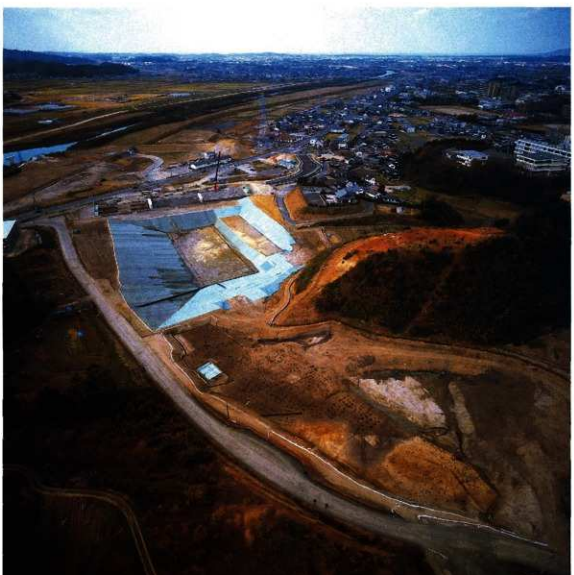
斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

三田谷Ⅰ遺跡
(Vol. 2)

2000年3月

建設省中国地方建設局出雲工事事務所
島根県教育委員会



三田谷Ⅰ遺跡全景

（東から神戸川・日本海を望む　1998年12月17日撮影）

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

三田谷Ⅰ遺跡
(Vol. 2)

2000年3月

建設省中国地方建設局出雲工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省出雲工事事務所では、斐伊川・神戸川流域の抜本的な治水対策として斐伊川放水路事業を推進しています。

事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当事務所では放水路の早期完成を目指し、平成３年度から島根県教育委員会のご協力のもとに調査を行っています。今回の三田谷Ⅰ遺跡からは縄文時代の丸木舟、弥生時代から奈良時代にかけての建物跡、奈良時代の木簡、墨書土器などが発見されました。

建設省出雲工事事務所といたしましては、今後とも同教育委員会と調整を図りつつ、貴重な埋蔵文化財の記録保存のため調査を円滑に進めてまいりたいと考えており、本報告書が埋蔵文化財に対するより一層の関心とご理解を得るための資料としてお役立ていただければ幸いに思います。

最後に今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し、心から厚くお礼申し上げます。

平成１２年３月

建設省中国地方建設局出雲工事事務所

所　長　五　道　仁　実

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受け、平成３年度以来、斐伊川放水路建設予定地内で遺跡の発掘調査を行っています。本書は平成９年度から平成10年度に発掘を実施した遺跡のうち、三田谷Ⅰ遺跡について、その調査結果をまとめたものです。

斐伊川・神戸川の二大河川の流れる出雲市周辺地域は、島根県内でも有数の遺跡集中地域であり、数多くの歴史的文化遺産の残っているところです。この調査により、県内４例目となる縄文時代の丸木舟や奈良時代の郡衙との関連が注目される木簡や墨書土器が発見されるなど大きな成果をあげることができました。いずれも、この地域の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

本書が地域の埋蔵文化財に対する理解や歴史学習に活用されることを期待いたします。なお、発掘調査及び本書の刊行にあたりましては地元の皆様、建設省中国地方建設局出雲工事事務所をはじめ、関係者の皆様から多くの御協力を得ましたことに対して心から御礼申し上げます。

平成１２年３月

島根県教育委員会

教育長　山　﨑　悠　雄

例　言

1．本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が実施した、斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書に収録したのは出雲市上塩冶町半分350番地外に所在する三田谷Ⅰ遺跡である。この遺跡の調査は1994年度から98年度まで5カ年行い、本書はそのうち97，98年度分の成果を収録している。なお、本書と調査期間は重なるが調査対象範囲が異なる96，97年度の報告は『三田谷Ⅰ遺跡Vol.1』（斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　1999年）としてすでに刊行している。また、94，95年度の調査成果は『三田谷Ⅰ遺跡Vol.3』として刊行予定である。

3．挿図中の方位は、測量法による平面直角第Ⅲ座標系のX軸方向を指す。従って、磁北より7°55′、真北より0°21′東の方向を指す。レベル高は海抜高を示す。

4．本書に掲載した遺跡の位置図（図2）は建設省国土地理院の地形図を使用した。また調査区割図（図3）、調査区設定図（図4）は建設省出雲工事事務所が1991年に作成した地形図（1：500）を使用した。

5．本書で使用した記号は以下のとおりである。

ＳＩ：竪穴建物、ＳＢ：掘立柱建物、ＳＫ：土壙、ＳＰ：貯蔵穴、ＳＡ：柱穴列、ＳＤ：溝・流路、Ｐ：柱穴、ＳＸ：その他

6．遺構図の縮尺は竪穴建物、土壙を1：40，1：60、掘立柱建物を1：80、貯蔵穴を1：30とし、他は適宜縮小率を変えた。

遺物については、土器は1：4、石製品は1：2，2：3，1：3、金属製品は1：3とした。木製品は小型品を1：2、他を1：6とし、中～大型品を1：6，1：8，1：12とした。

7．土器実測図のうちアミかけしたものは赤色塗彩を示す。

8．掘立柱建物の平面図に示した数値は柱穴心心間の距離を表し、単位はcmである。

9．97年度に出土した丸木舟と堅果類貯蔵穴ＳＰ29は保存処理の都合により概要の記述にとどめた。詳細についてはあらためて報告する予定である。

10．出土遺物の実測は第2章第1節にあげた調査員、補助員、整理作業員のほか、平石充、阿部智子、後藤達夫、錦織稔之が行った。

11．遺構写真は熱田貴保が、遺物の写真は難波孝之と熱田が撮影した。

12．貯蔵穴から出土した樹木片、堅果類の同定は㈱埋蔵文化財調査コンサルタントに、ボーリング及び土壌分析は㈱日新技術コンサルタントにそれぞれ委託して実施した。結果については分析者の報告を第3章に掲載した。なお、他の木製品の樹種同定は㈱古田生物研究所に委託した。

13．本書は第1章を難波が、第2章を熱田が、第4章を熱田と平石が執筆し、熱田が編集した。

14．本遺跡の出土遺物並びに調査に関する写真、実測図等の記録は、松江市打出町33番地　島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

三田谷Ⅰ遺跡
(Vol. 2)
目　次

巻頭図版
序
序
例　言

第1章　位置と環境 …… 1
第2章　発掘調査 …… 4
　第1節　調査の概要 …… 4
　　1．既往の調査 …… 4
　　2．調査の体制 …… 4
　　3．調査の経過 …… 5
　　4．調査の方法 …… 7
　第2節　調査の結果 …… 9
　　1．基本層序 …… 9
　　2．包含層 …… 10
　　3．竪穴建物 …… 14
　　4．掘立柱建物 …… 18
　　5．土　壙 …… 30
　　6．溝・流路 …… 40
　　7．貯蔵穴 …… 84
　　8．湖　沼 …… 87
第3章　自然科学的分析 …… 93
　第1節　三田谷Ⅰ遺跡発掘調査に伴う樹種同定 …… 93
　第2節　三田谷Ⅰ遺跡貯蔵穴内の堅果類他同定 …… 112
　第3節　三田谷Ⅰ遺跡の地下層序と地形発達史 …… 116
第4章　ま　と　め …… 128
　第1節　遺　物 …… 128
　第2節　遺　構 …… 136
出土遺物観察表 …… 143
写真図版 …… 157
付図　三田谷Ⅰ遺跡平面図

挿図目次

図1　調査対象位置図　vii
図2　二田谷Ⅰ遺跡と周辺の遺跡　3
図3　三田谷Ⅰ遺跡発掘調査区割図　7
図4　調査区設定図　8
図5　基本層序模式図　9
図6　包含層出土遺物実測図1　11
図7　包含層出土遺物実測図2　11
図8　包含層出土遺物実測図3　12
図9　包含層出土遺物実測図4　12
図10　包含層出土遺物実測図5　13
図11　ＳＩ01，02・出土遺物実測図　14
図12　ＳＩ03・出土遺物実測図　15
図13　ＳＩ04・出土遺物実測図　15
図14　ＳＩ05・出土遺物実測図　16
図15　ＳＩ06実測図　16
図16　ＳＩ07・出土遺物実測図　17
図17　掘立柱建物配置図　18
図18　ＳＢ06・出土遺物実測図　19
図19　ＳＢ04・出土遺物実測図　19
図20　ＳＢ15，ＳＡ01・出土遺物実測図　20
図21　ＳＢ13・出土遺物実測図　20
図22　ＳＢ05・出土遺物実測図　21
図23　ＳＢ11・出土遺物実測図　21
図24　ＳＢ02・出土遺物実測図　22
図25　ＳＢ08・出土遺物実測図　22
図26　ＳＢ16実測図　23
図27　ＳＢ14実測図　24
図28　ＳＢ09実測図　24
図29　ＳＢ07・出土遺物実測図　25
図30　ＳＢ10実測図　25
図31　ＳＢ03実測図　26
図32　ＳＢ12実測図　26
図33　ＳＢ01・出土遺物実測図　27
図34　ＳＢ17・出土遺物実測図　28
図35　ＳＢ18・出土遺物実測図　29
図36　ＳＸ03実測図　30
図37　ＳＸ05，09実測図　30
図38　ＳＫ05～07，09，39，40，43出土遺物実測図　30
図39　ＳＫ19，20・出土遺物実測図　31
図40　ＳＫ22実測図　32
図41　ＳＫ22出土遺物実測図　32
図42　ＳＫ62・出土遺物実測図　33
図43　ＳＫ03・出土遺物実測図　34
図44　ＳＫ15，16・出土遺物実測図　34
図45　ＳＫ104～109，21，23実測図　35
図46　ＳＫ103～109，21，23出土遺物実測図　36
図47　ＳＫ194・出土遺物実測図　36
図48　ＳＫ17・出土遺物実測図　37
図49　ＳＫ02実測図　37
図50　ＳＫ02出土遺物実測図　38
図51　ＳＫ01・出土遺物実測図　39
図52　ＳＤ28実測図　40
図53　ＳＤ06実測図　41
図54　ＳＤ06上層断面図　42
図55　ＳＤ06遺物出土状況図1　44
図56　ＳＤ06遺物出土状況図2　45
図57　ＳＤ06遺物出土状況図3　46
図58　ＳＤ06出土遺物実測図1　48
図59　ＳＤ06出土遺物実測図2　49
図60　ＳＤ06出土遺物実測図3　50
図61　ＳＤ06出土遺物実測図4　51
図62　ＳＤ06出土遺物実測図5　52
図63　ＳＤ06出土遺物実測図6　53
図64　ＳＤ06出土遺物実測図7　54
図65　ＳＤ06出土遺物実測図8　55
図66　ＳＤ06出土遺物実測図9　56
図67　ＳＤ06出土遺物実測図10　57
図68　ＳＤ06出土遺物実測図11　58
図69　ＳＤ06出土遺物実測図12　59
図70　ＳＤ06出土遺物実測図13　60

図71　ＳＤ06出土遺物実測図14　61
図72　ＳＤ06出土遺物実測図15　63
図73　ＳＤ06出土遺物実測図16　64
図74　ＳＤ06出土遺物実測図17　64
図75　ＳＤ06出土遺物実測図18　65
図76　ＳＤ16・出土遺物実測図　66
図77　ＳＤ24・出土遺物実測図　67
図78　ＳＤ17・出土遺物実測図　67
図79　ＳＤ12，13・出土遺物実測図　67
図80　ＳＤ14，15・出土遺物実測図　68
図81　ＳＤ05，07，19，20実測図　69
図82　ＳＤ05，07，19，20出土遺物実測図　70
図83　ＳＤ08・出土遺物実測図　71
図84　ＳＤ01，02，02′・出土遺物実測図　72
図85　ＳＤ03，04半面図　73
図86　ＳＤ03，04土層断面図１　74
図87　ＳＤ03，04土層断面図２　75
図88　ＳＤ03遺物出土状況図　76
図89　ＳＤ03出土遺物実測図１　77
図90　ＳＤ03出土遺物実測図２　78
図91　ＳＤ03出土遺物実測図３　79
図92　ＳＤ03出土遺物実測図４　80
図93　ＳＤ03出土遺物実測図５　80
図94　ＳＤ03出土遺物実測図６　81
図95　ＳＤ04遺物出土状況図　82
図96　ＳＤ04出土遺物実測図　83
図97　堅果類貯蔵穴位置図　84
図98　堅果類貯蔵穴実測図１　84
図99　堅果類貯蔵穴実測図２　85
図100　堅果類貯蔵穴・出土遺物実測図３　86
図101　湧泊底測量図　87
図102　上層断面図　88
図103　湧泊遺物出土状況図　89
図104　湧泊出土遺物実測図　90
図105　樹種同定用プレパラート作製フローチャート　93
図106　調査地域とボーリング地点　116
図107　調査地域の地形　117
図108　地下地質断面図　119
図109　花粉ダイアグラム　121
図110　地層発達模式図　123

表目次

表１　樹種同定結果一覧表(1)　98
表２　樹種同定結果一覧表(2)　99
表３　堅果類等同定結果一覧表　113
表４　^{14}C年代測定結果　120
表５　樹種同定結果一覧表　126
表６　掘立柱建物一覧表　137

写真目次

写真１　水没した調査区　5
写真２　丸木舟の発見　6
写真３　樹木顕微鏡写真１　100
写真４　樹木顕微鏡写真２　101
写真５　樹木顕微鏡写真３　102
写真６　樹木顕微鏡写真４　103

写真7　樹木類微鏡写真5　104
写真8　樹木類微鏡写真6　105
写真9　樹木類微鏡写真7　106
写真10　樹木類微鏡写真8　107
写真11　樹木類微鏡写真9　108
写真12　樹木類微鏡写真10　109
写真13　樹木類微鏡写真11　110
写真14　樹木類微鏡写真12　111
写真15　堅果類写真1　114
写真16　堅果類写真2　115
写真17　土層堆積状況　127

写真図版目次

PL.1　遺跡周辺の航空写真（1945年撮影）
PL.2　調査区航空写真（1991年5月撮影）
　　98年度調査区全景
PL.3　段丘の遺構検出状況
PL.4　ＳＩ01
PL.5　ＳＩ02，03
PL.6　ＳＩ04
PL.7　ＳＩ05
PL.8　ＳＩ06，07
PL.9　ＳＢ04，06
PL.10　ＳＢ06，04
PL.11　ＳＢ07，10，03，12
PL.12　ＳＢ07，03
PL.13　ＳＢ17，01
PL.14　ＳＢ01，15
PL.15　掘立柱建物検出状況
PL.16　ＳＢ13，05，11
PL.17　ＳＢ02，08，16
PL.18　ＳＢ14，09，18
PL.19　ＳＸ03
PL.20　ＳＫ19，20
PL.21　ＳＫ19
PL.22　ＳＫ22
PL.23　ＳＫ22
PL.24　ＳＫ62
PL.25　ＳＫ62
PL.26　ＳＫ03，194，17
PL.27　ＳＫ02
PL.28　ＳＫ01
PL.29　ＳＤ28
PL.30　ＳＤ06
PL.31　ＳＤ06
PL.32　ＳＤ06　1区
PL.33　ＳＤ06　2区
PL.34　ＳＤ06　2区
PL.35　ＳＤ06　3区
PL.36　ＳＤ06　3区
PL.37　ＳＤ06　4区
PL.38　ＳＤ06　4区
PL.39　ＳＤ06　5区
PL.40　ＳＤ06　6区
PL.41　ＳＤ06　7区
PL.42　ＳＤ06　7区
PL.43　ＳＤ06　8区
PL.44　ＳＤ16，24，17
PL.45　ＳＤ14，15
PL.46　ＳＤ05
PL.47　ＳＤ07，19，20
PL.48　ＳＤ08，01，02，02'
PL.49　ＳＤ03
PL.50　ＳＤ03遺物出土状況
PL.51　ＳＤ03

PL.52　SD03
PL.53　SD04
PL.54　SD04
PL.55　SP24
PL.56　SP33
PL.57　SP20
PL.58　SP27
PL.59　SP21
PL.60　SP22
PL.61　SP23
　　SP27，21，22，23完掘
PL.62　SP40
PL.63　SP41，34
PL.64　SP34，39
PL.65　SP35，37
PL.66　SP38
　　SP25，26検出状況
PL.67　SP25，26，29
PL.68　丸木舟検出状況
PL.69　丸木舟検出状況
PL.70　柵検出状況
PL.71　埋没林検出状況
PL.72　埋没林検出状況
PL.73　包含層出土遺物
PL.74　包含層出土遺物
PL.75　包含層出土遺物
PL.76　SI01～05出土土器
PL.77　SI07　掘立柱建物出土土器
PL.78　SK05～09，39，40，43，19，20，22，17
　　出土土器
PL.79　SK103，104，105，108，109，21，23，02
　　出土土器
PL.80　SD06出土土器
PL.81　SD06出土土器
PL.82　SD06出土土器
PL.83　SD06出土土器
PL.84　SD06出土土製品、木製品
PL.85　SD06出土黒書土器
PL.86　SD06出土木簡
PL.87　SD06出土木簡、斎串
PL.88　SD06出土金属製品、石製品
　　SD16、SD14，15出土遺物
PL.89　SD07，17，01，02，02' 出土土器
PL.90　SD03出土土器
PL.91　SD03出土土器
PL.92　SD03出土土器、石製品
　　SD04出土土器
PL.93　SD04出土土器
　　SP25出土石器
　　湖沼出土土器
PL.94　三田谷I遺跡全景

図1　調査対象位置図

第1章　位置と環境

三田谷Ⅰ遺跡は、JR出雲市駅から南に約2㎞、神戸川が出雲平野に流れ出るあたりの丘陵地帯に位置する。神戸川右岸から北東に谷間がのびており、遺跡はそのほぼ全面に広がっている。

出雲平野は南北を山系にはさまれた東西約20㎞、南北約5㎞の県内最大の平野である。縄文時代そのほとんどは海域であったが、縄文時代晩期より始まった海退と中国山地より流れ出る斐伊川・神戸川の二大河川による沖積作用により陸化してきた。平野中央部が形成され始めたのは遺跡の分布状況や地質学的研究から約3,600年前のことと考えられている。以来徐々に平野は拡がり人々の生活空間も拡がっていった。中・近世、上流の中国山地における製鉄業の隆盛に伴い、「鉄穴流し」による土砂流入量が増大し、平野の形成・拡大に大きな役割を果たした。日本海に流れ出ていた斐伊川が宍道湖へと流路を変え現在の地形に定着したのは江戸時代以降のことである。以下、出雲平野の遺跡を時代を追って概観する。なお、遺跡名のあとの番号は図2、表1の番号と対応する。

【縄文時代】現在、出雲平野で知られている最も古い遺跡としては西北にある菱根遺跡㊳と西の砂丘下にある上長浜貝塚㊺があげられる。いずれも縄文時代早期末の遺跡である。縄文時代前期末から中期にかけての遺跡は上ヵ谷遺跡で確認されているにすぎない。海退の進む縄文時代晩期には平野南部の丘陵下に本遺跡をはじめ後谷遺跡、御領田遺跡等で比較的安定して営まれるようになるほか、平野中央部の矢野遺跡㉞でも遺物が発見されている。

【弥生時代】前期の遺跡は縄文晩期から続く遺跡が多く、本遺跡のほか原山遺跡㊷や矢野遺跡が有名である。原山遺跡からは配石墓が検出された。また北部九州の弥生土器と技術的に類似したものが出土しており稲作技術の伝来との関連が考えられる。南部丘陵の荒神谷遺跡から出土した大量の青銅器の中には最古段階の銅鐸も含まれており弥生時代前期における出雲平野の有力集団の存在が想定されるが現在それを裏づける集落の発見には至っていない。中期中葉以降となると斐伊川と神戸川沿いの微高地上に遺跡が数多く見出されるようになる。四絡遺跡群・天神遺跡㊺・古志遺跡群などは環濠と思われる大溝を持つ大規模集落である。姫原西遺跡㊱では木橋を検出した。その他にも斐伊川右岸の微高地上や斐伊川左岸の現在のJR山陰線沿い、原山遺跡付近にも村落が存在したことが明らかになっており、新たな集落が次々と誕生し平野部の開発が進んでいった様子を窺うことができる。四隅突出型墳丘墓を持つ西谷墳墓群㉒は後期に造られたもので、出雲平野を統括する有力者の存在、他地域との交流関係を考える上で貴重な遺跡である。また、本遺跡では後期中頃のものと思われる方形周溝墓が県内唯一検出されている。

【古墳時代】四絡遺跡群、天神遺跡、古志遺跡群など出雲平野中心部の集落は急激に衰退し、遺跡の分布は斐伊川水系と神西湖南岸の東西に分断されたかっこうとなる。それにあわせて西谷の四隅突出型墳丘墓も築かれなくなり、この時大きな変動があったことが窺われる。ただし、古墳が築かれるのは古墳時代前期末になってからのことであり、しかも大寺古墳と山地古墳㊻の2基だけで、最古級の古墳は今のところ知られていない。この点、大規模な方墳を多数築造している出雲地方東部の荒島古墳群とは大きく様相を異にする。中期になると、北光寺古墳、軍原古墳、神庭岩舟山古

墳などが造られるが依然として数は少ない。しかし後期になると急に古墳の数は増加してくる。大型古墳は北山山麓に上乃古墳が築造された後は神戸川流域の丘陵地帯に限られている。神戸川右岸に築造された今市大念寺古墳(24)は全長92mで全国最大級の家型石棺を有し、その被葬者は出雲西部の最高首長と推定される。ほぼ同時期、出雲東部では同規模の山代二子塚古墳が造られており、また円系墳の多い出雲西部と異なり方系墳が多く埋葬施設も異なることなどから、当時東西に２人勢力が並立していたと思われる。今市大念寺古墳の後、首長系統の古墳は上塩冶築山古墳(14)、地蔵山古墳(13)に続くと考えられている。終末期になると出雲では九州系の横穴墓が出現する。神戸川右岸の上塩冶横穴墓群は県内でも最大規模の横穴墓群として知られ、うち２穴からは金糸が出土した。左岸にも小規模ではあるが、妙蓮寺古墳(59)・宝塚古墳(58)・放れ山古墳(62)などがあり、地蔵堂横穴墓群(49)・神門横穴墓群(47)など大規模な横穴墓群が形成されていている。

【奈良・平安時代】当時の官衙跡との関連が推定されるものとして、木簡・緑釉陶器・墨書土器などが出土した本遺跡、緑釉陶器・墨書土器・大型の掘建柱建物跡が検出された大神遺跡、礎石建物跡が検出された斐川町後谷Ⅴ遺跡などがある。古志本郷遺跡(54)では企画的に配置された大規模な建物群が近年見つかった。このうち構造・規模から神門郡衙の政庁の一部と思われる建物が確認できた。古代寺院跡としては神門寺境内廃寺(67)や長者原廃寺(68)が存在し、「出雲国風土記」記載の新造院との比定が進められている。古墓としては、出雲平野南側丘陵に、石製骨蔵器を備える菅沢古墓(17)や朝山古墓、小坂古墳の石室内に置かれた石櫃、須恵器の骨蔵器を使用した西谷墓、一辺75cmの立方体の石櫃が納められた光明寺３号墓(8)などがあり、火葬の風習がこの地方にも伝わっていたことがわかる。集落遺跡としては漁業関連の道具類が多量に出土した上長浜貝塚、多くの土器が出土した大寺一蔵遺跡が知られている。

【中世】古代、出雲国の政治の中心は国庁が置かれた松江市大草町であった。しかし、出雲一宮の出雲大社およびその別当寺としての鰐淵寺の影響や、出雲守護職佐々木氏が出雲平野中央部の塩冶郷に守護所を置いたことなどにより、鎌倉時代後半期の一時期、出雲国の中心となった。この時代の遺跡としては、ミニチュア五輪塔が出土した渡橋洋遺跡(68)や、国人領主朝山氏の館跡と推定される藏小路西遺跡があげられる。この遺跡からは幅約１mの堀や掘立柱建物そして１２～１５世紀の遺物が検出されている。備前焼等が多量に出土した大社町鹿蔵山遺跡(41)も有力者の館跡と考えられている。荻杼古墓(29)には国の重要文化財に指定された青磁が副葬されていた。被葬者はこの地方一帯を治めていた塩冶氏と考えられている。戦国時代には尼子氏と毛利氏との争いもあり、尼子十旗とされる米原氏の高瀬山城、神西氏の神西城、その他にも鷹ヶ巣城など平野を見下ろす丘陵上に多くの山城が点在している。

参考文献　島根県教育委員会　1998～99「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」
Ⅳ～Ⅵ
出雲市教育委員会　1997「遺跡が語る古代の出雲」
村上　誠編　1983「現代地理学」
内藤正中編　1997「図説　島根県の歴史」

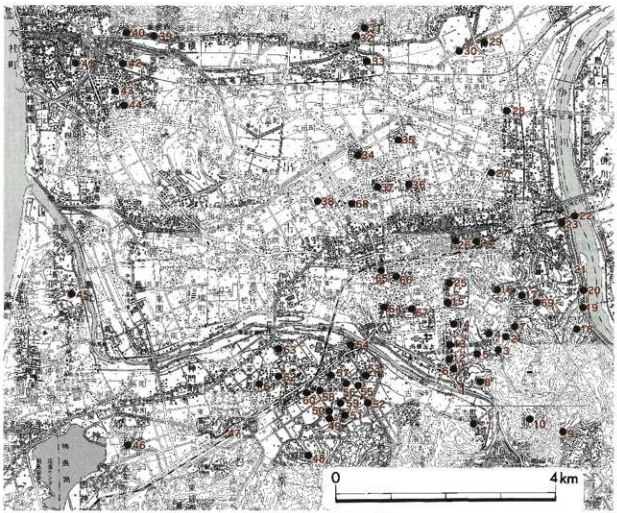


図2　三田谷Ⅰ遺跡と周辺の遺跡

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	三田谷Ⅰ遺跡	24	今市大念寺古墳	47	神門横穴墓群
2	狐廻谷古墳	25	角田古墳	48	深田横穴墓群
3	上塩冶横穴墓群第7支群	26	塚山古墳	49	地蔵堂横穴墓群
4	大井谷城跡	27	太鼓遺跡	50	地蔵堂北横穴墓群
5	上塩冶横穴墓群第22支群	28	荻杼古墳	51	浄土寺山城跡
6	上塩冶横穴墓群第33支群	29	山持川川岸遺跡	52	放れ山古墳
7	上沢Ⅱ遺跡	30	里方別所遺跡	53	大梶古墳
8	光明寺古墳群	31	大前山古墳	54	古志本郷遺跡
9	唐墨城跡	32	石臼古墳	55	古志遺跡
10	大坊古墳	33	里方八石遺跡	56	田畑遺跡
11	小坂古墳	34	矢野遺跡	57	正蓮寺周辺遺跡
12	半分古墳	35	大塚遺跡	58	宝塚古墳
13	地蔵山古墳	36	姫原西遺跡	59	妙蓮寺古墳
14	上塩冶築山古墳	37	小山遺跡	60	天神原古墳
15	宮松遺跡	38	白枝荒神遺跡	61	知井宮多門院遺跡
16	下沢古墳	39	愛宕遺跡	62	東原遺跡
17	菅沢古墳	40	修理面本堀遺跡	63	極楽寺付近遺跡
18	権現山横穴墓群	41	鹿蔵山遺跡	64	弓原遺跡
19	長迫横穴墓群	42	原山遺跡	65	天神遺跡
20	来原岩穴	43	南原貝塚	66	高西遺跡
21	西谷墳墓群	44	中分貝塚	67	神門寺境内廃寺
22	斐伊川鉄橋遺跡	45	上長浜貝塚	68	渡橋沖遺跡
23	石土手遺跡	46	山地古墳	69	長者原廃寺

表1　周辺の遺跡

第2章　発掘調査

第1節　調査の概要

1．既往の調査

三田谷Ⅰ遺跡の調査は斐伊川放水路事業に伴って5年間実施した。またこの事業に付随して計画された農道整備事業に伴う調査を出雲市教育委員会が98年度に実施している。

1994年度は権現山の南側の谷を調査し、翌95年度には谷の続きと段丘上の2ヶ所で調査を実施した。谷部では縄文後期から中世の流路・包含層を検出し、各時期の遺物が大量に出土した。木簡、封緘木簡状木製品、墨書土器、和同開珎、金属製巡方など官衙的な遺物が多く出土した（「三田谷Ⅰ遺跡Vol.3」）。1996，97年度は谷の入り口側にあたる段丘上を中心に調査を実施し、弥生後期から古墳時代後期の集落を検出した。竪穴建物21棟、掘立柱建物18棟、方形周溝墓3基で、このほか12世紀代の土師器焼成遺構なども検出した。包含層から「大止乃」と刻書した須恵器や金の溶解に使用した坩堝が出土した。また段丘下では火山灰層下に縄文後期の包含層を検出し、板状土偶が出土した（「三田谷Ⅰ遺跡Vol.1」1999年）。

2．調査の体制

調査主体　島根県教育委員会

1997，98（平成9，10）年度　現地調査

事務局　島根県教育庁文化財課　勝部昭（課長）、島地徳郎（課長補佐）
埋蔵文化財調査センター　宍道正年（センター長）、古崎蔵治（課長補佐）、秋山実(同)、松本岩雄（同）、濵谷昌宏（企画調整係主事）、川崎崇（同）

調査員　宮澤明久（調査第1係長）、内田伸雄（調査第2係長）、熱田貴保（文化財保護主事）、久保田　郎（主事）、斎谷衡（教諭兼文化財保護主事）、持田和男（教諭兼主事）、岡田充哲（同）、黒谷達典（臨時職員）、石田亨夫（同）、柴崎香織（同）

1999（平成11）年度　報告書作成

事務局　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター　宍道正年（所長）、秋山実（総務課長）、松本岩雄（調査課長）、今岡宏（総務係長）、渡邊紀子（総務係主任主事）、川崎崇（同主事）

調査員　熱田貴保（文化財保護主事）、難波孝之（教諭兼文化財保護主事）

発掘作業（発掘作業員雇用、測量発注他）については、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会島根支部へ委託して実施した。

社団法人　中国建設弘済会島根支部

布村幹夫（現場事務所所長）、原博明、中村弘己、小村敏行、倉橋博之、高橋憲生、岡田篤史、板倉次郎（以上技術員）、板倉律子、渡辺美智子（以上事務員）

発掘作業員（1997，98年度）

飯島光子、飯塚春枝、飯塚美代子、奥井惣市、奥井久子、加藤源次郎、加藤敏男、高橋加代子、

富宰和、成相昭、成相律子、日野定雄、藤原キク子、二成銀一郎、吉田健造、吉田未子、吉田延子、糸原幸子、吉田清夫、西倉良子、錦織喜多子、青木伊子、勝部武夫、山本綾子、宍戸政一、金山寛、木村光利、熊野明夫、青木俊幸、阿部孝代、飯国美代子、石川美奈子、板垣サチ子、板倉啓子、坂根幸子、塩野啓子、須山林吉、高橋辰夫、寺本武夫、富田トシ子、中山二郎、柳楽孝子、廣戸操、元井清二、矢田君枝、山山朝野、和田虎雄、長島三千代、前田真二、並河秀敏、田部博、石川年二、石川トメ子、野津猪佐夫、田中恭子、横原文子、森山登、山辺真治、森田季子、長岡恵美、島屋尾一郎、茂川雄司、江戸友義、神山千歳、田中二三、中島三恵子、種野国男、小谷四郎、山本ハリノ、石川恒夫、吾郷綾子、上田実、勝部登美子、金築里己、鍾築幸男、向村房子、佐々本明美、佐藤フミ子、杉原節子、武田淑子、田中重吉、永田益雄、成相幸子、平尾一雄、矢田愛子、山根信枝、有馬紀美子、板垣栄、板山洋子、岸光枝、岸美代子、杉本正枝、橋重成、西村芳江、深井恭、深井春信、深井ヤヨエ、深井薄文、三島一恵、三島澄江、三島美登枝、三島安子、森山一代、安井清美、山本満好、吉川茂、吉川広江、渡部秋代、渡部謙治

遺物整理作業員（1997～99年度）

阿部春枝、鎌田民江、須山啓子、中島直美、出村尚子、加藤麻子、植野喜久恵、坂根喜世美、糸賀五月、原明枝、多久和文子、守屋かおる、来海順子、広田和子、堀江五十鈴、金津まり子

発掘調査・報告書の作成にあたり以下の方から指導・助言をいただいた。記して感謝する。

平川南（国立歴民俗博物館）、川田政晴（滋賀県立琵琶湖博物館）、兼康保明（(財）滋賀県文化財保護協会）、中川正人（同）、笠野和己（奈良国立文化財研究所）、山中敏史（同）、大久保徹也（徳島文理大学）、田中義昭（島根大学）、渡邊貞幸（同）、竹広文明（同汽水域研究センター）、会下和宏（同理蔵文化財調査研究センター）

3．調査の経過

調査は1996年度からの区割りを踏襲し、F、G、H区とした。97年度は低湿な谷部分にあたるG区と、南側の丘陵裾のH区の調査を実施した。面積は約5,900㎡で、4月10日からを2班体制で着手した。まずG区では包含層第Ⅰ～Ⅲ層を掘り下げた。この作業はその後5ヶ月続き、9月19日に

写真1　水没した調査区

ようやく完了して第Ⅶ層を基盤にしたＳＤ01～08を確認した。その間の７月13日には記録的な大雨によって調査区が完全に水没し、北側の調査区壁面が崩壊するなど調査区の維持に多大な労力を投入しなければいけない事態が発生した（写真１）。その後の調査は順調に進み、11月12日にはＳＤ06から紀年銘の木簡が出土した。また律令制下の郡名を記した墨書土器も出土した。このまま順調に終わるかに思われたが、空撮を翌日に控えた12月16日、丸木舟が突如出現し、年内の調査終了は不可能となった（写真２）。年末年始をひかえていたため、丸木舟の調査はいったん中断し、年明けに持ち越すことになった。暖冬続きの例年の気候を期待して１月６日から再開し、貯蔵穴と平行して丸木舟の調査を行った。再開数日は天候も味方して順調に進んだが、後半は一転して真冬の天候となった。丸木舟の全容が明らかになり、15日には現地説明会を開催した。当日は氷雨の降る荒天にもかかわらず120人の参加者でにぎわった。丸木舟の取り上げは網代敷きの貯蔵穴とともに19，20日に行った。両日とも雪が横殴りに吹き付ける最悪の天候となった。その後排水用の溝掘り等養生をし、23日に初年度の調査を終了した。なお、２月９日～16日には三田谷の地形発達を探る目的で、谷の２カ所でボーリング調査を実施した。

Ｈ区は９月１日から調査を開始し、掘立柱建物２棟と、弥生中期の竪穴建物１棟を検出して11月６日に終了した。

1998年度は４月13日から調査を開始した。前年度に引き続き、Ｇ区は貯蔵穴と湧沼埋土の調査し、５月27日に終了した。Ｆ区はＧ区とＨ区に挟まれた位置にあたり約3,000㎡を対象に４月27日から調査を開始した。谷側では前年度木簡が出土したＳＤ06の続きを上、下流で調査した。９月30日には木簡「八野郷神門米□　　二」が出土した。この日は奇しくも奈良国立文化財研究所史料調査室長の狩野久氏による調査指導当日で、出土直後の木簡を現地で釈読していただくことができた。10月22日にはさらにもう１点出土し、過去出土分を含め本遺跡から出土した木簡は11点となり、出雲国庁の調査以来の出土量となった。一方段丘上では竪穴建物６棟、掘立柱建物16棟、土壙、溝、ピットを多数検出した。段丘の砂層は脆く、雨によってしばしば遺構流失の危機に直面したが、12月17、18日に調査区全体、25日にはＳＫ62の空撮を行い、翌１月７日に無事終了した。

なお、６月30日に出雲市立乙立小学校、10月９日に同上津小学校の見学を受け、９月に同河南中学校の生徒を職場体験で受け入れた。

写真２　丸木舟の発見

4．調査の方法

今回報告する調査は過去の調査区より谷奥側にあたる。総面積は8,950㎡で、1997，98年度の2カ年にわたって調査を実施した。調査区の呼称は、1996・97年度の調査区割りA～E区に準拠して、F，G，H区とし、初年度にG，H区、次年度にF区を調査した。ただし、本報告ではこの調査時の区割りを使わず記述する。

過去の調査ではすべて任意の基準線が用いられていたが、今回は平面直角座標系（第Ⅲ系）を利用した調査区を設定することとした。調査区設定にあたって調査対象外の谷奥の1点を原点とした。この原点の座標値はY＝54460、X＝－73050で、この点を基準に座標軸に沿って10m間隔で区切り、西にA，B，C～L、南に0，1，2～18として、10m四方のグリッドを設定した。グリッド名は北東隅の交点のアルファベットと数字で、F－10のように表した（図4）。

包含層の調査ではすべてこのグリッドを基準に土層の観察、遺物の取り上げを行った。一方遺構の調査では遺構の性格、形状や立地等を考慮してすべて任意の基準線を設定した。

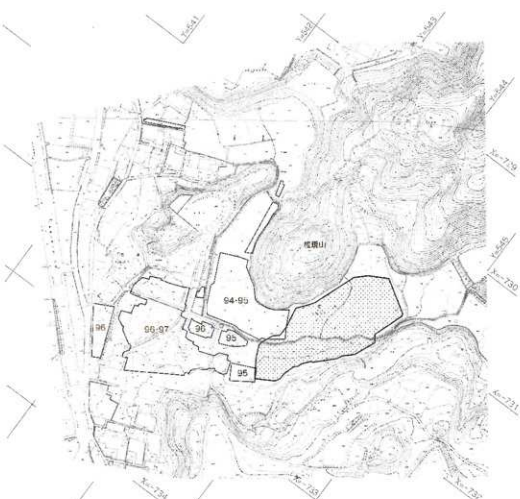


図3　三出谷Ⅰ遺跡発掘調査区割図（S＝1：4000）

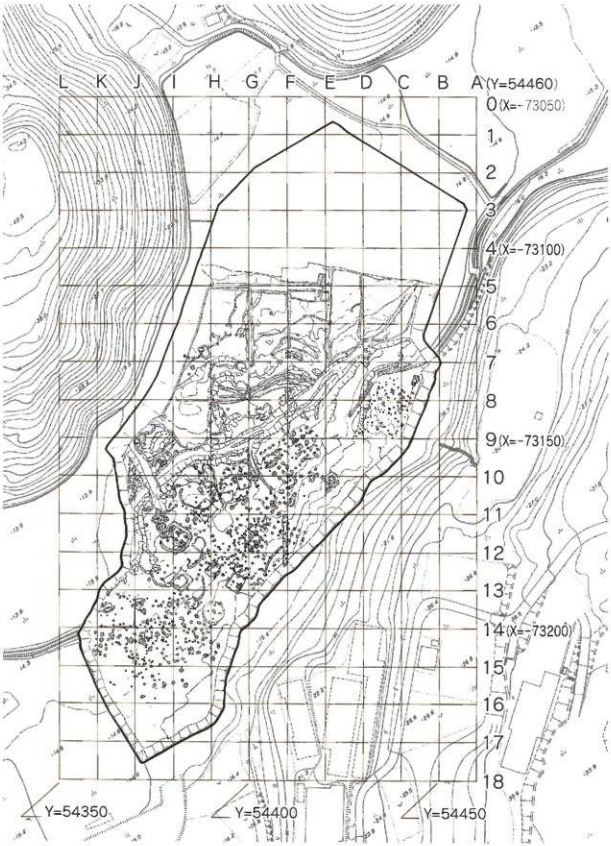


図4　調査区設定図（S＝1：1000）

第２節　調査の結果

１．基本層序

調査着手前に盛られた造成土、事業開始以前の水田層とその下の近世以前の水田層は重機によって除去したため層相の観察の対象からあらかじめ除外した。ここではそれより下層について所見を述べる。基本層序は上から遺物の有無に関係なく第Ⅰ～Ⅷ層とした。

第Ⅰ層　－１層砂粒を多く含む黒色粘質土、－２層：１層より砂粒の少ない黒色粘質土、－３層：黒色砂、黒色粘質土のブロック堆積、－４層：黒色砂。谷側では粘質土が優位で、段丘側では第Ⅳ層とほぼ同化している。粘質土から陶磁器が出土している。

第Ⅱ層　－１層：有機質を多く含み、砂粒を含まない黒色粘質土、－２層：砂粒を含まない淡黒色粘質土、－３層：黒色粘質土混じり淡黒色砂。－１層は段丘上にはなく谷全体に見られる特徴的な土層。調査区下流側では有機質の純粋堆積層で、谷全体が沼と化したような様相が考えられる。

第Ⅲ層　－１層：砂混じり暗茶色粘質土、－２層：砂混じり暗褐色粘質土、－３層：２層に有機質が混じる。２層は粘質土と砂が６：４程度の割合で混合したような土層で、水田耕作土と考えられる。出土遺物は必ずしも多くないが、12世紀代の土師器碗が出土している。

第Ⅳ層　黒色砂層。第Ⅲ層が表土化したもので、砂丘遺跡で見られる「クロスナ」とほぼ同じである。ＳＤ06側では斜面堆積が顕著で厚いが、段丘上では最大でも10数cm程度の厚さしかない。各時期の遺物包含層であり、遺構埋土も基本的にはこの黒色砂なので、切り合い関係を確認することが非常に困難であった。

第Ⅴ層　遺物を含まない均質な淡青灰色粘質土。

第Ⅵ層　木葉、樹木を多く含む暗茶色粘質土。縄文時代後期前葉末～中葉に存在した湖沼の埋土で当該期の土器と丸木舟を包含していた。

第Ⅶ層　３cm以下の軽石を多く含む粗砂。第３章第３節で詳述するように三瓶火山の第Ⅵ活動期に伴う洪水堆積層で、神戸川流域に展開する集落遺跡の基盤層も同じである。

第Ⅷ層　灰白色シルト層。三瓶火山第Ⅵ活動期に伴う火山灰の２次堆積層である。上層のⅦ－１層は洪水砂到達前の木葉を多く含む層である。共に遺物は確認できなかった。

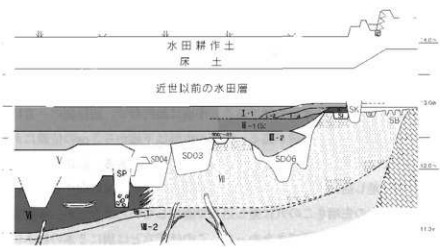


図５　基本層序模式図

2．包 含 層

図６－１～５は弥生中期後葉の土器である。３は高坏か図83－２のような鉢であろう。４は大型の広口壺で、外面に突帯を貼り付け、口縁端部は刻目と棒状浮文を施す。５は口縁端部が下方に拡張した広口壺で凹線を施す。７は手捏土器である。８は内外面赤彩を施した高坏で外面は格子状、内面は放射状の暗文を施す。９は胎土が精良な小型の直口壺である。以上は第Ⅰ、Ⅱ層出土。

11～15は緑釉陶器である。11，13，14は同一個体と思われる５輪花の皿である。削り出し高台で底部内面に凹線による圏線が２条認められる。釉はほとんど剥げ落ちているが全面施釉である。胎土は緻密で灰白色を呈する。F－10，12の第Ⅳ層から出土。12も５輪花皿である。削り出し高台で、高台と底面を圏線状に削り込む。底部内面は凹線状に圏線を施す。釉はかなりが剥げ落ちているが全面施釉されている。胎土は緻密で灰白色～黄白色を呈し、やや軟質である。底部内面には重ね焼きによる熔着痕がある。ＳＤ06下流側に近いＪ－14で第Ⅳ層からまとまって出土した。15は碗で口縁端部を玉縁状に肥厚させている。胎土は緻密で淡青灰色を呈し焼成は良好である。第１層出土。これら緑釉陶器は９世紀後半の畿内産と考えられる。

16～28は輸入陶磁器である。第Ⅰ・Ⅱ層から出土した。16～22は白磁碗で、16～19は玉縁の口縁を持つⅣ類、20，21は外反する口縁でⅤ－２類、22は口縁が外反し端部が水平になるⅤ－４類、23は底部内面を蛇の目釉剥ぎするⅧ類である。Ⅳ、Ⅴ類は12世紀前半、Ⅷ類は12世紀後半～13世紀前半である。24～26は同安窯系青磁で、24は内面に櫛状工具によるジグザグ文様を施す皿で１－１・ｂ類、25は外面にクシ目を施す碗で１－１・ｂ類、26は外面に片彫り風の条線を施す碗でⅢ－１・ａ類。12世紀後半～13世紀前半である。27は龍泉窯系青磁の劃花文碗で12世紀後半～13世紀前半である。28は褐釉の四耳壺である。同一個体と思われる破片が日－10を中心に広範囲に出土した。12世紀代。29は高台付きの土師器皿で12世紀代。第Ⅰ層出土。30は土師器碗で底部内面に刻書があるが判読できない。31，32は内面に条線を施す瓦質の鉢。13世紀。33，34は土師器の擂鉢である。

図７は石製品、金属製品である。６は滑石製の硯であろう。11は北宋銭の淳熙元寶で、背面に「十六」とあることから鋳造は1189年（淳熙16）である。第Ⅰ・Ⅱ層出土。

図８－10は木製品である。図８－１，２は木簡である。１は右側辺以外は欠損し、上半に１字ある。「寅」とも読めそうだが確定できない。木取りは柾目で調整は不明である。第Ⅰ・Ⅱ層出土。２は下端、左側辺を欠損する板目の木簡で２字確認できるが判読できない。第Ⅲ層出土。３は上端の左右に切り込みを入れた木簡状木製品で、表裏とも墨痕は認められない。４は細い角柱で、上端側の四角に切り込みを入れた木簡状木製品である。５は刀子形木製品であろう。刀身のみをかたどり、棟側に段を付け茎を短く表現している。６は下端と上端を欠損している用途不明の木製品である。表裏とも削り調整が施され、図示した面は著しく削られている。７は中央に直径５㎜穿孔のある用途不明の木製品である。図９は刳物桶である。平面は楕円形で、短径側の一方に把手が付く。底部内面の下部に底板をはめ込む突帯が巡る。底板の痕跡は下端から５㎝の位置にあり、上から底板を落とし込んだのではなく下から突帯に押し当てていたようである。底板は、短径両側に開けたほぞ穴に２本の桟木を差し込んで固定していたようである。ほぞ穴に対向する位置に未貫通の穴が掘り込まれており、桟木の先端をこの穴に差し込んで固定していたようだが、ほぞ穴側で桟木を固定する木釘の痕跡は欠損により確認できなかった。このほぞ穴とは別に２本の桟木に挟まれた位置に対向する刳り込みを一対いれているが、機能は不明である。なお、外面にひび割れの補修痕があ

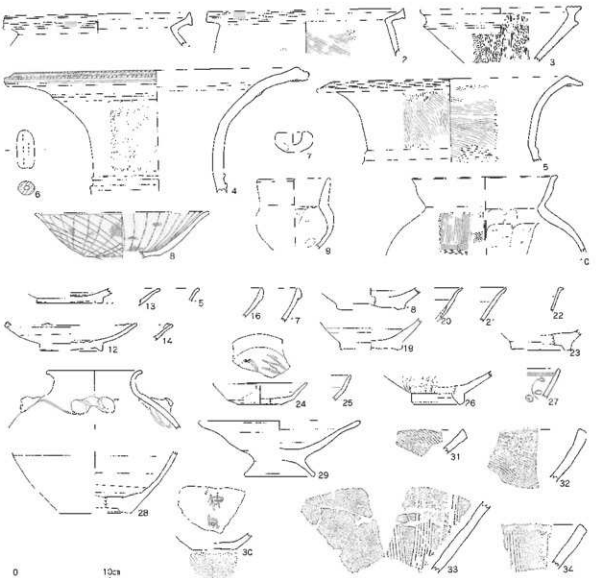


図6　包含層出土遺物実測図1（S＝1：4）

図7　包含層出土遺物実測図2（1～2はS＝2：3　3～10はS＝1：3　11はS＝1：2）

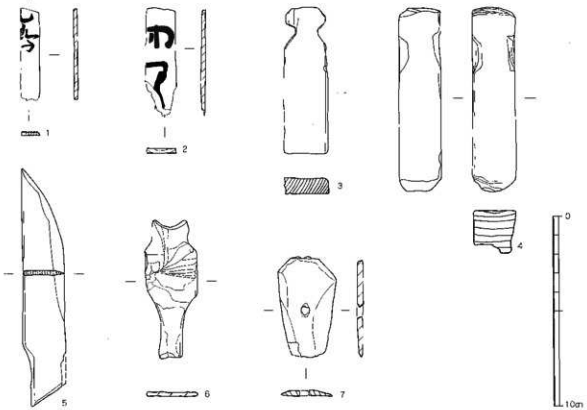


図8　包含層出土遺物実測図3（S＝1：2）

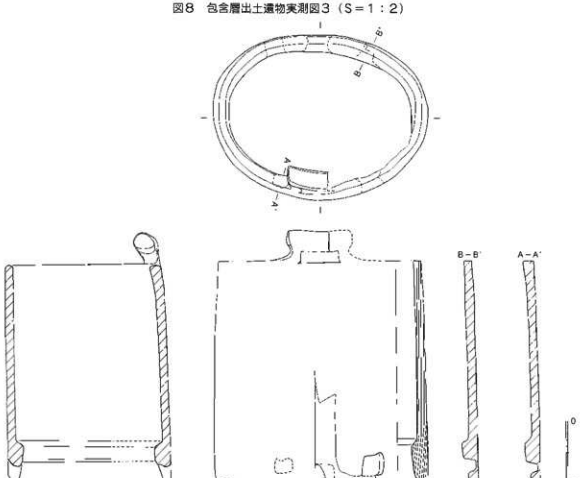


図9　包含層出土遺物実測図4（S＝1：6）

る。長さ3㎝、幅0.7㎝で、金属片による綴じ合わせがなされていたと思われる。

図10－1は漆碗。2，3，6，7は組結合による枠型の田下駄である。6が刳り込みと紐穴の両方で枠と固定するのに対し、7は刳り込みだけである。4は4ヶ所にほぞ穴をあけた部材片である。5は直柄の平鍬で、側面から見てそりのない緩やかな隆起を示す狭鍬である。弥生前期から中期に見られる型式[2]である。

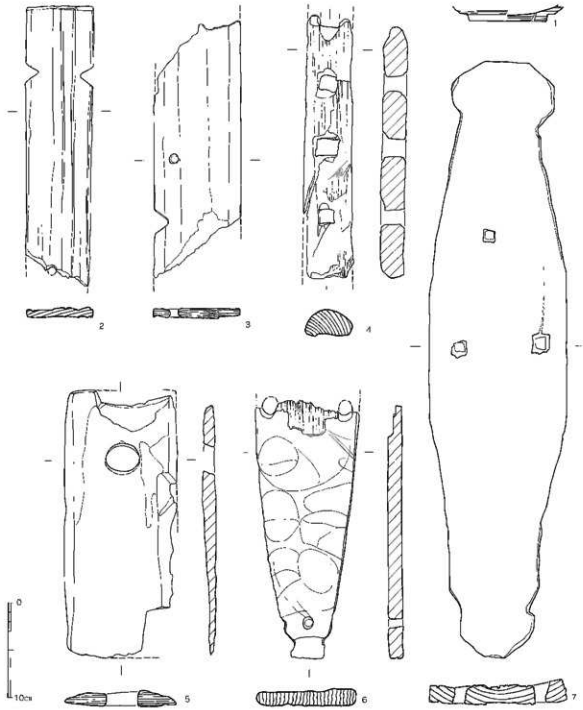


図10　包含層出土遺物実測図5（S＝1：4）

3．竪穴建物

竪穴建物は７棟検出したが、かなり削平を受けておりほとんどが床面の検出で、遺物も少ない。弥生時代が１棟あるほかはすべて古墳時代の方形プランの建物である。また、建物に伴う柱穴が判別できない場合が多く、現状では竪穴状遺構とするほうが妥当かもしれない。

ＳＩ０１，０２（図11　図版４，５，76）

調査区のうち最も谷の出口側に位置し、ＳＩ02を切り込んで作られている。長方形プランで、4.25×5.15ｍを測る。四周は幅約１ｍ前後、深さ約0.2ｍの溝状の落ち込みがめぐるが壁体溝とは考えられないので建物造成の際の基礎構造的な掘削の痕跡と考えられる。

遺物は検出面で散漫に出土した。２，３が建物に伴うものと考えられる。赤彩を内外面に施す土師器の高坏で、２は外面に２重の放射状に、３は単純な放射状に暗文を施す。２の内面は風化しているが暗文が施されていたものと思われる。同様の高坏は既往の調査で出雲編年１期[3]の須恵器と共伴[4]していることから、５世紀末～６世紀初と考えられる。ＳＩ02は平面長方形で3.5×2.8ｍを測る。遺物はなく西南隅に浅い溝がとりつくが伴う遺構かどうかは不明。

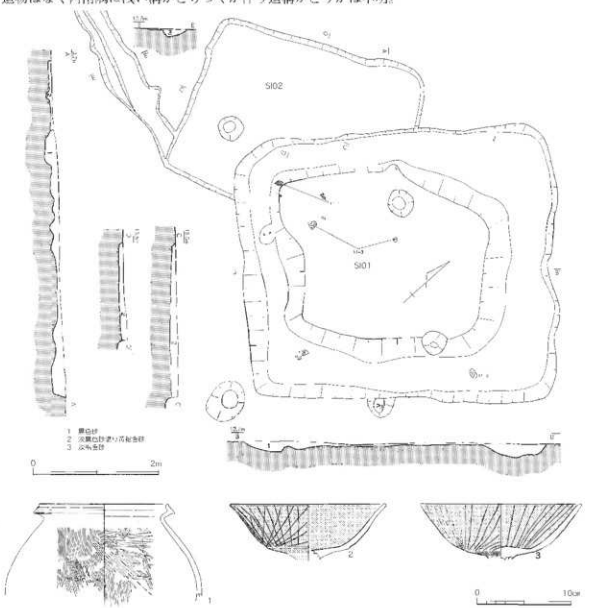


図11　ＳＩ01，02・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：60　遺物Ｓ＝１：４）

ＳＩ０３（図12　図版５，76）

4.6×3.8ｍを測る方形の建物で、ＳＢ08と一部重複する。南隅寄りの円形の土壙は中世以降のもので、住居に伴う柱穴は明確でない。

出土遺物のうち１は土師器で赤彩を施す短頸壺である。２は須恵器杯蓋で、ＳＢ08に伴うものかもしれない。

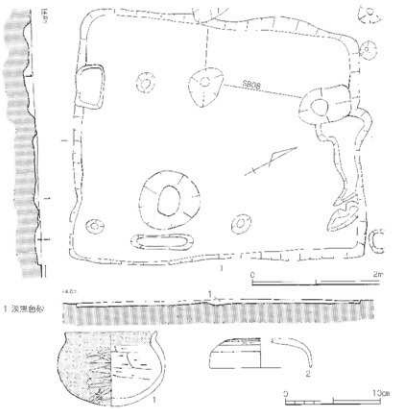


図12　ＳＩ03・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：60　遺物Ｓ＝１：４）

ＳＩ０４（図13　図版６，76）

4.75×4.5ｍを測る方形の建物で、ＳＤ14に切られている。南東辺の南寄りに入口と考えられる約0.8×0.3ｍの張り出しが認められた。床面に多数のピットを検出しているが、伴うかどうか不明である。

遺物は少ないが、東隅でまとまって出土した。１は土師器の甕で口縁は直線的に開き、内側する端面下に浅い沈線がめぐる。２は二重口縁が退化した土師器甕である。３は丸底壺である。時期は１，２の特徴から須恵器出現前の松山編年Ⅱ期[5]にあたる。

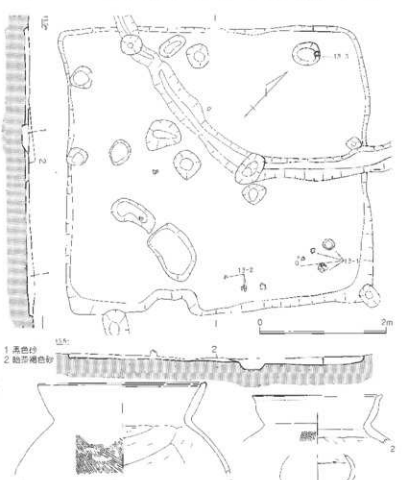


図13　ＳＩ04・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：60　遺物Ｓ＝１：４）

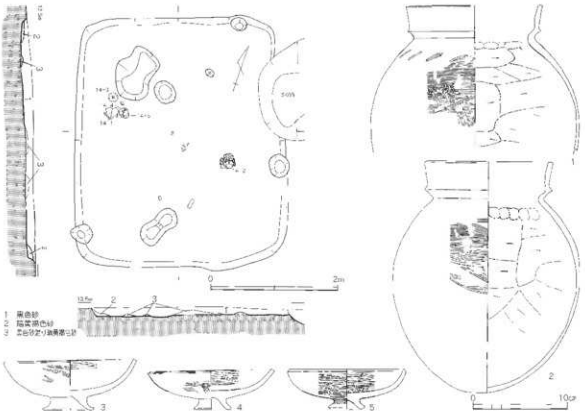


図14　ＳＩ05・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：60　遺物Ｓ＝１：４）

ＳＩ０５（図14　図版７，76）

調査区内で最も谷奥にあたる場所に位置する。ＳＫ05に一部切られているが、比較的に整った長方形を呈している。3.4×3.95ｍを測る。床面でピットを確認したが、建物との関係は不明である。

遺物は他の建物跡に比べまとまって出土した。１，２は複合口縁の甕で、１の肩には部分的に板状工具による刺突文が施されている。１は低脚杯と共に出土し、２は東辺寄りで出土した。３～５は低脚杯、でいずれも伏せた状態で出土し、４，５は上下に重なるように出土した。３はやや大きく砂粒を多く含むのに対し４，５は法量、胎土とも近似している。

ＳＩ０６（図15　図版８）

ＳＩ04と05の中間に位置し、ＳＤ15に切られている。いびつな台形を呈し、確証はないが一応建物に含めておく。規模は北辺4.1、西辺2.9ｍを測る。出土遺物はなく時期も不明であるが、ＳＤ14・15との関係から見ればＳＩ04と同時期とも考えられる。

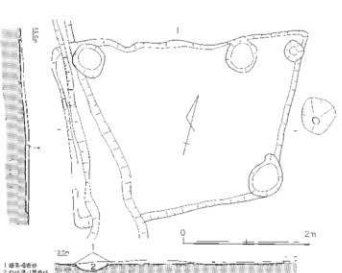


図15　ＳＩ06実測図（Ｓ＝１：60）

ＳＩ０７（図16　図版８、77）

調査区内では最も南に位置し、唯一の弥生時代の建物である。平面円形で直径約4.2ｍを測る。床面上で主柱穴Ｐ１～４を検出した。柱穴は直径0.3～0.6ｍの不正形な円形を呈し、深さは床面から0.3～0.45ｍを測る。柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２、Ｐ３－Ｐ４が2.5ｍ、Ｐ１－Ｐ４が2.3ｍ、Ｐ２－Ｐ３が2.4ｍを測る。床面中央には長径1.05ｍ、短径幅0.7ｍ、深さ0.2ｍを測る土壙があり粘質土が入っていた。

遺物はすべて竪穴埋土からの出土で全体に散漫な出土状況を示している。１、２は弥生中期後葉の甕である。口縁端部下端の特徴からすると１が新相、２が古相の特徴を示している。３は無頸の壺と思われる。

この建物は後述するＳＫ01，02、ＳＤ02，02' と同時期で、三田谷Ⅰ遺跡の中では数少ない弥生中期の遺構である。

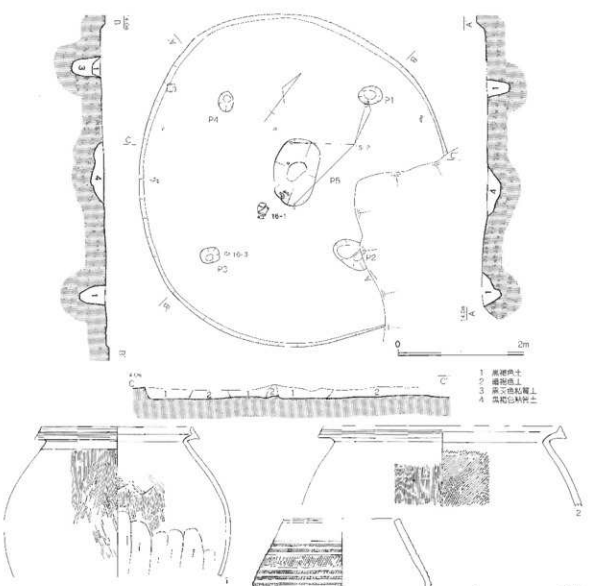


図16　ＳＩ07・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：60　遺物Ｓ＝１：４）

4．掘立柱建物

掘立柱建物は南の丘陵と谷のほぼ中央を流れるＳＤ06の間の段丘上で確認できた。同一場所の建て替えを除くと18棟あり、そのうち束柱を持たない側柱建物が８棟、束柱を持つ総柱建物が10棟である。柱間数で見ると側柱建物では３×２間が６棟、２×２間が１棟、全容が不明なもの１棟である。総柱建物では２×２間が９棟、３×２間が１棟である。面積で見ると２×３間の側柱建物ではＳＢ18が最大で40.2㎡、最小がＳＢ14で15.3㎡である。一方２×２間の総柱建物では最大がＳＢ02で13.6㎡で、最小がＳＢ03で8.8㎡である。

次に建物の分布を見ると調査区南西、北東及びその中間の３つに分かれている。前２者は各２棟しかなく、中間地帯に大多数が集中する特徴が窺える。中間地帯の建物群は棟・妻方向（以下軸方向とする。）の相関関係と建物相互の配置状況からさらに３つのまとまりが認められる。Ａ群はＳＢ04，06の２棟で、桁行き方向をそろえ直列配置されている。Ｂ群はＳＢ13，05，11，02とＳＢ08の５棟でＳＢ13から02までが雁行する建物配置を見せている。棟方向（柱穴心心距離の長い方向。以下同じ。）はＳＢ13を除き同一方向に向く。Ｃ群はＳＢ07，10，03の３棟で、近接して直列に配置されている。立て替えと考えられるＳＢ12もこれに含む。棟方向はＳＢ07・10・03で互い違いに配置されている。以上の３群とこのほかの建物を軸方向で比べるとＳＢ01，17はＣ群と共通することから同じグループを構成する可能性が考えられる。残る建物のうちＳＢ09と14、ＳＢ15と16はそれぞれ同一の方位であるが、ＳＢ15・16はＢ群に近いので一応これに含め、ＳＢ09と14はＤ群とする。ＳＢ18はどの建物にも軸方向が揃わないので帰属は不明である。既報告の調査区（島根県教委1999）の検出建物との関係が考えられるが一応保留しておく。

次に各群の建物構成を種類別に概観する。ここでは側柱建物を平地式建物、総柱建物を倉庫とする。Ａ群は平面形式が異なる同規模の倉庫２棟で構成されている。Ｂ群の場合、ＳＢ13は束柱こそ持たないが平面形が正方形に近いことから倉庫と考えられるので、倉庫４棟と平地式建物３棟の構成となる。Ｃ群は４棟（建て替えのＳＢ12を除く）の倉庫と１棟の平地式建物で構成される。Ｄ群は平地式建物２棟である。以下、群別に各建物の概要をのべる。

なお、今回建物として報告するのは、建物としての蓋然性が高いもののみ取り上げた。従って方形に展開しない不規則な柱穴列はすべて除外し、その位置を巻末の全体図に示すだけにとどめた。

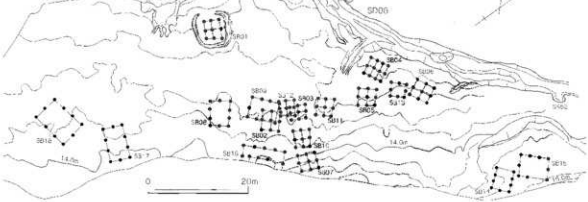


図17　掘立柱建物配置図（Ｓ＝１：750）

ＳＢ０６（図18　図版11）

ＳＤ06に接する位置にあり、ＳＢ04とは棟通りを揃え直列に配置されている。２×２間の総柱建物で桁行長3.73m、梁行長3.46m（柱穴心心距離以下同じ）床面積12.9㎡を測る。棟方向はＮ－61°－Ｅ。Ｐ１では柱根が残っていた。樹種はカヤで、径25～30cm、高さ30cmを測る。

柱穴から土師器の小片が多数出土した。須恵器では１がＰ８から、２がＰ１の上面と柱根脇から出土した。１は底部回転糸切りのちナデ。２は輪状つまみが付く蓋であろう。

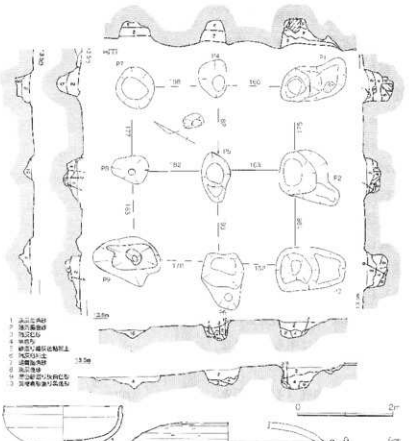


図18　ＳＢ06・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：80　遺物Ｓ＝１：４）

ＳＢ０４（図19　図版11）

ＳＢ06の南西６mに位置する。２×３間の総柱建物で、桁行長3.75m、梁行長3.53m、床面積13.2㎡を測る。棟方向はＮ－60°－Ｅ。Ｐ２～４の南側から妻側に向かって幅15cm前後の雨落溝が残る。

柱穴から土師器の小片が多数出土した。１は唯一の須恵器で、杯か高坏の口縁であろう。２は土師器の甕の口縁である。

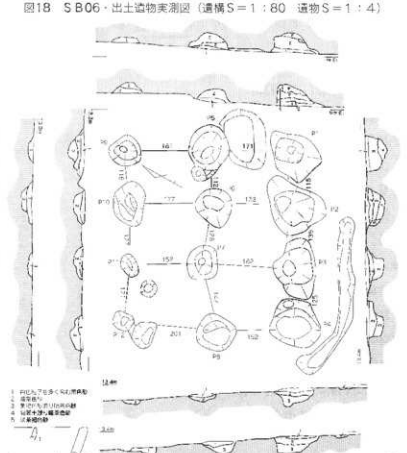


図19　ＳＢ04・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：80　遺物Ｓ＝１：４）

ＳＢ１５（図20　図版15）

調査区北東に位置する。岩盤に掘り込まれた２×３間の側柱建物で桁行長5.80ｍ、梁行長4.25ｍ、床面積24.7㎡を測る。棟方向はＮ－44°－Ｅ。建物内部の東隅を矩形に区画するような柱列（Ｐ3、14、15、16、11）があるが、建物の柱筋とかならずしも一致しないので、別の建物が重複しているとも考えられる。ただしＰ14は17，18，19と柱穴列ＳＡ01を構成する可能性もあり、ＳＢ15との関係は明らかではない。

遺物は土師器甕（１）と須恵器杯身（２）がＰ12から、須恵器蓋と思われる小片（３）がＰ１から出土した。

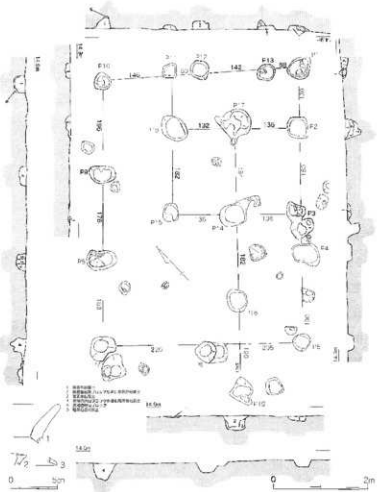


図20　ＳＢ15、ＳＡ01・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：80　遺物Ｓ＝１：４）

ＳＢ１３（図21　図版16）

後述する３棟の倉庫とともに雁行配置をとる２×２間の側柱建物である。雁行の北端に位置し、ＳＢ05とは約2.7ｍの間隔をおいて隣り合い、柱筋を約1.6ｍずらして雁行する。

桁行長2.93ｍ、梁行長2.64ｍ、床面積7.7㎡である。棟方向はＮ－43°－Ｅ。床束の痕跡こそ無いが、２×２間で小型、正方形に近いことから倉庫と考えられる。

柱穴から土師器の小片が出土している。１は高坏の口縁と思われるが、薄いつくりで内外面とも縦方向のヘラ磨き。Ｐ４出土。２は内外面赤彩した杯の口縁で、内面に螺旋状の暗文が認められる。Ｐ８出土。

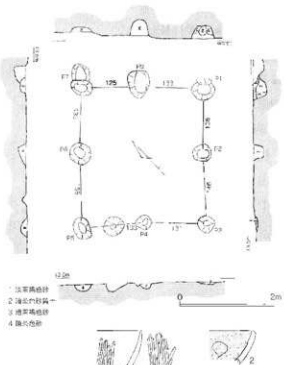


図21　ＳＢ13・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：80　遺物Ｓ＝１：４）

ＳＢ０５（図22　図版16）

後述のＳＢ11とは約4.6ｍの間隔をおいて隣り合い、柱筋を約2.6ｍずらして雁行する。２×２間の総柱建物で、桁行長3.55ｍ、梁行長3.52ｍ、床面積12.5㎡を測る。棟方向はＮ－52°－Ｗ。柱穴は１辺１ｍを越える方形に近いものもあるが0.5ｍ前後の不整な円形のものもある。深さは最も深いＰ９で0.5ｍを測る。

柱穴からは土師器の小片が多数出土した。Ｐ１から古墳時代前期の土師器甕の口縁が出土している。

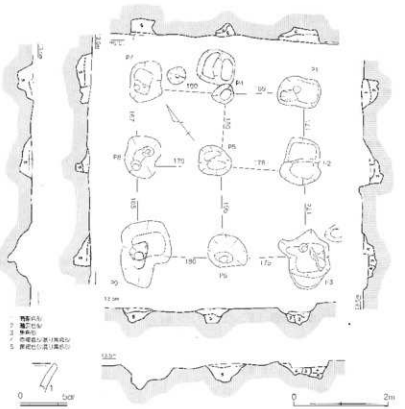


図22　ＳＢ05・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：80　遺物Ｓ＝１：４）

ＳＢ１１（図23　図版16）

２×２間の総柱建物で雁行する建物の中ではやや歪な方形を呈する。桁行3.37ｍ、梁行長3.28ｍ、床面積11.1㎡を測る。棟方向はＮ－39°－Ｅ。柱穴は不整な円形で、大きいもので0.8ｍ前後、小さいもので0.6ｍ前後である。Ｐ１，２，４，５には他の建物では見られなかった赤橙色の粘土塊があった。Ｐ２以外は柱穴上面で顕著であったことから、根腐れ防止のために柱に巻かれた粘土であった可能性もある。

柱穴から土師器の小片が多数出土した。細片だがＰ２から赤彩痕が出土している。

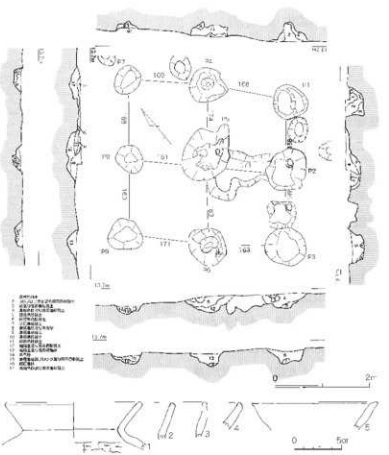


図23　ＳＢ11・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：80　遺物Ｓ＝１：４）

ＳＢ０２（図24　図版17）

調査区中央の１群の中でも建物の密集地点に位置し、ＳＢ12，09と一部重複する。先述のＳＢ11とは約７ｍ離れ、柱筋を約3.6ｍとほぼ一棟分ずらして雁行する。２×２間の総柱建物で、桁行長3.77ｍ、梁行長3.61ｍ、床面積13.6㎡を測る。棟方向はＮ－50°－Ｗ。柱穴は不整方形を呈し、Ｐ７～９は１辺１ｍを測る。

出土遺物には須恵器（１，２）と土師器（３）がある。１は提瓶又は平瓶の口縁で、Ｐ８出土。２は高坏又は杯の口縁で、Ｐ６出土。３は土師器甕でＰ８出土。

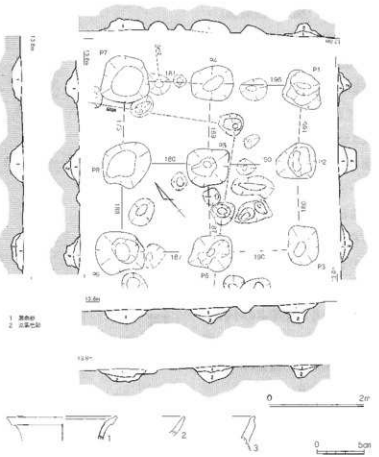


図24　ＳＢ02・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：80　遺物Ｓ＝１：４）

ＳＢ０８（図25　図版17）

調査区中央の一群で西端に位置し、一部ＳＩ03と重複する。ＳＢ02とは6.4ｍの距離を置き、東梁行の柱筋をそろえて並列することから同グループと判断した。２×３間の側柱建物で、桁行長4.82ｍ、梁行長4.06ｍ、床面積19.6㎡を測る。棟方向はＮ－54°－Ｗ。柱穴は不整円形を呈し、径0.45～0.85ｍを測る。

遺物は須恵器（１～３）、土師器（４）がある。１は高台の付く長頸壺で、Ｐ２出土。２は高坏脚部で２方に切れ目状の透かしを入れる。Ｐ９出土。３は高坏又は杯の口縁。Ｐ８出土。４は土師器甕で、Ｐ９出土。

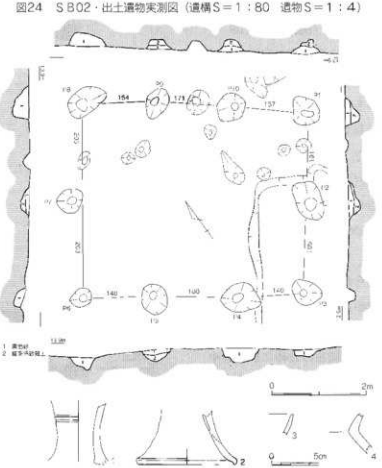


図25　ＳＢ08・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：80　遺物Ｓ＝１：４）

ＳＢ１６（図26　図版17）

ＳＢ02の南東3.5ｍに位置する。柱間寸法の異なる柱穴列が２重にめぐる。東半は調査区外にあり正確な構造、規模は不明である。２条の柱穴列を無関係と見れば、大小２棟の建物が重複するとも考えられる。しかし、Ｐ１～３とＰ５～９が平行していること、外側の柱穴がちょうど内側の柱穴間の中央ににくるように配置されていることから２条の柱穴列が無関係に存在したのではなく、一体として建物を構成していたと考えられる。一部の所見から全体を推測するには無理もあるが、幾つかの類例[6]からすると内側を身舎柱列、外側を縁束柱列と見ることもできる。身舎の柱配列がやや不明確だが、Ｐ３はＰ10にはつながらず調査区外に展開するものと考えられるので１辺が２または３間の建物に周り縁がとりつく構造と推測される。規模は縁が南北４間、東西２間以上で、棟方位はＮ－44°－Ｅまたは46°－Ｗになる。

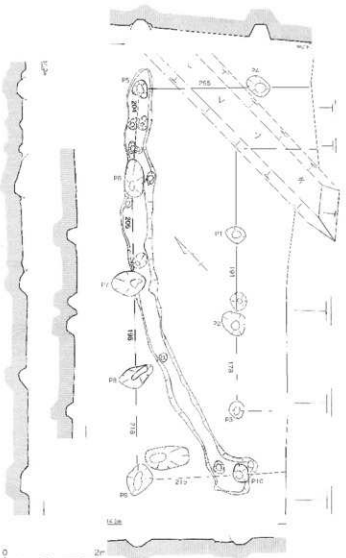


図26　ＳＢ16実測図（Ｓ＝1：80）

柱穴からは土師器の細片が出土しているが、時期は不明である。Ｐ５～７はＳＤ17と重複しているが、前後関係を明確にできなかった。溝に伴う遺物には古墳時代後期と思われる赤彩の高坏、甕、土師器甕の破片がある。

ＳＢ１４（図27　図版18）

調査区北東に位置する。このあたりには第Ⅶ層は無く、遺構は黄褐色の風化した岩盤に掘り込まれている。近接するＳＢ15とは軸方向が若干異なる。２×３間の側柱建物で、桁行長4.27ｍ、梁行長3.58ｍ、床面積15.3㎡を測る。棟方向はＮ－42°－Ｗ。柱穴は0.3～0.5ｍを測る不整円形を呈する。Ｐ３で灰色の粘土に置換した柱痕跡を確認した。径は0.2ｍ。北の妻側柱穴を確認できなかった。

図示できなかったが、Ｐ２から土師器の杯と思われる小片が出土している。胎土は精良で色調は淡橙色。内外面とも赤彩を施す。

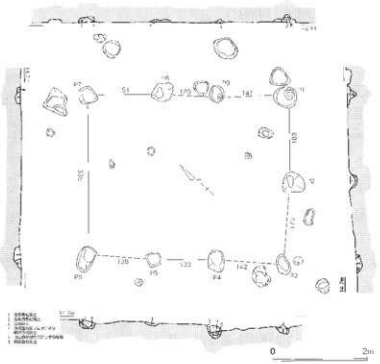


図27　ＳＢ14実測図（Ｓ＝１：80）

ＳＢ０９（図28　図版18）

調査区中央の一群でＳＢ02，12と一部重複する。２×３間の側柱建物で均整のとれた長方形を呈する。桁行長5.63ｍ、梁行長4.13ｍ、床面積23.3㎡を測る。棟方向はＮ－48°－Ｅ。柱穴は不整な円形を呈し、妻柱がやや小さく0.4ｍで、他は0.5～0.7ｍとやや大きい。Ｐ９はＳＢ12のＰ９と切り合っていたと思われるが、前後関係を確認できなかった。

柱穴から出土したのは土師器の小片がほとんどで須恵器はＰ４出土の１片のみであった。図示できなかったが、杯または高坏の破片と思われる。

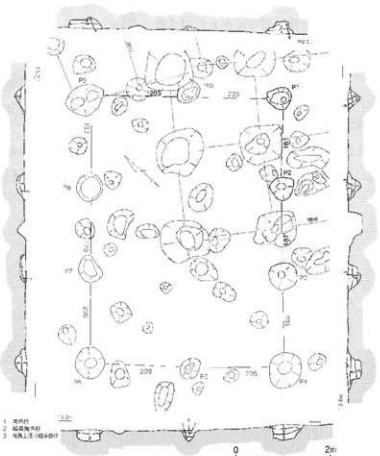


図28　ＳＢ09実測図（Ｓ＝１：80）

ＳＢ０７（図29　図版12，13）

調査区中央の一群で、南東丘陵の裾にあたる。２×２間の総柱建物で、桁行長3.63ｍ、梁行長3.24ｍ、床面積11.8㎡を測る。

棟方向はＮ－23°－Ｅ。柱穴平面はＰ３，４，５が比較的に方形を呈するほかは不整形である。Ｐ１，３，４で柱根が残っていた。遺存状態は悪くＰ３，４ではわずかに木質が残る程度で大半は粘土に置き換わっていた。Ｐ１の樹種はスギである。

柱穴から磨滅した七師器の小片と須恵器が出土した。１はＰ３から出土した土師器で脚部に段を持つ高坏である。２，３は須恵器で壺胴部と杯身口縁の小片である。

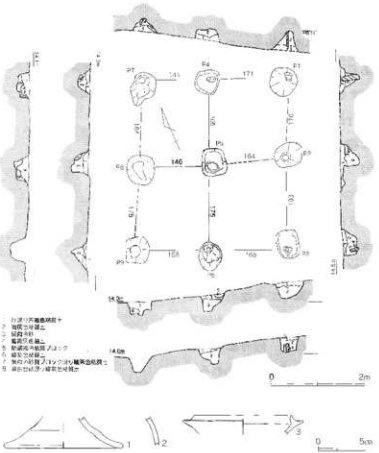


図29　ＳＢ07・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：80　遺物Ｓ＝１：４）

ＳＢ１０（図30　図版13）

ＳＢ07の西側に隣接する位置にあり、建物間の距離は１～1.5ｍ程度しかない。２×２間の総柱建物で、桁行長3.35ｍ、梁行長3.26ｍ、床面積10.9㎡を測る。棟方向はＮ－64°－Ｗで、ＳＢ07と直行する配置をとる。柱穴は不正形な楕円が多い。

図示できなかったが、柱穴から土師器の小片が出土している。

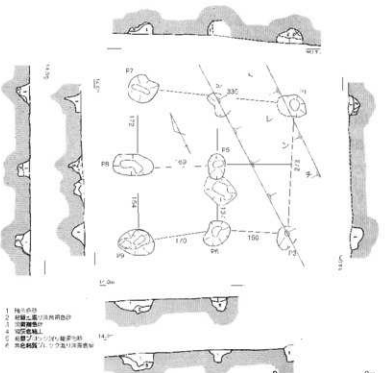


図30　ＳＢ10実測図（Ｓ＝１：80）

ＳＢ０３（図31　図版12）

ＳＢ10の西側約２ｍの位置にあり、後述するＳＢ12と一部重複する。２×２間の総柱建物で、桁行長3.16ｍ、梁行長2.8ｍ、床面積8.8㎡を測る。棟方向はＮ－27°－ＥでＳＢ10と直行する。柱穴の平面形は不整形な楕円で、深さは他の三棟に比べて深く25㎝前後である。

図示できなかったが、柱穴から土師器の細片が多数出土している。Ｐ１から出土した土師器は胎土が精良で、内外面とも赤彩を施した杯の細片と思われる。

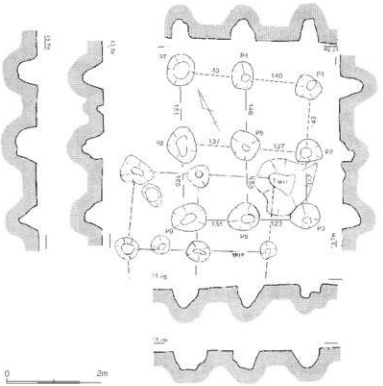


図31　ＳＢ03実測図（Ｓ＝１：80）

ＳＢ１２（図32　図版12）

ＳＢ03と一部重複する。２×２間の総柱建物で桁行長3.03ｍ、梁行長2.96ｍ、床面積９㎡を測る。棟方向はＮ－30°－ＥでＳＢ03とほぼ同じである。Ｐ１は古墳時代前期のＳＫ17を切り込んでいるが平面で切り合いは確認できなかった。またＰ９はＳＢ09のＰ９と一部重複するが前後関係は確認できなかった。規模、棟方向がＳＢ03とほぼ同じことから同一の群内の建て替えと考えられる。

柱穴から土師器の細片がわずかに出土している。

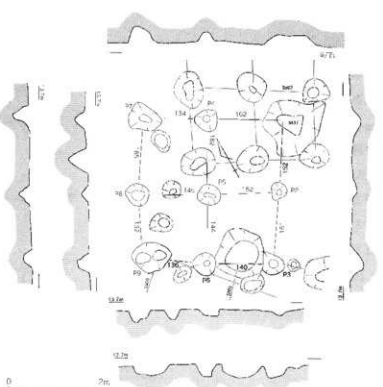


図32　ＳＢ12実測図（Ｓ＝１：80）

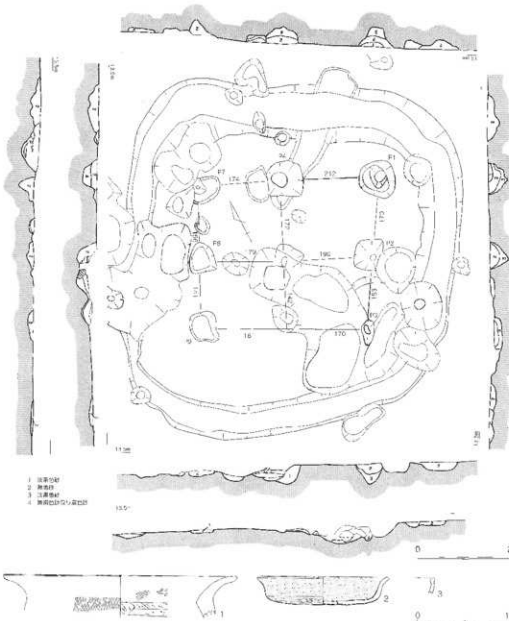


図33　ＳＢ０１・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：80　遺物Ｓ＝１：４）

ＳＢ０１（図33　図版14，15）

調査区中央の一群から北西にやや離れて存在する建物である。２×２間の総柱建物で四周を溝で区画している。桁行長3.86ｍ、梁行長3.23ｍ、床面積12.5㎡を測る。棟方向はＮ－62°－Ｗ。遺構面は中世以降の土壌によって著しく攪乱されおり、Ｐ３，５はその一部を確認したがＰ６は確認できなかった。攪乱を免れた柱穴の形は不整形な楕円～隅丸方形である。周溝は西側で中世以降の土壌に切られているが、もとはつながっていたものと思われる。平面形は歪な方形で幅0.7～1.1ｍ、深さは最大で0.2ｍを測る。建物と溝の間隔を見ると南側が他の３辺より広いが、最も広いのはＰ６相当箇所とＰ９の前面で、この辺りが入り口に相当するかもしれない。

遺物は周溝内から土師器の小片が多数出土した。１は土師器甕の口縁。２は内外面赤彩を施す土師器杯で底部はヘラ削り。Ｐ７から須恵器の小片１点が出土した。３は高台の付かない糸切り底の碗であろう。

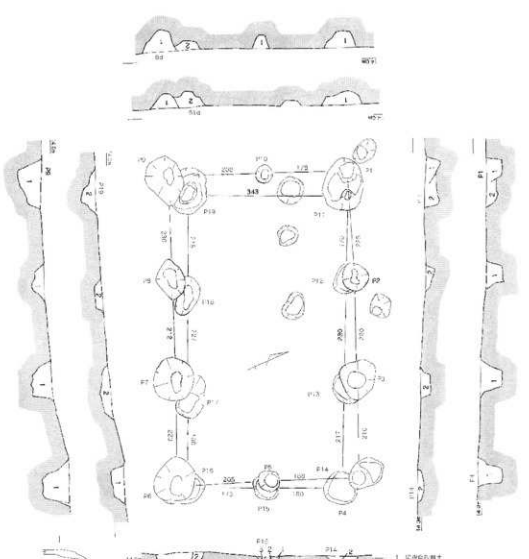


図34　SB17・出土遺物実測図（遺構S＝1：80　遺物S＝1：4）

SB17（図34　図版14）

調査区南西に位置する2×3間の側柱建物で、同一位置での建て替えが確認できた唯一の例である。当初の建物（P11～19）は桁行長6.25m、梁行長3.43m、床面積21.4㎡を測る。棟方向はN－66°－W。西側の妻柱にあたる柱穴は確認できなかった。建て替え後の建物（P1～10）も2×3間の規格を踏襲し、桁行長6.65m、梁行長3.93m、床面積26.1㎡を測る。棟方向はN－69°－W。建て替え前後の柱間寸法を平均値で比較すると、桁行で2.08mから2.19m、梁行で1.68mから1.94mに拡大している。柱穴は建て替え前後とも不整円形を呈し、妻柱にあたる柱穴は他より小さい。柱穴の底のレベルを比較すると建て替え後のほうが深い。

柱穴の前後関係と対応させて遺物を取り上げることができなかったが、須恵器（1～4）と土師器（5）の小片が出土している。1はへら切り未調整の杯蓋。4は糸切り底の碗の口縁である。

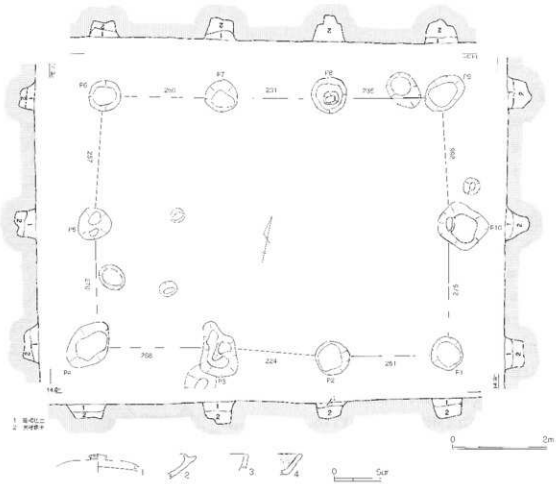


図35　ＳＢ18・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：80　遺物Ｓ＝１：４）

ＳＢ１８（図35　図版18）

調査区の最も南に位置する２×３間の掘立建物である。桁行長7.43ｍ、梁行長5.41ｍ、床面積40.2㎡を測る。同規格の建物の中で最も規模が大きい。棟方向はＮ－77°－Ｅで、軸方向は他のどの建物とも共通しない。柱穴は不整円形を呈し、0.6～1.1ｍを測る。深さは0.3～0.55ｍである。

柱穴からは土師器の小片多数と須恵器の小片が若干出土している。１は須恵器で、かえりが付く蓋と思われる。つまみはつぶれた擬宝珠状を呈する。Ｐ４出土。２は杯身でＰ２出土。３は高台の付かない糸切り底の須恵器碗と思われる。Ｐ８出土。４は内外面に赤彩を施した土師器杯で、胎土は精良である。Ｐ８出土。

5．土　壙

土壙として取り上げたものは比較的に大型の「穴」で、形状が特徴的なもの、まとまって遺物が出土しているか特殊な遺物が出土しているものである。

ＳＸ０３（図36　図版19）

ＳＢ06とＳＢ14の間の遺構空白地帯で第Ⅰ層を掘削中に検出した。1991年度に実施したトレンチ調査で南西の一角を失っているが、底部、両側辺を薄い板で３面張りした遺構で両小口と天井に板は認められなかった。掘り形は長方形を呈し長辺1.8ｍ、短辺0.5ｍ、深さ最大0.17ｍを測る。平坦な底面に長方形の板が４枚主軸に対し斜行するように敷かれていた。この上に長さ1.66ｍ、幅0.21ｍ、厚さ１㎝の一枚ものの底板を置く。側板は底板よりも長く北側板は長さ1.74ｍ、幅0.17ｍ、厚さ１㎝を測る。側板は敷き板に乗せるようにして外開きに置かれている。さらに中央やや北東側の底板と側板の隙間に長さ35㎝、幅３㎝の杭が２本、側板を押さえるように斜めに打ち込まれていた。図示できなかったが、須恵器の小片と漆碗が底板から浮いた状態で出土した。木棺墓としては特異な構造で性格は不明と言わざるを得ない。

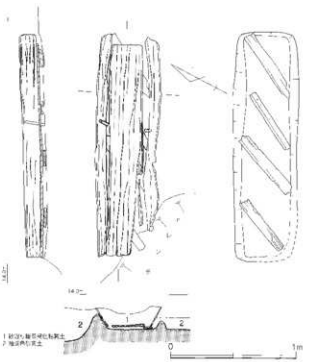


図36　ＳＸ03実測図（Ｓ＝１：30）

ＳＫ０５、０６、０７、０９、３９、４０、４３（図37，38　図版78）

第Ⅳ層を掘り込んでいた土壙群のうち、特徴的な遺物が出土したものを取り上げた。これらの土壙群はＳＢ01からＳＢ06の間に分布しており、規模、形状はさまざまだが、埋土の上面に第Ⅰ層またはその下層に由来すると思われる砂混じり粘質土が、下面に赤褐色や黄白色の粗砂が堆積するという点で共通していた。土壙からの出土遺物は磨滅した土器片ばかりで、まとまった出土状況を示

図37　ＳＫ05，09実測図（Ｓ＝１：60）

図38　ＳＫ05～07，09，39，40，43出土遺物実測図（Ｓ＝１：４）

すものはなかった。6はＳＫ05出土の須恵器で頸部と胴部の境に突帯が巡る水瓶。7はＳＫ39出土の青白磁梅瓶で渦文の描かれた肩部の小片。11はＳＫ43出土の同安窯系青磁碗で外面に片彫り風に条線が施されている。7，11から土壙群の上限が13世紀代にあることがわかる。

ＳＫ１９（図39　図版20，21，78）

調査区南東から張り出した丘陵裾の先端に位置する。後述するＳＫ20，22，24と隣接している。長径1.17ｍ、短径0.8ｍ、深さ0.24ｍを測る楕円形の土壙である。図示してないが須恵器の小片若干とＳＫ20と同様な土師器碗の小片が出土している。

ＳＫ２０（図39　図版20，78）

ＳＫ19と長軸が同じ楕円形の土壙である。長径1.87ｍ、短径1.33ｍ、深さ0.29ｍを測る。土師器碗は樹木片、石を伴い土壙の北側に偏って出土した。３，４は高台の付かない碗で底部から屈曲した体部から口縁を単純に納める。５～10は高台が付く碗で体部は丸みをもち口縁端部は単純に納める。２は口縁端部が若干反る。

ＳＫ２２（図40，41　図版22，23，78）

丘陵表層の粘質土を地山にして掘り込まれた大型の集石土壙である。平面は西側に張り出しが付いた不整円形を呈し、径3.85ｍ、深さ0.6ｍを測る。石は土壙の上面にはなく底面に重なるような状態であった。丸みのある礫が大半で、おおよそ拳大から人頭大の大きさである。集石から出土した遺物は図４１－４～６，10，14である。ＳＫ24に近接する位置でまとまって出土した遺物は１，３，７，８，13である。

土壙外の南と北に掘り込みを伴わない大小の集石がある。南の集石は地山に張り付くように広範囲に見られた。ここからの出土遺物は２，11，12がある。11は青白磁合子の身である。北側の集石は0.9×0.6ｍの狭い範囲に限られており、須恵器の甕片のほか９の土師器柱状高台が出土している。２，３，８，10に見られる丸みのある体部と高台の特徴から12世紀前半頃と考えられ、青白磁合子の年代観とも矛盾しない。

図39　ＳＫ19，20・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：60　遺物Ｓ＝１：４）

図40　SK22実測図（S＝1：60）

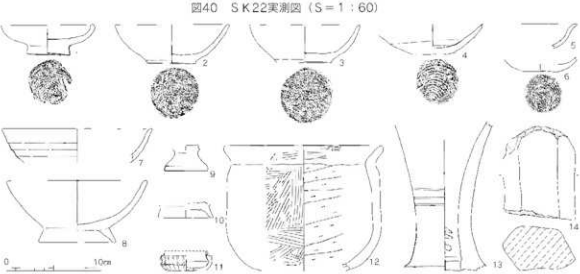


図41　SK22出土遺物実測図（S＝1：4）

ＳＫ６２（図42　図版24，25）

ＳＤ06上流部の一角に位置する湧水坑である。風化岩盤に掘り込まれており、2.3×2.1ｍ、深さ1.36ｍを測る不整な方形を呈する。湧水点は坑の東隅で（図の↘印部分）、坑底から湧き上がるのではなく岩盤の隙間から流れ落ちるように出ていた。湧水点に対向する西隅はＳＤ06に取り付くように開口している。坑底のレベルはＳＤ06の下面とほぼ同じである。この開口部には転用材と思われる長さ0.73ｍ、幅0.18ｍ、厚さ1.5㎝の長方形の板が長辺を横に立てて置かれていた。板は坑底から若干上がった位置に据えられており内側で杭で留められ、溝側は大型の岩に押さえられていた。湧水を坑内に貯めるための堰状の施設と考えられる。流水の形跡が顕著なＳＤ06とは対照的に、坑内には暗茶～暗灰色の均質な粘質土が堆積していたことから緩やかな埋没過程が想定できる。

坑内からは土師器碗の小片が１点だけ出土した。内外面赤彩を施し、底部はヘラ削り、口縁部内面に回転なでの痕跡が明瞭に残る。位置を特定できなかったが、坑に近接するＳＤ06中から齋串が２点（図71－８，11）出土した。古代の湧水状態は不明だが、井泉として機能し、湧水点祭祀が行われていたと思われる。

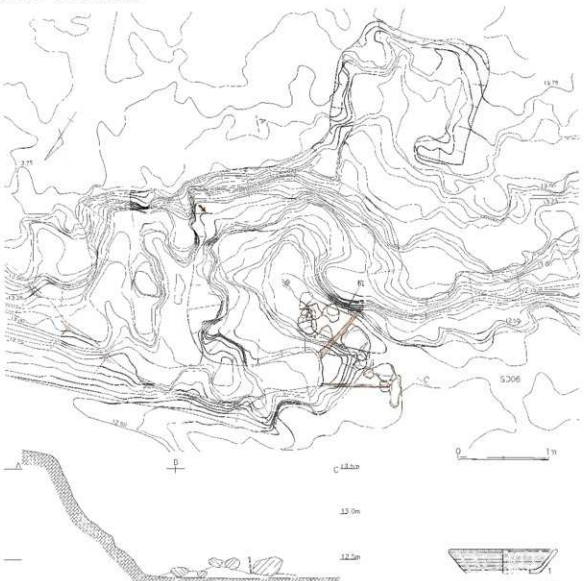


図42　ＳＫ62・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：40　遺物Ｓ＝１：４）

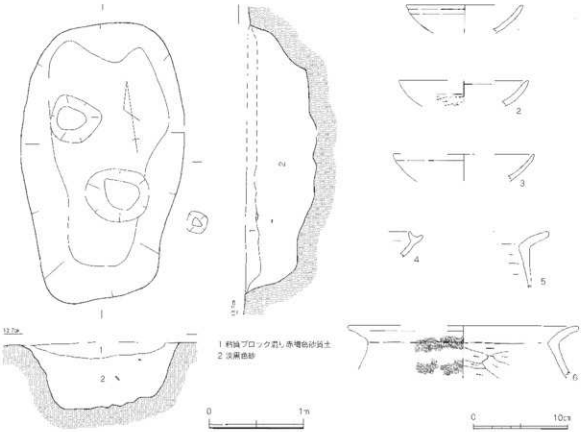


図43　ＳＫ03・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：40　遺物Ｓ＝１：４）

ＳＫ０３（図43　図版26）

調査区南隅の小ピット群の中に位置する。隅丸の長方形を呈し、長辺2.9m、短辺1.7m、深さ0.7mを測る大型の土壙である。底面は２カ所に柱穴状の落ち込みが見られるほかは平坦であった。埋土の様相は単純で周辺のピットの埋土と変わることはない。

出土した土器はすべて小片で、２層から出土した。１～３は須恵器の高坏か杯の口縁部。４は須恵器の杯身。５，６は土師器の甕である。土壙墓とする積極的な根拠もなく、性格は不明である。

ＳＫ１５・１６（図44）

Ｓ１05の南側に位置する。長楕円形の土壙が切り合っており、新しい方をＳＫ16、古い方をＳＫ15とした。ＳＫ15は長径2.49m、短径0.94mを測り、中央で最も深く0.36mであった。上面から上師器の甕が出土した。ＳＫ16は長径1.97m、短径0.66m、深さ0.13mを測る。遺物は出土しなかった。

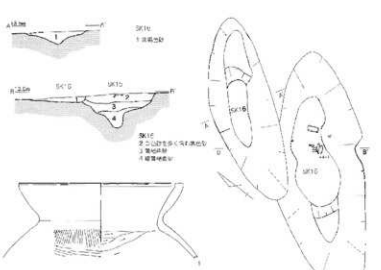


図44　ＳＫ15,16・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：40　遺物Ｓ＝１：４）

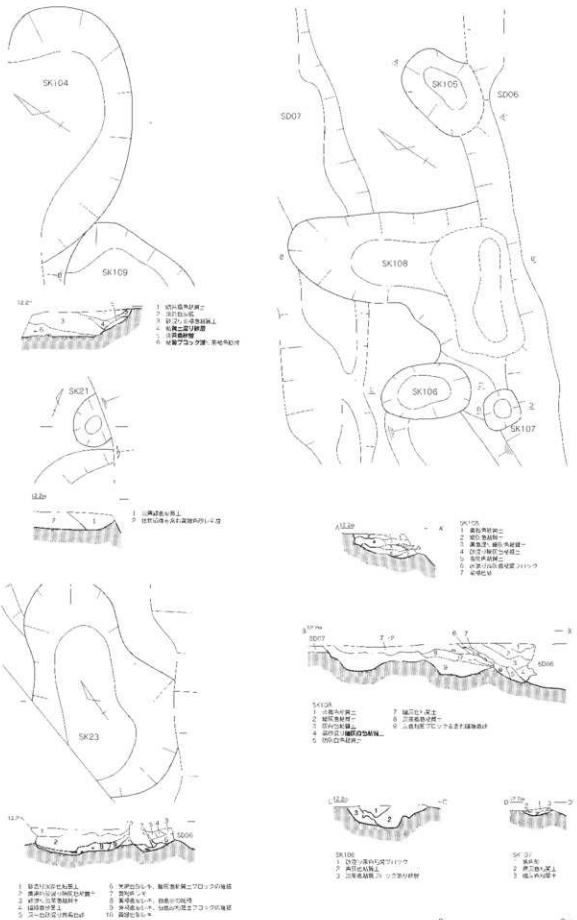


図45　ＳＫ104～109，21，23実測図（Ｓ＝１：60）

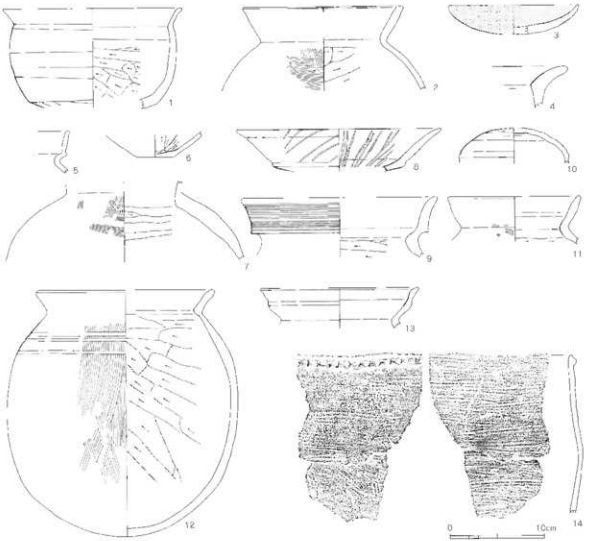


図46　ＳＫ103～109，21，23出土遺物実測図（Ｓ＝１：４）

ＳＫ１０３（図46，53　図版79）

ＳＤ06の上流部に位置する。不整円形を呈し、径1.3～2.0ｍを測る。切り合い関係からＳＤ06，01より新しい。１の土師器甕が出土した。

ＳＫ１０４・１０９（図46　図版79）

調査区西端に位置し、周辺で舗縁する溝の一部を捉えている可能性もある。２がＳＫ104出上。５～７がＳＫ109出土。

ＳＫ１０５～１０８（図46　図版79）

ＳＤ06とＳＤ07の間に位置する。ＳＤ06との切り合いは明確にできなかった。３がＳＫ105出上。４がＳＫ108出上。

ＳＫ２１・２３（図46　図版79）

ともにＳＤ20を切って掘られている。８，９がＳＫ21出上。10～14がＳＫ23出土。

ＳＫ１９４（図47　図版26）

ＳＢ08の西に位置する。0.82×0.63ｍ、深さ0.14ｍを測る土壌で、手捏土器が１点出上した。

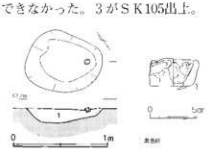


図47　ＳＫ194・出土遺物実測図
（遺構Ｓ＝１：40　遺物Ｓ＝１：４）

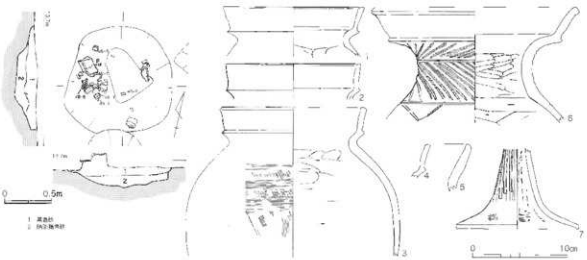


図48　SK17・出土遺物実測図（遺構S＝1：40　遺物S＝1：4）

SK17（図48　図版26，78）

SB03，12に切られている。径1.1m、深さ0.2mの不整円形の土壙である。土器は土壙の東にかたまって出土したが、破片ばかりで完形のものはなかった。1～4は複合口縁の甕で、5は口縁の内面端部に内傾するアクセントが残る甕である。6は複合口縁の壺で、頸部に羽状文を施す。7は高坏脚部である。軸部分は縦方向のヘラ磨きを全面に施した上に暗文風のヘラ磨きをまばらに施している。5以外は古墳時代初頭の土器である。

SK02（図49，50　図版27，79）

SB01の東隣に位置する。土壙の南にSD13が取り付くが伴うものではない。規模、構造から竪穴建物と考えにくいので土壙とした。隅丸方形で3.1×3.15m、深さ0.25mを測る。土壙の下面にピットはない。遺物は弥生中期の甕ばかりで、土壙内に分散してやや浮いた状態で出土した。7，9が土壙中央で口縁を下に倒立して置かれ、ほかの甕は土壙縁辺部で横倒しの状態で出土した。大型品は安定のため伏せて置いたことがわかる。

図示した8と5は同一個体の可能性が高いので、出土した甕は8個体である。長胴の甕1を除くと、他は胴部内面下半にヘラ削りを施すことから弥生中期後葉の特徴を示している。口縁の拡張の度合いや凹線文の有無で前後2時期に細分も可能であるが、出土状況からすれば共存関係にあるといえる。1の甕は外面縦ハケのちヘラ磨き、内面は横ハケのち縦方向のヘラ磨きで調整されており、内面の削りは一部で頸部まで達している。類例は乏しいが、近くでは簸川郡斐川町大倉Ⅳ遺跡出土の甕[7]がある。自然流路からの出土で時期を特定する伴出遺物はないが、本例と同じく弥生中期後葉を前後する時期が考えられる。

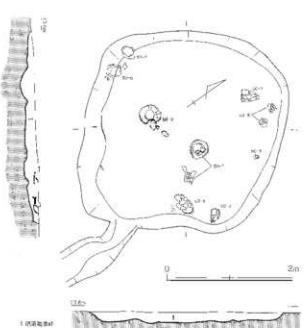


図49　SK02実測図（S＝1：60）

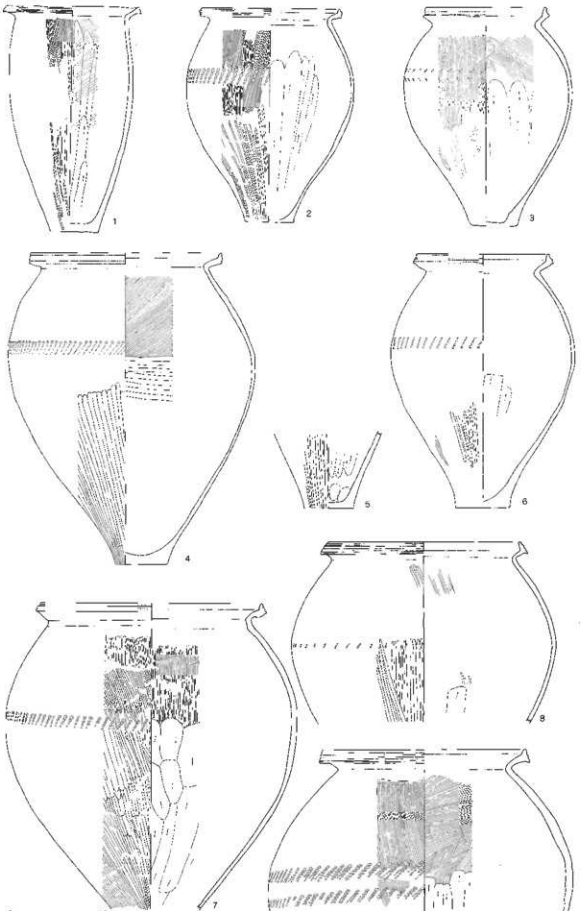


図50　ＳＫ02出土遺物実測図（Ｓ＝１：４）

ＳＫ０１（図51　図版28）

ＳＪ07に隣接する位置にある。不整形な隅丸方形を呈し2.9×2.85ｍ、深さ0.13ｍを測る。東辺にＳＤ12が取り付くが時期は異なるものと思われる。底面にピットがあるが、柱穴とは考えにくいのでＳＫ02同様に土壙とした。遺物は弥生中期の甕と石錘で、床面からやや浮いた状態で出土した。出土状況は散漫でＳＫ02と比較できるほどまとまってはいない。

１は有溝石錘で6.6×5.6ｍ、265ｇを測る。２～４は弥生中期後葉の甕で３，４は胴部内面下半にヘラ削りが施されている。４は３に比べ胴部の張りが弱いタイプである。

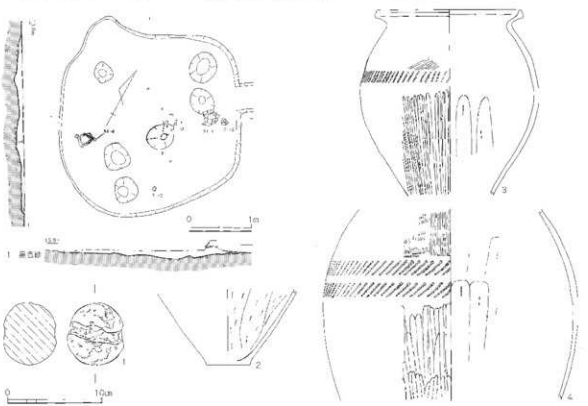


図51　ＳＫ01・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝１：60　遺物Ｓ＝１：４）

6．溝・流路

人為、自然を問わず溝状のものを取り上げた。自然流路はＳＤ06より北側で確認できた。ここは北の権現山と南の段丘に挟まれた谷の最も低い場所に相当し、縄文晩期以降時代が下るに従い川筋を段丘側に移動させて流下している。ＳＤ06を含め段丘状のものは人為的な溝と判断した。なお、自然流路には細長い土壙の連続のようにみえるものもあり、一方土壙として取り上げたものには自然流路の一部を含む可能性もあるなど、土壙と溝を明確に区別しがたいものもある。特に権現山と段丘の間が最も狭くなる箇所では流路が錯綜するうえ調査区域の制限から、平面的な把握が十分できなかった。

ＳＤ２８（図52　図版29）

調査区南端に位置し、第Ⅳ層を掘り込んで作られていたことから他の溝より新しい。溝の一端は調査区外へのびており他方は撹乱を受けていたので、規模や区画の形状は不明である。現状では東西に細長く伸びる溝とこれに取り付く大小２条の溝が確認できた。東西方向の溝は幅0.6～0.9ｍ、深さ0.25ｍを測り、東側では掘り形は２段掘りで（Ａ－Ａ’）、全体に拳大の礫を多く含む。西端の調査区壁際では南東方向から別の溝（Ｅ－Ｅ’）が合流しているようだが、前後関係は不明である。また西端から2.7ｍで、人頭大の石組みを検出した（Ｄ－Ｄ’）。石組みには凝灰岩製五輪塔の火輪の一部が転用されていた。出土遺物には須恵器、土師器の磨滅した細片のほか、白磁の小片があった。出土した五輪塔はおそらく向かいの権現山石切場で製作されたもので、溝の年代は戦国期以降と考えられる。

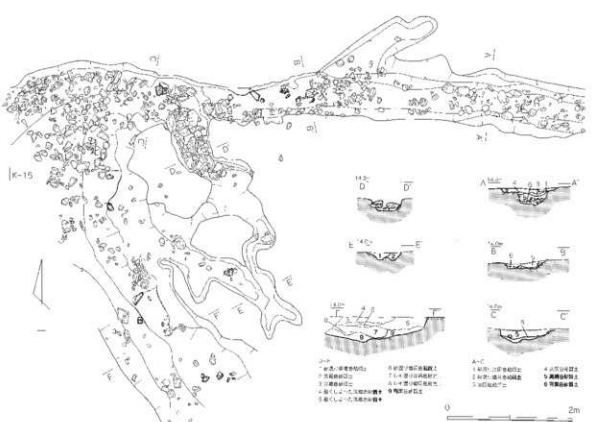


図52　ＳＤ28実測図（Ｓ＝１：60）

ＳＤ０６（図53～75　図版30～43，80～88）

点爆な段丘と低湿な谷を区画するように穿たれた大溝である。下流側は1994，95年度調査区（『二田谷Ⅰ遺跡　Vol.3』）に続いている。これより下流の状況は、出雲市教育委員会が実施した調査では確認できていないので不明である。上流側の様相は全く不明であるが、谷奥の三田谷Ⅲ遺跡（98年度調査）では続きは確認できていない。

以下、形状・規模、土層堆積状況・遺物出土状況、出土遺物の順で記述する。なお記述にあたって土層観察用ベルトで区切られる区間を上流側からⅠ～Ⅶ区と呼称し、必要に応じて遺跡全体に適用したグリッドも適宜使用する。

【形状・規模】調査は97，98年度の２カ年にわたり、延長約110ｍを検出した。基本的に段丘の砂層（第Ⅶ層）を掘り込んで造られているが、Ｅ－８より上流側では明黄褐色の風化岩盤を掘削している。基本的な規模を示すと、幅は上端で4.0～4.8ｍ、深さは段丘面から1.5ｍである。上流側の溝底が12.2ｍ、下流側で11.5ｍである。底は平坦であるが、Ⅱ～Ⅳ区の段丘側で階段状になる。

Ⅰ区からⅢ区はＮ－51°－Ｅ方向に直線的にのびるが、これより下流側では椎現山側に張り出すように流下している。Ⅴ～Ⅶ区に隣接する、より古いＳＤ05の様子からすれば、段丘はＳＤ06掘削時には椎現山側に張り出していたと考えざるを得ない。従って、ＳＤ06は計画的な空間占地を前提とした区画溝ではなく、あくまで地形なりに谷と段丘を区画したにすぎないものといえる。

【上層堆積状況】上層観察は溝の10カ所で行った。その結果、溝の埋土を５層に大別することができ、上から埋土第１～５層として遺物を取り上げた。埋土第１～３層は基本層序で示した第Ⅰ～Ⅲ層にほぼ対応する。溝本来の埋土ではないが、溝の埋没過程と廃絶後の状況を把握する上で埋土として扱った。埋土第４，５層は溝の埋土である。埋土第５層は青灰～青緑色砂礫を含む最下層で、それより上を埋土４層とした。埋土第４層は黄褐色の砂礫や有機質を多く含む。砂礫の堆積

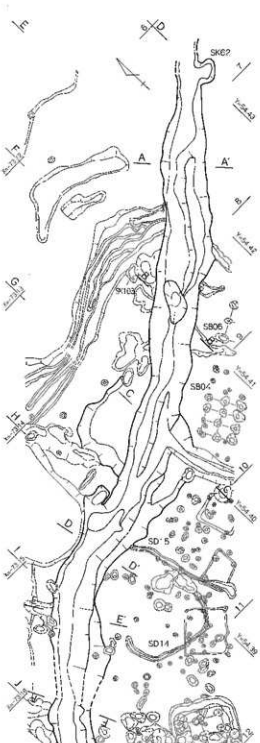


図53　ＳＤ06実測図（Ｓ＝１：400）

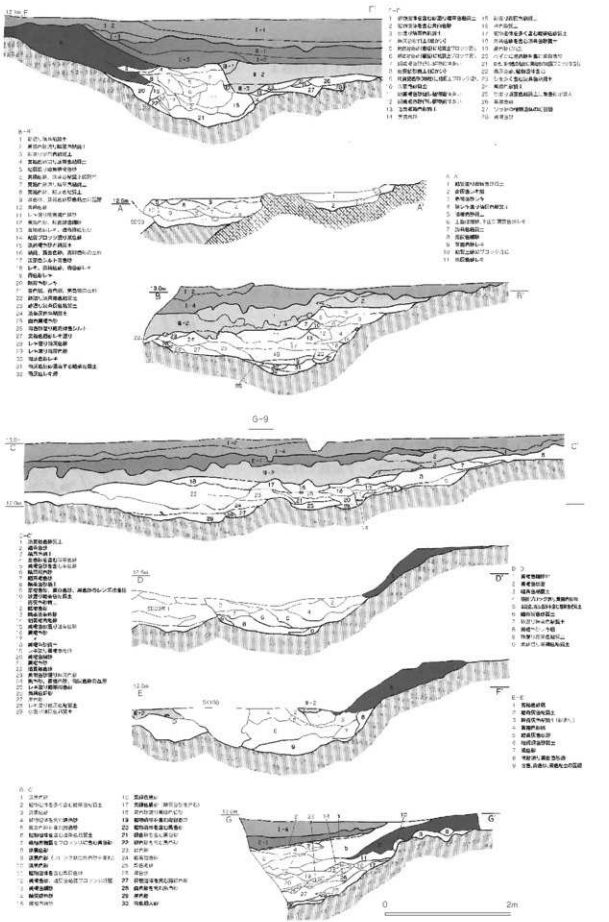


図54　ＳＤ06土層断面図（Ｓ＝１：60）

状況からすると、水は溝の中で位置を変え断続的に流れていたようで、複雑な切り合いを示している。調査では一つ一つの流れを平面的に把握することは不可能であったためやむを得ず一括して扱った。以下上層の観察を行った10カ所のうち7カ所について記述する。

A－A'　岩盤を削り出して掘削している。上下2段に流路が掘られ、段丘側の溝がやや高く、下段は岩盤、第Ⅲ層及びSD03埋土を掘り込んでいる。

B－B'　グリッド軸に沿ってベルトを設定したために溝主軸に斜行する結果となった。1～4が第Ⅲ層対応層、5～25が埋土第4層、26～32が埋土第5層。上述のような明確な掘り返しの痕跡はないが、段丘斜面側に第Ⅳ層が存在せず、溝の中程と比べ細かな土層堆積があるので掘り返されているようである。溝の廃絶後は谷側に水田が形成されるが、段丘縁辺は湿潤な状態として残ったようである。

C－C'　これも溝に斜行するベルトである。段丘側からSD16が合流する位置にあたる。1～4層が第Ⅲ層対応層、10～26が埋土第4層、27～29は埋土第5層。ここでは掘り返しの痕跡は明瞭で、これより下流側で溝は緩やかにカーブし、掘り返しの痕跡も確認できなくなる。当初の溝の埋土が単純な様相を示すのに対し、段丘側の掘り返しの埋土は複雑に細かく切り合っている。また埋土5層は掘り返した側では確認できない。SD16から流れ出した土砂は掘り返し埋土と重なるように堆積していることから掘り返しの溝とSD16は同時に存在していたと考えられる。

D－D'　大きくカーブする途中の断面である。弥生時代前期の溝SD03の一部を切って掘り込まれている。1～7が埋土第4層、8～10が埋土第5層。これから下流側には第Ⅳ層が段丘斜面に厚く堆積していることや、埋土にそれらしい状況が認められないことから掘り返しは及んでいないと考えられる。

E－E'　蛇行山側に最も張り出した位置にあたる。1～8が埋土第4層、9が埋土第5層。段丘斜面には第Ⅳ層が堆積し、掘り返しの痕跡は見あたらない。

F－F'　1～18が埋土第4層、20～22が埋土第5層である。埋土第4層の堆積状況をみるとから断続的に水が流れ、1，2、10が最終の流れを示しているものと考えられる。段丘側に黒色砂が厚く堆積し、徐々に溝が埋まっていく様子が分かる。ここでは古代末の水田層が溝の一部を切るように堆積している。Ⅱ－1層は有機質の厚い堆積層で、この付近で最も顕著な堆積状況を示している。

G－G'　再度流れを変えている場所である。調査区の端にあたり完掘できていないのでこの辺りの溝幅は不明である。1～13は第Ⅲ層対応層、14～29が埋土第4層、30が埋土第5層。段丘斜面に第Ⅳ層が残り、溝の底に埋土第5層が存在するので掘り返されていなかったと考えられる。

【遺物出土状況】溝からは大量の遺物が出土した。層位的な出土状況を見ると、7世紀から8世紀末頃までの土師器、須恵器はどの層位からも出土しているのに対し、図65の土師器碗は埋土第3層を主体に出土し、それより下層では出土しなかった。

個々の土器の出土状況を見ると、かなり離れて接合関係にある個体が多数見受けられた。このことは溝の流量が断続的にでも一定量あり、破片が下流に向け流されていたことを示している。このことをふまえた上で、以下、大まかに平面分布の特徴を示す。まず、Ⅰ区からⅣ区の掘り返しに伴う遺物を十分に特定できないが、図58－26の擬宝珠状のつまみの付く蓋や、図60－23，25の灯明皿、図71－4，5の斎串、図75－10の丸鞆、図72－1の挽物皿などはあげられる。なお、9世紀後半以降の須恵器はⅦ区に少量ある以外は確認できていない。供膳具の分布にはあまり意味のある状況は

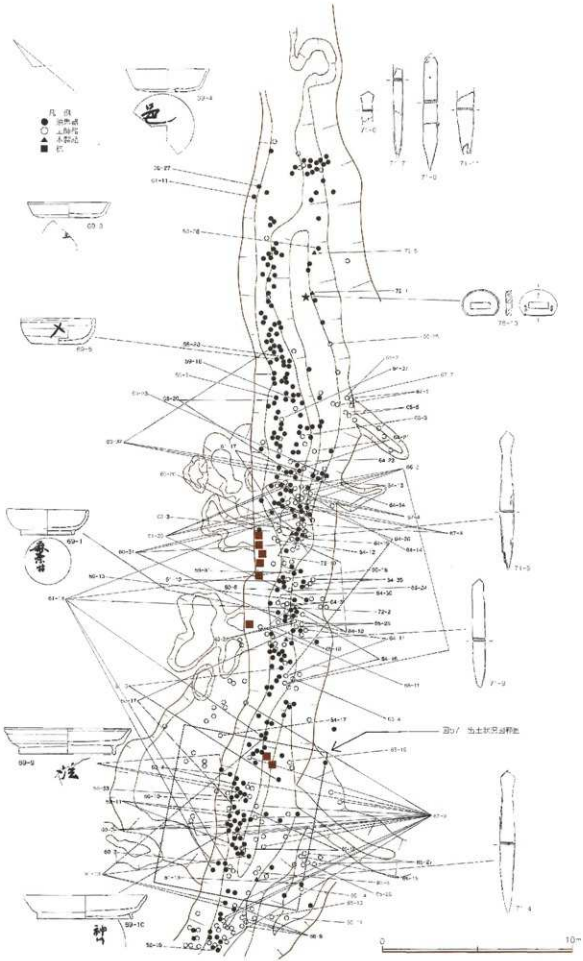
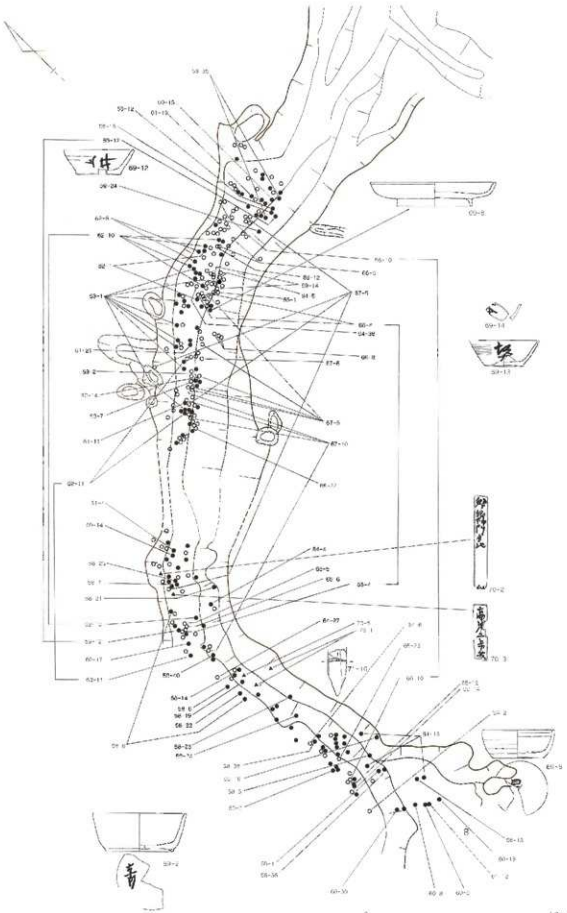


図55　ＳＤ06遺物出土状況図１（Ｓ＝１：200）



区56　SD06遺物出土状況区２（S＝１：200）

看取できないが、仏器にはある程度のまとまりを想定できる。すなわち図60－30の鉄鉢形土器（Ⅲ区出土）と図60－28の灯明皿（Ⅳ～Ⅵ区出土）以外はすべてⅠ～Ⅲ区の出土で、掘り返しの範囲によく対応している。後述するようにＳＤ16から鉄鉢形が１個体出土しており、仏器の使用がこれより上流側で行われたことを示している。仏器の分布と重なるものとしては斎串がある。木製品のほうがより流されやすいことを考慮すれば、両者を直接結びつけるのはためらわれるが、溝の掘り返し埋土にも斎串が含まれるのでこれらを一連の祭祀具と考えることが可能かもしれない。

【出土遺物】量的に最も多いのは土器で、ほかに土製品、木製品、金属製品、石製品がある。

須恵器（図58～63　図版80～82）は出土遺物のうち最も量が多い。図58－１～６は７世紀代の杯身で、口径の大きい５，６世紀の杯身はほとんど出土していない。７～９は蓋にかえりのけく小型の杯。10～22は輪状つまみと内面にかえりを持つ蓋で、７世紀中葉～末葉。23～25は端部を折り曲

図57　ＳＤ06遺物出土状況図３（遺構Ｓ＝１：50　遺物Ｓ＝１：６）

げる蓋で、7世紀末～8世紀前葉。26～28は端部をわずかに折り曲げる蓋で欠損しているが擬宝珠状のつまみが付く。8世紀末～9世紀初頃か。図58－29～図59－8は高台付碗である。図58のうち、29～31が糸切り痕跡の確認できないもので、かえりのある蓋と同時期。40～43が静止糸切り痕が残るもので端部を折り曲げる蓋と同時期。図59のうち、1，2，6，7が回転糸切り、3～4が糸切り痕が確認できないものである。8は9世紀後半～10世紀の碗である。図59－9～28は高台の付かない碗で9～14は静止糸切り痕が残るもので他はすべて回転糸切りである。28は糸切り後底部縁辺をヘラ削りで調整しており、他とは器種が異なる可能性もある。図60－1～5は皿で、2が底部がヘラ切りで他は糸切りである。6～10は高台付の皿で、6～8が底部糸切りで、他はヘラ切りか。11～19は高坏である。19の杯部は扁平で碗蓋に似た端部を持つタイプと思われる。

20～28は灯明皿である。底部はすべて糸切りで、20，23，25，27が静止糸切り、22，24，28が回転糸切りである。29は托である。静止糸切りした浅い皿に低い高台が付き、内面に断面台形の低い突帯が巡る。突帯の内側は墨が付着しているが、表面は平滑ではないので墨皿として転用されたと考えられる。30～32は鉄鉢形土器である。30は赤褐色～暗茶褐色、32は白色を呈し、31の須恵器通有の青灰色とは明らかに異なる。特に32は特異な色調に加え精良な胎土でやや軟質であり、特殊な製品として意図して作り出したものと思われる。30、32が尖底気味なのに対し31は丸底で、わずかに静止糸切りの痕跡が確認できる。粘土接合の痕跡から底のない鉢に糸切りした厚めの円盤状の粘土を充填・接合し、その後外面を丸くヘラ削り成形したと思われる。30も底部よりやや上に削りが施されているので同様に体部と底部を接合する方法が採られたものと思われる。

図61～図63は壺・甕の類である。図61－1～5は廻で、3，4は静止糸切りのちヘラ削りが施されている。5は高台が付き体部と頸部が滑らかになっている。6～11は長頸壺である。11は静止糸切りがわずかに残る。12糸切りした小型の壺。13，14は水瓶であろう。14は頸部に隆起する突帯を巡らす。焼成・色調の特徴はSK05出土の水瓶（図38－6）と共通する。16は高台杯の壺で底部外面に叩きの痕跡が残る。17は強く張る肩と大きく開く口縁が特徴的な高台付きの壺で、色調は白い。18も肩の張る壺で回転糸切りで高台は付かない。19は体部が低平で、端部を引き出した頑丈な高台を持つ壺と思われる。外面は暗赤紫色を呈し特異な器種である。20は提梁を持つ高台付の平底で、胴部に断面台形の突帯を巡らせる。突帯上半にはカキメ状の条線が施されている。21は水差しで、提梁は持たない。底部はヘラ削り。図62－1，2は高台付の壺で、2は叩き技法で丸底に打ち出してから高台を付ける。4～6，10はやや大型の甕であろう。7～9は口縁の短い丸底の壺。7は砂粒の多い茶褐色の壺で内面には放射状の当て具痕が残っている。11は広口の壺で、肩に2方の把手が付く。内面の当て具痕がなで消されている。図63－1～4は横瓶である。2の内面には中心が十字状になる当て具痕が残る。大甕は図示した以外は断片的な資料である。5は口縁に文様を施さず、内面は掘り幅の広い同心円の当て具痕が残る。

土師器（図64～67　図版82，83）は須恵器に次いで出土量が多い。層位では埋土第1～3層と埋土第4，5層で内容が大きく異なる。図64－1～7は胎土に砂粒を多く含む高坏、杯である。赤彩が施されないのは1，4で、暗文を施すのは4だけである。6世紀後半～7世紀初め頃であろう。8～11は赤彩、内面暗文、底部静止糸切りの特徴が共通した杯である。12は風化が著しいが、無彩の杯で口縁端部を内側に巻き込み、底部に木の葉の葉脈痕が残る。色調は淡桃色～黄白色を呈する。13～28は赤色塗彩し、暗文を施さない杯、皿である。胎土は砂粒が少なく精良で、破断面は黄白色

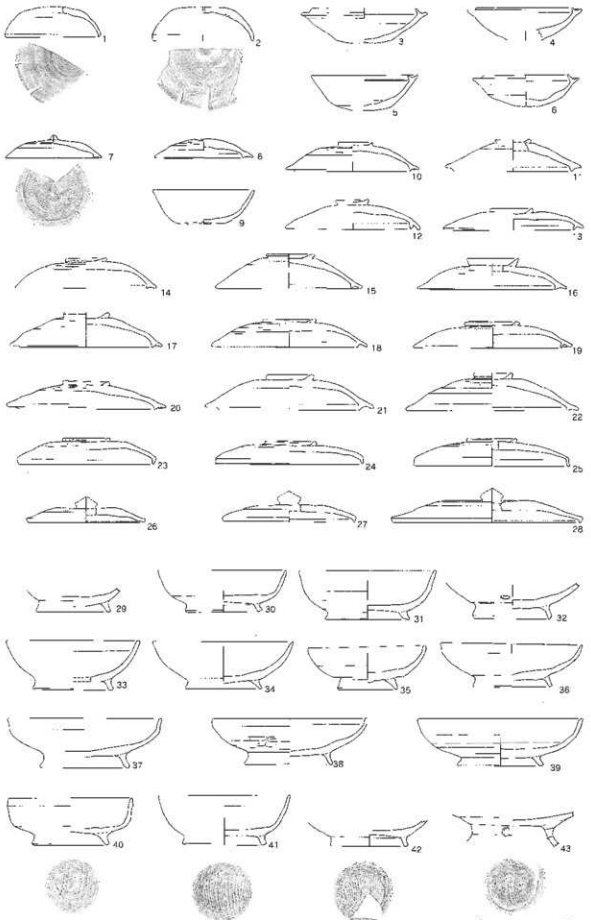


図58　ＳＤ06出土遺物実測図１（Ｓ＝１：４）

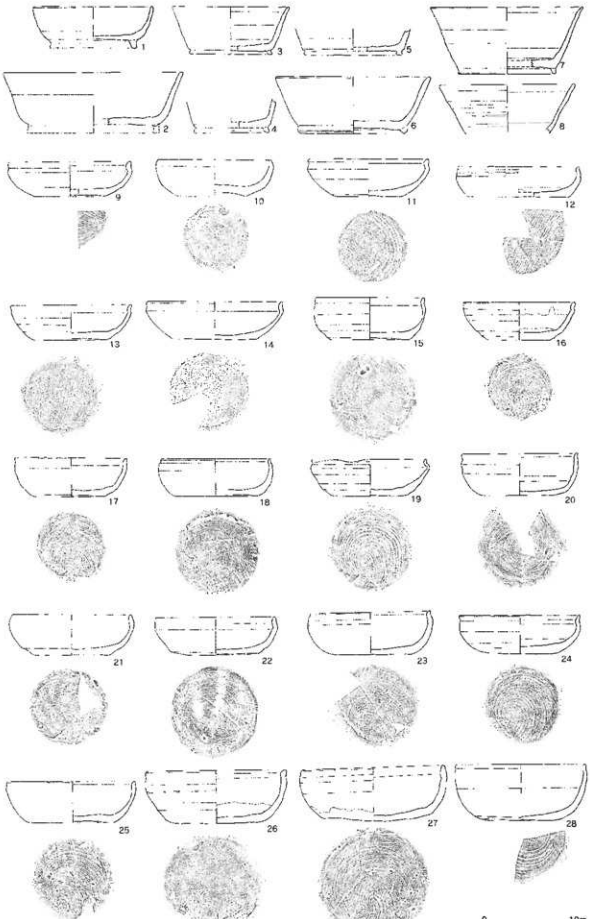


図59　ＳＤ06出土遺物実測図2（Ｓ＝1：4）

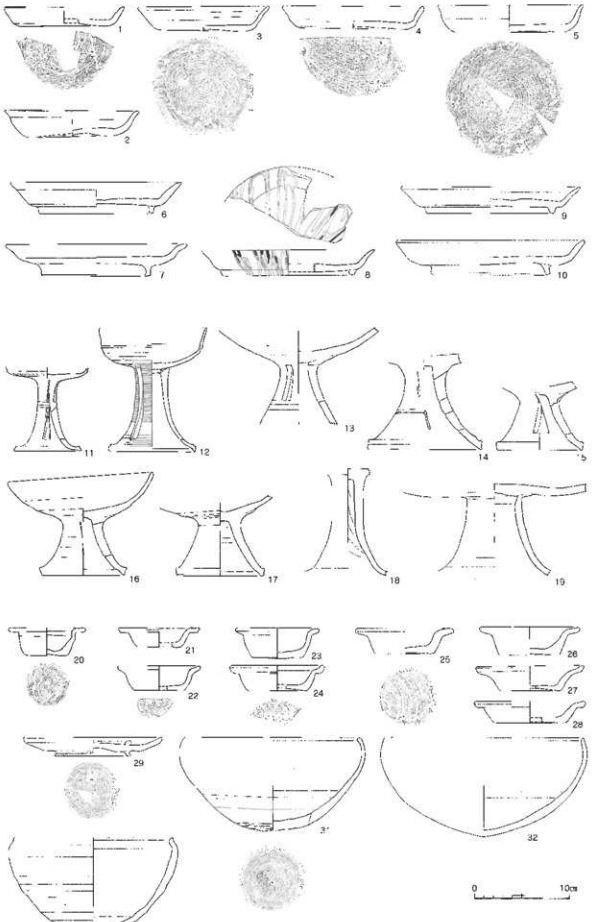


図60　ＳＤ06出土遺物実測図３（Ｓ＝１：４）

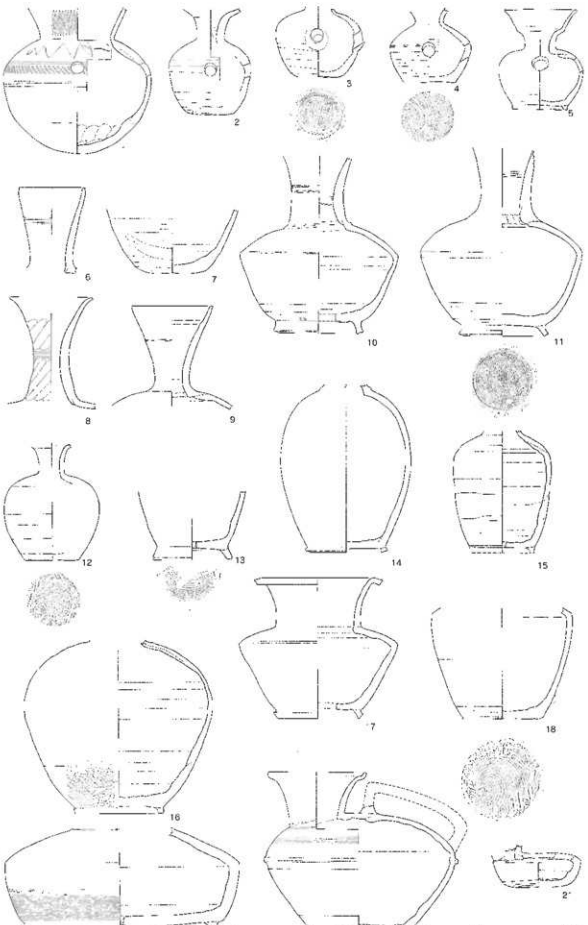


図61　ＳＤ06出土遺物実測図４（Ｓ＝１：４）

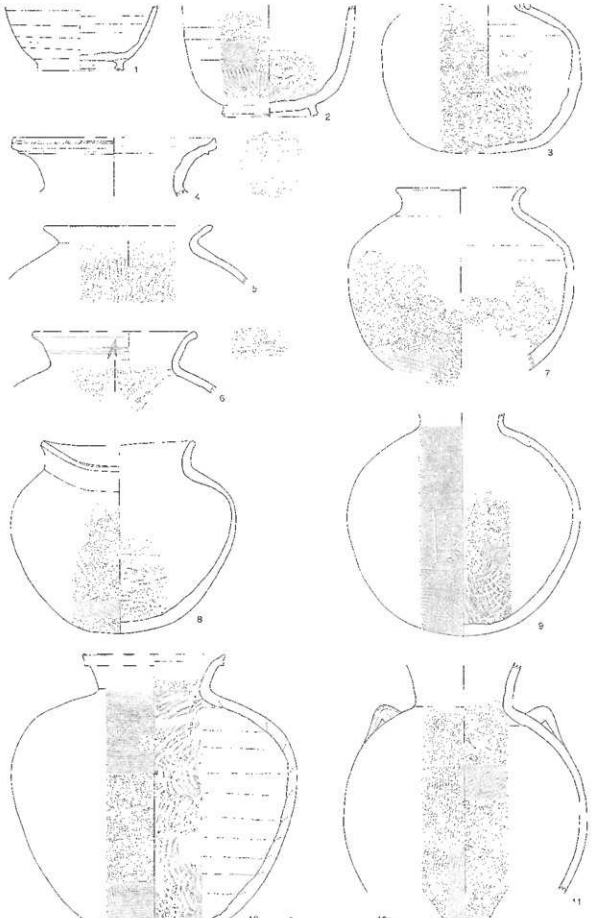


図62　ＳＤ06出土遺物実測図５（Ｓ＝１：４）

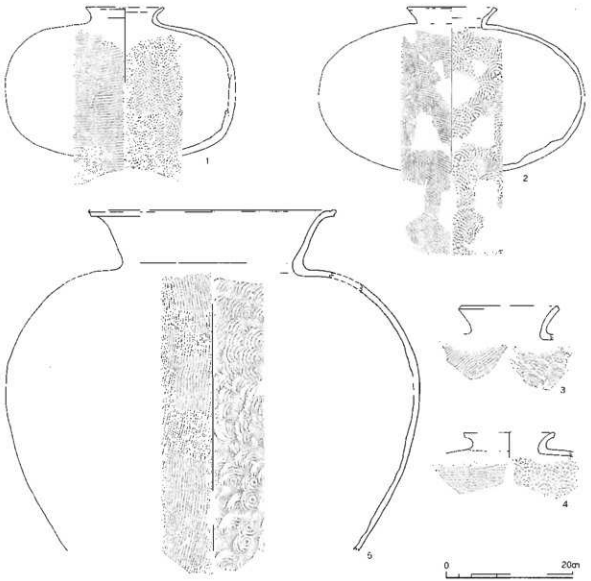


図63　ＳＤ06出土遺物実測図６（Ｓ＝１：６）

を呈する。器壁は全体に薄く、口縁は直線的に開くものと若干内曲して開くものがある。底部を除く内外面は轆轤回転成形の痕跡が明瞭である。底部は手持ちのヘラ削りが施され、概して不安定な丸底に仕上げている。例外的に底部外面を塗り残した個体もあるが、全面に顔料を薄く刷毛塗りしている。29～32は高台付碗で底部外面を除き赤彩を施す。31はやや高めの高台で、29，30，32は低い高台が碗の体部と一体化している。33，34は鉄鉢形土器と考えられる。33は外面にヘラ削りを施す。35は静止糸切りした無彩の碗で、深めの器形で器壁が厚い。36は平底の碗で内面には確実に赤彩を施している。前述の赤彩碗とは明らかに形態が異なり、むしろ埋土第３層出土の土師器碗に類似した特徴を持つ。37，38は底部以外の外面に赤彩を施す小型の壺で底部は静止糸切りである。図65の土師器碗は埋土第１～３層から出土し、埋土第４，５層からは出土しなかったものである。１，２は底部ヘラ削りの碗、３～５は底部を糸切りする際に高台状に厚く残した碗である。高台部分がなければ皿に近い形態である。６～21は高台の付かない碗で回転糸切り痕を残す。６～10は体部が直線的に開く碗で、底部が高台状にわずかに凹曲するもの（８～10）としないもの（６，７）がある。11～21の碗はやや丸みを持つ体部から端反り気味に口縁を終わらせるものである。22～28は高

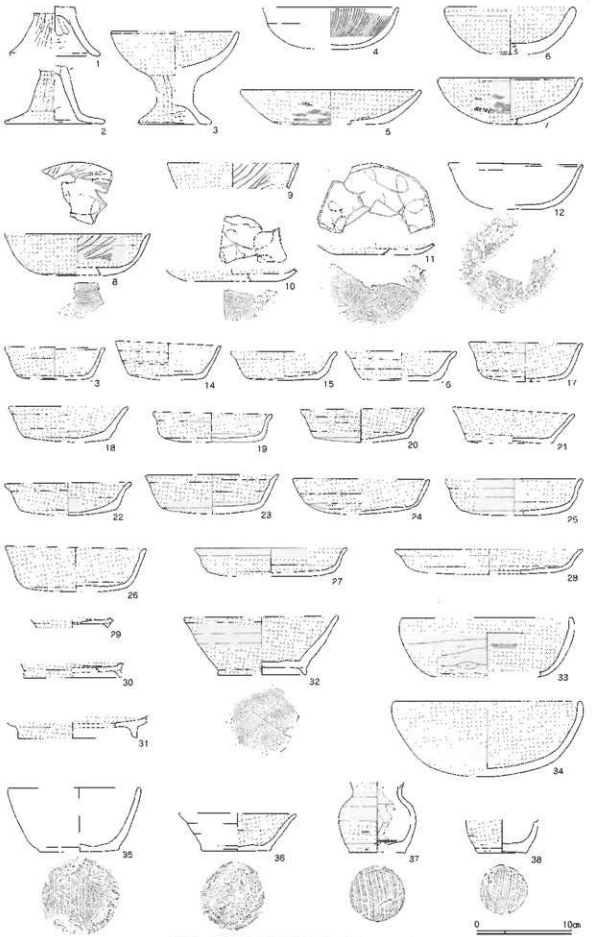


図64　ＳＤ06出土遺物実測図７（Ｓ＝１：４）

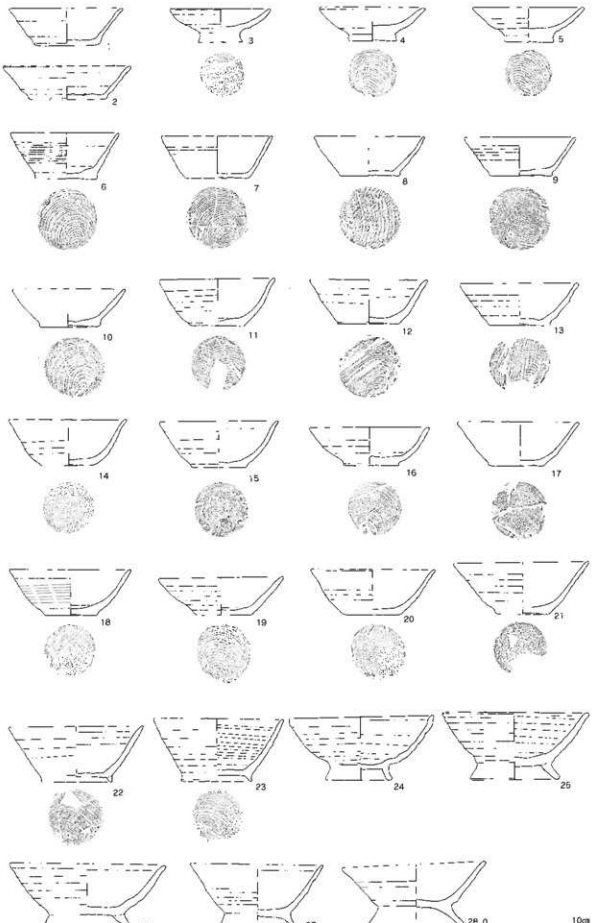


図65　ＳＤ06出土遺物実測図８（Ｓ＝１：４）

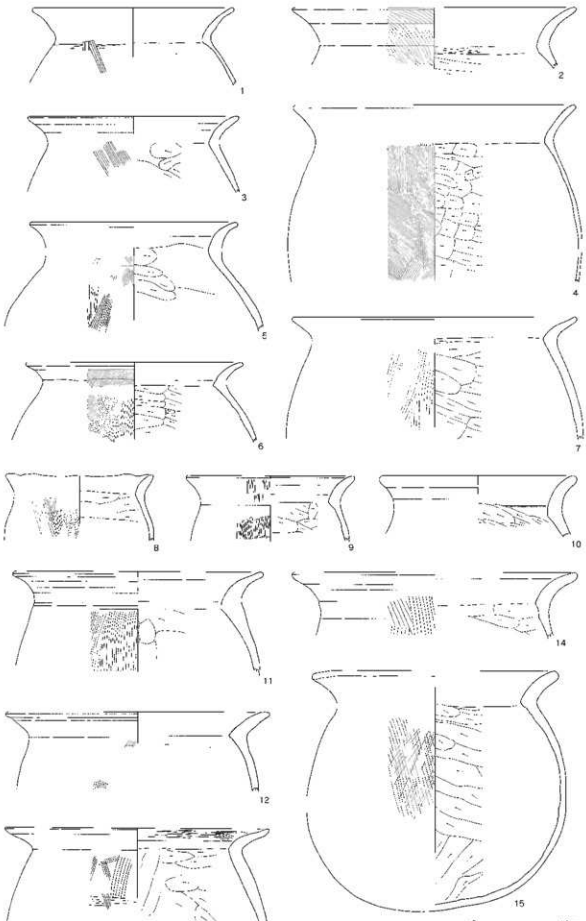


図66　ＳＤ06出土遺物実測図９（Ｓ＝１：４）

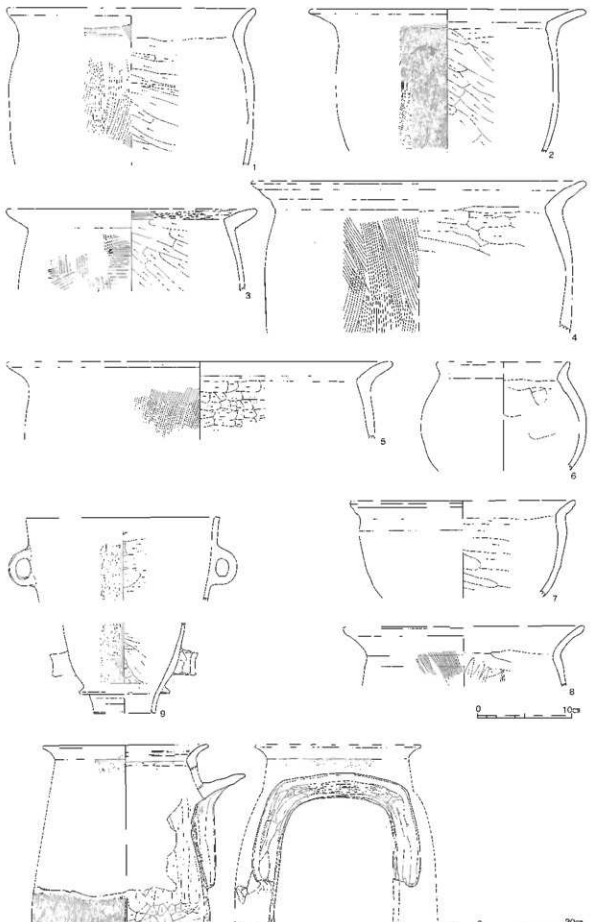


図67　SD06出土遺物実測図10（1～8はS＝1：4　9，10はS＝1：8）

台付の碗である。22，23は直線的な体部と一体化した低い高台が付く碗で、図64−32と同様に須恵器碗の模倣形態である。24〜28がいわゆる足高高台の碗である。前述した丸みのある碗に高台を付けた形であるが、高台が高く直線的なものほど体部も直線的な傾向にある。図66〜図67−8は甕である。破片数が多く特徴が類似しており十分に復元できなかった。口縁が「く」字状に開き、胴部外面に粗い縦ハケ、内面の頸部以下にヘラ削りを施すことで共通している。図66−1〜7は口縁部の器壁が薄く上方に向かって開く。15は唯一全形がわかる資料である。6区段丘斜面でまとまって出土した。器壁の厚い口縁は反り気味に開き、胴部から底部は丸い。図66−13，図67−2，3，4は口縁の屈曲が著しい。図67−6，7は上記の特徴とは異なる甕である。埋土第1〜3層から出土しており、図65の土師器碗に伴うものと考えられる。9は甑形土器である。上下で接合できないが同一個体であろう。10は移動式竈である。甕を据える口の部分は前述の甕口縁と形態が同じである。

土製品（図68　図版84）土製支脚はコンテナ1箱程度出土している。側面の穿孔が貫通するもの（1）としないもの（2，3）がある。4は鞴の羽口片で同一個体の可能性がある。鍛冶炉は検出できていないが、溝から再結合滓（図版36）も出土しており鍛冶を行ったことは明らかである。5〜11は管状の土錘である。10には針金が残っている。12〜16は製塩土器である。ビニール袋1袋程度出土しているが、全形がわかるものはない。

墨書土器（図69　図版85）1〜10は須恵器で11〜14は土師器碗である。1はほぼ完形の高台付碗で底部外面の左寄りに「麻奈井」と記してある。高台は低く底部に糸切り痕は無く体部は丸い。3区底面出土。2は破片で底部外面に1または2文字あるが釈読できない。直線的な体部に低い高台が付く碗で底部は回転糸切りである。3は底部回転糸切りの皿の破片で中央上寄りに墨書がある。字形、字数とも不明。4は高台の付かない杯で底部外面の上寄りに「邑」とある。5は口縁が内湾

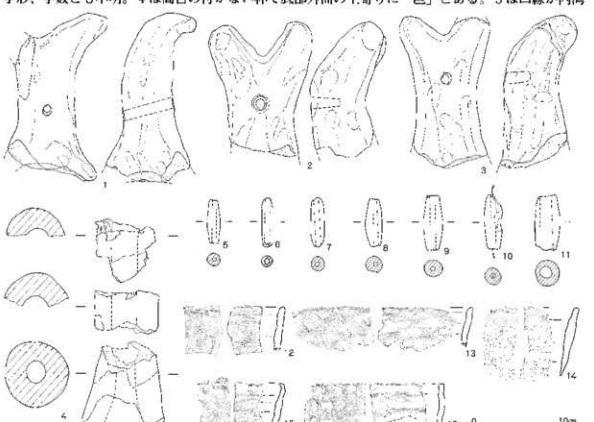


図68　ＳＤ06出土遺物実測図11（Ｓ＝1：4）

する碗で体部側面に「×」と記す。6は焼成不良の杯で底部外面に「日」とありその下にも墨書が続くが、破損しているため字形、文字数とも不明。7は糸切りした底部の破片で外面に墨書がある。8～10は高台付きの皿で、底部外面に墨書がある。8は文字ではなく「○」を記号状に記したもの。9は中央に「法」とある。10は上右寄りに「神門」とある。11は底部外面に墨書があるが磨滅により釈読不能。12は体部外面に横方向にして「上井」とある。13は「坂□」とあり、2字めは「本」であろう。14は碗の底部に近い位置にあたる破片でやはり「本」であろう。11～14は埋土3層から出土した。1が8世紀前半、2～5，8～10が8世紀後半～9世紀初頭、6が9世紀後半、11～14が10世紀代にあてられる。

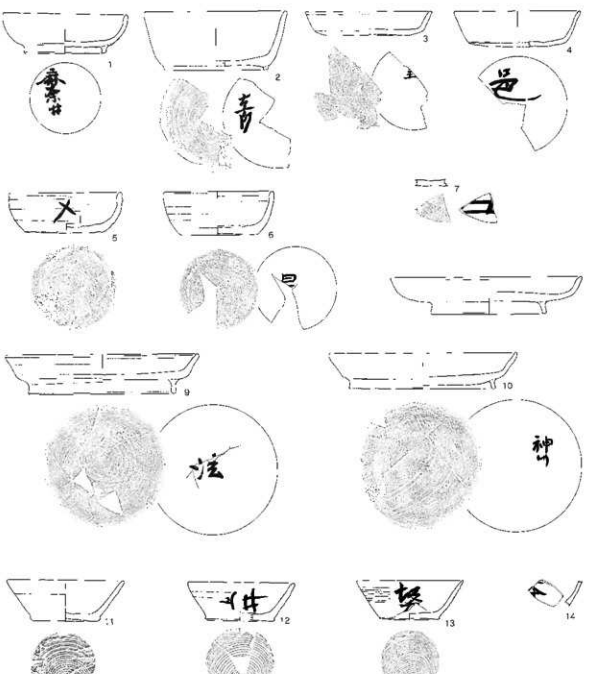


図69　SD06出土遺物実測図12（S＝1：4）

木製品は容器、農工具、建築部材等日常品のほか、木簡、斎串など特殊な遺物も出土している。

木簡（図70，71　図版86，87）は3点出土した。1は側面に穿孔のある015型式[80]の木簡で、4区の谷側から出土した（図57、図版38）。現状では短冊形で上端と側辺の一方を欠損している。半面は削り調整が確認でき、下端は両半面から面取りが施されている。木取りは柾目である。両面に記載があり、紀年銘側を裏面、他方を表面とする。表面は欠損する上端に1文字分程度空白がある。文字は太く、幅いっぱいに書かれている。裏面は表面に比べ墨痕が薄く判読しがたい。749年は4月に大平から大平感宝に改元され、7月には大平勝宝に再び改元されている。このうち閏月は5月であることから「元年」以下を「閏五月」とした。最後の2文字は人名と思われる。欠損により不確かだが「酒主」であろうか。側辺の欠損により表面は「調」以下で、裏面は「調」以下で文字の一部が損なわれているが、それより上は左右両側辺を失うにも限らず文字は欠損せず納まっている。

穿孔は木簡の下端に3カ所あり、裏面を基準に左側面側を穿孔a、右側面側を穿孔b、cとする。穿孔aは木簡下端から15㎜の距離（円孔下端まで距離。以下同じ。）にあり、径3㎜を測る。孔の縦断面を見ると側面に直交せず裏面側に傾いて穿孔されている。現状では右側辺の一角を除きほぼ裏面に露出していて内面が黒く炭化している様子がはっきりと分かる（図版86）。穿孔bは穿孔aに対向するように穿たれていて、裏面中央付近でつながっている。下端からの距離は15.5㎜で裏面

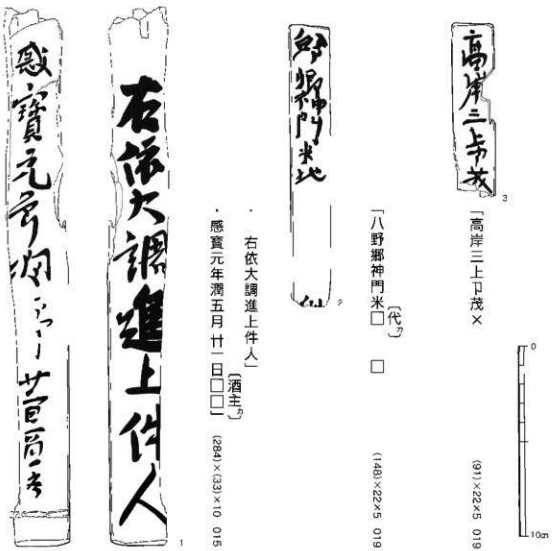


図70　SD06出土遺物実測図13（S＝1：2）

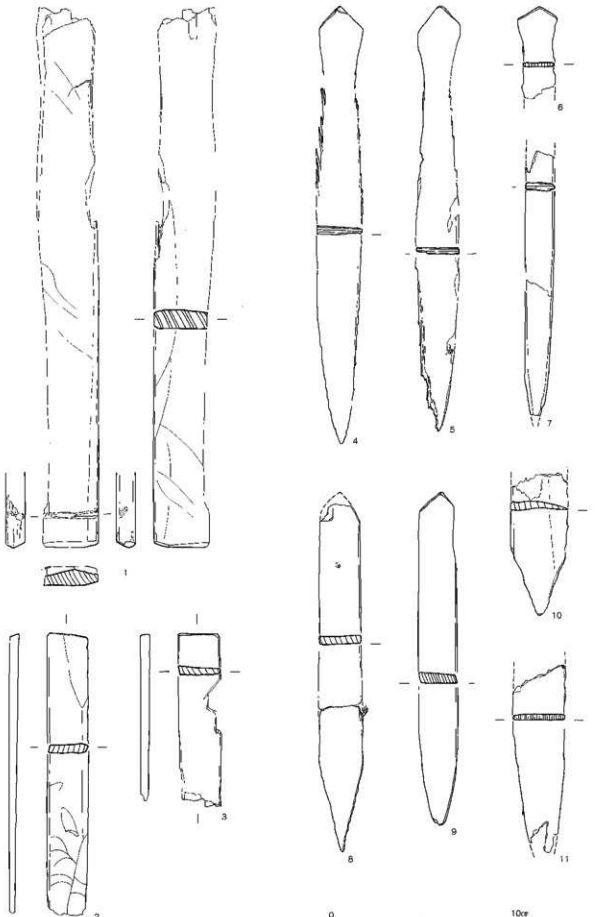


図71　ＳＤ06出土遺物実測図14（Ｓ＝１：２）

に完全に露出している。孔の表面は材の年輪が断ち切られ凹凸が著しい。穿孔ｃは穿孔ｂの上方に隣接して穿たれている。下端から18.5㎜を測り、側面のほぼ中央に位置している（図版87）。径は２㎜で貫通していない。径が小さく内面の状況は不明である。以上の観察から穿孔の具体的な方法を考えると、穿孔ａが「火箸のような焼けた金属棒」を使い、穿孔ｂが先端のあまり鋭くない錐を使ったと思われる。両者の先後関係は、孔がつながる位置で穿孔ｂ側に炭化した痕跡が認められないといういわば切り合い関係を看取できることから、穿孔ａ→穿孔ｂと考えられる。穿孔ｃは本貫通ながら穿孔ｂ側の側面ほぼ中央に位置しており、穿孔ｂに代えてあけようとしたものと考えられる。

２、３は７区の満の肩付近で出土した（図版41，42）。出土層位は包含層第Ⅲ層だが、この付近では第Ⅲ層がＳＤ06を切り込むように堆積していることから、本来はＳＤ06に伴来する遺物と考えた。

２は郷名と人名を記載する木簡である。表面は平滑で下半部に細かい削り調整が施されている。裏面は未調整のままでささくれだっている。上端は切り・折りで、木取りは目の細かい柾目である。人名の下に５文字分程度の空白を置いて１文字確認できるが、判読できない。全体に文字のつくりや字配りはかなり稚拙である。特に「八野」の２文字は字間が無く、「野」は偏と旁が食い違い、文字の体裁をなしていない。「八野郷」は『出雲国風土記』（以下『風土記』）にある神門郡八野郷で、現在の出雲市矢野町周辺に比定されている。「神門」は神門郡を本領とする氏族で、『風土記』同郡条の末尾に大領神門臣の署名があるほか、天平11年「出雲国大税賑給歴名帳」（以下「賑給帳」）では、同郡に神門臣族・神門部が、出雲郡に神門が見られる。

３も郷名と人名を記載する木簡である。右側辺の切り込みは調査時の傷で、下端は当初からの欠損である。表面は平滑で、痕跡は確認できなかったが削り調整を施していると考えられる。裏面は柾目の凹凸を残しているので未調整である。上端は切り・折りで、木取りは柾目である。「高岸」は郷の１字を省略しているが神門郡高岸郷を指している。『風土記』によると神亀３年（726年）に「高嶺」から「高岸」に表記を改めたとあり、現在の出雲市塩冶町に高西の遺称がある。人名の「部」は「ア」に近い略字で「茂」の下は欠損している。三上部は天平11年「賑給帳」の出雲郡・神門郡に見られる氏である。

斎串（図71　図版87）は８個体出土した。６，７，８，11は１区から、５は２区から、９は３区から、４は４区から、10は７区の埋土４層からそれぞれ出土した。上端を主頭状にして下端を剣先状につくる。側面に切り込みを入れるもの（４～５）と無いもの（８，９）がある。４は左に６カ所、右に９カ所の切り込みがあり下端は若干劣化している。５は左に１カ所以上、右に６カ所以上の切り込みがあり下端は劣化が著しい。板目の特徴から４，５は同材と考えられる。

容器（図72、73）１は挽物で、白木地の高台付き皿である。内外面にかすかに筋状の線刻がある。２，３は曲物の身である。曲物はかなりの数が出土したが、円板と側板が分解しており全形をとどめる物は図示した２点のみである。図73－１は楕円形の大型曲物の蓋。２は槽の残欠で内面に焦げ跡（図のトーン部分）が残る。

農工具類（図72）４は鎌の柄で、端部を折り返した鎌が残っている。５は針状の工具。６～８は用下駄。10は用途不明。工具の一部か。11は火鑽臼。図72－９は連歯下駄である。図73－３～５は用途を特定できないが建築部材と考えられる。

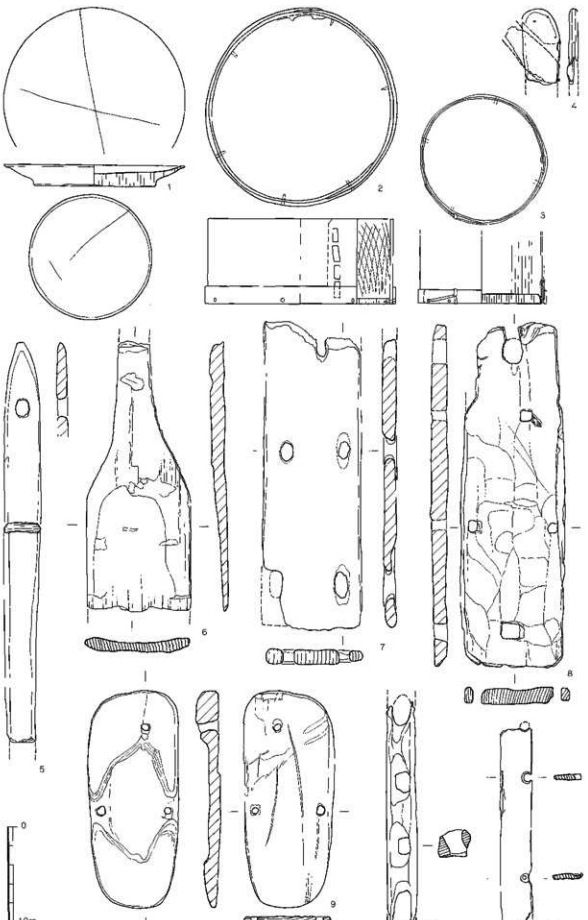


図72　SD06出土遺物実測図15（S＝1：4）

金属製品（図74　図版88）1～3は袋状の鉄斧で、柄の一部が残る物がある。4は紡錘車。5は鎌の折り返し部分。6は刀子。7は鍬形の鉄製品で、扉の閂金具であろう。8，9は耳環で前者は中空、後者は中実品である。

石製品（図75　図版88）1は撥形の打製石鏃で、欠損する破面が磨滅（図のトーン部分）してい[10]

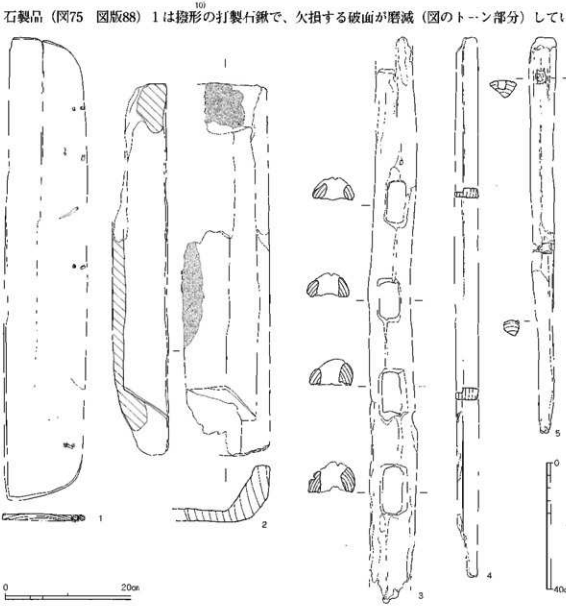


図73　ＳＤ06出土遺物実測図16（1～2はＳ＝1：6　3～5はＳ＝1：12）

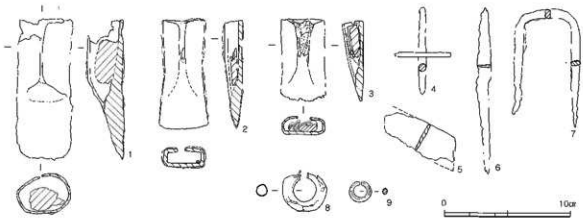


図74　ＳＤ06出土遺物実測図17（Ｓ＝1：3）

ることから長期の使用が窺える。2は撥形と短冊形の中間的形態の打製石鍬である。使用の痕跡はあまり明瞭ではない。3は敲石。4は石錘。5は安山岩製の石鏃。6は抉りの無い、断面長方形の小型方柱状片刃石斧である。7は太型蛤刃石斧の残欠である。8は磨製の石鎌か石包丁であろう。9は砥石。10は丸鞆である。潜り孔は方孔の上、左右の3カ所にある。幅3.3cm、高さ2.3cm、厚さ0.5cmを測る。長方形の孔は縦0.5cm、横1.8cmを測る。11は紡錘車の錘で外面、底面に山形の線刻が残る。

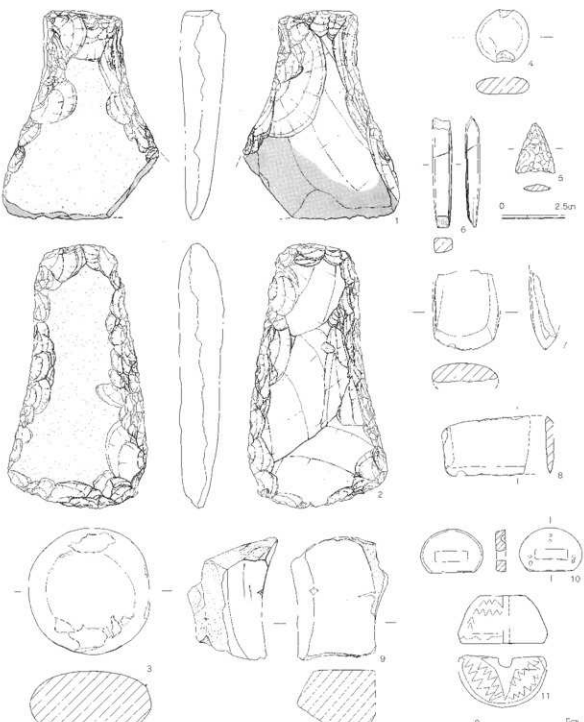


図75　SD06出土遺物実測図18（1～3.5～9はS＝1：3　4はS＝1：4　10.11はS＝1：2）

ＳＤ１６（図76　図版44，88）

段丘上にある溝でＳＢ04とＳＩ05の間に位置する。長さ約12ｍで上流の南側は細く下流は幅が広くなってＳＤ06に合流している。溝の底は下流から階段状になって先端に向け浅くなっている。溝埋土は１、２～６、７～12に３大別することができる。ＳＤ06と合流する下流部分は、図54のＣ－Ｃ'で見る限りＳＤ06と併存したことがわかる。以上のことから、当初はＳＤ06に取り付く短い溝であり、その後浚渫・拡張あるいは雨水による埋没・浸食を繰り返したことが考えられる。

出土遺物は土師器（１～３）、須恵器（４～６）、砥石（７）がある。１は隣接するＳＩ05出土の甕に類似することからここからの混入であろう。４は高台の付かない碗として図示したが杯の蓋の可能性もある。５は鉄鉢形土器である。破片の大半は１～６層で出土しているが、ＳＤ06のⅣ、Ⅴ区から出土した破片もある。色調は灰白色で外面下半にヘラ削りが施されている。６は２方透かしの高坏。７の砥石は表裏に溝が残る。

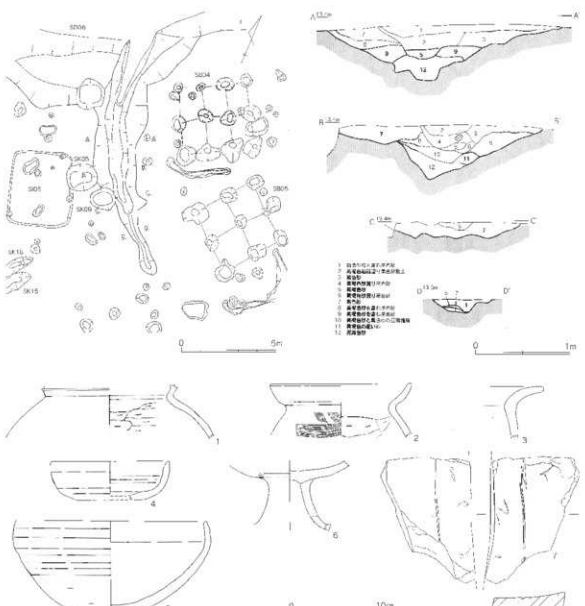


図76　ＳＤ16・出土遺物実測図（平面Ｓ＝１：200　断面Ｓ＝１：40　遺物Ｓ＝１：４）

ＳＤ２４（図77　図版44）

ＳＢ13とＳＢ06の間に位置する。長さは4.8ｍで北側はＳＤ06の掘り形に切られている。深さは0.2ｍ前後と浅い。出土遺物は弥生土器（１）と須恵器（2，3）がある。１は頸部の短い複合口縁の壺である。２枚貝を原体とする平行沈線文が口縁に、連続刺突文が肩部にそれぞれ施される。弥生後期中葉～後葉。２は輪状つまみの付く蓋で口縁端部が折れ曲がる。３はつまみの付かない蓋である。

ＳＤ１７（図78　図版44）

ＳＢ16と一部で重複している。谷側に緩やかに張り出すようにカーブしており、長さ18.5ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.1ｍを測る。溝に伴う出土遺物は土師器で、１は内面の頸部以下をヘラ削りする甕。２は赤彩の高杯で軸から脚にかけてたて刷毛を施す。このほか移動式竈の破片がある。

ＳＤ１２，１３（図79　図版27）

ＳＫ01側がＳＤ12，ＳＫ02側がＳＤ13である。ともに弧状を呈する浅い溝である。ＳＤ12は長さ6.6ｍ、幅0.5ｍ、を測る。出土遺物は弥生後期以降の甕片（２）が一点出土した。ＳＤ13は長さ６ｍ、幅0.6ｍを測る。出土遺物は砥石（１）が一点である。

土壙との先後関係は平面的な切り合いでは確認できなかった。出土遺物からはＳＤ13とＳＫ02の時間的な関係は判然としないが、ＳＤ12ではＳＫ01より新しい遺物が出土している。

溝と土壙の底のレベルを比較すると溝が高い位置にありそれぞれ土壙と直接関係するものではないと考えられる。

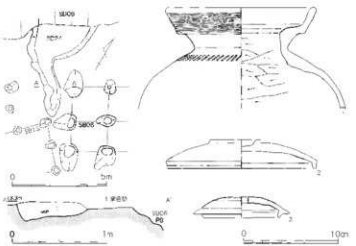


図77　ＳＤ24・出土遺物実測図
（平面Ｓ＝１：200　断面Ｓ＝１：40　遺物Ｓ＝１：４）

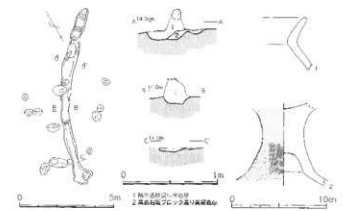


図78　ＳＤ17・出土遺物実測図
（平面Ｓ＝１：200　断面Ｓ＝１：40　遺物Ｓ＝１：４）

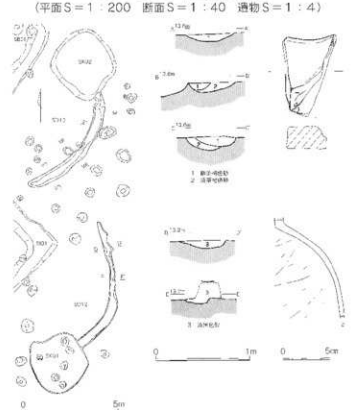


図79　SD12,13・出土遺物実測図（平面S＝1：200　断面S＝1：40　遺物S＝1：4）

ＳＤ１４，１５（図80　図版45，88）

権現山側に張り出した段丘上に位置する。ＳＤ14は弧状の溝が２本つながったような形状を呈し、長径方向9.25ｍ、幅１ｍ、深さは最大値で0.2ｍを測る。切り合い関係からＳＩ04より新しく、ＳＫ07より古い。出土遺物は土師器が２点ある。１は甕で口縁は内湾気味に立ち上がり、口縁内面と肩部に竹管の刺突がある。２は高坏で、杯部と脚部の接合状況から、脚部成形後ある程度の乾燥を経て杯部を作り、最後に杯内底から小粘土塊を充填して接合する技法が看取できる。[10]

ＳＤ15は直線的な溝で、長さ12.1ｍ、幅0.7ｍ、深さは最大で0.15ｍを測る。切り合い関係からＳＩ06より新しく、ＳＫ07より古い。出土遺物のうち２はＳＤ14からも出土している。３は口縁が上方に開く小型丸底壺で、体部に筋状の穿孔が焼成後に施されている。４は平底気味の小型の壺である。

ＳＤ０５，０７，１９，２０（図81，82　図版46，47，89）

段丘と権現山に挟まれた狭い谷に位置している。ＳＤ05，07とＳＤ19，20は初年度の調査区側溝で分断されており、上・下流の対応関係は不明なので、一応別の遺構として扱う。ＳＤ05は深さ0.75ｍを測る。段丘側に黒色砂が厚く堆積しており、段丘が近くまで張り出していたことが窺える。ＳＤ05を切るＳＤ07は浅い溝で北東側はＳＤ03の重複する。ＳＤ20は調査区隅で確認できたが、幅は不明。ＳＤ19は、切り合いからＳＤ20より新しくＳＤ06より古い。

遺物は１～３がＳＤ05、４～11がＳＤ07、12～15がＳＤ19、16～23がＳＤ20からそれぞれ出土した。４は複合口縁の壺で頸部に突帯を巡らせる。６は複合口縁の退化した甕か。８は外面に赤彩を

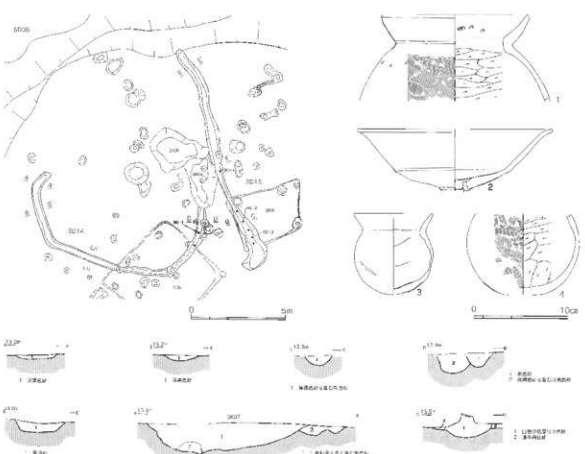


図80　ＳＤ14，15・出土遺物実測図（平面Ｓ＝１：200　断面Ｓ＝１：40　遺物Ｓ＝１：４）

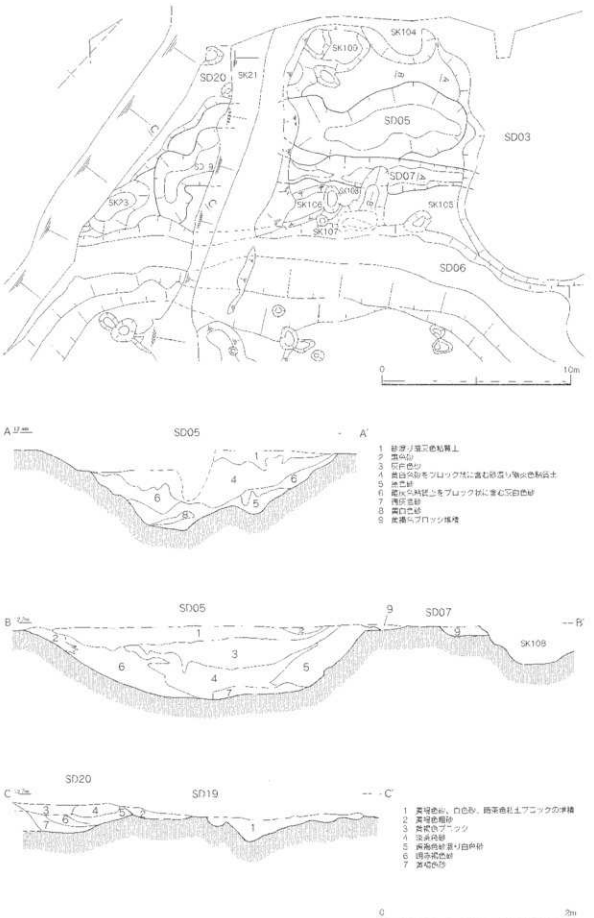


図81　SD05, 07, 19, 20実測図（平面S＝1：200　断面S＝1：40）

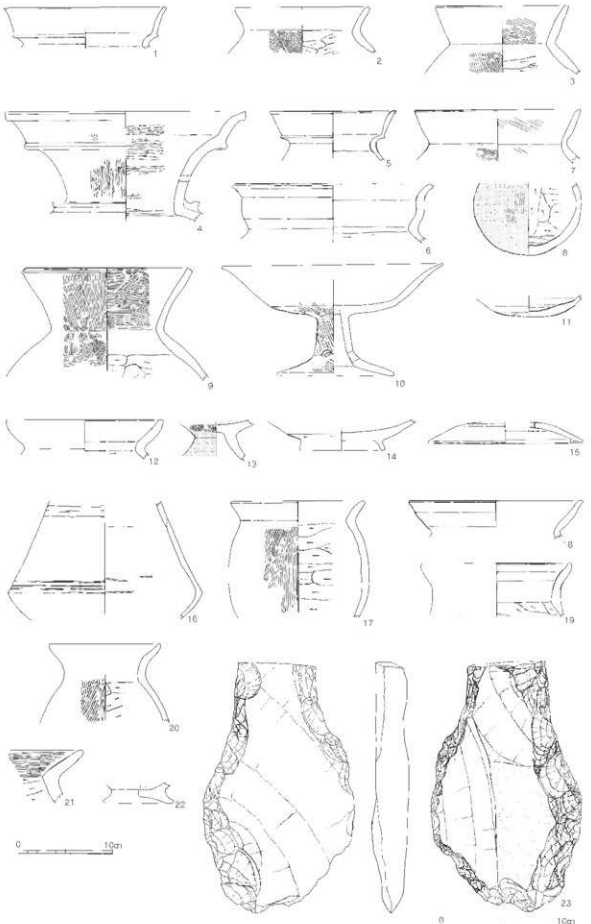


図82　SD05, 07, 19, 20出土遺物実測図（1～22はS＝1：4　23はS＝1：3）

施す丸底の壺。10は口縁部に段を持つ高坏で接合方法は図80－２に似る。３，９は特徴が共通する広口の壺である。16は凹線文を２段に施す縄文土器。22は低脚の付く甕か。23は有肩形の打製石鏃である。

ＳＤ０８（図83　図版48）

ＳＤ03，06，01に囲まれた位置にある。溝としたが土壙の連続とも考えられる。遺物は弥生土器と土錘が出土した１，３～５は甕で中期末～後期前半の幅でとられられる。２は後期初頭の高坏の杯部を独立させた鉢である。

ＳＤ０１，０２，０２'（図84　図版48、89）

後述するＳＤ03と平行するように東西に伸びる細長い溝である。南から北に向かって01，02，02'とした。東側はＳＤ06に切られているが、ＳＤ03に並複する西側は平面的に十分確認できなかった。切り合い関係から、ＳＤ03→02'→02→01の順が想定できる。

遺物は１～５がＳＤ01から、７が02から、６，８が02'からそれぞれ出土した。５は複合口縁の

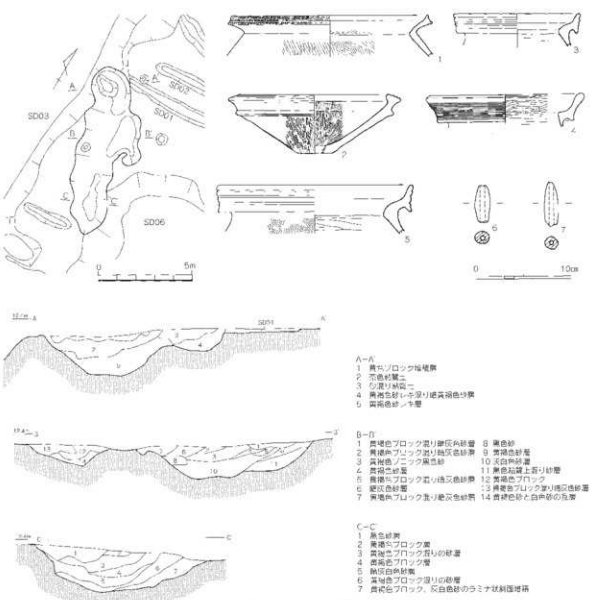


図83　ＳＤ08・出土遺物実測図（平面Ｓ＝１：200　断面Ｓ＝１：40　遺物Ｓ＝１：４）

窓で、肩部・頸部・口縁屈曲部に竹管を連続刺突し、さらに口縁端部から肩部の刺突文まで櫛状工具による刺突文で埋めるという特異な装飾が施されている。口縁の形態から1と同じ後期中葉。8は後期初頭の高坏か図83－2と同類の鉢であろう。

出土遺物は3本の溝が弥生後期初頭から中葉にかけて順次移動したことを示しており、この変遷が、第Ⅶ層上で谷側から段丘側に向かって後退するように進行したことが窺える。SD01には黒色砂がまとまって堆積しており、SD01～02'が弥生後期中葉までの段丘縁辺の溝として機能してい

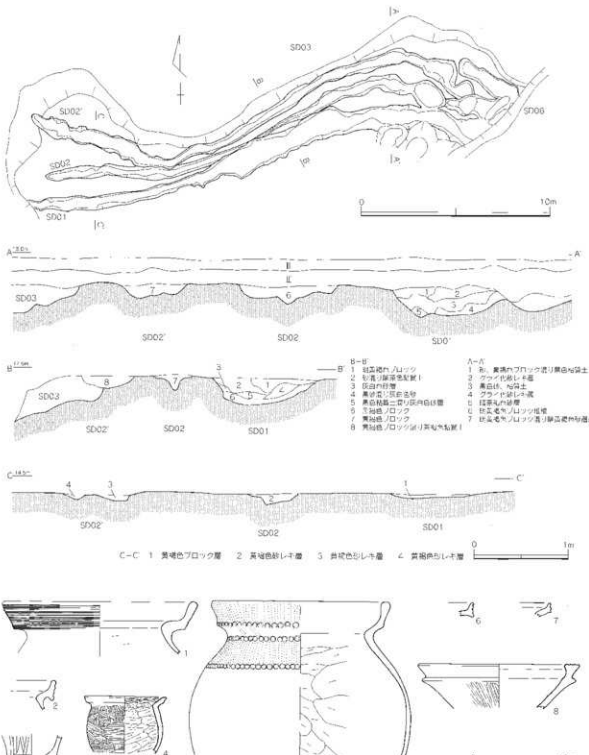


図84　SD01, 02, 02'・出土遺物実測図（平面S＝1：200　断面S＝1：40　遺物S＝1：4）

たと考えられることから、ＳＤ06との間に失われた当該期の遺構面が存在したことが想像できる。

ＳＤ０３（図85～94 図版49～52、90～92）

調査区を北東から南西に向け流下する弥生前期～中期前葉の自然流路である。上流側はＳＤ06に切られているため形状は不明であるが、調査区中央付近では幅5.5ｍ、深さ0.5ｍを測り、第Ⅶ層を基盤に蛇行しながら西流する。ＳＤ04と重複する辺りから大きく南下し、調査区外へ続く。確認できる箇所でも幅12ｍ、深さ0.9ｍを測る。これより下流側の状況は不明であるが、ＳＤ20付近に続きが見られないことや、権現山との間隔があまり無いこと、さらに第Ⅶ層との関係からこれ以上は下流に伸びずに滞留したと考えられる。

第３章第３節で詳述するように、段丘を形成する第Ⅶ層は二瓶火山の噴出物に由来する洪水堆積層である。すなわち、神戸川を駆け下った洪水が土石流となって三田谷を遡上し、苦大な量の火山性粗砂で谷を埋め尽くしたことが段丘の成因と考えられる。この洪水砂は権現山の東側にまで達し、流路としての余地をわずかに残すほどだったと考えられる（図101）。この洪水が引き起こした景観の変化についてはあらためて述べるとして、ここではＳＤ03及び04の流下状況と段丘の関係につい

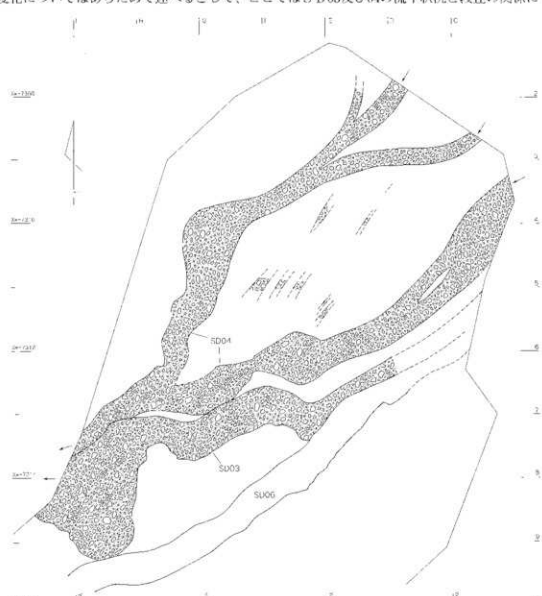


図85　ＳＤ03，04平面図（Ｓ＝１：600）

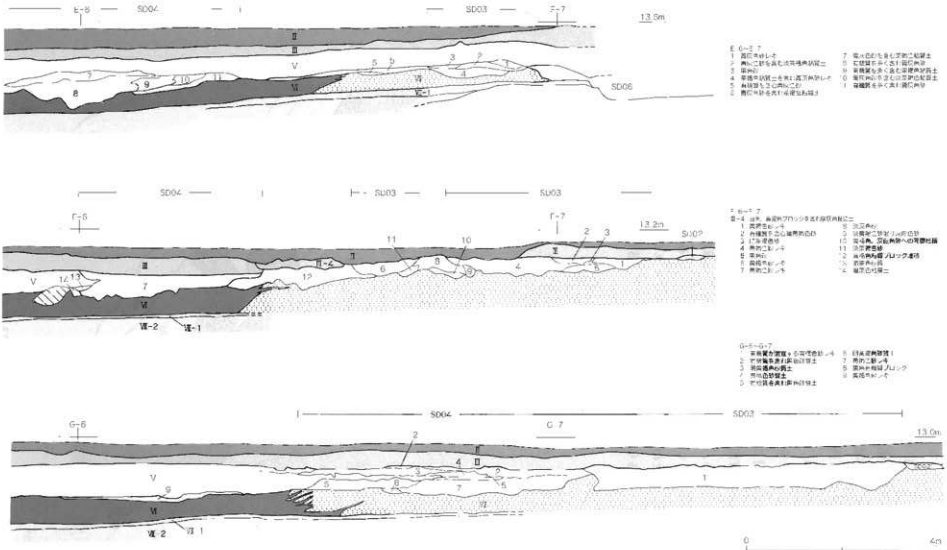


図86　SD03, 04土層断面図1（S＝1：80）

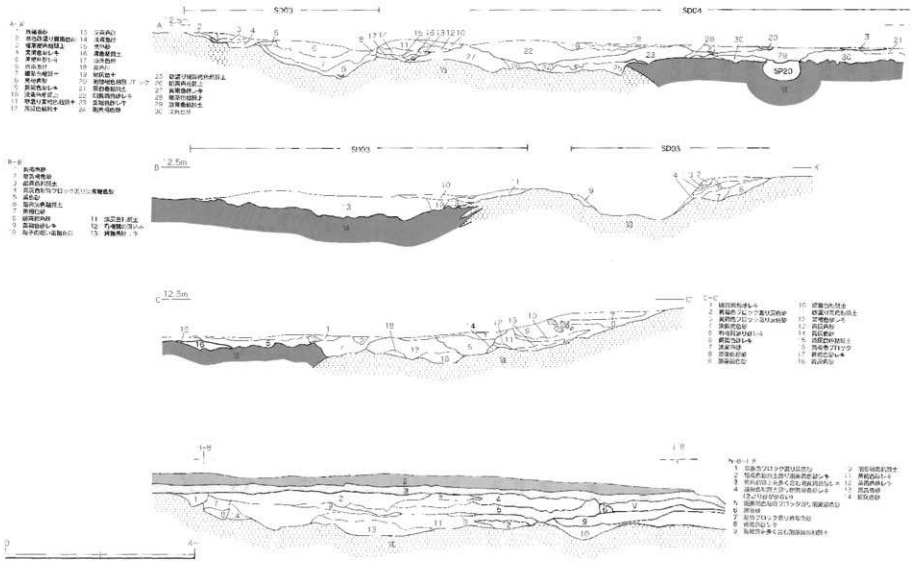


図87　SD03，04土層断面図2（S＝1：80）

て述べておきたい。流路の平面を見ると谷の奥から流れてきたＳＤ04，03が段丘に接触する辺りから大きく流れを変えていることがわかる。ＳＤ04は山側と谷の中程の２条あり，ともに段丘にぶつかり法面に沿って流下している。ＳＤ03は北東から流れてきて砂層上で急激に進路を西に変更している。調査区西側で南下し、川幅が大きく広がっているのは、段丘と権現山の丘陵裾に阻まれた結果、行き場を失った流れが段丘の凹みを削り滞留した結果と考えられる。このような想定から、後述する湖沼と神戸川をつなぐ僅かな流路は、ＳＤ03の流下時点でもはや存在しなかったと考えられる。

土層観察はグリッド軸と任意に設定したベルトで７ヶ所で行った。埋土は岩盤起源の黄褐色砂礫が主体で、多数の自然木と土器片をまじえて堆積していた。流路内の埋土はほぼ同質で溝の各所の埋土を対応させることがほとんど困難な状況であった。以下観察の所見を上流側から記述する。

Ｅ－６～Ｅ－７　ＳＤ06に一部切られている。第Ⅶ層をベースとするがこれより上流では湖沼埋土の第Ⅶ層を基盤にしている。溝底の標高は12.45ｍである。

Ｆ－６～Ｆ－７　島状の高まりを挟んで南北に分かれているが土質は同じである。南側は第Ⅶ層を基盤にしているが、北側はＳＤ04以前の堆積土を切り込んでいる。

Ｇ－６～Ｇ－７　ＳＤ04との切り合いが認められる。土層は比較的に単純で底面も平坦である。

Ａ－Ａ'　ＳＤ04以前の堆積層で形成される島状高まりによってＳＤ04と隔てられている。段丘と島状高まりに挟まれて狭くなったところでは溝の底が極端に深くなり、有機質を多く含む粘質土（７）で砂礫層が上下に分かれる（５，９）。ただしこれほど明確に分かれるのはここだけの現象のようである。

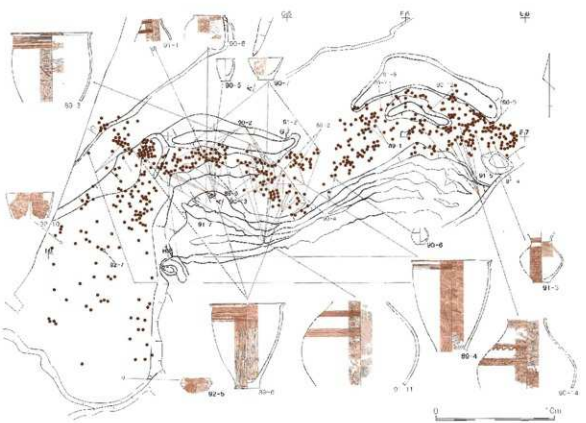


図88　ＳＤ03遺物出土状況図（遺構Ｓ＝１：320　遺物Ｓ＝１：８）

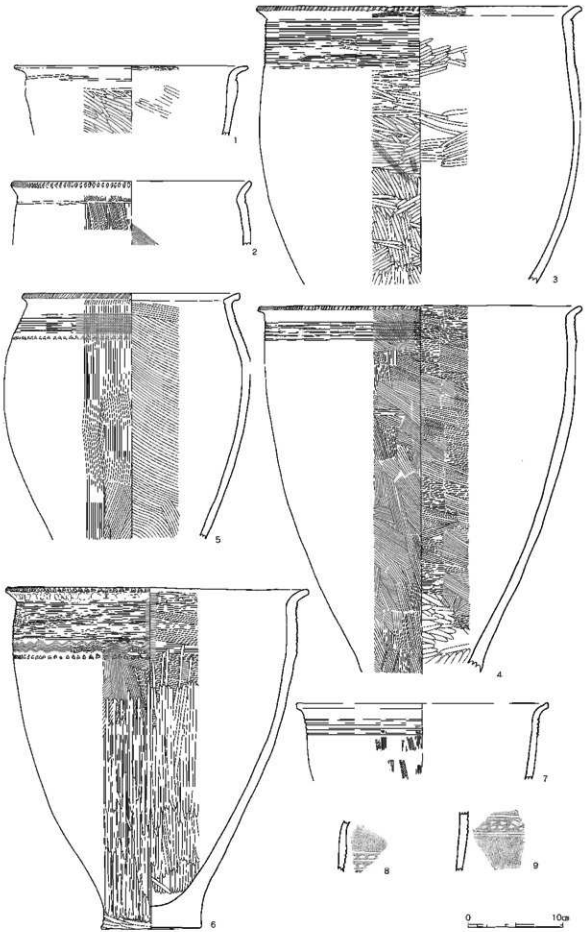


図89　ＳＤ03出土遺物実測図１（Ｓ＝１：４）

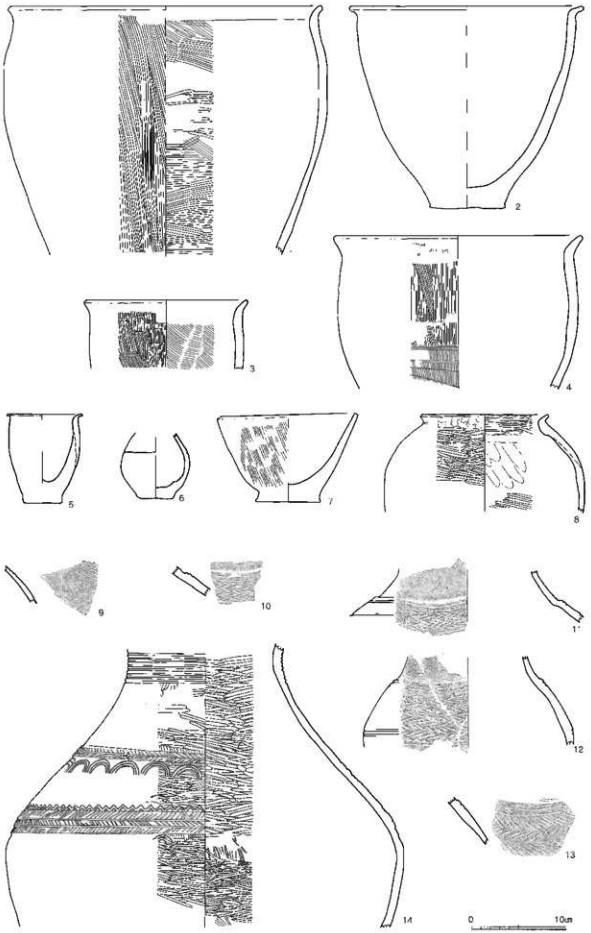


図90　SD03出土遺物実測図2（S＝1：4）

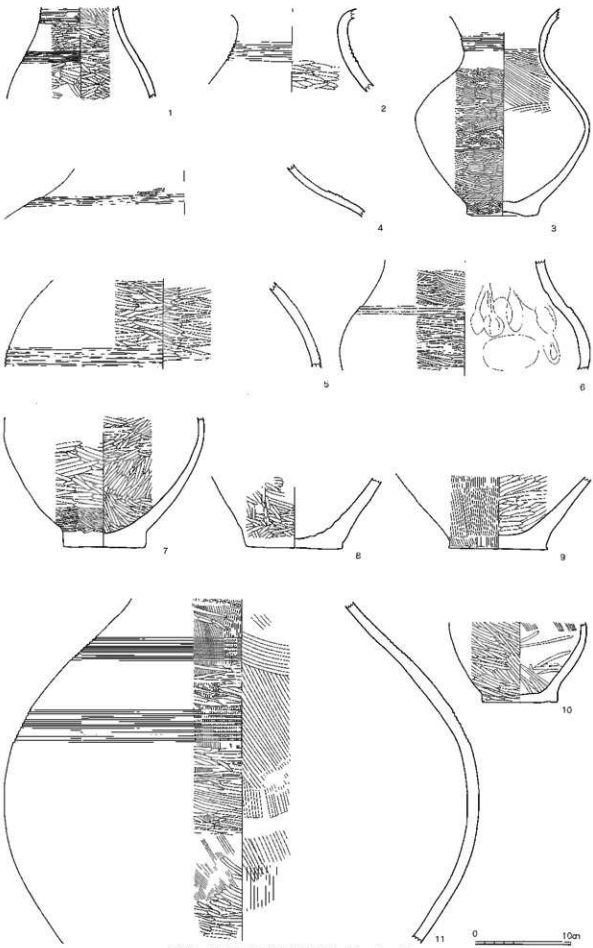


図91　ＳＤ03出土遺物実測図３（Ｓ＝１：４）

C－C'　ＳＤ04と重複する位置にあたる。

Ｈ－８～Ｉ－８　流路幅が極端に広がった箇所である。大量の砂礫が堆積しており切り合いも多く見られる。なお包含層で記述した挽物椀や中期中頃の壺は第Ⅲ層とＳＤ03埋土の間で出土しているので弥生中期以降の流路が切り合っている可能性もある。

溝埋土からは土器が大量に出土した。まとまった出土状況を示す場合もあるが、個体によってはかなり雌れて破片が出土している。この傾向はＧラインからＩラインにかけて顕著である。時期的な傾向を見るとＧラインから東側に前期の遺物が多く西側には中期前葉の資料が多い。平面的には認識できなかったが、２時期の流路が重複している可能性もある。

出土遺物の大半は土器で弥生土器と縄文土器がある。他に石器と木器が僅かにある。縄文土器にはＳＤ04に由来するものが含まれる可能性がある。

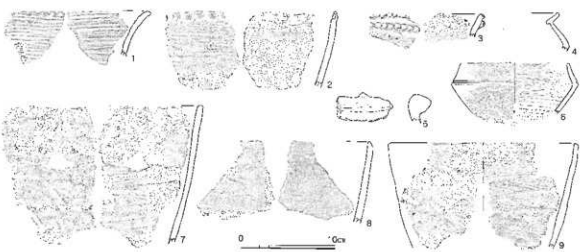


図92　ＳＤ03出土遺物実測図４（Ｓ＝１：４）

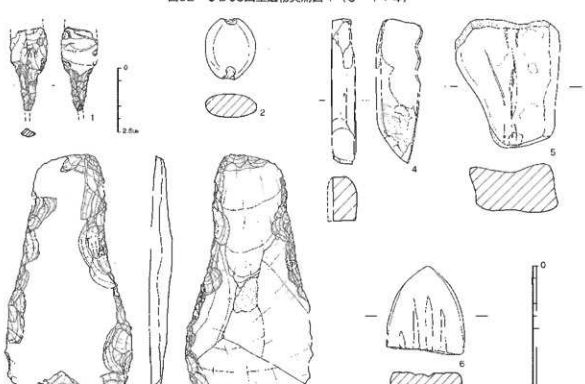


図93　ＳＤ03出土遺物実測図５（１はＳ＝２：３　２～６はＳ＝１：３）

弥生土器（図89～91）図89～90－4は甕である。図89－1，2，4は口縁下にヘラ描沈線を施すもので，2，4は口縁端部に刻目を施している。沈線を比較すると1条の1，2の幅が広いのに対し，沈線が多条化した4は細く浅い。3，5～7はクシ描沈線を施すものである。形態では，3，5は口縁より胴部が張り出し，6，7は張り出さない。口縁端部は上方に開くように短く外反し，5は端部を折り返している。沈線の施文を比較すると7が2条2単位，5は2条3単位，3が5条3単位，そして6が最も多く4条4単位で施文されている。6は直線文の下に4条の波状文を施す。7以外は口縁端部に刻目を施している。3，5は口縁に斜行して刻む。6は板状工具の角を使った三角形の刺突文を口縁端部とクシ描文下に施し，5はクシ描文下に施している。なお，8，9のように沈線間に連続刺突文を施す個体もある。図90－1～4は沈線を施さないものであるが，施文の有無以外に相違する点はない。図89－5，6はミニチュア土器で，前者は甕，後者は沈線で胴部と頸部の段を表現したと思われる壺である。7は鉢である。8は無頸壺である。図90－9～図91は壺である。9はヘラ描の木葉文であろう。10～12は肩の段から下に，貝殻腹縁による沈線・羽状文を施す壺である。10，11は貝殻沈線を境に羽状文帯が2段になる可能性がある。14は頸部にヘラ描沈線を施し肩から胴部にかけ様々な施文方法が駆使された壺である。まず肩と胴部最大径の僅かに上の位置に削り出し突帯を作りだす。突帯は肩が2段，胴が3段に沈線で区画され羽状文を施す。肩の突帯下には重弧文が，胴の突帯上には2重の連続山形文が貝殻腹縁で描かれている。胴部突帯の上下に貝殻による重弧文が僅かに残っていることから，当初は突帯を挟んで重弧文列を3段描くつもりであったかもしれない。図91－1～5はヘラ描沈線を施す壺である。6は肩に貝殻沈線を施す。7～10は甕・壺の底部。11はクシ描沈線を施す大型の壺である。

縄文土器（図92）1は表裏が貝殻条痕で口縁端部に刻目を施す鉢。2は孔列土器である。内湾する口縁の内面端部側にやや斜め方向から未貫通の連続刺突を加え，外面は瘤状の隆起が連続している。刺突の原体は径0.6cmの丸棒を縦に半截したような形状だったと思われる。3は口縁端部に刻目を施す突帯文土器。4は口縁と胴部が2段に屈曲する浅鉢。6は口縁が内側に屈曲する粗製の浅鉢。7～9は粗製の深鉢である。

石器（図93）1は錐で上下端を欠損する。2は石錘。3は撥形の打製石鏃。4は2段に抉りを入れる柱状片刃石斧である。左側面が板状に剥離・欠損しているが丁寧に全面研磨された優品である。5，6は砥石だが，溝に伴うものではない。

木器（図94）1は挽物で高台状の脚が付く椀。2は長さ1.5mの鋤の未製品。

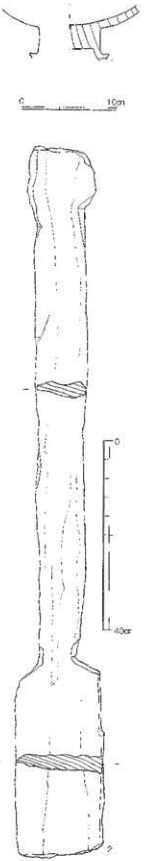


図94
ＳＤ03出土遺物実測図6
(1S－1：4　2S＝1：8)

ＳＤ０４（図85～87，95，96　図版53，54，92，93）

北東から南西に向けて流下する縄文晩期前葉の自然流路である。大きく見れば谷の中央と南の丘陵寄りに２本あり、調査区南西で合流している。流路は場所によりかなり不整形であるが基本的な規模は幅４～8.5m、深さ0.5mを測る。段丘以外の場所では湖沼埋土の第Ⅵ層を基盤にしている。谷側の流路は上流側で３つの流路が合流している。２つの流路の間にも第Ⅵ層を削り込むような砂礫層が所々で確認できるので、流路そのものは不安定なものだったことがわかる。

各流路の時期を限定できる資料はなかったが、Ｇラインでの溝底のレベルを比較する限り谷側が低く丘陵側が高いので、谷の埋積に伴い前者から後者へ順次移動したことが想定できる。

土層観察はグリッド軸と任意に設定したベルトで６ヶ所で行った。埋土はＳＤ03と同じく岩盤起源の黄褐色砂礫が主体であるが、自然木は多くない。Ｅ－６～Ｅ－７では第Ⅵ層を基盤にしており有機質を交えている。溝底の標高は11.8mである。Ｆ－６～Ｆ－７では第Ⅵ層とＳＤ04以前の堆積層を基盤にしている。土質は単純である。Ｇ－６～Ｇ－８では第Ⅴ層を挟み上下に分層できる。２～５層が、刻目の無い突帯文の鉢（96－14）を含む土層であろう。Ａ－Ａ′では流路が合流する位置で、複雑な切り合いを示しているが、Ｂ－Ｂ′では単純な堆積状況を示している。

出土遺物の大半は流路の合流地点に集中している。図96－１，２は砲弾形の粗製深鉢である。前者は口縁端部に面を持たせ表裏面はナデ調整。後者は口縁端部を丸く単純に納める。外面のみ条痕。４は２段に屈曲する口縁に回線文を施す浅鉢で、口縁内面の端部側に浅い段が巡る。６は外方に口縁端部を張り出し、端部上面に組紐を陽刻であしらった甕である。外面は沈線の下に縄文を施す。７，８は鉢の底部で前者は丸底、後者は凹底である。９は屑から口縁にかけ２段に強く屈曲する無文の精製浅鉢である。内外面とも横方向のミガキ調整が施され、黒色を呈するいわゆる黒色屑研土

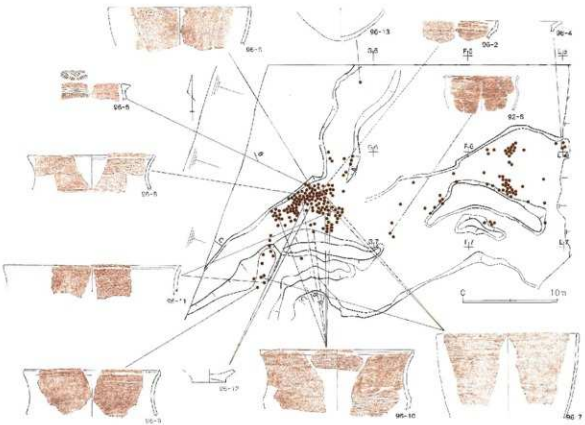


図95　ＳＤ04遺物出土状況図（遺構Ｓ＝１：400　遺物Ｓ＝１：８）

器である。10～13は口縁端部内面に浅い凹線状の段を持つ粗製の深鉢である。胴部は内湾し、口縁は反るように開く。調整は口縁内外面をなで調整するが、12は内面に条痕が見られる。胴部は12を見る限り内面条痕、外面ケズリである。11～13は端部を内側に若干屈曲させ、幅1㎝程度の面を作り出しているが、10は単純に納めている。岩田IV類[11]と共通する特徴であろう。14は胴部から口縁が屈曲する突帯文の鉢で、口縁端部に張り付けた突帯に刻目はなく、粗製である。

出土した土器は14が晩期の終末頃であるほかは4，9，10～13はおおよそ晩期前葉の時期が当てられる。

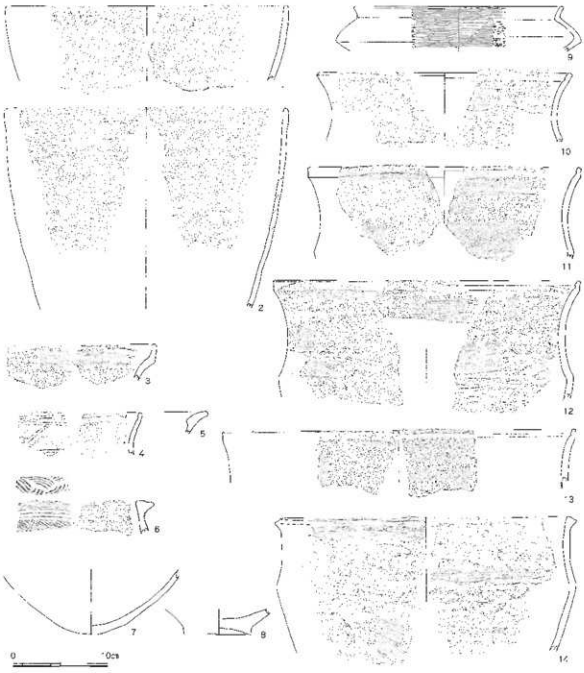


図96　SD04出土遺物実測図（S＝1：4）

7．貯　蔵　穴

堅果類の貯蔵穴を20穴確認した。大半がＳＤ04の右岸側に位置し、南西に集中する傾向にある。ＳＤ04の埋土を切り込むものがあるので、縄文晩期中葉～後葉の時期が考えられる。

なお、出土した堅果類、樹木片の同定結果は第３章第１，２節に掲載した。

ＳＰ２４（図版55）

径0.68～0.45ｍ、深さ0.5ｍを測る。ＳＤ04の砂礫層を切り込んでいる。アカガシ、イチイガシの堅果が大量に残されていた。

ＳＰ３３（図版56）

径0.65～0.7ｍ、深さ0.29ｍを測る。上面を葉と樹木片で覆うが、堅果類は多くない。１，２層は堅果を抜き取った跡の埋め戻しと思われる。

ＳＰ２０（図版57）

袋状に掘り込まれた穴で、径0.7～0.75ｍ、深さ0.39ｍを測る。ＳＤ04の砂礫層を切り込んでいる。上面は粘土で覆い、穴の中程を葉で覆っている。

ＳＰ２７（図版58）

径0.78～0.55ｍ、深さ0.41ｍを測る。堅果を埋めた後、樹皮で穴を半分覆いさらに葉を敷きつめ、最後に上面を粘土で覆っていた。

ＳＰ２１（図版59）

径0.77～0.68ｍ、深さ0.42ｍを測る。ＳＰ24に次いで堅果類が多く、トチの種子の占める割合

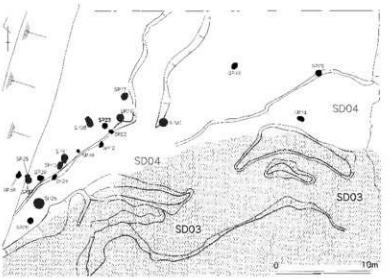


図97　堅果類貯蔵穴位置図（Ｓ＝１：400）

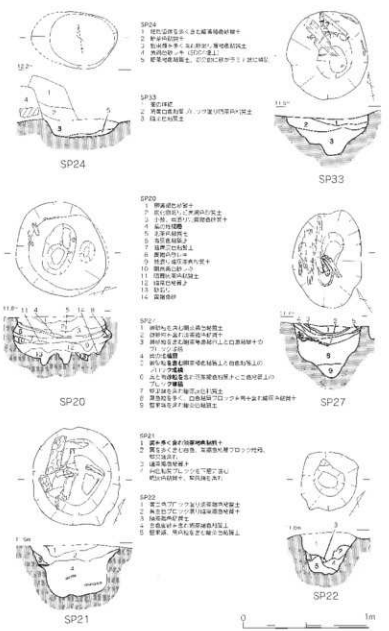


図98　堅果類貯蔵穴実測図１（Ｓ＝１：30）

が高い。上面は粘土で覆っているが出土した樹木片は穴を覆うような状況ではなかった。

ＳＰ２２（図版60）

径0.43～0.47ｍ、深さ0.33ｍを測る。

ＳＰ２３（図版60，61）

径0.48～0.57ｍ、深さ0.25ｍを測る。

ＳＰ４２

貯蔵穴の底をかろうじて残していただけで規模は不明。

ＳＰ３６

不正形な落ち込みで、堅果類らしき破片が１点出土した。

ＳＰ２８

径0.4～0.26ｍ、深さ0.05ｍを測る。

ＳＰ４０（図版62）

径0.83～0.5ｍ、深さ0.5ｍを測る。切り合いから隣接するＳＰ41より新しい。底面に堅果類が集中していた。

ＳＰ４１（図版63）

袋状を呈する穴で、底径0.97～0.74ｍ、深さ0.23ｍを測る。底面に堅果類が集中し、上面は葉を交えた粘質土で覆われていた。

ＳＰ３４（図版63，64）

径0.78～0.38ｍ、深さ0.4ｍを測る。埋土にＳＤ04由来の砂礫が混じる。カシ類の堅果よりトチの種子が多い。

ＳＰ３９（図版64）

径0.68～0.55ｍ、深さ0.47ｍを測る。

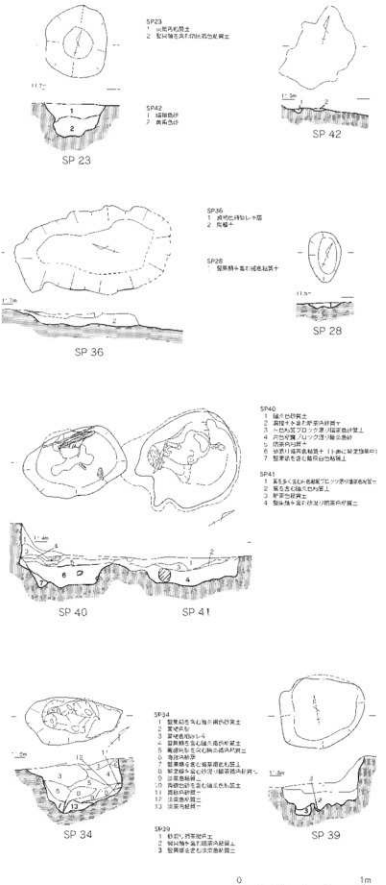


図99　堅果類貯蔵穴実測図２（Ｓ＝１：30）

ＳＰ３５（図版65）

径0.52ｍ、深さ0.2ｍを測る。ＳＰ37を切って掘り込まれている。

ＳＰ３７（図版65）

底径0.67～0.62ｍ、深さ0.4ｍを測る。底面に荒別したカヤを８本敷きつめていた。堅果類は少なく抜き取り後の状況であろう。

ＳＰ３８（図版66）

径0.6～0.7ｍ、深さ0.52ｍを測る。掘り返しに伴う埋土（５層）の上を葉と粘土で塞いでいる。底面で堅果類がまとまって出土した。

ＳＰ２５（図版67）

径1.02～0.96ｍ、深さ0.55ｍを測る。１層に多種多量の樹木片が投げ込まれており、土質の状況も含め明らかに廃絶の状況を示している。全埋土を通じトチの種子しか出土していない。

なお、スクレイパーが１点出土した。

ＳＰ２６（図版67）

径0.57～0.55ｍ、深さ0.25ｍを測る。

ＳＰ２９（図版67）

底径0.65ｍを測る。底面に織りの異なる２枚の綱代を敷いている。

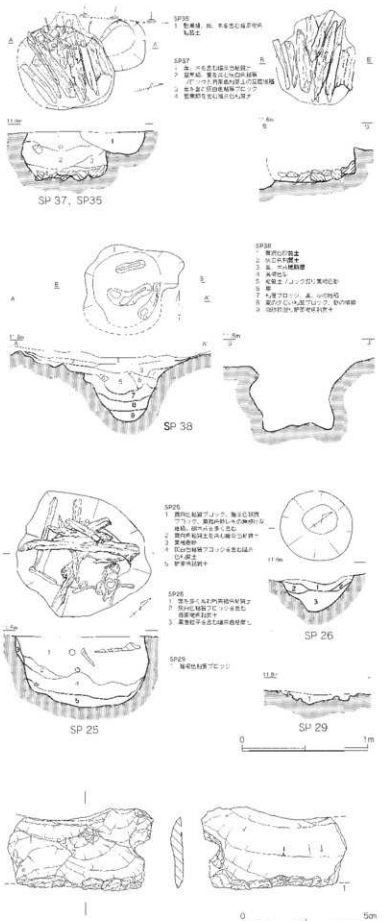


図100　竪果類貯蔵穴・出土遺物実測図３（遺構Ｓ＝１：30　遺物Ｓ＝２：３）

8．湖　沼

三瓶山の爆発に起因する洪水が莫大な火山性の粗砂で谷を埋め尽くしたことはすでに述べた。この洪水砂が安定した生活面を作り出した一方、谷の出口を塞ぎ、谷奥に小規模なせき止め湖を作り出す結果となった。谷奥部の三田谷Ⅲ遺跡の調査では湖沼を確認できていないので、範囲はかなり狭かったようである。湖沼底は火山灰の２次堆積である第Ⅷ層で、Ｇ－５～Ｆ－５付近がもとも低く、標高10.85ｍを測る。湖沼埋土である第Ⅵ層の厚さは最大0.6ｍで、ほとんどが未分解の葉や樹木であったことから水深の浅い沼地のような状態であったことが窺える。湖沼底は権現山側に向かって低く伸びており、細い流路となって湖沼の木を僅かに流下させていたと考えられる。

湖沼の成立は、第３章第３節で示されるように、三瓶山の第Ⅵ活動期の直後の3,600年前頃と考えられる。出土した遺物は最大限幅をとっても縄文時代後期前葉の末頃から中葉までに限定されるので、湖沼は短期間に埋没してしまったと思われる。

湖沼埋土からは自然木のほか、縄文土器と丸木舟が出土した。丸木舟の詳細については別に報告する予定で、ここでは出土状況を中心に述べる。

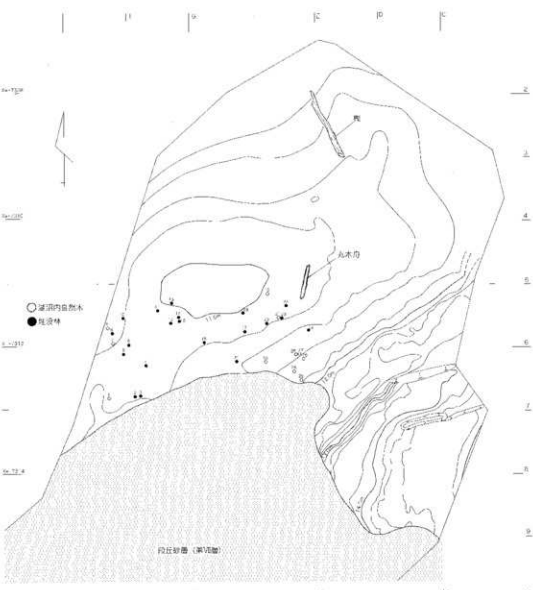


図101　湖沼底測量図（Ｓ＝１：600　樹木番号は第３章第３節の表５に対応）

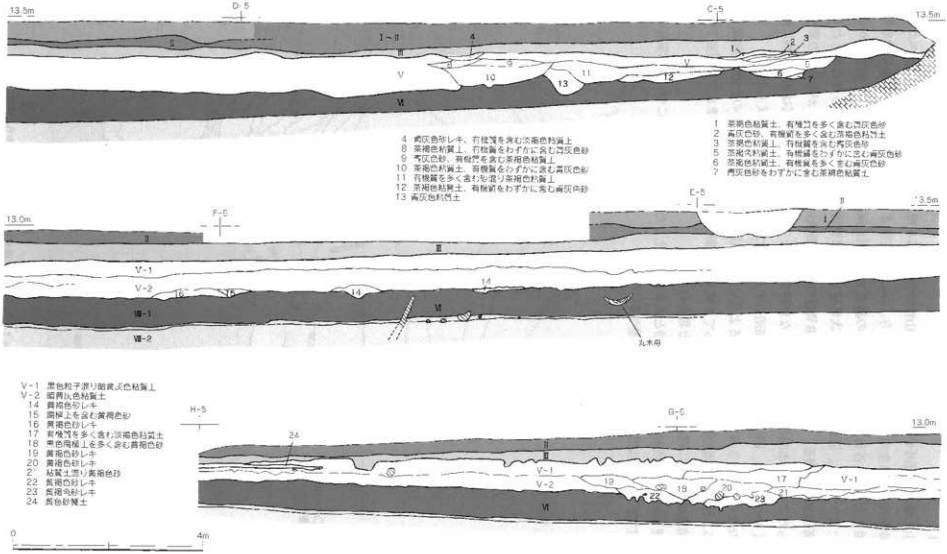


図102　土層断面図（S＝1：80）

丸木舟が出土したのは湖沼の岸、すなわち段丘先端から北に13.2ｍの位置である。船首を段丘側に向け、船底外面を湖沼底から0.2ｍ浮かせた状態で、完全に湖沼理土に埋没していた。本来は完形であったが、調査初期にあけたトレンチによって船尾を僅かに欠損している。形態はいわゆる鰹節形[12]で、残存長5.6ｍ、幅0.46～0.6ｍ、深さ0.1～0.14ｍを測り、復元長は６ｍ弱と考えられる。樹種はスギで、船底内面の数カ所に焦げ跡が残る。円礫が１個船外にあるほかは舟に関係する遺物はなかった。

縄文土器は湖沼内から分散して出土した（図103，104）。東側の状況は不明であるが、湖沼中央寄りに破片が多く、西側は少ない。極端に離れた接合関係を示す資料はない。

縄文上器（図104　図版93）１は九州地方を中心に分布する鐘崎式[13]の特徴を持つ精製の浅鉢である。胴部から口縁にかけ短く屈曲し、外面は沈線で区画された狭い縄文帯に赤彩が施されている。口縁端部は１条の沈線と縄文が施され、組の結節を表現したような肥厚部分が認められる。２は沈線と縄文を施す。３は口縁端部に沈線を１条施す粗製の鉢。５～10は口縁端部外面と屈曲して張り出す胴部に縄文を施す鉢である。５～７は浅鉢、９，10が深鉢。口縁端部の施文幅は、６，７が広いのに対し、５，８，９，10は狭い。11は焼成後穿孔のある精製無文の深鉢。12，13は粗製の深鉢で、口縁端部を内側に肥厚させるように粘土帯を外側接合させている点で特徴的である。同様の特徴を持つ資料は飯石郡頓原町板屋Ⅲ遺跡第２黒色土[14]、同下山遺跡第１黒色土[15]から出土している。14，15は粗製の深鉢。15は鉢の丸底。17は平底の小片。これらはおおよそ縄文後期前葉末～中葉に位置づけられる資料であろう。

湖沼内にはこのほか自然木が多く含まれていた。西側では権現山側から倒れ込んだ状況で出土（図101の○印の７、９）したものもあった。（これらの樹種同定の結果は第３章第３節の表５を参照）湖沼に埋没した自然木の中で特に目を引くのは調査区北側で出土した椎の大木である（図版70）。

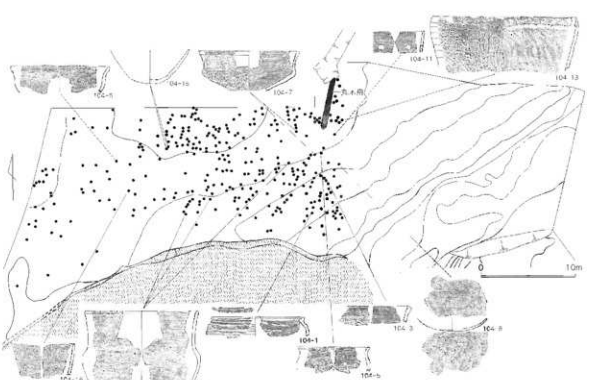


図103　湖沼遺物出土状況図（S＝1：400）

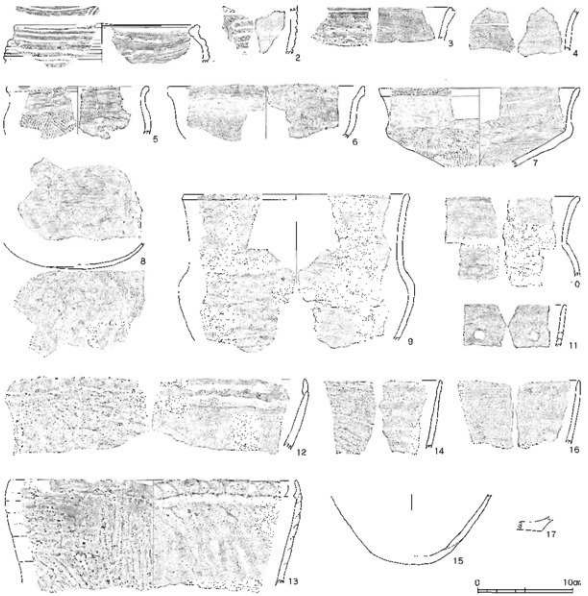


図104　湖沼出土遺物実測図（S＝1：4）

枝、根を欠き、長さ11.5m、径約1mを測る。幹を下流側に向け、下面は湖沼底に接していた。一部で砂礫層に切られており、湖沼形成後まもなく埋没したものと考えられる。

湖沼埋土を除去する段階で多数の埋没林を確認した。（図101の●印　番号は第3章第3節　表4と対応　図版71，72）このことから、当時湖沼水面のいたるところで立ち枯れした木が突き出でていたものと思われる。

注

1）陶磁器の分類・編年は横田賢次郎・森田勉両氏（横田・森田1978）、山本信夫氏（太宰府市教委1983，1984）の研究による。

2）木製品の分類・編年は奈良国立文化財研究所1993による。

3）須恵器編年は大谷1994による。

4）96，97年度調査で検出したＳＩ06，08，09，07で共作している。このほかに、須恵器を伴わないが赤彩を施した土器が出土した建物が６棟ある（島根県教委1999）。

5）古墳時代前期から中期の土師器編年は松山1991による。

6）弥生・古墳時代の祭儀用建物を類型化し変遷を考察した梅本康広氏の整理（向日市教委1997）によると、ＳＢ16は「２間四方の身舎に３間以上の柱列が四隅に配置される」中海道類型に共通する特徴を持つ。この類型のうち身舎と四隅の柱筋を揃えるⅠ類から揃えないⅡ類が派生したとし、５世紀後半に変化したとする。中海道類型の例としては中溝・深町遺跡（群馬県）、原之城遺跡（同）、鳥羽遺跡（同）、城之越遺跡（三重県）、平城京跡（奈良県）、南郷安田遺跡（同）、上之宮遺跡（同）、中海道遺跡（京都府）、八木嶋遺跡（同）、西本６号遺跡（広島県）がある。

7）斐川町教委1997　所収

8）木簡学会の型式番号。「短冊型で、側面に穴を穿ったもの」と定義している。なお、本報告の釈文の表記・型式番号は木簡学会の表記方法による。

9）この木簡の概要については既に『木簡研究』誌上で報告している（久保田1998）。今回釈文を訂正し、正報告とする。

10）石鏃の形態分類は平井1991による。

11）山口県岩田遺跡（潮見1960）

12）清水1975の分類による。

13）近くでは大原郡木次町平田遺跡で出土している（木次町教委1997）。

14）1994～96年度島根県教育委員会調査。（島根県教委1998）

15）1995，96年度島根県教育委員会発掘調査。

引用・参考文献

伊勢崎市教育委員会　1987『原之城遺跡発掘調査報告書』

上野市教育委員会・上野市遺跡調査会　1998『城之越遺跡（２次）発掘調査報告』上野市文化財調査報告51

大谷晃二　1994『出雲地域の須恵器の編年と地域色』『島根考古学会誌』第11集

木次町教育委員会　1997『平田遺跡』木次町文化財調査報告書第４集

久保田一郎　1998「島根・三田谷Ⅰ遺跡」『木簡研究』第20号

群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986『鳥羽遺跡Ｇ・Ｈ・Ｉ区』関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター1994『八木嶋遺跡』京都府遺跡調査概報第56冊

（財）桜井市文化財協会　1990『上之宮遺跡第５次調査概要』桜井市内埋蔵文化財1989年度発掘調査報告書２

潮見浩　1960「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部紀要』18

静野勝信　1996「中溝・深町遺跡」『水辺の祭祀』　日本考古学協会三重県実行委員会

島根県教育委員会　1998『板屋Ⅲ遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5
島根県教育委員会　1999『二田谷1遺跡　Vol.1』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ
清水潤三　1975「日本古代の舟」『日本古代文化の探求　船』社会思想社
太宰府町教育委員会　1983『太宰府条坊跡Ⅱ』太宰府町の文化財7
太宰府市教育委員会　1984『太宰府条坊跡Ⅲ』太宰府市の文化財第8集
奈良県立橿原考古学研究所　1996「井戸遺跡・南郷安田遺跡発掘調査概報」奈良県遺跡調査概報1995年度
奈良国立文化財研究所　1984『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告』
奈良国立文化財研究所　1993『木器集成図録　近畿原始篇』奈良国立文化財研究所史料第36冊
東広島市教育委員会・（財）東広島市教育文化振興事業団　1997『発掘された古代の「神殿」を検討する　－東広島市高屋町大畠　西本6号遺跡をめぐって－　資料集』
斐川町教育委員会　1997『大倉Ⅳ遺跡　神田原Ⅰ遺跡』（株）出雲空港カントリー倶楽部建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
平井勝　1991『弥生時代の石器』考古学ライブラリー64　ニュー・サイエンス社
松山智弘　1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』第8集
三重県埋蔵文化財センター　1992「城之越遺跡」『三重県埋蔵文化財調査報告99－3
向日市教育委員会・（財）向日市埋蔵文化財センター　1997「中海道遺跡－第32次発掘調査概要－」向日市埋蔵文化財調査報告書第44集
横田賢次郎・森田勉　1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館

第３章　自然科学的分析

第１節　三田谷Ⅰ遺跡発掘調査に伴う樹種同定

古野　毅（島根大学）・渡辺正巳（文化財調査コンサルタント㈱）

はじめに

三田谷Ⅰ遺跡は島根県中部、出雲市塩冶町地内に立地する遺跡である。本報は、発掘に伴い検出された縄文時代晩期のドングリピット内より出土した木片、７～８世紀（古墳時代後期）の柱根、７～11世紀の溝内より出土した木材の樹種同定結果の報告である。

木材樹種同定方法

図105に示すフローチャートに従い、全ての試料について永久プレパラートを作製した。作製したプレパラートは光学顕微鏡下で４倍～６００倍の倍率で観察を行い、19種類の樹種の記載・同定を行った。また、特徴が不明瞭なため同定に至らなかった２種類、樹皮と考えられる２種類については記載のみを行った。樹種の同定に当たっては、現生標本および資料（島根大学総合理工学部古野研究室蔵）との顕微鏡下での比較を基本とした。また、作製した永久プレパラートは、文化財調査コンサルタント㈱において整理番号を付け保管している。

〔処理手順〕	〔処理内容〕
試料整形	適当な大きさに３断面に配慮して行う
切片（薄片）作成	ミクロトームあるいは剃刀を利用
染色	サフラニンによる
有機溶媒への置換	試料中の水分を有機溶媒に置換
標本作製	カナダバルサムにてプレパラートに封入

図105　樹種同定用プレパラート作製フローチャート

同定樹種の記載

各分類群毎に記載を行い、表１、２に鑑定結果を示した。

（1）スギ *Cryptomeria japonica* D.Don

試料番号：SP25②-1、SP25⑪、SP25⑭、SP25⑮、SP25⑲、SP25㉑、SP25㉓-1、SP25㉕、SB07①、SD06③、SD06⑤、SD06⑥、SD06⑦、SD06⑧、SD06⑨

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はゆるやかで、

晩材の幅はほとんどの試料が広い。樹脂細胞は主に晩材部に分布している。また、分野壁孔はスギ型で２～３個存在することなどから、スギと同定した。

（２）ヒノキ属 *Chamaecyparis* sp.

試料番号：SP25㉘

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の幅は広い。樹脂細胞は晩材部に認められる。分野壁孔は明瞭なヒノキ型で２～４個存在することなどから、ヒノキ属と同定した。

（３）イヌマキ属 *Podocarpus* sp.

試料番号：SP25㉙

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の幅はやや狭い。樹脂細胞は多く、年輪内に均等に散在している。分野壁孔不明瞭であるが、小型のものが２個存在することなどから、イヌマキ属と同定した。

（４）カヤ属 *Torrea* sp.

試料番号：SP25①、SP25④-1、SP25⑬-3、SP25㉓-2、SP25㉖-3、SP25㉕-1、SP25㉚、SP33①№7、SP33②№6、SP33③№8、SP33④№1、SP33⑤№5、SP33⑥№4、SP33⑦№3、SP33⑧№2、SB06-P1

記載：構成細胞は仮道管、放射柔細胞からなる。早材から晩材への以降は緩やかで、晩材の幅は狭い。仮道管にはらせん肥厚があり、２本のらせんが対になる傾向がある。有縁壁孔の孔口は凸レンズ状を示すものがある。分野壁孔は明瞭なヒノキ型で２～４個存在することなどから、カヤ属と同定した。

（５）イヌガヤ属 *Cephalotaxus* sp.

試料番号：SP20①、SP25②-2、SP25③、SP25⑦-2、SP25⑨、

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の幅は非常に狭い。樹脂細胞は多く、年輪内に均等に散在している。分野壁孔は非常に不明瞭であるが、トウヒ型で１～２個存在する。仮道管にらせん肥厚が顕著に認められることなどから、イヌガヤ属と同定した。

（６）ハンノキ属 *Alnus* sp.

試料番号：SP25⑬-1

記載：小さい道管が単独ないし放射方向に２～4個かそれ以上複合し、散在状に分布する散孔材である。道管せん孔は階段せん孔である。また、短繊維状柔細胞が存在する。放射組織は単列で、ほとんどが平伏細胞からなる同性型である。小型の単列放射組織が部分的に集まった集合放射組織が認められる。以上の組織上の特徴から、ハンノキ属と同定した。

（７）クマシデ属 *Carpinus* sp.

試料番号：SP27①

記載：小さい道管が単独ないし放射方向に2～4個複合し、散在状に分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔である。放射組織は1～3列でほとんどが平伏細胞からなる同性型である。小型の放射組織が部分的に集まった集合放射組織が非常に目立つ。また、集合放射組織の部分では年輪界が内側に窪んでいる。以上の組織上の特徴から、クマシデ属と同定した。

(8) シイノキ属 *Castanopsis* sp.

試料番号：SP25⑱-1、SP27②、SP27⑤、SP27⑦、SP33①

記載：孔圏には中庸で楕円形の道管が単独で並ぶ環孔材である。道管の分布は非常に疎で放射方向に並ぶ。孔圏外の道管は小さく、火炎状に配列する。道管せん孔は単せん孔で、道管中にはチロースが認められる。孔圏道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は単接線状に配列するものも認められる。放射組織はすべて単列同性である。さらに道管放射組織壁孔は典型的な柵状を示す。以上の組織上の特徴からシイノキ属と同定した。また広放射組織が認められないことから、スダジイの可能性が指摘できる。

(9) コナラ属（アカガシ亜属） *Quercus* （sub. *Cyclobalanopsis*） sp.

試料番号：SP25⑤、SP25㉔-1、SP33②、SP33③

記載：中庸で円形ないし楕円形の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。道管せん孔は単せん孔である。また、道管にはチロースが非常によく発達し、周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は接線方向に１ないし２細胞幅の独立帯状柔組織を形成している。放射組織は同性で、低い単列放射組織ときわめて幅の広い広放射組織がある。さらに道管放射組織壁孔は典型的な柵状を示す。以上の組織上の特徴から、コナラ属（アカガシ亜属）と同定した。

(10) コナラ属コナラ亜属（クヌギ節） *Quercus* （sect. *Aegilops*） sp.

試料番号：SD06②、SD06⑩

記載：やや大きい円形ないし楕円形の道管が単独で１～数列に配列する環孔材である。孔圏外では径を中庸から徐々に減じた小さい道管が、単独で放射状に配列する。小道管は厚壁で円形である。道管せん孔は単せん孔であり、一部の道管にはチロースが認められる。また、孔圏道管の周りには周囲仮道管が存在している。放射組織は同性ですべて平伏細胞からなり、多数のきわめて低い単列放射組織ときわめて幅の広い広放射組織からなる、典型的な複合型である。道管放射組織壁孔は柵状を示す。軸方向柔細胞は１ないし２細胞幅の単接線状柔組織を形成している。以上の組織上の特徴から、コナラ属（クヌギ節）と同定した。

(11) ムクノキ属 *Aphananthe* sp.

試料番号：SP25⑧、SP25⑯-2、SP25⑰、SP25㉒、SP25㉗

記載：小さい道管が、単独あるいは２～３個放射方向に複合して均等に分布する散孔材である。道管の分布数は少ない。道管せん孔は単せん孔である。道管壁は非常に厚い。道管内にチロースがよく発達しているものがある。放射組織は異性で１～４（５）細胞幅を示し、高さは低い。軸方向柔組織は周囲状から連合翼状～帯状、ターミナル状を示す。特に３～１０細胞幅で接線方向への帯状配列が目立ち、特徴的である。以上の組織上の特徴からムクノキ属と同定した。

(12) エノキ属 *Celtis* sp.

試料番号：SP25⑯-3

記載：年輪幅の狭いものがある。中庸の道管が１～３列に配列する環孔材である。孔圏外道管は房状をなして、円形、斜線状、接線状に配列する。道管せん孔は単せん孔で、孔圏外の小道管にはらせん肥厚が認められる。また道管内にはチロースが発達している。孔圏道管および集団管孔を囲む周囲柔組織が存在している。放射組織は異性で１～８細胞幅で、高さはきわめて低い。紡錘形を示す多列放射組織にさや細胞が認められ、非常に目立つ。以上の組織上の特徴から、エノキ属と同

定した。

(13) クワ属？ cf. *Morus* sp.

試料番号：SP33④

記載：年輪幅が非常に狭く、中庸の道管が１～２列（ほとんど単列）に配列する環孔材である。孔圏部が年輪の大部分を占めるため、孔圏外の集団管孔の配列様式は不明である。道管せん孔は単せん孔で、孔圏外の小道管にはらせん肥厚が明らかに認められる。また道管内にはチロースが非常によく発達している。軸方向柔組織は周囲状である。放射組織は１～６細胞幅で、高さはきわめて低く、紡錘形を示すものがある。以上の組織上の特徴からクワ属と推定されるが、軸を含む試料であることなど不確定要素があることから、断定には至らなかった。

(14) モクレン属 *Magnolia* sp.

試料番号：SP25⑦-1、SP25⑩、SP25⑲、SP25㉓-3、SP25㉔-4、SD06①（W99110803）、SD06①、

記載：小さい道管が、単独あるいは数個主に放射方向に複合して均等に分布する散孔材である。一部の試料に年輪幅が非常に狭く、分布数の少ないものがある。道管せん孔は単せん孔である。また、道管内にチロースが発達する場合がある。放射組織は異性で１～２細胞幅である（一部の試料で３細胞幅）。ターミナル柔組織が存在する。木部繊維に明らかに隔壁が認められる（一部の試料で不顕著）。以上の組織上の特徴から、モクレン属と同定した。また、現代の自然分布からホオノキの可能性が指摘できる。

(15) サカキ *Cleyera japonica* Thunb.

試料番号：SP25④-2、SP25㉓-2、SP25㉕-2、SD06④

記載：小さな道管が、単独ないし数個複合して散在状に多数分布する散孔材である。道管の形状は角張っているものが多い。道管せん孔は階段せん孔で、バーの数は多い。傷壁の壁孔は対列状～階段状である。放射組織は単列異性型であるが、２細胞幅の試料もある。また、平伏細胞、直立細胞、方形細胞の３種類がすべて存在する。放射柔細胞は厚壁である。軸方向柔細胞は散在状である。木部繊維も非常に厚壁で、有縁壁孔が認められる。以上の組織上の特徴から、サカキと同定した。

(16) アオギリ *Firmiana simplex* W.F.Wight

試料番号：SP25⑥

記載：中庸の道管が１～２列（ほとんど単列）に配列する環孔材である。孔圏外道管は単独で散在する。道管せん孔は単せん孔である。軸方向柔細胞は孔圏道管を囲む周囲柔組織と孔圏外道管を囲う翼状～連合翼状柔組織を形成している。放射組織は異性で１～６細胞幅で、高さはきわめて低い。紡錘形を示す多列放射組織にさや細胞が部分的に認められる。また、木部繊維は典型的な階段状配列を示す。以上の組織上の特徴から、アオギリと同定した。

(17) サクラ属？ cf. *Prunus* sp.

試料番号：SP25⑬-2

記載：小さい道管が単独ないし放射方向や斜方向に２～３個複合し、散在状に分布する散孔材であるが、年輪の内境に沿ってやや密に配列する。道管せん孔は単せん孔である。放射組織は同性ないし異性で、１～５細胞幅であり、辺縁に方形細胞が出現する。以上の組織上の特徴からサクラ属と推定されるが、断定には至らなかった。

(18) トネリコ属 *Fraxinus* sp.

試料番号：SP20③

記載：中庸の道管が単独でほとんど1列でやや疎に配列する環孔材である。孔圏外で道管は著しく小さくなり、単独あるいは数個複合して散在状に分布している。道管せん孔は単せん孔で、チロースがよく発達している。軸方向柔組織は孔圏部で周囲状、孔圏外で翼状～連合翼状を示す。放射組織は同性で1～3細胞幅で、高さは低い。以上の組織上の特徴から、トネリコ属と同定した。

(19) ニワトコ属？ cf. *Sambucus* sp.

試料番号：SP25⑫

記載：小道管が、単独ないし2～3個放射方向あるいはそれ以上が群状に複合して散在状に分布する散孔材であるが、年輪の最内層に沿って環状に配列するのが認められ、晩材部では接線状、斜線状に配列する傾向が強い。道管せん孔は単せん孔である。放射組織は異性で単～3列であり、高さは低い。不完全なさや細胞を持つものが認められる。軸方向柔細胞は少なく、不顕著である。木部繊維は非常に厚壁である。以上の組織上の特徴からニワトコ属と推定されるが、髄を含む試料であることなど不確定要素があることから、断定には至らなかった。

(20) 不明散孔材1

試料番号：SP20⑤

記載：試料が小枝であり、良好な切片が得られないため、樹種の同定には至らなかった。

小さい道管が単独ないし放射方向に2～3個複合し、散在状に分布する散孔材である。道管分布数は少ない。道管せん孔は単せん孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなる同性型で、5～10細胞幅の紡錘形放射組織が目立つ（樹皮部分）。軸方向柔組織が豊富で、短接線状に配列している部分が多い。

(21) 不明散孔材2

試料番号：SP21⑬

記載：試料の痛みが激しいことから、良好な切片（特に木口切片）が得られないため、組織上の情報が乏しい。このため、樹種の同定には至らなかった。

小さい道管が、単独で散在する散孔材である。道管せん孔は単せん孔で、チロース状の内容物が顕著に認められる。放射組織は異性で1～3細胞幅である。木部繊維は非常に厚壁である。

(22) 不明広葉樹樹皮1

試料番号：SP20⑥

記載：スクレイドが発達して団塊状となって多く分布している。じん皮繊維が存在している。師部柔細胞の接線状配列はスクレイドの団塊状配列のため乱れている。広葉樹樹皮であるが、樹種名は不明である。

(23) 不明広葉樹樹皮2

試料番号：SP21①、SP21②、SP21③、SP21④、SP21⑤

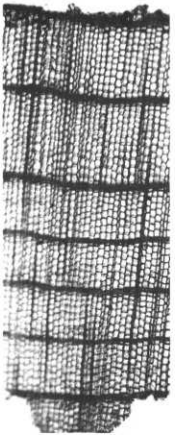
記載：師部柔細胞の層と、じん皮繊維と師管を含む層が接線方向に交互に配列している。スクレイドは認められない。広葉樹樹皮と思われるが、樹種名は不明である。

No.	試料番号	整理番号	樹種名	用途	時代
1	SP20①	W99100701	イヌガヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
2	SP20③	W99100704	トネリコ属	ピット内の木	縄文時代晩期
3	SP20⑤	W99100706	不明散孔材1	ピット内の木	縄文時代晩期
4	SP20⑥	W99100708	不明広葉樹樹皮1	ピット内の木	縄文時代晩期
5	SP21①	W99100707	不明広葉樹樹皮2	ピット内の木	縄文時代晩期
6	SP21②	W99100709	不明広葉樹樹皮2	ピット内の木	縄文時代晩期
7	SP21③	W99100710	不明広葉樹樹皮2	ピット内の木	縄文時代晩期
8	SP21④	W99100711	不明広葉樹樹皮2	ピット内の木	縄文時代晩期
9	SP21⑤	W99100712	不明広葉樹樹皮2	ピット内の木	縄文時代晩期
10	SP21⑬	W99101205	不明散孔材2	ピット内の木	縄文時代晩期
11	SP25①	W99101403	カヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
12	SP25②-1	W99101404	スギ	ピット内の木	縄文時代晩期
13	SP25②-2	W99101405	イヌガヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
14	SP25③	W99101406	イヌガヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
15	SP25④-1	W99101407	カヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
16	SP25④-2	W99101408	サカキ	ピット内の木	縄文時代晩期
17	SP25⑤	W99101409	コナラ属(アカガシ亜属)	ピット内の木	縄文時代晩期
18	SP25⑥	W99101501	アオギリ	ピット内の木	縄文時代晩期
19	SP25⑦-1	W99101502	モクレン属	ピット内の木	縄文時代晩期
20	SP25⑦-2	W99101503	イヌガヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
21	SP25⑧	W99101504	ムクノキ属	ピット内の木	縄文時代晩期
22	SP25⑨	W99101505	イヌガヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
23	SP25⑩	W99101901	モクレン属	ピット内の木	縄文時代晩期
24	SP25⑪	W99101902	スギ	ピット内の木	縄文時代晩期
25	SP25⑫	W99101903	ニワトコ属?	ピット内の木	縄文時代晩期
26	SP25⑬-1	W99101904	ハンノキ属	ピット内の木	縄文時代晩期
27	SP25⑬-2	W99101905	サクラ属?	ピット内の木	縄文時代晩期
28	SP25⑬-3	W99101906	カヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
29	SP25⑭	W99101907	スギ	ピット内の木	縄文時代晩期
30	SP25⑮	W99101908	スギ	ピット内の木	縄文時代晩期
31	SP25⑯-1	W99101909	シイノキ属	ピット内の木	縄文時代晩期
32	SP25⑯-2	W99101910	ムクノキ属	ピット内の木	縄文時代晩期
33	SP25⑯-3	W99101911	エノキ属	ピット内の木	縄文時代晩期
34	SP25⑰	W99101912	ムクノキ属	ピット内の木	縄文時代晩期
35	SP25⑱	W99102202	スギ	ピット内の木	縄文時代晩期
36	SP25⑲	W99102203	モクレン属	ピット内の木	縄文時代晩期
37	SP25㉑	W99102204	スギ	ピット内の木	縄文時代晩期
38	SP25㉒	W99102205	ムクノキ属	ピット内の木	縄文時代晩期
39	SP25㉓-1	W99102206	スギ	ピット内の木	縄文時代晩期
40	SP25㉓-2	W99102207	カヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
41	SP25㉓-4	W99102208	モクレン属	ピット内の木	縄文時代晩期

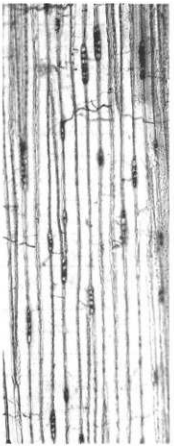
表1　樹種同定結果一覧表（1）

No.	試料番号	整理番号	樹種名	用途	時代
42	SP25㉔-1	W99102209	コナラ属(アカガシ亜属)	ピット内の木	縄文時代晩期
43	SP25㉔-2	W99102210	サカキ	ピット内の木	縄文時代晩期
44	SP25㉔-3	W99102211	カヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
45	SP25㉔-4	W99102911	モクレン属	ピット内の木	縄文時代晩期
46	SP25㉕-1	W99102912	カヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
47	SP25㉕-2	W99110401	サカキ	ピット内の木	縄文時代晩期
48	SP25㉖	W99110403	スギ	ピット内の木	縄文時代晩期
49	SP25㉗	W99110409	ムクノキ属	ピット内の木	縄文時代晩期
50	SP25㉘	W99110410	ヒノキ属	ピット内の木	縄文時代晩期
51	SP25㉙	W99110801	イヌマキ属	ピット内の木	縄文時代晩期
52	SP25㉚	W99110802	カヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
53	SP27①	W99101206	クマシデ属	ピット内の木	縄文時代晩期
54	SP27②	W99101207	シイノキ属	ピット内の木	縄文時代晩期
55	SP27⑤	W99101401	シイノキ属	ピット内の木	縄文時代晩期
56	SP27⑦	W99101402	シイノキ属	ピット内の木	縄文時代晩期
57	SP33①	W99100609	シイノキ属	ピット内の木	縄文時代晩期
58	SP33②	W99100610	コナラ属(アカガシ亜属)	ピット内の木	縄文時代晩期
59	SP33③	W99100611	コナラ属(アカガシ亜属)	ピット内の木	縄文時代晩期
60	SP33④	W99100612	クワ属?	ピット内の木	縄文時代晩期
61	SP37①No.7	W99100601	カヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
62	SP37②No.6	W99100602	カヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
63	SP37③No.8	W99100603	カヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
64	SP37④No.1	W99100604	カヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
65	SP37⑤No.5	W99100605	カヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
66	SP37⑥No.4	W99100606	カヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
67	SP37⑦No.3	W99100607	カヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
68	SP37⑧No.2	W99100608	カヤ属	ピット内の木	縄文時代晩期
69	SB06-P1	W99110402	カヤ属	柱根	7～8世紀
70	SB07①	W99110901	スギ	柱根	7～8世紀
71	SD06①	W99110803	モクレン属	溝内の木	7～11世紀
72	SD06②	W99110804	コナラ属コナラ亜属(クヌギ節)	溝内の木	7～11世紀
73	SD06③	W99110805	スギ	溝内の木	7～11世紀
74	SD06④	W99110806	サカキ	溝内の木	7～11世紀
75	SD06⑤	W99110807	スギ	溝内の木	7～11世紀
76	SD06⑥	W99110808	スギ	溝内の木	7～11世紀
77	SD06⑦	W99110809	スギ	溝内の木	7～11世紀
78	SD06⑧	W99110810	スギ	溝内の木	7～11世紀
79	SD06⑨	W99110811	スギ	溝内の木	7～11世紀
80	SD06⑩	W99110812	コナラ属コナラ亜属(クヌギ節)	溝内の木	7～11世紀

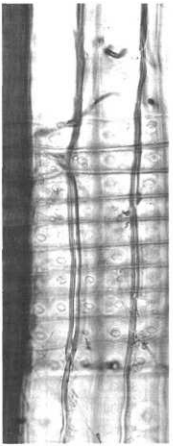
表2　樹種同定結果一覧表（2）



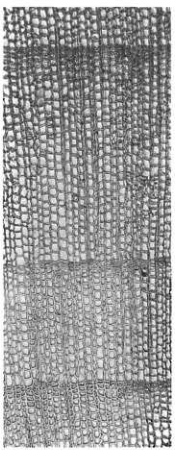
スギ：横断面（40倍）



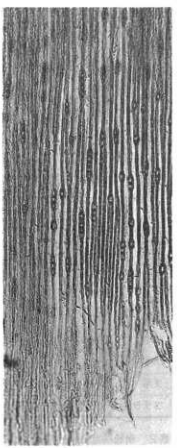
接線断面（100倍）



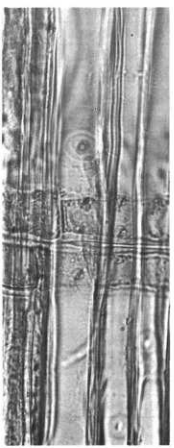
放射断面（380倍）



ヒノキ属：横断面（100倍）

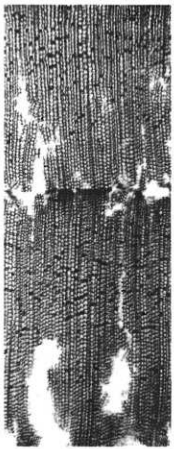


接線断面（100倍）



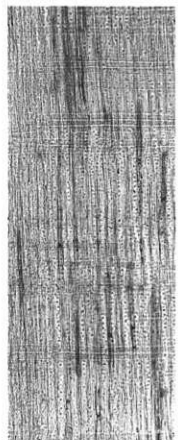
放射断面（560倍）

写真３　樹木顕微鏡写真１

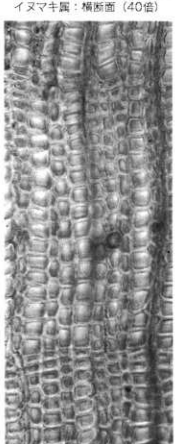


イヌマキ属：横断面（40倍）

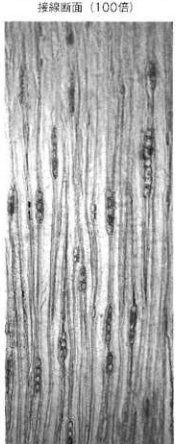
接線断面（100倍）



放射断面（100倍）



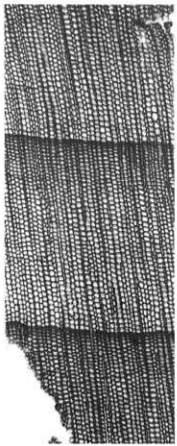
カヤ属：横断面（190倍）



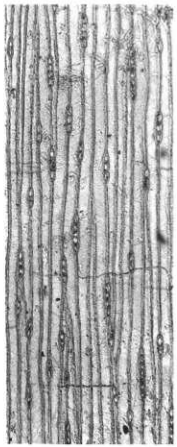
接線断面（100倍）

放射断面（560倍）

写真4　樹木顕微鏡写真2



カヤ属：横断面（40倍）

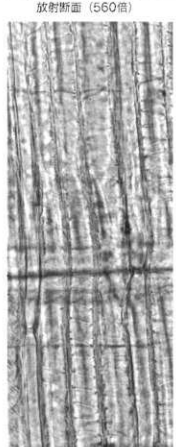


接線断面（100倍）

放射断面（560倍）

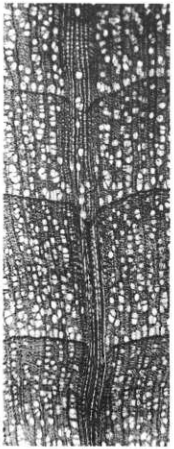
イヌガヤ属：横断面(40倍)

接線断面（40倍）



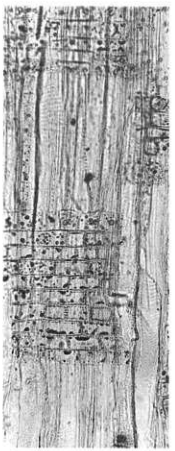
放射断面（380倍）

写真５　樹木腐微識写真３

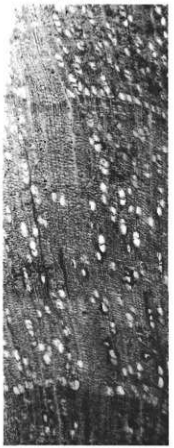


ハンノキ属：横断面(40倍)

接線断面（100倍）

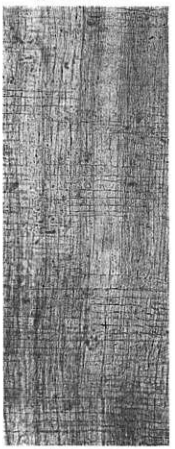


放射断面（190倍）



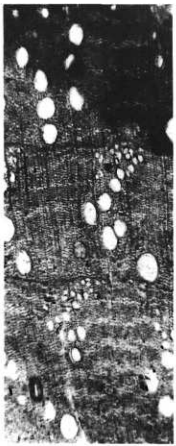
クマシデ属：横断面(40倍)

接線断面（40倍）



放射断面（100倍）

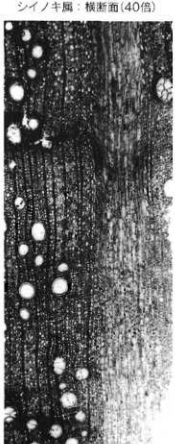
写真6　樹木顕微鏡写真4



シイノキ属：横断面(40倍)

接線断面（40倍）

放射断面（190倍）

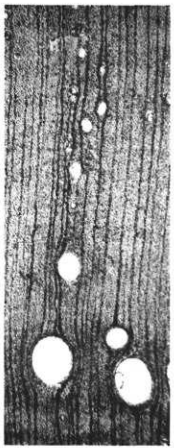


アカガシ亜属：横断面(40倍)

接線断面（40倍）

放射断面（380倍）

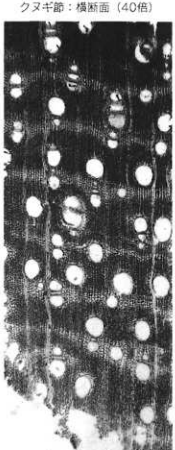
写真7　樹木顕微鏡写真5



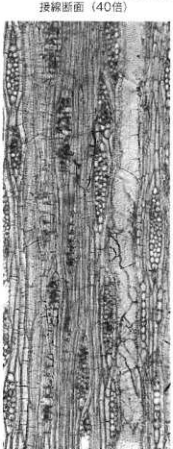
クヌギ節：横断面（40倍）

接線断面（40倍）

放射断面（190倍）



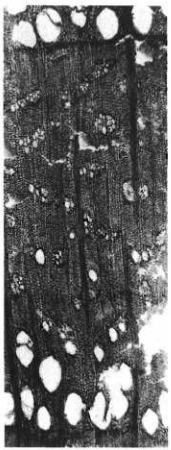
ムクノキ属：横断面（40倍）



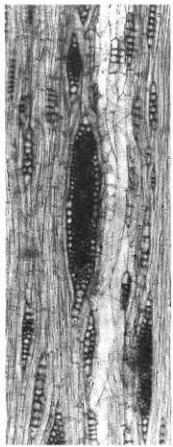
接線断面（100倍）

放射断面（190倍）

写真8　樹木顕微鏡写真6

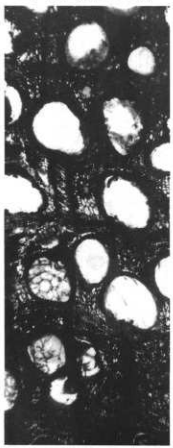


エノキ属：横断面（40倍）



接線断面（100倍）

放射断面（190倍）

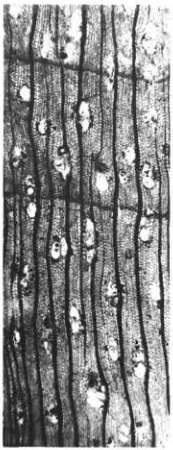


クワ属？：横断面（40倍）

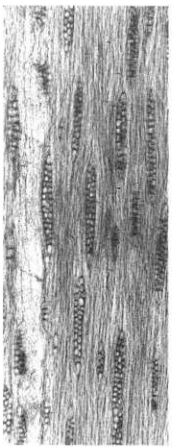
接線断面（100倍）

放射断面（190倍）

写真9　樹木顕微鏡写真7

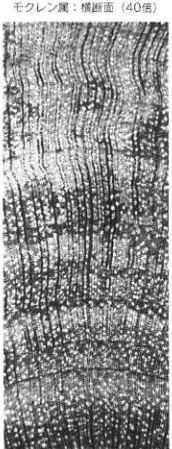


モクレン属：横断面（40倍）



接線断面（100倍）

放射断面（190倍）

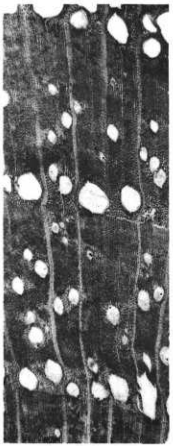


サカキ：横断面（40倍）

接線断面（40倍）

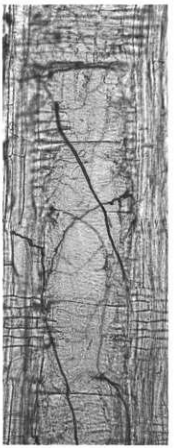
放射断面（190倍）

写真10　樹木顕微鏡写真８

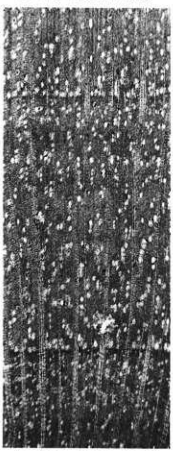


アオギリ：横断面（40倍）

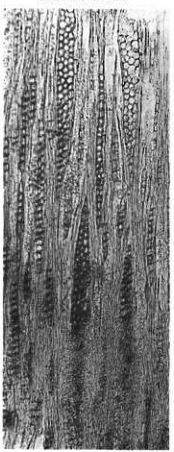
接線断面（40倍）



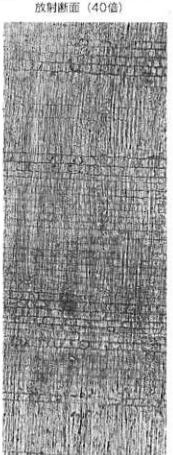
放射断面（40倍）



サクラ属？：横断面（40倍）

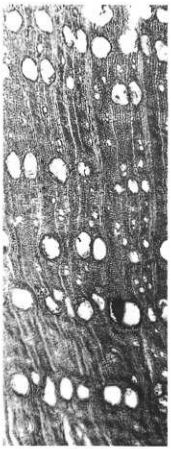


接線断面（100倍）

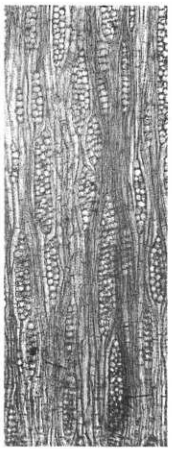


放射断面（100倍）

写真11　樹木顕微鏡写真9

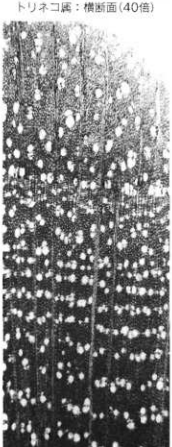


トリネコ属：横断面(40倍)



接線断面（100倍）

放射断面（190倍）



ニワトコ属？：横断面(40倍)

接線断面（100倍）

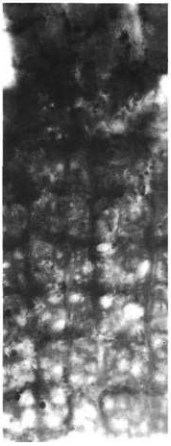
放射断面（190倍）

写真12　樹木顕微鏡写真10

不明散孔材1：横断面(40倍)

接線断面（100倍）

放射断面（380倍）



不明散孔材2：横断面（100倍）

接線断面（100倍）

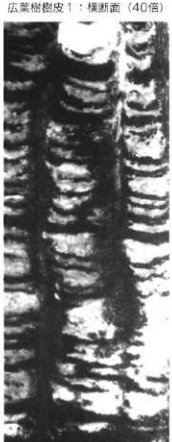
放射断面（100倍）

写真13　樹木膜微鏡写真11

広葉樹樹皮1：横断面（40倍）

接線断面（100倍）

放射断面（100倍）



広葉樹樹皮2：横断面（40倍）

接線断面（40倍）

放射断面（40倍）

写真14　樹木顕微鏡写真12

第2節　三田谷Ⅰ遺跡貯蔵穴内の堅果類他同定

杉村喜則（島根大学）・渡辺正巳（文化財調査コンサルタント㈱）

はじめに

三田谷遺跡は島根県中部、出雲市塩冶町地内に立地する遺跡である。本報は、発掘に伴い検出された縄文時代晩期のドングリピット内より出土した「ドングリ」類他の同定結果の報告である。

同定方法

洗浄され出土ピット毎に分け、ビニール袋に入れられた状態で試料の提供を受けた。同定にあたり実体顕微鏡下あるいは肉眼で観察を行い、８種類（９部位）の記載・同定を行った。また不能としたものは、「ドングリ」ではあるが、分類のための特徴を示す場所が壊れているもの、あるいは形を留めないほど壊れているものであり、おおよその個体数で表している。同定した試料は全て50％エチルアルコールに浸し、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターにて保管されている。

同定結果・記載

各ドングリピット毎に分類毎の個体数を表１に示す。また、以下に各分類毎の特徴を示す。

(1) マツ属（複維管束亜属）　*Pinus* (sub. *Diploxlon*) sp.

球果が検出された。

側面観は卵形。長径35㎜、短径17㎜。種鱗先端の肥厚は扁平五角形で、中央に「へそ」がある。

(2) オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr

核が検出された。

側面観は広卵形。長径35㎜程度、短径30㎜程度。一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。

(3) アカガシ *Quercus acuta* Thunb.

堅果、殻斗が検出された。

堅果の側面観は楕円形。長径20㎜程度、短径13㎜程度。堅果上部の輪紋の外輪は窪み状。殻斗の輪は8～9で、中心部の輪の縁は浅く裂ける。また、細毛が密に生える。

(4) イチイガシ *Quercus gilva* Blume

堅果（幼果含む）が検出された。

側面観は楕円形。長径15㎜程度、短径11㎜程度。堅果上部の輪紋のある部分が著しく立ち上がり花柱に連続する。柱頭は小型で短く外を向く。また、殻斗の輪は2～3。

(5) フジ属 *Wisteria* sp.

莢果が検出された。

全体が大きく３ブロックに分かれ、基部近くが無い。全長は11㎝以上。平たく、側面観は倒披針形。

(6) トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume

種子が検出された。

側面観は円～楕円形。径25㎜程度。表面は光沢のある部分とやや粗くざらつく部分に分かれる。

(7) ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn

種子が検出された。

側面観は円形。直径15㎜程度。陥没しているが、一文字状の「へそ」が一つある。

(8) エゴノキ属 *Styrax* sp.

核が検出された。

側面観は楕円形。上面観は円形。長さ15㎜程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に数本の浅い縦溝がある。

	マツ属	オニグルミ	アカガシ			イチイガシ	フジ属	トチノキ		ムクロジ	エゴノキ属	不能	不明
	球果	核	堅果	殻斗	片	堅果	莢果	種子	片	種子	核		
SP20			109			51						130	
SP21	1		1415		1	17		49	74			520	
SP22			91			8		12	1			210	
SP23			260			1		24	4			420	
SP24		2	1553	5		638		9	1	2	1	270	1
SP25								48	6				1
SP26			20		1							40	
SP27			84		1	5		2				110	
SP28			26			1						100	
SP29			11		2	1							
SP33			29			24	1					110	
SP34			62					101	3			80	
SP35			94		1			7	1			50	
SP36													1
SP37								8					
SP38	1		228						6			100	
SP39			98			4						240	
SP40			331									790	
SP41			95			2			3			720	

(不能の数はおよその個体数)

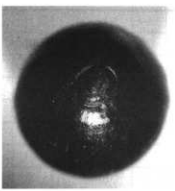
表3　堅果類他同定結果一覧表

マツ属(複維管束亜属)(球果):×1.5

オニグルミ(核):×1.5

アカガシ(堅果):×2.7

アカガシ(堅果):×1.5



アカガシ(堅果):×2.7

アカガシ(殻斗):×2.7

イチイガシ(堅果):×1.5

イチイガシ(幼果):×2.7

アカガシ(殻斗):×2.7

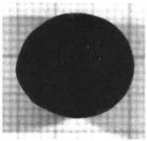
イチイガシ(幼果):×2.7

エゴノキ属(核):×3.0

エゴノキ属(核):×3.9

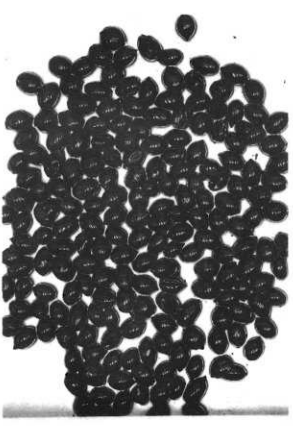
写真15　堅果類写真1

トチノキ(種子)：×1.5

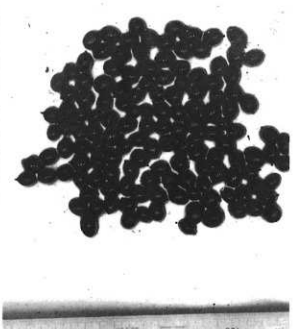


ムクロジ(種子)：×2.2

フジ属(莢果)：×0.8



アカガシ状況(SP24 971212)：×0.4



イチイガシ状況(SP24 971212)：×0.4

写真16 堅果類写真2

第３節　三田谷Ⅰ遺跡の地下層序と地形発達史

中村唯史（株式会社日新技術コンサルタント）
渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

三田谷Ⅰ遺跡の発掘調査に伴って，ボーリングによる地下堆積層の調査と花粉分析，^{14}C年代測定を行い，地下層序と地形発達史を検討した。

三田谷Ⅰ遺跡の地下には2層の火山灰質堆積層が分布し，これは三瓶火山の噴出物に由来する洪水堆積物で，それぞれの堆積時期が三瓶火山の活動期に対応することが明らかになった。この砂層は三田谷の出口を塞ぐ形で堆積し，谷奥側に小規模なせき止め湖を形成した。1997年度の三田谷Ⅰ遺跡の発掘調査ではこのせき止め湖の堆積層から縄文時代後期の丸木舟が出土している。上位の火山灰質堆積層が形成した地形面上は安定した沖積段丘となり，弥生時代以降の遺跡が形成された。

三田谷Ⅰ遺跡は神戸川が出雲平野へ流れ出る地点にあり，今回明らかになった本遺跡の層序は，弥生時代の集落遺跡が多数存在する神戸川下流域（出雲平野西部）の地形発達を検討するうえでの重要な資料といえる。

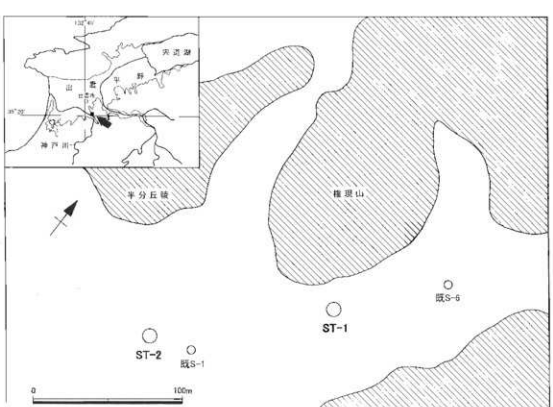


図106　調査地域とボーリング地点

ST-1，ST-2が本調査で実施したボーリング。既S-1，既S-6は既存資料による。

地形・地質概要

三田谷Ⅰ遺跡は中国山地から流下する神戸川が出雲平野へ流れ出る地点の右岸の枝谷（三田谷）にある。三田谷の谷底面と神戸川の氾濫原面は比高差2～3mの小崖で接しており，三田谷の谷底面は神戸川の氾濫原に対して沖積段丘になっている（第106，107図）。

三田谷集水域の丘陵地帯には新第三系中新統の砂岩～凝灰質砂岩，凝灰岩が分布している。砂岩層には安山岩礫からなる礫層が挟まれることがある。

神戸川の流域には白亜系～古第三系の花崗岩類と新第三系の火山岩類，堆積岩類が分布している。上流部には三瓶山がある。三瓶山は後期更新世から完新世に噴火活動を行った火山で，縄文時代には2回の活動期（第Ⅴ期：4300～4800年前と第Ⅵ期：3600年前頃）が知られている（松井・井上，1971）。

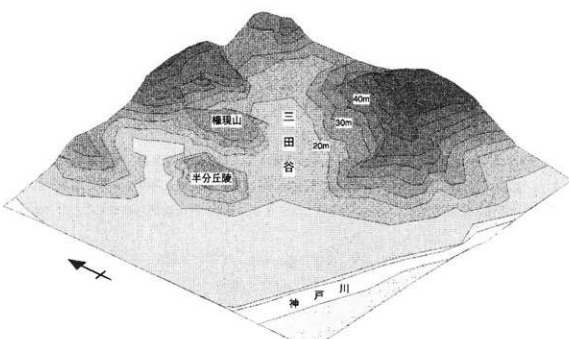


図107　調査地域の地形

調査地域を南西方向から見た状況を模式的に示している。

調査方法

本調査では三田谷Ⅰ遺跡において図106に示した2地点でボーリング（ST-1，ST-2）を行い，層序・層相の観察と^{14}C年代測定および花粉分析を行った。ボーリングはサンドサンプラーを用いて不撹乱試料を採取した。

^{14}C年代測定はボーリングコアから採取した試料を米国ベータ社に依頼して，加速器質量分析計（AMS）により測定分析を行った。

三田谷Ⅰ遺跡の地下層序

ボーリング結果および既存のボーリング資料に基づいて，本調査地の地下地質を5層に大別した（図108）。これを上位から順にA～E層として，各層の特徴を以下に述べる。

A層：シルト分を主体とする地層で，東（谷奥）側へ向かって層厚を増す。三田谷Ⅰ遺跡1997年度調査区トレンチでの観察では，本層は未分解の植物片を多量に含んでいる。最上部は最近までの水田耕作によって撹乱を受けた土壌である。

B層：火山灰質砂層と火山灰質シルト層の互層で，西（谷出口）側へ向かって層厚を増す。

火山灰質砂層は，石英安山岩（デイサイト）の岩片とこれに由来する鉱物（斜長石，黒雲母，角閃石，石英）からなる粗粒砂を主体とする。同質の軽石が点在し，軽石の密集部も認められる。軽石はよく円摩されている。

火山灰質シルト層は乳白～灰色を呈し，平行葉理が発達する。吸着性が高く，ある程度脱水した状態ではよく締まる特徴を持つ。

1997年度調査区トレンチではB層の上部を直接観察することが出来た（写真17）。B層の層理面は東落ちの傾斜を持ち，砂層中の葉理も東落ち成分が優先する。また，B層に埋積された立木が多数発見されている。立木は谷奥方向に谷奥方向へ傾いており，谷出口側からもたらされた土砂が急速に堆積してB層を形成したことを示している。

本層に含まれる石英安山岩は，神戸川の上流に位置する三瓶火山の第Ⅴ期，第Ⅵ期の噴出物（松井・井上，1971）と同質であることから，本層は神戸川の洪水堆積層と判断できる。なお，三田谷の集水域に中新統の流紋岩質軽石凝灰岩が分布しているが，B層の構成岩種とは異なるものである。

C層：シルト分を主体とする地層で，東（谷奥）側へ向かって層厚を増す。未分解の植物片をよく含んでいる。ST-1の深さ6.8m付近とST-2の深さ5.5m付近は撹乱を受けた旧土壌である。

D層：火山灰質砂層と火山灰質シルト層の互層で，西（谷出口）側へ向かって層厚を増す。

火山灰質砂層は，石英安山岩（デイサイト）の岩片とこれに由来する鉱物（斜長石，黒雲母，角閃石，石英）からなる粗粒砂を主体とする。同質の軽石が点在し，軽石の密集部も認められる。軽石はよく円摩されている。

火山灰質シルト層は乳白～灰色を呈し，平行葉理が発達する。吸着性が高く，ある程度脱水した状態ではよく締まる特徴を持つ。

本層に含まれる石英安山岩は，三瓶火山の第Ⅴ期，第Ⅵ期の噴出物（松井・井上，1971）と同質であることから，本層は神戸川の洪水堆積層と判断できる。なお，B層とD層の構成物質は同質である。

E層：砂礫層および礫まじりシルト層からなる。礫種は三田谷の集水域に分布する砂岩，凝灰岩，安山岩で，B層，D層を構成する三瓶火山起源の石英安山岩は含まれない。

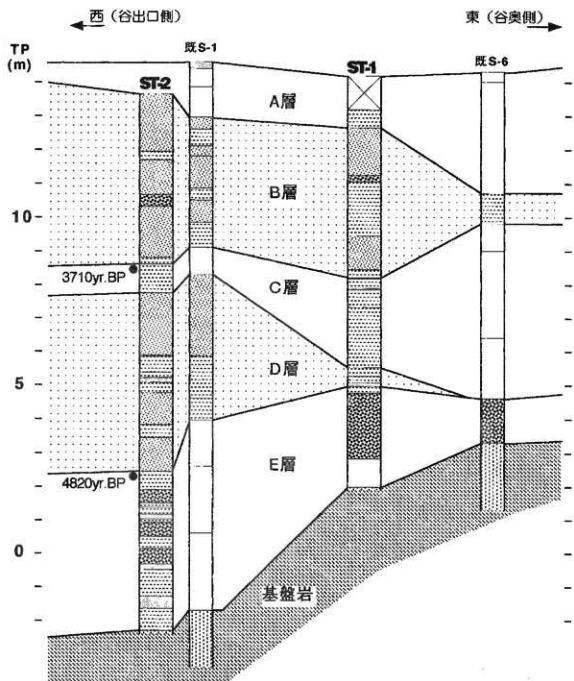


図108　地下地質断面図

ボーリング位置は図106参照。

柱状図の左に付した黒丸と数字は^{14}C年代測定試料採取層準と測定値。

^{14}C年代

ST-2から採取した2試料について^{14}C年代測定を行った。火山灰質の砕屑物からなるB層とD層の堆積時期を推定する目的で，C層最上部とE層最上部の試料を測定した。試料はいずれも旧土壌に含まれる木片である。測定値を表4に示す。

深度(GL-m)	^{14}C年代(yr.BP)	暦年補正値	測定番号
5.50	3700±40	BC2190～1955	Beta－126145
11.25	4820±40	BC3675～3520	Beta－126146

表4　^{14}C年代測定結果

^{14}C年代値は$\delta^{13}C$補正値。

花粉分析

ST-1，ST-2から採取した32試料について花粉分析を行った。分析処理は渡辺（1995）に従って行った。分析の結果を花粉ダイアグラム（図109）に示す。

花粉組成の特徴をもとに花粉分帯を行い，Ⅰ帯～Ⅳ帯を設定した。ST-2ではⅠ帯とⅡ帯に相当する層準が欠如している。

以下に各花粉帯の特徴を記載する。

Ⅳ帯：特に高率になる種類はないが，マツ属（複維管束亜属），スギ属，アカガシ亜属，コナラ亜属，ムクノキ属－エノキ属，ニレ属－ケヤキ属がその他の種類に比べて高い出現率を示す。

ST-1では相当する層準の層厚が薄いため細分が出来なかったが，ST-2では，モミ属，ブナ属が数～10%の出現率を示すc亜帯，マツ属（複維管束亜属）が比較的高率になるb亜帯，マツ属（複維管束亜属）が比較的低率を示すa亜帯に細分できた。

Ⅲ帯：アカガシ亜属が卓越する。上部ではマツ属（複維管束亜属）が高率を示すことからa亜帯とし，その他の試料をb亜帯とした。

Ⅱ帯：マツ属（複維管束亜属）が卓越し，スギ属を伴う。

Ⅰ帯：マツ属（複維管束亜属）が卓越するほか，特徴的に出現する種類はない。

樹種鑑定

C層上部に源があるB層により埋積されていると推定される，三田谷Ⅰ遺跡の埋没林の樹種鑑定を行った。鑑定結果を表5に示す。鑑定にあたり島根大学総合理工学部古野毅教授には終始御指導、御助言を頂いた。

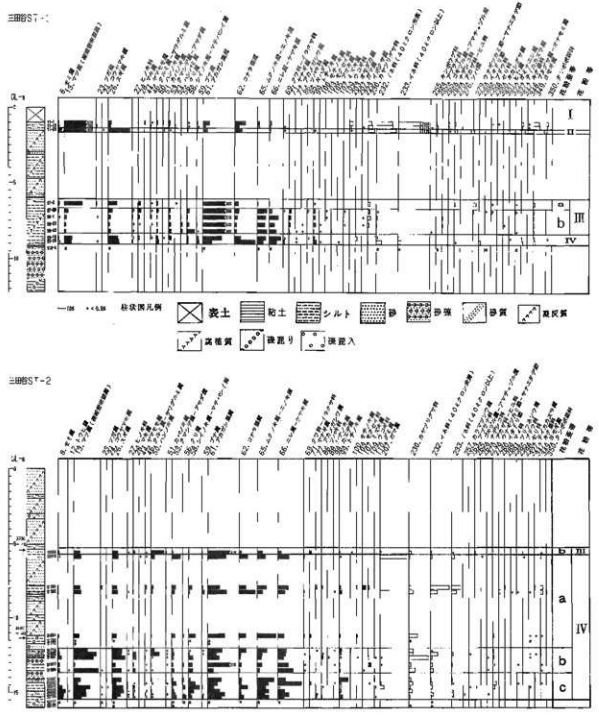


図109　花粉ダイアグラム

ST-1（上）とST-2（下）の花粉組成を示した。

考　察

各層の堆積環境

各層の堆積環境を，堆積順に従って下位から順に述べる。

E層：三田谷付近の基盤岩に由来する岩片を含み，層相変化が大きいことから，三田谷を流れる小河川の堆積物と考えられる。

本層は花粉分帯ではⅣ帯（c～a亜帯）に対応する。花粉分析では，ムクノキ属－エノキ属，ニレ属－ケヤキ属などの河畔林（自然堤防林）要素の花粉が卓越し，ヤナギ属などの川辺林要素やハンノキ属などの湿地林要素の花粉も低率であるが認められる。また，二次林要素のマツ属（複維管束亜属），コナラ亜属の花粉も比較的高率になる。一方で，極相林を構成するアカガシ亜属やシイノキ属の花粉はさほど高率にならない。さらに，草本花粉の検出種類も多く，検出量も少なくない。このような状況から三田谷には，頻繁な河川氾濫により極相林が育ちにくい荒れ地（比較的湿潤な土地）が広がっていたと考えられる。

花粉層序学の立場で大西ほか（1990）による宍道湖周辺地域の花粉帯と対比すると，本層は縄文時代早期末以降に堆積を始めたと考えられる。また，最上部で4820yr.BPの^{14}C年代が得られているので，本層の堆積時期は縄文時代早期末から縄文時代中期初頭までの間のどこかと考えられる。

D層：三瓶火山噴出物と同質の石英安山岩を主体とすることから，神戸川の洪水堆積物と考えられる。火山灰質砂層と火山灰質シルト層が互層していることから数回の洪水で堆積したと考えられる。

本層の中程に花粉化石が多く含まれる層準があることから，一時的に堆積が休止期し，沼沢湿地が形成されたことがわかるが，全体としてかなり急速に堆積したと考えられる。

本層直下のE層最上部で得られた4820yr.BPの^{14}C年代値は，D層の堆積直前を示すと考えられる。この値から，本層の堆積時期は三瓶火山の第Ⅴ期活動期（松井，1998）と一致する可能性が高く，第Ⅴ期の噴出物が引き金となって大きな洪水が発生して本層が堆積したと考えられる。

C層：木分解の植物片に富んだ泥質堆積物を主体とする地層で，湖沼または沼沢湿地の堆積物と考えられる。下位のD層が谷の出口側で厚く堆積していることから，D層の堆積によって谷奥が閉塞され，湖沼が形成されたと考えられる。

本層は花粉帯で亜帯に対応する。ST-1では，下位のⅣ帯に比べ検出された草本花粉の種類も数も減り，水生植物のヒシ属の花粉も僅かながら検出される。このことは，先に述べた三田谷の谷奥が湖沼に成ったとの仮説を裏付ける。この湖沼内の岸に近い場所ではヒシ類が成育し，岸辺にはイボクサ類，カヤツリグサ類やアシなどが成育していたと考えられる。

C層の上部は土壌化しているので，堆積の進行によって水域は消滅したと考えられる。三田谷Ⅰ遺跡では，B層中に埋没した状態で埋没立木が多数確認されている。発掘調査でも埋没立木の根本は確認されていないが，これらはC層上部の土壌形成期に生育し，B層の急速な堆積によって埋没したものと推定される。

樹種鑑定結果と花粉組成は，アカガシ亜属花粉，ムクノキ属－エノキ属が卓越する点で良く一致する。一方でスギ属，ニレ属－ケヤキ属は，花粉化石の出現率が比較的高いにもかかわらず立木では出現していない。またモミは，立木で出現しているが花粉化石ではほとんど出現していない。樹種鑑定を行った立木の分布およびC層最上部の詳細な古地形など不明な点が多いものの，花粉組成での卓越種の多くが樹種鑑定結果でも卓越すること，出現した花粉化石種類の多くは自然堤防上お

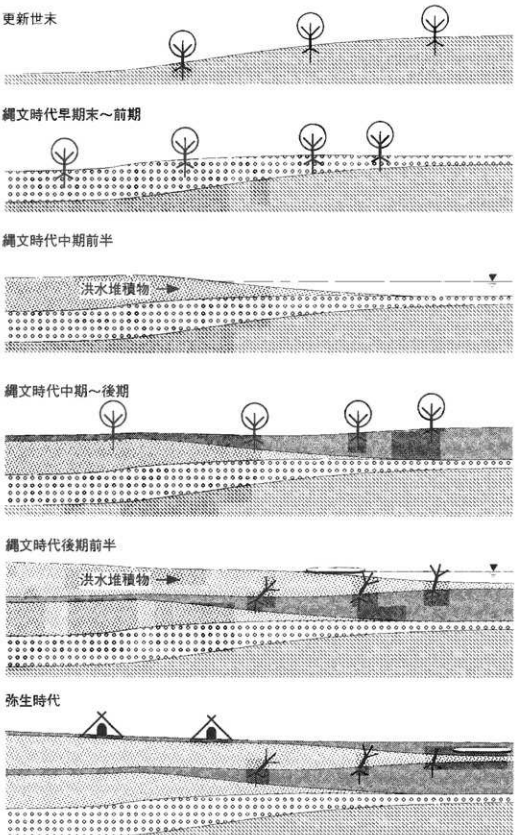


図110　地層発達模式図
各層の堆積環境は本文参照。

よび後背湿地などでの成育可能な種類であることから，自然堤防上および後背湿地などの比較的狭い範囲の植生を示していると考えられる。

したがって，三田谷の底部は開放的な草地や湿地ではなく自然堤防林や湿地林で覆われており，C層上部の土壌化を受けた部分の多くは，「森林土壌」であると考えられる。

またC層上部で3710yr.BPの^{14}C年代値が得られており，下位のD層は4820yr.BP以降に急速に堆積したと考えられるので，C層の堆積時期は縄文時代中期から縄文後期前半までの間と考えられる。B層：三瓶火山噴出物と同質の石英安山岩を主体とすることから，神戸川の洪水堆積物と考えられる。火山灰質砂層と火山灰質シルト層が互層していることから数回の洪水で堆積したと考えられる。

本層直下のC層最上部で得られた3710yr.BPの^{14}C年代値は，B層の堆積直前を示すと考えられる。この値から，本層の堆積時期は三瓶火山の第Ⅵ期活動期（松井，1998）と一致する可能性が高く，第Ⅵ期の噴出物が引き金となって大きな洪水が発生して本層が堆積したと考えられる。

A層：ボーリング地点では本層は土壌化が進んだシルト層である。それより谷奥側へ向かって層厚が厚くなり，未分解の植物片に富む泥質堆積物が分布しており，谷奥は湖沼または沼沢湿地の環境だったと考えられる。下位のB層の堆積によって谷奥が閉塞され，湖沼が形成されたと考えられる。三田谷Ⅰ遺跡で出土した丸木舟はA層中に包含されていたことから，この湖沼で使われていた可能性がある。

花粉分帯では本層はⅡ～Ⅰ帯になる。イネ科花粉が高率で含まれることから，ボーリング地点付近には水田が広がっていたと考えられる。

以上の地層の形成過程を図110に模式的に示す。

地形発達史

(1)2万～1万年前（後期旧石器時代）

この時代は最終氷期の後期である。氷期には気候の寒冷化に伴って海面低下が生じた。海面低下によって河川の浸食営力は大きくなり，三田谷には現地表下15m以深に達する深い谷が形成された。

(2)1万～5千年前（縄文時代早期～前期）

最終氷期は1万年前に終わり，気候は急速に温暖化した。気候の温暖化に伴って海面が上昇した。海面上昇に伴って河川の浸食営力は低下し，三田谷の谷底にE層が堆積した。

(3)5千～4千年前（縄文時代中期）

この時代に三瓶火山第Ⅴ期の活動があった。三瓶火山の噴出物が神戸川の洪水を引き起こし，三田谷の出口を塞ぐ形で洪水堆積層（D層）が堆積した。D層の堆積によって谷奥に湖沼が形成されそこにC層が堆積した。

(4)4千～3千年前（縄文時代後期）

湖沼は埋積され，谷底は林に覆われていた。3600年前頃に三瓶火山第Ⅵ期の活動があり，第Ⅴ期と同様に三田谷の出口を塞ぐ形で洪水堆積層（B層）が堆積した。谷底林はB層によって急速に

堆積されたため，立った状態のままで保存された。B層の堆積によって谷奥に湖沼が形成され，そこにA層が堆積した。

B層の堆積でせき止められたため，谷奥からの流水は本来の谷出口側へ流出できなくなり，権現山の山裾に河道を形成して，半分丘陵との間を経て流出するようになった。

(5)3千年前以降

三瓶火山第Ⅵ期の活動期以降は，B層が形成した微高地は沖積段丘化して安定した。神戸川は三瓶火山の活動期には大規模な洪水を引き起こしたが，その後はそれ以上の規模の洪水はなかったとみられる。

三田谷の層序と出雲平野

三田谷は神戸川が出雲平野へ流れ出る地点にあたり，ここで確認された2層の火山灰質堆積層は出雲平野西部（神戸川下流域）の鍵層となる。

2層の火山灰質堆積層は，三瓶火山の第Ⅴ期，第Ⅵ期の活動期にその噴出物に起因する大洪水があったことを示している。この大洪水は多量の砕屑物をもたらして，出雲平野西部の地形発達に大きく関与したと考えられる。

出雲平野西部には古志遺跡群，四絡遺跡群に代表される弥生時代の集落遺跡が存在する。これらの多くは火山灰質堆積層からなる地盤上に立地している。集落遺跡が立地する地形面の形成時期を示す資料は今のところ得られてはいないものの，三田谷の層序に当てはめると，三瓶火山の第Ⅵ期活動期に地形面が形成され，弥生時代にその上に集落が形成されたという推定が可能である。

文　献

松井整司・井上多津男，1971：三瓶火山の噴出物と層序．地球科学，25，147-163．

松井整司，1998：三瓶火山の噴出物とその年代．建設省中国地方建設局・島根県教育委員会編「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5－板屋Ⅲ遺跡－」，127-136．

中村唯史，1999：島根県の完新世火山灰層－とくに三瓶火山起源の火山灰層について－．島根県地学会誌，14，7-11．

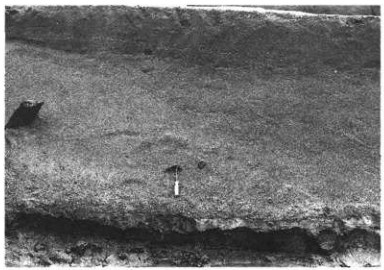
大西郁夫・干場英樹・中谷紀子，1990：宍道湖湖底下完新統の花粉群．島根大学地質学研究報告，9，117-127．

渡辺正巳，1995：花粉分析方法．考古試料分析法，84-85．ニューサイエンス社．

試料No.	整理番号	樹種名	備考
S－1	W98121401	クマシデ属？	湖沼内自然木
S－2	W98121402	サクラ属	埋没林
S－3	W98121403	ムクロジ	〃
S－4	W98121404	コナラ属（アカガシ亜属）	〃
S－5	W98121405	クワ属	〃
S－6	W98121501	ムクノキ属	〃
S－7	W98121502	モミ属	湖沼内自然木
S－8	W98121503	モミ属	埋没林
S－9	W98121504	シイノキ属	湖沼内自然木
S－10	W98121505	ムクノキ属	埋没林
S－11	W98121506	ヤナギ属	〃
S－12	W98121507	ヤナギ属	〃
S－13	W98121508	クワ属	〃
S－14	W98121509	コナラ属（アカガシ亜属）	〃
S－15	W98121601	クワ属	〃
S－16	W98121602	ヤナギ属	〃
S－17	W98121603	ヤナギ属	〃
S－18	W98121604	ヤナギ属	〃
S－19	W98121605	エノキ属	湖沼内自然木
S－20	W98121606	エノキ属	埋没林
S－21	W98121607	コナラ属（アカガシ亜属）	湖沼内自然木
S－22	W98122403	コナラ属（アカガシ亜属）	埋没林
S－23	W98122404	イイギリ属？	〃
S－24	W98122405	コナラ属（アカガシ亜属）	〃
S－25	W98122406	エノキ属	湖沼内自然木
S－26	W98122407	コナラ属（アカガシ亜属）	〃
S－27	W98122408	コナラ属（アカガシ亜属）	〃
S－28	W98122409	コナラ属（アカガシ亜属）	〃
S－29	W99040201	サカキ	〃
S－30	W99040202	コナラ属（アカガシ亜属）	〃
S－31	W99040203	サクラ属	〃

表5　樹種同定結果一覧表

（各試料の出土地点は図101を参照）



1　火山灰質の洪水堆積層
左に斜めに立っている埋没立木がみえる。ねじり鎌の長さは約25cm。

2　洪水堆積層に含まれる軽石礫
軽石礫は良く円磨されている

3　洪水堆積層に発達
する大型の斜交層理

写真17　土層堆積状況

第4章　まとめ

第1節　遺　物

1．木簡の釈文について

SD06出土1号木簡（図70－1）

釈文

・　右依大調進上件人」

・感寶元年潤五月廿一日[通上か]□□」　　(284)×(33)×10　　015

釈文は、年号のある面を裏面とすると、表面に空白を開けて「右依…」との文章が続く。加えてこの文章の内容は裏面に続いておらず、このことから、本木簡は現存長よりかなり大きかったことが推測できる。なお、文字は木簡の中央に書かれていたと考えられるので、「右依…」が特に右寄りに記載されたわけではない。文字の割付が裏面の下に行くほど詰まっていることも、文字を一行で無理に納めた木簡であることを窺わせる。記載内容としては、「大調」の進上に際し、「件人」に指示を下す、あるいは指示した報告などの文書、指示の記録などが考えられる。裏面の記載は、年号と署名からなる。

表面の「大調」は、木簡としては初出の表現である。[1]「贄」に対しての「大贄」のような美称表現であろうか。木簡の「調」「御調」の記載については、東野治之氏が、必ずしも賦役令文の調と同じではなく広く貢納物を指す場合があることを指摘し、氏の述べる通りであるが（東野1983）、この点について木簡の記載月から若干考察してみたい。

調の貢納期限などに関する賦役令調庸物条では、調の貢進時期は「毎年八月中旬起輸」し、中国の出雲国は11月30日以前に「納訖」（京進）となっている（賦役令調庸物条）。そして『令集解』朱説では「八月中旬起輸」は、「所部内」で出すことと理解されており、これに従えば、国内での調の徴収作業は8月以降に行われることとなる。しかし、実際には、藤原宮・平城宮出土の調の木簡には、明らかに令規定の8月以前に貢納作業が行われたと考えられる[2]、4～6月の日付を持つ木簡が、少量ではあるが海藻・熬海鼠・塩などに付けられた荷札に存在することが知られている[3]。また、山陰道では中男作物ではあるが、因幡国で4～7月にかけての日付を持つ木簡が5点知られており、そのいずれもが海藻(若布)である[4]。また、税目不明の海藻の荷札では、因幡国・石見国・長門国で3～6月の日付を持つものが存在する[5]。このように、特に山陰道諸国では海藻については賦役令の規定とは異なり4～6月ごろに貢進作業が行われたことが窺える。なお、「出雲国計会帳」では贄として7月2日に「茂濱藻　御贄貳荷」が駅家に付けて進上されている[6]。

ここで出雲国の貢納物を見ると、『延喜式』上計上では出雲国の調は繊維製品の他に鳥賊・鰒が存在し、中男作物として紙・油類の他に薄鰒・雑腊・紫菜・海藻がみえる。しかし、二条大路木簡には天平9年の中男作物としての鳥賊の荷札木簡が存在しており[7]、8世紀段階では、調・中男作物・贄が延喜式制のように整然と分離していない可能性がある（樋口1991）。以上の推定が許され

るなら、あくまでも憶測ではあるが、海藻の貢納作業に伴って本木簡が作成された可能性が先ずあげられる[9]。

次に、「調糸」について考えたい。賦役令調庸物条調の中でも「調糸」については「七月卅日以前輸訖」とされ、跡記以外の『集解』諸説は、この期限を大蔵省への納入、京進の期限としている。これは養蚕の時期による規定と理解されるが、この調糸に関わっても8月以前に貢納に関わる作業が行われたことみられる。糸については、『延喜式』主計上では調糸の中糸を出す国として出雲国が見られるが、夏調と呼ばれる7月30日以前の貢納規定を持つ6カ国（伊賀・伊勢・三河・越前・安芸・阿波）には含まれていない。しかし、天平6（734）年の「出雲国計会帳」解部弁官解文には、8月9日の「夏調過期限遅進事」が見え、天平期には出雲国に「夏調」（調糸）が科せられていたことは明らかで、なおかつ、この調の7月30以前に京進されなければならなかったことが確認できる[9]。この調糸の貢納作業は、京進の期限からして、5・6月に行われた可能性がある。

第3には、調の外国での直接調達・消費の場合である。山口県長登銅跡の調査では、多くの庸米荷札木簡とともに、次にあげる調塩の荷札木簡が出土している（美東町教育委員会1993）[10]。

・∨周防国大嶋郡屋代郷｜□里□□調塩

・∨二斗　　天平四年四月　　(222)×20×7　039

長登銅山跡の調・庸荷札木簡については、八木充氏が庸米荷札に国・郡記載を省く、前掲調荷札については個人名を記さないなど書式の特異性があることを指摘し、8世紀段階から調庸が直接銅山に料物として送られたことを述べている（八木1993）。さらにここで、月の記載に注目すると、前掲の木簡が4月であるのに対し、平城京出土の大嶋郡の調塩の木簡では全て9月となっている[11]。古代における塩生産の季節性については、河本清・水内昌康が春から秋にかけてで、8月が最盛期であろうとしており（河本清・水内昌康1999）、前掲木簡の4月は、海藻・調糸のような初物貢進にあたるかどうかは明らかでない。いずれにせよ、先の八木氏の調・庸米の書式の指摘と合わせると、外国で直接調を調達する場合、通常の調の収取とはことなる形態がとられ、8月以降起輸の原則が当てはまらないことが推察される[12]。ただし、出雲国では、調の国内での調達・消費については原則としてはみられず、直接想定することは難しい[13]。

以上述べてきたように、木簡の「大調」については、一般名詞としての貢納物を指すだけでなく、令規定の調とみることも可能である。

裏面の「感宝元年」は、木簡としては初出のものである。天平感宝元（749）年は第2章第2節で述べたように、天平21年4月14日に改元されたもので、感宝元年7月2日に天平勝宝元年に改元される（『続日本紀』天平21年4月丁未条。同天平感宝元年7月甲午条）。

天平期の詔勅の伝達速度については、「出雲国計会帳」が参考になる。同帳移部の伯耆国送到の天平6年7月の「十九日移　勅符壹道　太政官符貳道」は、同年7月12日の詔と考えられ（『続日本紀』天平6年7月辛未条、鹿内1990）、これに伯耆ー出雲間の2日を加えると、9日程度で出雲国府に勅が到着したとみられる（早川1962）。

出雲国内での文書伝達については直接明らかにする史料はないが、「伊勢国計会帳」では国符が郡毎に通送されたことが伺われ（鐘江1993）、同様の伝達を想定できる[14]。いずれにせよ、本木簡によって、4月末頃に出雲国府に到着していた改元に関する情報が、少なくともその50日後には国内に周知されていたことが明らかになった。

SD06出土2・3号木簡（図70−2，3）

釈文

2号	「八野郷神門米□　　」×	(148)×22×5	019
3号	「高岸三上部茂×	(91)×22×5	019

第70図2・3の木簡についての概要は、本文を参照されたい。このほか三田谷Ⅰ遺跡では、次にあげる古代の木簡が出土しており、本稿ではこれらとの関連から2・3号木簡の性格について述べる[15]。

イ．	「高岸神門	(86)×38×3	019
ロ．	「V（符籙）鬼急々如律令」	278×21×4	033
ハ．	「（符籙）急々如律令」	159×22×3	051
ニ．	（符籙）急々如律令	(135)×29×4	081
ホ．	「□□」積豊□	(76)×19×3	081
ヘ．	「V□□二	126×31×6	033

すでに本文で触れたように、2・3号木簡は本来、郷名＋人名（姓名）＋（空白）＋何らかの記載を少なくとも持っていたことが推定される。さらにイ〜ヘの木簡をみると、イ、ホも同様の形態を持つと考えられる（鳥谷1997・熱田1999）。つまり、「郷名＋人名（姓名）＋（空白）＋何らかの記載」という書式の木簡の類型を本遺跡から析出することができる。記載の内容は、人名の後に空白部分を残し、再び何らかの記載を行う点が注目される。このような木簡には、以下のような類例があるが、空白について単なる区切り以上の意味があるか否かについては今後の検討を待ちたい[16]。

大田市白坏遺跡2号木簡(大田市教育委員会1989)

ト．	「嶋主　　千嶌	(195)×23×4	019

石川県金沢市上荒屋遺跡21号木簡（金沢市教育委員会1993）

チ．	春日千万呂　ゝ坂本吉人　ゝ国麦八千万呂	(247)×10×7	019

総じて2・3号木簡（加えて前掲木簡イ・ホ）の機能は、差出・宛先記載がなく、01型式をとり、同様の記載のものが複数みえることから記録木簡と考えられる。そしてこの木簡群の年代は「郷」の表記から、天平11・12（739・40）年以降と判断することができる（岸1972・1966）。

さらに、これらの木簡は厚さ・幅などに違いはあるものの、製作技法に注意するといずれも上端部をキリ・オリ[17]にしていることがわかる。キリ・オリ技法は普遍的な製作技法であるから、偶然の一致も考えられる。しかし、この製作技法の一致を重視すれば、木簡は同一地点、あるいは相互に強く影響を与え得る部署で、比較的短期間に製作されたことを推測させる。すなわち、木簡の製作・使用については、木簡が各郷毎に作成され、三田谷Ⅰ遺跡に運ばれたとは考えがたいのである。一方、文字の形態に注目すると、3号木簡の「門」の表現は、省略されている木簡イの「門」とは明らかに異なっており、両者は別人によって書かれたものと判断でき、実際の木簡の記載にあたっては複数名（時間的な意味でも）による作業が行われたことが判明する。

以上のように2・3号木簡から、本遺跡で複数郷にわたる人物に対する記録木簡作成作業、すなわち文書事務作業が本三田谷Ⅰ遺跡で行われたこと明らかになった。

最後に、木簡に見える高岸郷・八野郷がいずれも神戸川右岸に所在地が比定される郷であることについて若干検討を加える。神門郡については、中世の史料になるが、文永八(1271)年の「関東御

教書」（千家家文書、『鎌倉遺文』10922号文書）を初出とする神西庄、嘉暦3（1328）年「佐々木貞清寄進状」（『富家文書』7号文書〔島根県古代文化センター1997〕）にみえる神東という呼称が注目される[18]。このうち神西庄は、その前身の園山庄の本庄の位置について延応元(1239)年の関東御教書(酒井宇吉氏所蔵文書、『鎌倉遺文』5467号文書)では「本庄内無海山之由」とみえ、神戸川ー神門水海以南、すなわち神戸川以南の平野部に存在したとみられ、神東は、後に神東村としてみえ現在の上塩冶町・塩冶町・今市町に相当すると考えられており、少なくとも中世には神門郡を東西に分ける認識があったことがわかる。そして、このような神戸川を境に神門郡内を区分する意識、あるいは地域区分はおそらく古代に遡りうる[19]。これらの両地域については、古墳時代後期にそれぞれ連続する首長墳を持つ古墳群を形成し（渡辺1987・大谷1997）、横穴墓群も左岸と右岸にそれぞれ集中的に分布している（出雲市教委1997）。『出雲国風土記』には、右岸の朝山郷に同郡大領を出していた神門臣等によって建立された新造院が、左岸の古志郷には同じく擬少領・主帳を出していた刑部臣によって建立された新造院が記され、神戸川を挟んで政治的に2つの地域に分かれていたと考えられるからである。さらに、同風土記では、神門郡の郷名の記載順は朝山郷・日置郷・塩冶郷・八野郷・高岸郷・古志郷・滑狭郷・多伎郷（餘戸・神戸は最後）となっている。このうち朝山～高岸郷は神戸川右岸、古志郷以下は神戸川左岸に比定されており、神戸川の右岸・左岸でのまとまりが認められる[20]。

古代における一郡内の地形による地域区分の存在については、平川氏によって提唱され（平川1995）、三上氏はさらにそれが郡内の文書行政においても文書木簡の通送などで機能したとする（三上1999）。上述したように神門郡でも東・西の地域区分があったとすれば、2・3号木簡（加えて木簡イ・ホ）は、まさに三田谷Ⅰ遺跡が、神門郡の東部地区の文書行政の拠点的施設の一つであったことを示しているのである。

2．015型式の木簡について

SD06から出土した1号木簡（図70－1）は都城以外では出土例が少ない015型式の木簡である[21]。これは短冊型の木簡の側面に穴を穿ったもので、奈良時代に属する地方出土資料は、宮城県の2例と出雲国庁跡（松江市教委1970、平石1995）の1点があり、今回報告する資料は県内2例目、都城以外では4例目になる。

015型式の木簡は今のところ、平城宮式部省関連遺構からの出土例が大半を占めている（奈文研1986、馬1996）。これらが律令官人の考課・選叙という人事に関する行政事務に使用されていたことが、これまでの研究によって明らかになってきた（井上1967、東野1977他）。考課・選叙木簡（以下考課木簡とする）という具体的な史・資料により考選事務の復元的検討がなされる一方で、その規格など実物に即した検討も行われるようになった。舘野和己氏は、形状・廃棄方法など、015型式木簡そのものについて詳細に観察し、長屋王家、二条大路出土木簡との比較・検討を行った。以下では舘野氏の成果に依拠して都城出土の考課木簡との比較を行い[22]、本遺跡から出土した015型式木簡（以下1号木簡とする）の諸特徴を明らかにし、型式と記述内容との関係および用途・使用場所について検討を行う。

まず1号木簡の概要をあらためて述べると、上端と側辺の一方を欠損し、現状では長さ284㎜、幅33㎜、厚さ10㎜の細長い短冊状を呈している。記述は、穿孔のある端部側を下にして表裏両面に

あり、裏面に感寶元年（749）の紀年が記されている。穿孔は下端に３ヶ所あり、表面から見て左側に１、右側に２ヶ所ある。形状は短冊状を呈しているが、本来の長さは欠損により不明である。表面の記載の冒頭が前文を受け継いだ書き出しになっているので、１文程度書き込みの余地がさらにあったとすれば、現存長の倍程度の長さが想定できる。幅は本来の形状を残す側辺（表面から見ると左側辺）から最大で33㎜を測る。表面の「大調」以下の文字の欠損具合から見て、本来の幅はこの数値を若干上回る程度だったと思われる。厚みについては墨書部分の削り取りによって本来の厚さを残していないのは明白であるが、内面が炭化した穿孔ａの直径と穿孔角度からすると厚さは20㎜程度と思われるが、記載面（この場合は裏面）の削り代を想定すれば、さらに厚かったと思われる。以上をまとめると、長さ550㎜程度、幅33㎜以上、厚さ20㎜以上を測る角柱状に復元できる。都城出土の考課木簡の諸特徴と比較すると、完形の考課木簡の長さは242㎜から394㎜で、１号木簡の復元長の方がかなり長い。幅は都城出土資料が30㎜前後で、ほぼ同じである。墨書部分を削り取ることで再使用されることから、本来の厚みは30㎜以上のものがあったようで、当初は「角柱形」を呈していたらしい。この点は１号木簡も共通するので、考課木簡と同様、削り代を想定した角柱が、基本的な属性であったと考えられる。

次に穿孔についてみると、考課木簡では全長に対する穿孔位置（この場合上端からの計測になる）の割合は上から10分の１ないし、10分の２より少し上にあたるという。１号木簡の穿孔位置は下端からそれぞれ15㎜，15.5㎜，18.5㎜である。後述するようにこの木簡は転用にあたり上下を反転させていることから、本来は上端側に穿孔されており、その位置は復元長からするとほぼ上端に接する位置といっても過言ではない。考課木簡に見られる穿孔方法は「火箸のような焼けた金属棒（焼け火箸）」と錐による２種類あり、穿孔方向にも両面と片面の２種類がある。「焼け火箸」による穿孔は、孔の内面を平滑に仕上げることができ、連綴する際に紐の通りが良いので、考課木簡では圧倒的に多い。それに比べて錐のみによる穿孔例は少なく、資料数から見れば「焼け火箸」の補助的な手段にすぎないようにみえる。ただし錐で穿孔したのち孔の内面を平滑にする目的で「焼け火箸」を使った可能性もあり、その場合、錐が主要な穿孔手段で「焼け火箸」を調整工具として使用したことになる。いずれにしても錐のみによる穿孔は量的に少ないので考課木簡の製作技法として主体的な位置を占めているわけではない。１号木簡の穿孔方法と順序は第２章第２節で述べたように、穿孔ａ：「焼け火箸」→穿孔ｂ：錐であるが、考課木簡にも同様の例がある（3806，6436 奈文研1986の木簡番号による）。これらは繰り返し使用するうち当初の孔が露出したため、別の孔をあけ直したことを示しているが、孔をあけ直す際、当初のとは違う方法によって穿孔されている。あけ直しが木簡の使用者によることは明らかなので、ここでは錐のみによる穿孔が臨時的・補助的な手段としてとられていたと言え、１号木簡にも同様な使用過程が窺える。以上のように１号木簡は長さ、孔の位置が若干異なるものの、製作技法・使用方法の点で都城出土の考課木簡に類似していることがわかる。

次に木簡の記述と木簡型式との関係であるが、まず、連綴すべき孔が露出しているので、015型式としての機能を喪失した状態であることは明白である。同型式木簡の使用方法からすれば孔の側を上にし、露出した面を表面にしているはずだが、１号木簡では穿孔が下端に位置し、かつ孔の露出面が記述の文末になっている。従って記述と木簡型式とは直接的な関係は無く、機能喪失後、表裏・天地を逆転して転用したことがわかる。釈文に関する問題点等は既に述べたので、次に再使用の状況を述べておく。

上端の欠損を別にすれば、再使用の墨書と側辺の削れに前後関係が窺える。まず、表面では「調」以下５文字が右側辺の欠損によりわずかに欠け、反対に裏面では「税」以下の左側辺側が欠けるので再使用後に割れたことは明らかである。一方それより上では左右両側辺を失うにも関わらず文字は欠損せず納まっている。表面の左側辺（裏面では右側辺）の抉れと字配りに注目すると、「依大」と「元年」がこの抉れを避けるように書かれているように見える。抉れは長さ3.5cmを測り、上方から刃を入れて削っていることから明らかに人為的で、２次的な調整と考えられる。この抉れより上の左右両側辺の欠損が、記載以前に存在した可能性は高いが、015型式の廃棄行為であるか、再利用の過程で生じたものか不明である。

以上、015型式木簡の製作・使用・廃棄・再使用の過程を復元的に検討してきた。ただし、転用前の記述が残っていないので本来の用途や使用場所をにわかに特定できない。そこで、015型式木簡の用例と転用例を参考に１号木簡の使用形態について考えてみる。

既に述べたとおりこの木簡は考課木簡の特徴に類似している。考課は五位以上であれば家政機関内で資人を対象として行われるが（考課令家令条、考帳内条）、地方にあっては五位自体例外的な存在で、しかも対象となる資人の数も非常に少ない。従って地方における考課のほとんどは国衙、郡衙、軍団の官人を対象としており、ここでは神門郡または神門軍団に考課対象者が存在する。しかし、考課令考郡司条、国博士条の規定によると地方官人の勤務評定は国司長官の固有事務とされており、規定通りに事務が遂行されていたとすれば考課木簡の使用場所も国衙に限られることになる[23]。従って、１号木簡が考課に使用された可能性は低いと考えられる。

宮城県で考課以外の用途に使用された015型式木簡が２点出土している。１つは多賀城跡から出土しており（多賀城跡調査研究所1984）、佐藤和彦氏によって詳細な検討がなされている（佐藤1984）。それによると、表裏両面に記述があり、転用に伴う習書部分を除くと本来の記述は表面の「丈部大麻呂 [illegible]」である。内容は人名とその下に２行割りにして年齢、身体的特徴、本貫地を記したもので、個人情報を木簡を媒体にカード化したものである。共伴する木簡に兵制関係のものが含まれることから、兵士個人を特定するために作られた可能性が高く、木簡の用途を、「基本的な帳簿から派生する別の帳簿を作成する」ために「個人ごとに作られて、側面上方部の孔を利用し複数の木簡を綴って使用され、必要に応じて自由にその順序を組み換えて使われた」と考え、これを「歴名作成用木簡」であるとした。もう１点は、多賀城に近接する山王遺跡から出土している（多賀城市教委1997）。表裏にわたり「大長」「軍毅」「主帳」など軍団の職名の記述があるが、内容は断片的で不明な点が多い。

考課であれ歴名作成であれ、015型式木簡の最大の特徴は個人の情報をカード化し、これを特定の原理の基づいてグループに分けたり並べ替えたりして再編成が容易に行える点にある。特に、カード化するにあたり抽出する情報母体の容量が大きい場合や情報母体が複数にまたがる場合にはより効果を発揮したに違いない。データの再配列作業の結果は最終的に文書に記載されるので、木簡自体が独立して存在するのではなく、あくまで紙本の存在を前提とし使用されている（東野1977）。こうした作業を伴う事務が一過性のものでなかったことは、木簡どうしを連綴する孔が露出するまで削り直して繰り返し使用されていることからも明らかである。１号木簡の具体的な用途は確かめられないが、特定の事務作業の中で「木製のカード」として「紙の文書では代置できない」独自の役割を担い、しかも継続的な事務処理に使用されていたと言える。

奈良時代、木簡は紙と共に互いの長短を補完し合いながらさまざま文書事務に活用されてきた。木簡の最大の特徴は記載面を削り直して再利用できる点にあり、木簡とともに出土する大量の削り屑はそのことを如実に物語っている。もちろん、1次的な利用後廃棄された木簡も多数存在するので、すべてが繰り返して使われたとは言えないが、出土木簡の記載はすべて最終段階の記述を示していると言える。再利用には単なる書き直しの場合もあれば当初とは異なる目的に使用された場合も考えられるが、木簡の形態が概して単純なこともあり転用前後の機能変化を記述内容からでは捉えにくい。015型式木簡の機能は、その特殊な形態から情報のカード化による整理・再構成にほぼ限られるので、転用の有無、転用による使用状況の変化などは他の木簡に比べ把握しやすいと言える。既に述べたとおり1号木簡は型式機能を喪失したのち転用されているが、転用が当初の使用場所を離れて行われるかどうか類例で検討してみたい。

まず考課木簡では転用は少ない傾向にある。これは考課木簡が官人個人の人事に関わる内容を含むため、不用になると安易に転用せず廃棄したためではないかと思われる[24]。式部省前面の溝からは多数の考課関係の木簡、削り屑が出土している。この中に考課関係の文言を習書した例がある（奈文研1985）。片面は漢詩と思われる文字を習書し、反対面に「□二政初位式式部」とあり式部省内で転用されたものと考えられる。習書に転用した他の例として平城京東二坊坊間路西側溝出土木簡がある（奈文研1990）。この木簡は表面に考課関係の記述があり、習書は両面になされている。第2章で述べたとおり、廃棄に伴う縦割りによって考課の文言の左半分を欠くが習書の文字は両面で納まっているので、入念な廃棄行為を施した上で習書用に転用していることが明確にうかがえる。この木簡の裏面には「夜壱伯伍拾参」という上日数が習書されており、転用が考課事務を行っていた場所でなされたことを示している。

長屋王家木簡に015型式の銭の付札が3点ある（奈文研1989，1990，1993）。同筆同文の2点と他は銭の使途を記録したものである。後者は明らかに転用しているが、前者がはたして本来的に付札として使われていたかどうか不明である。

多賀城跡出土木簡は既に述べたとおり、当初兵士の個人カードだったもので、表裏の余白に「鳥取部」「丈部」の氏族名が習書されている。共伴する兵士関連の木簡にも同じ氏族名が習書されていることから兵制に関わる事務を行った施設内で習書に転用されたと考えられる。なお山王遺跡から出土した木簡は一連の記述が表裏両面にわたっていることから、015型式の機能との関係が薄く転用の可能性がある。ただし、転用以前の使用状況については不明である。

わずかな例ではあるが015型式木簡はもとの場所から移動することなく本来の使用場所で転用されていることがわかる。この理由としては015型式木簡が本来、情報を整理するためのカードとして使われており、これを部外にでるようなかたちで転用することが憚られたのかもしれない。先述のように、1号木簡には租税に関する記述が記されているが、欠損していることもあり性格は不明である。年号や署名があることから単なる記録ではないと思われるが、先に示した転用の実態からすれば本来の使用場所から移動していないとみてよい。本遺跡から他の郷名を記した木簡や郡名を記した墨書土器が出土しており、神門郡衙の機能の一部を担った施設が存在した蓋然性が高い。015型式木簡の使用場所の推測が妥当であれば、1号木簡が果たしたであろう継続的な事務処理を郡レベルの事務と見なすこともできるであろう。

3．墨書土器について

三田谷Ⅰ遺跡からは、十数点の墨書土器が出土しているが、ここでは、本報告書掲載ならびに既に報告されているの墨書土器について若干の考察を加える。第２章第２節で報告した墨書土器は合計14点で、このほかにA区包含層からもヘラ書き土器１点が報告されている（島根県教委1998）。文字の書かれている土器は、全体に坏・蓋・皿・碗などの供膳具であるという共通性を持つが、その土器の年代・機種・出土地点、墨書の内容などからは大きく２つのグループに分けて考えることができる。

A群は、概ね８世紀から９世紀初頭を中心のものと考えられる須恵器の一群である（第69図１～10）。記号と考えられる５を除くほか、いずれも底部外面に墨書される。ヘラ書き土器も蓋外面にヘラ書きされているが、これに含めることができる。記載された文字としては１の「麻奈井」、９の「法」のような祭祀・仏教に関わるものや、ヘラ書き土器の「大止乃」、「神門」のような支配・支配機構に関わるものが特徴的である[25]。なかでも「神門」は当時の郡名で、同様の例として出雲国府にほど近い松江市黒田畦遺跡でも「云石」（飯石郡）の墨書土器が発見されている（松江市教委1995）[26]。同遺跡の報告書でも触れられているが、黒田畦遺跡の近くには飯石郡少領出雲臣弟山が建立した山代郷新造院の推定遺跡である四王寺跡が存在する[27]。このように郡名の墨書土器は郡司あるいは郡家との関連性をうかがわせる資料である[28]。

B群は、10世紀前後を中心とする上師器坏である。これらは記名部位が側面正位・あるいは横位とA群と異なっている。また、記載内容も「坂刀」・「上井」など２文字にわたるものが多い。これらの意味を断定することは困難だが、鳥谷1997に報告されている「荏原」が神門郡日置郷の郷里制下の里名であること、「坂」も同じく郷里制下の里名の坂本あるいは坂奈である可能性が高いことからして[29]、郡名・郷名以下の小地域の地名であることが推測できる。

ここで、資料の豊富な東国を中心としたとした集落の墨書土器について触れた近年の研究動向をみると、概ね次のような指摘がなされている。すなわち、１：時期については８世紀前半から出土例がみられるが、集落に広がって行くのは８世紀後半以降で、９・10世紀に爆発的に増加し、10世紀内には急速に減少する。２：記載は１文字のものが大多数を占め、内容も吉祥句が多く、「大」・「万」・「富」など文字も限られている。というものである（平川1991・高島1994他）。そして同類の現象は香川県でも認められている（片桐1999）。本遺跡の墨書土器については、A類にみるように８世紀代のものが比較的多くみられることなどからして、上記の集落に関する墨書土器の指摘は当てはまらず、あくまでも墨書土器という視点からすると、むしろ官衙・有力者の居宅的要素の強いものであるように思われる。なお、B群についても、記載される小地域名が広範に及んでいることから、典型的な９・10世紀の集落出土墨書土器とは言い難い。墨書土器に限っていえば、むしろ、同じく周辺の小地名を記した墨書土器が出土した千葉県吉原山Ⅰ遺跡やその周辺の遺跡群などとの共通性を指摘しておきたい（佐原市教委1980・長部山遺跡発掘調査会）[30]。

以上述べてきたように、墨書土器からは、本遺跡を一般的な集落遺跡とは認めがたい。A・B両群、またその差異をどのように歴史的に位置づけるのかは、A群にみられる祭祀的様相と、斎串・馬園・鉄鉢型土器・托・灯明皿・湧水遺構などをどう理解するか、B群にみられる小地名が10世紀当時どのように機能していたかを類例の増加をまって再検討する必要がある。

第2節　遺　構

各建物群の構成については第2章で述べたとおりであるが、群別に建物の概要をまとめると表5のようになる。以下ではまず建物群の時期を検討し、次に建物と建物群の特徴を述べる。

建物群の時期

遺構の切り合い関係はＳＢ09・12・02とＳＢ08・ＳＩ03それにＳＢ16・ＳＤ17で認められたが、土層の観察から先後関係を確定することができなかった。柱穴出土遺物は建物の時期を推測する上で参考になるが、柱の抜き取り状況が不明なので出土遺物が柱の埋設時に伴うのか抜き取り後の混入か、多くの場合その帰属を決めることができなかった。

ＳＢ04は柱根が遺存しており、伴出した須恵器蓋から建物の上限を7世紀末頃に特定できる。またＳＢ07から出土した土師器は、掘り返しのない柱痕跡のある柱穴から出土している。これは脚部に段を有する特徴的な高杯[32]で古志本郷遺跡など出雲市内で確認されている。古志本郷遺跡では6世紀後半の須恵器と共伴していることから、これ以降の年代が当てられる。以上の例から所属する建物群の時期をA群が7世紀末以降、C群が6世紀後半以降とすることができる。B群は出土遺物に7世紀代のものを含むので一応7世紀以降とする。D群は後述するようにB群との関係が考えられるので七世紀以降の年代を当てておく。以上からC群→B・D群→A群の変遷を想定しておく。

建物の概要

建物の種類別数は倉庫11棟、平地式建物7棟で、半数以上が倉庫である。群別に見てもA～C群で倉庫数が優越しているので、倉庫を中心とした建物群であることがわかる。平面形式は倉庫の場合1棟を除き2×2間で、全容が不明のＳＢ16を除けば平地式建物は3×2間に限られる。床面積は倉庫で7.7～13.6㎡で12㎡前後に集中する。側柱建物では15.3～40.2㎡で最大のＳＢ18を除けば27㎡以下である。柱穴心心距離からみた柱間寸法は倉庫が4.5～6.5尺、平地式建物ではＳＢ18が桁行8尺、梁間9尺であるほかは4.5～7尺である。ただし柱間が等間にならないものがあり柱筋の通りが悪いものが多い。梁間総長と桁行総長の比率を梁桁比とすると、倉庫は0.84～0.99で、11棟中8棟が0.90以上の正方形に近い平面形態である。平地式建物では0.59～0.84である。ＳＢ17を除くと0.73が3棟、0.84が2棟で、3×2間の建物には平面形態が正方形に近いタイプ（以下Ⅰ類とする。）と長方形タイプ（以下Ⅱ類とする。）の2種類が存在したことが分かる。面積を比較するとⅠ類が20㎡以下の小型に、Ⅱ類が23㎡以上の中・大型に対応しているので、両者に機能的な違いを想定できる。Ⅰ類は、2×2間の倉庫の床面積・平面形態に近い特徴を持つことから倉庫としての機能が考えられる。その際、総柱倉庫との機能差は収納物の重量差によるものとおもわれる。

建物群の概要

A群は棟通りを揃えて直列する3×2間と2×2間の倉庫2棟で構成される。3×2間のＳＢ04は梁桁比がほぼ正方形に近く、床面積はＳＢ06に近似しており、2棟は同形・同規模の倉庫である。他群の倉庫に比べて規模に差がないので機能的な違いを見いだしにくいが、ＳＢ04の桁行の柱間数が多いのは重量物の収納に対応してのことと思われる。2棟の棟間距離は約20尺（6ｍ）で、棟通りを揃えて直列することから他の群より企画的な建物配置となっている。

B群は雁行する4棟の倉庫（ＳＢ13，05，11，02）と平地式建物3棟（ＳＢ08，15，16）で構成される。雁行配置に完数尺を使った形跡は明瞭ではなく、むしろ間隔はほぼ一棟分の距離で柱筋を

群	種類	番号	平面形式 (間)	桁行 (m)	桁行 柱間	梁間 (m)	梁間 柱間	面積 (m)	梁桁比 (梁/桁)
A群	倉庫	SB06	2×2	3.73	1.87	3.46	1.73	12.9	0.93
		SB04	3×2	3.75	1.25	3.53	1.77	13.2	0.94
合計								26.1	
B群	倉庫	SB13*	2×2	2.93	1.47	2.64	1.32	7.7	0.90
		SB05	2×2	3.55	1.78	3.52	1.76	12.5	0.99
		SB11	2×2	3.37	1.69	3.28	1.64	11.1	0.97
		SB02	2×2	3.77	1.89	3.61	1.81	13.6	0.96
	小計							44.9	
	側柱建物	SB08	3×2	4.82	1.61	4.06	2.03	19.6	0.84
		SB15	3×2	5.80	1.93	4.25	2.13	24.7	0.73
		SB16	3×2	8.23	2.06	-	-	-	-
	小計							44.2	
合計								89.1	
C群	倉庫	SB07	2×2	3.63	1.82	3.24	1.62	11.8	0.89
		SB10	2×2	3.36	1.68	3.26	1.63	10.9	0.97
		SB03	2×2	3.16	1.58	2.80	1.40	8.8	0.89
		SB12*	2×2	3.03	1.52	2.96	1.48	(9.0)	0.98
		SB01	2×2	3.86	1.93	3.23	1.62	12.5	0.84
	小計							44.0	
	側柱建物	SB17	3×2	6.65	2.22	3.93	1.97	26.1	0.59
	小計							26.1	
合計								70.1	
D群	側柱建物	SB09	3×2	5.63	1.88	4.13	2.07	23.3	0.73
		SB14	3×2	4.27	1.42	3.58	1.79	15.3	0.84
合計								38.5	
その他	側柱建物	SB18	3×2	7.43	2.48	5.41	2.71	40.2	0.73

＊SB12はC群内の建て替えとし、面積計から除いた。
＊SB13は側柱建物であるが、規模・形態から倉庫と判断した。

表6　掘立柱建物一覧表

柱間1間または2間分ずらす程度の企画だったと思われる。SB13は側柱建物であるが、小型で平面形態が正方形に近いので倉庫と考えられる。他の3棟は規模に若干の差があるものの平面形態はほぼ正方形である。平地式建物では、Ⅰ類のSB08とⅡ類のSB15が主軸を直交させ約60m離れて位置している。この2棟の存在形態に近いのがD群で、ここでは主軸方向とⅠ・Ⅱ類の位置関係を入れ替えて2棟（SB14，09）が対峙している。両群は建物の軸方向（棟・妻の相関関係）も近似しており、前後関係は不明ながらSB08・15とSB14・09が建て替えの関係にあると考えられる。SB16は庇または周り縁の付く可能性があり、建物群の集中する場所に位置することからも中核的な建物と思われる。

C群は近接して直列する3棟（SB07，10，03）と建て替えの1棟（SB12）の倉庫群に、離れて存在する周溝付き倉庫1棟（SB01）と平地式建物1棟（SB17）で構成される。倉庫はA、B群の倉庫に比べ床面積が若干小さく、平面形態にわずかながら差がある。SB01は周溝が付くことや他の3棟の倉庫から離れて位置するなど異なる存在形態を示しており、単純に倉庫とするには問題が残る。SB17は直列する倉庫群から約30m離れて位置する。Ⅱ類より平面形態が長方形で、同一場所で建て替えられている。

建物配置の特徴

C群の倉庫群は3棟があたかも軒を連ねるように近接しており、A、B群が間隔をとって配置されるのと比べ対照的な配列状況を示している。律令期の郡衙正倉などでは火災時の延焼を防ぐため他の施設との混在を避け、相互に一定の距離をとって倉を配置したとされる（山中1994他）。A、B群にみられる倉庫の間隔も防火対策によるものと推測されるが、B群ではさらに倉庫群と平地式建物Ⅱ類を大きく離した位置に置くことから同様の意図が想定できる。C群の場合、倉庫群が密集するものの平地式建物が離れて位置するのでこれも防火を意図したものであろう。先に示した建物群の時期的変遷を重ね合わせるなら、倉庫群の配置形態が密集型から分散型に変化したことが看取できる。B、C群では平地式建物Ⅱ類が倉庫群と距離を置いて対峙するのに対し、A群の倉庫に伴う平地式建物が認められない。調査の精度や発掘範囲の制約も考慮しなければならないが、谷の出

口部分の調査で数多くの側柱建物が検出されており（Vol.1島根県教委1999）、ここに関連する建物があった可能性も考えなければならない。

立地の特徴

谷全体から見ると建物は出口側と今回報告した谷奥側に分かれて立地している。谷奥側は倉庫群も目立つが、ＳＢ16のような特殊な構造を持ち、祭殿との関係が指摘されている建物や墨書「麻奈井」に通じる湧水坑（ＳＫ62）、それに斎串や鉄鉢形土器、托、灯明皿などの仏具といった祭祀色の強い遺構・遺物が検出されている。湧水坑の祭祀開始時期は不明であるが、倉庫群が谷の奥部でこれら祭祀的な諸施設と重複するように立地していることから、全く無関係だったとは考えにくい。この点については谷全体を視野に含めた検討が必要であるが、今回過去の調査成果を十分ふまえることができなかった。

建物群の性格

以上、検出した建物について特徴を述べた。あらためてまとめると、検出した建物は倉庫を中心とした建物群で少なくとも３期の変遷が考えられた。同一場所での建て替えは顕著でなく、建物配置も踏襲されていない。建物は総じて小型で、柱穴の形状・規模では、掘り形が隅丸方形を呈するものが若干あるほかはほとんどが不整円形で、整った方形のものはない。柱間寸法はＳＢ18以外は７尺以下で、建物ごとに違いが認められる。束柱の有無やその数の違いによって収納物の異なる倉庫が存在する可能性が考えられた。

一般に原始・古代において倉は余剰生産物の集積・保管施設であり、小型とはいえ集落の一角に群を構成している倉庫群は集落の富の象徴として存在していたのであろう。この遺跡での倉庫群の諸特徴は律令期の郡衙の特徴とは明らかに異なり、集落遺跡のありかたに近いといえる（山中1994）。ただし、Ａ群の段階はそれ以前のＢ・Ｃ群に対し、棟数の減少、企画性の顕在化、平面形態や建物構成の変更など大きく変化しているので、収納物の管理がそれまでとは異なる原理によって行われたことが推測される。Ａ群の建物に隣接するＳＤ06からは８世紀後半を中心とする遺物が数多く見つかっているが、この中には前節で詳述した015型式を転用した天平感宝元年の木簡や神門郡内の他の郷名を記した木簡、郡名「神門」を墨書した須恵器があり、神門郡衙に関連した施設の存在を示唆している。当然ながら、２棟だけが関連施設であったのではなく、神戸川に近い谷の出口部分の建物の幾つかもその可能性がある。ただし、古志本郷遺跡で確認された神門郡衙の建物が郡を代表する施設として圧倒的に大規模であり、三田谷Ⅰ遺跡との格差は歴然としている。このことは郷に分置された正倉別院と比較しても言える[20]。従って、規模・構造の点では本遺跡が郡衙の直轄的な出先機関ではなく、さらに下位の機関に位置づけできよう。前節で示したように律令制下の神門郡に東西２つの行政区画が存在したとすれば、本遺跡が「神東」地域の徴税機構の一機関と見ることもできるかもしれない。なお、谷の出口部分の調査区からは首長またはその居館を指していると思われる「大止乃」と刻んだ８世紀後半の須恵器蓋が出土している（Vol.1島根県教委1999）。「大止乃」が律令制下のいかなる官職にあったかは不明であるが、郡衙の職務を担う人物に関連する資料として興味深い。

Ａ群以前の建物群については今回十分に検討できていない。過去の調査範囲を含む何々の建物を対象とした遺跡の構造的な検討も必要であるが、古志本郷遺跡ほか周辺諸遺跡との比較に基づいた地域論的な検討も不可欠であり、今後の課題としたい。

注

1）人名としては烏大調が知られる（『平城京出土木簡概報』32−10頁。以下『平城概報』号数−頁数と略す）。単語（名詞）としての「大調」は存在したと考えられる。

2）木簡の日付が国での勘会の時点を示すことについては亀谷1999参照。9・10月の日付を持つ木簡は10〜12月の京進期限に適合するが、これらの木簡も閏5月に郡以下で調の貢納作業が行われなかったことを直接証明するものではない。

3）調の荷札で4〜8月の日付を持つものをまとめると下表のようになる。

4月から8月までの記載を持つ調の荷札木簡

	海藻	赤乃利	塩	熬海鼠	堅魚	その他
4月	志摩2	志摩1	周防1	能登2		越前1
5月	志摩2			能登1		
6月			不明1	志摩1	志摩1	
7月	志摩1		三河1		駿河1	
8月			尾張1	能登3		尾張1 若狭1 不明1

なお、熬海鼠のうち、能登となっているものは全て、能登郡鹿島郷のものである。

4）国郡国の中男作物の木簡は6点知られているが、月の書かれているもの5点は全て4〜7月の間に当てはまる（亀谷1995）。『平城宮木簡』（以下『平城宮』と略）4−4668木簡・『平城概報』16−7、17−14、19−31、22−35、24−29。

5）国郡国気多郡（『平城概報』22−35）。石見国美濃郡大殿御物（『平城概報』24−29）。長門国豊浦郡（『平城宮』1-401）。

6）同帳については平川南1989によった。

7）出雲国島根郡生馬郷・秋鹿郡多太郷の荷札が各1点確認される（『平城概報』22−35）。
このほか、出雲国については、中男作物の荷札・贄の海藻の荷札が平城京から出土している（『平城宮』1−43、『平城概報』30−7）。

8）三田谷I遺跡は、現在神戸港河口から直線距離で6km程離れており、『出雲国風土記』に書かれる神門入海を想定しても、直接海藻の貢進地域ではなかったようにも思われるが、出雲国では同様の地理的条件を持つ意宇郡飯梨郷から送られた中男作物海藻の荷札木簡（『平城概報』19−23）が存在する。

9）早川庄八氏は、延喜式までの間に制度の変遷があったこと、8世紀では調全はほとんどが夏調ではなかったかとする。首肯すべきである（早川1962）。

10）周防国大嶋郡の調荷札には他に美敢郷のもの2点（『平城概報』29−36）、同務理郷のもの1点（『平城概報』31−19）がある。

11）周防国大嶋郡屋代里は現大島町屋代島と考えられているが、同島には製塩遺跡はなく、製塩に適した浜もないことが指摘されいている(岸本雅敏1992)。また、同郷からの調塩荷札は他に一般の調と収取の異なる可能性のある長屋王家木簡に多くみられることも注目される。

12）この他、秋田城出土の次の木簡も外国での調の直接の調達に関わるものとも考えられる（秋田市教育委員会1992）
秋田城跡出土64号木簡

・V　二国泮万己調米五

・V　三月九日　(128)×25×4　034

13) 石見国美濃郡都茂郷での採銅（『三代実録』元慶５（881）年３月７日己卯条）などの理由を考えられなくもない。

14) 隠岐国は現在、島前（西ノ島・中ノ島・知夫里島）・島後に分けられるが、島前は正和３（1312）年の玉若酢神社棟札写など中世前期の史料には「遠前」として見え、「伊勢国計会帳」（『大日本古文書』24−548）に見える「遠前」「遠後」のように山陰道の国府より前の地域と位置づけられていたと考えられている。山陰道諸国でも国内での文書の遣送を想定できる。

15) イは平石1995、ロ〜ヘは鳥谷1997。

16) トの白坏遺跡は荘園の下部組織(納所)の遺跡と推定される遺跡で、同様の木簡９点以上が確認できる。チの上荒屋遺跡はは荘園生所(東大寺領横江荘)の遺跡と考えられ、他にもう１点同様の木簡（55号木簡）が出土する。空白は木簡チにみえるような合点などの追筆を行うためのものともみることができよう。

17) 木簡の製作技法については、山中章1992参照。

18) 現在、出雲市に神西町の遺称が残る。

19) 神門郡に隣接する出雲郡では、明徳３（1392）年の「隠岐守安堵状」（鰐淵寺文書）に「出東郡」がみえ、「出西郷」はさらに古く建久５（1194）年「国造千家孝房譲状」（千家家文書）にみえるので、平安時代末には出雲国内の郡にも地域区分を確認できる。ただし、出東郡は出雲郡の西部が神門郡に含まれることによって成立したと考えられる（井上寛司1991）。

20) 神門川は必ずしも現神戸川と同位置であったとは限らないが、現神戸川より西側で旧流路が検出されたことはない。なお、『倭名類聚抄』の郷名記載順は風土記と異なっており、八野郷が最後にくる。

21) 奈良国立文化財研究所木簡データベース（1999年５月25日現在）によると015型式の木簡は76点ある（奈文研1999）。このうち奈良時代に特定できる資料は68点である。

22) 平城宮・京跡出土資料については奈良国立文化財研究所のご厚意により実見させていただいた。

23) 出雲国庁跡から出土した015型式木簡は、その上端近くに「中」の文字があることから郡司、軍団少領以上、史生、資人、国博士、医師、外散位のいずれかの評定結果を記しており、国衙での考課を裏付ける史料である（平石1995）。

24) 考課木簡の廃棄方法については舘野氏の論考に詳しく、「入念に欠損させることで、木簡のもつ「公的な性格」を悪用できないようにしたとされている。このうち穿孔より下部の裏面を剥離させる廃棄方法は、015型式の機能自体を停止させる意図が窺え、縦方向に細かく割り裂く廃棄方法は、機密保持のため不用の文書を細断する際に使う手法である。このように転用・悪用に少なからず注意を払っているのは、言うまでもなく木簡の「公的な性格」が人事に関わる内容だからであろう。なお、穿孔より下部の裏面を剥離して廃棄する場合、記載のない裏面側を他の用途に転用した可能性はある。

25) ヘラ書き土器「大止乃」は島根県教委1999所収。このほか鳥谷1997に報告されている「□宅」（須恵器坏・底部外面に墨書）の墨書土器もこのグループに含めることができる。

26) なお、墨書土器は、第69図10と同じく高台付きの皿で、記名部位も同じである。

27) 「出雲国風土記」意宇郡条。

28) 郡名を記した墨書土器は、国府・国府関連遺跡から出土する例が多いが、これらは国府と郡家の交通、郡司の国府へ出頭を示すものであると考えられる。「塩谷」（下野国府跡出土）、「信大」（多賀城跡出土）、

「黒川」（多賀城廃寺跡出土）など国府所在郡と異なる郡名墨書がみられる。

29）いずれも「出雲国大税賑給歴名帳」に見える郷里制下の里名である。荏原（日置郷荏原里、『大日本古文書』2－228頁）、坂本（伊秩郷坂本里、同234頁）、坂奈（伊秩郷坂本里、同235頁）にあたる。

30）島根県内の10世紀のまとまった墨書土器としては大田市白坏遺跡出土（大田市教育委員会1989）のものが知られるが、「大」・「梨」など一文字の墨書が中心で、明らかな地名の墨書はみられない。

31）古原山王遺跡では中世の史料に見える「大畠」「清」「野」「岡」「岡本」「大家」など小地名を記した墨書土器が検出されている。また、長部山遺跡からも「森」（森部）などが出土している。

32）古志本郷遺跡の報告書中に「脚部有段高坏」と仮称されている土器で、端部に向かって広がる脚部に段がめぐる（島根県教委1999）。

33）山代郷正倉跡（松江市）は意宇郡で分置された正倉別院で、4×3間の総柱倉庫群が企画的に配置されている（島根県教委1981）。

引用・参考文献

秋田市教育委員会　1992『秋田城出土文字資料集』Ⅱ

熱田貴保　1999「島根・三田谷Ⅰ遺跡」『木簡研究』第21号

出雲市教育委員会　1997『遺跡が語る古代の出雲』

井上寛司　1991「出東郡の成立」『大社町史』上　大社町

井上光貞　1967「最近出土した平城京の木簡」『月刊文化財』昭和42年3月号

大谷晃一　1997「『出雲国』の支配者たち－出雲の後期古墳文化－」『古代出雲文化展－神々の国　悠久の遺産－』島根県教育委員会。

河本清・水内昌康　1999「キヘエ島民の居住地と生活」『壱岐・対馬－海峡と土器製塩遺跡群の研究－』『壱岐・対馬』刊行会。

鐘江宏之　1993「計会帳に見える8世紀の文書伝達」『史学雑誌』第102編第2号

亀谷弘明　1995「中男作物の荷札」『日本史攷究』第21号

亀谷弘明　1999「伊豆国の荷札木簡と（贈）大伴部」『古代』第99号

片桐孝浩　1999「讃岐国出土の文字資料と祓」『第11回中四国古代史研究会大会レジュメ』

岸俊男　1966「郷里制廃止の前後」『日本古代政治史研究』塙書房

岸俊男　1973「古代村落と郷里制」『日本古代籍帳の研究』塙書房

岸本雅敏　1992「律令制下の塩生産」『考古学研究』第39巻第2号

栗田則久・石田広美・平川南　1986「千葉県古原山王遺跡の墨書土器」『考古学雑誌』第71巻第3号

（財）千葉県文化財調査センター　1990「古原山王遺跡」千葉県文化財センター調査報告書第178集

佐藤和彦　1984「多賀城跡出土の歴名作成用木簡について」『東北歴史資料館研究紀要』第10巻

鹿内広胤　1990「大宝令勅符の再検討」『歴史』第75号

島根県教育委員会　1981『史跡出雲国山代郷正倉跡』

島根県教育委員会　1999『三田谷Ⅰ遺跡』Vol.1　斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

島根県教育委員会　1999「古志本郷遺跡」Ⅰ　斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

島根県古代文化センター　1997『窯家文書』古代文化叢書3

高島英之　1994「古代東国の村落と文字」『古代王権と交流2　古代東国の民衆と社会』名著出版

多賀城市教育委員会　1997『山王遺跡』Ⅰ　多賀城市文化財調査報告書第45集
舘野和己　1996「015型式木簡」（奈文研1996『解説』）
寺崎保広　1986「考課・選叙と木簡」（奈文研1986『解説』）
東野治之　1977『成選短簡と平城宮出土の考選木簡　『正倉院文書と木簡の研究』塙書房
東野治之　1983『古代税制と荷札木簡　『日本古代木簡の研究』塙書房
東野治之　1983「志摩国の御調と調制の成立」『日本古代木簡の研究』塙書房
鳥谷芳雄　1997『鳥根・三田谷Ⅰ遺跡』『木簡研究』第19号
長部山遺跡発掘調査会　1980『佐原市長部山遺跡』
奈良国立文化財研究所　1979『平城宮木簡』3　奈良国立文化財研究所史料第17冊
奈良国立文化財研究所　1985『平城宮発掘調査出土木簡概報』18
奈良国立文化財研究所　1986『平城宮木簡』4　奈良国立文化財研究所史料第28冊
奈良国立文化財研究所　1989『平城宮発掘調査出土木簡概報』21
奈良国立文化財研究所　1990『平城宮発掘調査出土木簡概報』23
奈良国立文化財研究所　1993『平城宮発掘調査出土木簡概報』27
奈良国立文化財研究所　1996　平城宮木簡』5　奈良国立文化財研究所史料第42冊
奈良国立文化財研究所　1998『古代の稲倉と村落・郷里の支配』
奈良国立文化財研究所　1999『木簡データベース』(http://www.nabunken.go.jp/)
野村忠夫　1967『律令官人制の研究』吉川弘文館
野村忠夫　1969『古代官僚の世界』　塙書房
早川庄八　1962「天平六年出雲国計会帳の研究」『日本古代史論集』下　吉川弘文館
樋口知志　1991「『二条大路木簡』と古代の食料品貢進制度」『木簡研究』第13号
平石充　1995「鳥根・三田谷Ⅰ遺跡」『木簡研究』第17号
平石充　1995「出雲国庁跡出土木簡について」『古代文化研究』第３号　鳥根県古代文化センター
平川南　1989「〈校訂〉出雲国計会帳」『漆紙文書の研究』吉川弘文館
平川南　1991「墨書土器とその字形ー古代村落における文字の実相ー」『歴史民俗博物館研究報告』第35集
平川南　1995「郡符木簡」『律令国家の地方支配』吉川弘文館
松江市教育委員会　1970『出雲国庁跡発掘調査概報』
松江市教育委員会　1995『松江市黒田畦遺跡』
松村恵司　1983「古代舶倉をめぐる諸問題」『文化財論叢』同朋舎
三上喜孝　1999「文書木簡と文書行政ー地方出土木簡を例として」『古代文書論』東京大学出版会
美東町教育委員会　1993『長登銅山跡』Ⅱ
宮城県多賀城跡調査研究所　1984『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1983
八木充　1993「長登木簡からみた古代銅生産」『長登銅山跡』Ⅱ　美東町教育委員会
山中章　1992「考古資料としての古代木簡」『木簡研究』第14号
山中敏史・佐藤興治　1985『古代日本を発掘する』岩波書店
山中敏史　1991「古代の倉庫群の特徴と性格」『クラと古代王権』ミネルヴァ書房
山中敏史　1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
渡辺貞幸　1987「古墳時代の出雲　考古学からみた政治史」『季刊明日香風』第22号

遺物観察表１（土器類）

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	備考	実測番号
6－1		H7	弥生土器	甕		(19.6)		内 横なで 外 横なで		SJ66
6－2		G7	弥生土器	甕		(20.6)		内 横なで、刷毛目 外 横なで、刷毛目		SJ70
6－3		G7 Ⅰ層	弥生土器	高杯		(17.0)		内 横なで、へら磨き 外 横なで、へら磨き		SJ61
6－4		G10 Ⅰ層	土製品	管状土錘						SJ99
6－5		G7	弥生土器	壺		(29.6)		内 なで 外 刻目、棒状浮文、突帯、刷毛目、なで	ＳＤ０３、ＳＤ０６、ＳＤ０８、Ｇ８Ⅱ層でも出土	SB37
6－6		E9 Ⅰ層	手捏ね土器		2.1	3.2		内 なで 外 なで		SJ27
6－7		G7 Ⅱ層	土師器	甕		(24.8)		内 横なで、刷毛目 外 横なで、刷毛目		SJ63
6－8		西側溝	土師器	高杯		18.2		内 刷毛目、横なで、赤彩、暗文 外 刷毛目、横なで、赤彩、暗文		SK66
6－9		G10 Ⅰ層	土師器	壺		(7.6)		内 横なで、へら削り、指頭圧痕 外 横なで、なで		SB12
6－10		H10 Ⅰ層	土師器	壺		(15.3)		内 横なで、なで、へら削り 外 横なで、刷毛目		SB11
6－11	73	F12	緑釉陶器	碗			6.9	内 回転なで、沈線 J28外 回転なで、削り出し高台		SA57
6－12	73	J14 Ⅰ層	緑釉陶器	五輪花皿	2.7	14.0	6.7	外 磨き、削り出し高台		SA61
6－13	73	F10 Ⅰ層	緑釉陶器	皿				内 回転なで 外 磨き		SA60
6－14	73	F12	緑釉陶器	輪花皿				内 回転なで 外 回転なで		SA58
6－15	73	K 上層	緑釉陶器	碗				内 回転なで 外 回転なで		SA59
6－16	73	C6	白磁	碗					白磁Ⅳ類	SA82
6－17	73	H7	白磁	碗					白磁Ⅳ類	SA84
6－18	73	G8	白磁	碗			(7.2)	外 削り	白磁Ⅳ類	SA86
6－19	73	G区	白磁	碗			(6.6)	外 削り	白磁Ⅳ類	SA85
6－20	73	H9 Ⅰ層	白磁	碗				外 削り	白磁Ⅴ－２類	SA88
6－21	73	K	白磁	碗				外 削りか	白磁Ⅴ－２類	SA87
6－22	73	B4	白磁	碗					白磁Ⅴ－４類	SA89
6－23	73	K	白磁	碗			(6.4)	内 見込みに蛇目釉剥 外 削り	白磁Ⅷ類	SA90
6－24	73	F区	青磁	皿	2.3	(10.6)	(4.6)	内 櫛描文へら片彫り 外 へら削り	同安窯系皿Ⅰ類１・ｂ	SA91
6－25	73	E10	青磁	碗				外 櫛目	同安窯系Ⅰ－ｂ類	SA95
6－26	73	D6	青磁	碗			(5.0)	外 片彫りの条線、削り	同安窯系Ⅲ－１・ａ類	SA93
6－27	73	E10 Ⅰ層	青磁	碗				内 劃花文	龍泉窯系Ⅰ類－２	SA92
6－28	73	※	褐釉陶器	四耳壺		(10.0)	7.6	内 回転なで 外 削り		SA97
6－29	73	F7 Ⅰ層	土師器	高台付碗	5.6	(16.7)	(7.2)	内 回転なで 外 回転なで		SJ103
6－30	73	H10 Ⅰ層	陶器	捏ね鉢				内 刷毛目 外 回転なで、なで		SJ72
6－31	73	K区	陶器	捏ね鉢				内 条線		SJ74
6－32	73	F区上層	土師器	皿				外 回転糸切り	見込みに刻書	SA68
6－33	73	G Ⅰ層	陶器	擂鉢				内 回転なで、擂目 外 回転なで		SJ76
6－34	73	I9 Ⅰ層	陶器	擂鉢				内 擂目、回転なで 外 回転なで		SJ73
11－1		SI01	弥生土器	甕		(13.5)		内 横なで、刷毛目 外 横なで、刷毛目、刺突文		SC 9
11－2	76	SI01	土師器	高杯		(16.4)		内 横なでか 外 横なで、赤彩、暗文		SB 9
11－3	76	SI01	土師器	高杯		(17.1)		内 横なで、赤彩、暗文 外 横なで、刷毛目、赤彩、暗文		SB 8
12－1	76	SI03	土師器	杯	3.1	(9.5)		内 横なで、へら削り、なで 外 横なで、へら磨き、赤彩		SB13
12－2		SI03	須恵器	杯蓋		(10.6)		内 回転なで、なで 外 へら削り、回転なで		SB 3
13－1	76	SI04	土師器	甕		17.6		内 横なで、へら削り 外 横なで、刷毛目		SB 7
13－2	76	SI04	土師器	甕		(13.6)		内 横なで、なで、へら削り 外 横なで、刷毛目		SB 1
13－3	76	SI04	土師器	壺				内 なで、へら削り 外 なで		SB2
14－1	76	SI05	土師器	甕	24.2	(14.2)		内 横なで、なで、へら削り 外 横なで、刷毛目、刷毛目、なで、刺突文		SC10
14－2	76	SI05	土師器	甕	5.3	(12.8)	5.1	内 横なで、なで、へら削り 外 横なで、刷毛目、なで		SC11
14－3	76	SI05	土師器	低脚杯	4.2	13.5	3.5	内 へら磨き、なで 外 刷毛目、なで、回転なで		SC 4
14－4	76	SI05	土師器	低脚杯	4.2	12.6	3.1	内 へら磨き 外 刷毛目、へら磨き、なで	SK05でも出土	SC 2
14－5	76	SI05	土師器	低脚杯		12.0		内 へら磨き 外 刷毛目、へら磨き、回転なで		SC 1
16－1	77	SI07	弥生土器	甕		(15.8)		内 横なで、刷毛目、へら削り 外 横なで、刷毛目		SC51
16－2	77	SI07	土師器	甕		(24.9)		内 横なで、刷毛目 外 横なで、刷毛目		SJ105
16－3	77	SI07	縄文土器	鉢		(12.0)		内 なで 外 なで、沈線、刻目、刷毛目、削り		SB36

原図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	備考	実測番号
18－1	77	SB05	須恵器	碗	4.2	(12.4)	7.8	内 回転なで、なで 外 回転なで、なで、回転糸切り、なで		SA89
18－2	77	SB06	須恵器	蓋		(21.2)				SA33
19－1	77	SB04	須恵器	碗か				内 回転なで 外 回転なで		SC71
19－2	77	SB04	土師器	壺				内 横なで 外 横なで		SB46
20－1	77	SB15	土師器	壺				内 横なで、へら削り 外 横なで		SB41
20－2	77	SB15	須恵器	杯身				内 回転なで 外 回転なで		SC54
20－3	77	SB15	須恵器	杯蓋				内 回転なで 外 回転なで		SC61
21－1	77	SB13	土師器	碗				内 へら磨き、なで 外 へら磨き		SB47
21－2	77	SB13	土師器	碗				内 横なで、赤彩、暗文 外 横なで、赤彩		SB49
22－1		SB05	土師器	壺				内 横なで 外 横なで		SC74
22－1		SB11	土師器	壺		(14.2)		内 横なで、なで、へら削り 外 横なで		SC86
23－2		SB11	土師器	壺				内 横なで 外 横なで		SC55
23－3		SB11	土師器	壺				内 横なで 外 横なで		SB45
23－4		SB11	土師器	壺				内 横なで 外 横なで		SC75
23－5		SB11	土師器	壺		(13.2)		内 横なで 外 横なで		SB42
24－1	77	SB02	須恵器	壺		(11.6)		内 回転なで 外 回転なで		SC58
24－2	77	SB02	須恵器	鉢				内 回転なで 外 回転なで		SC66
24－3	77	SB02	土師器	壺				内 横なで 外 横なで		SC53
25－1	77	SB08	須恵器	長頸壺				内 回転なで、なで 外 回転なで		SC 3
25－2	77	SB08	須恵器	高杯			(10.2)	内 回転なで 外 回転なで		SC56
25－3	77	SB08	須恵器	碗				内 回転なで 外 回転なで		SC59
25－4	77	SB08	土師器	壺				内 横なで、へら削り 外 横なで		SC73
29－1	77	SB07	土師器	高杯			(12.0)	内 横なで 外 横なで		SB48
29－2	77	SB07	須恵器	壺				内 回転なで 外 回転なで		SC55
29－3	77	SB07	須恵器	杯身		(10.4)		内 回転なで 外 回転なで		SC52
33－1	77	SB01	土師器	壺		(24.8)		内 横なで、刷毛目、なで、へら磨り 外 横なで、刷毛目、なで		SB40
33－2	77	SB01	土師器	碗	3.0	(13.6)	(12.0)	内 横なで、赤彩 外 横なで、へら削り、赤彩		SB39
33－3	77	SB01	須恵器	碗				内 なで 外 なで		SB38
34－1	77	SB17	須恵器	杯蓋				内 回転なで、なで 外 回転なで	外面にヘラ記号	SC67
34－2	77	SB17	須恵器	杯身				内 回転なで 外 回転なで、なで		SC70
34－3	77	SB17	須恵器	杯身				内 回転なで 外 回転なで		SC63
34－4	77	SB17	須恵器	碗				内 回転なで 外 回転なで		SC64
34－5	77	SB17	土師器	壺				内 横なで 外 横なで		SC72
35－1	77	SB18	須恵器	蓋				内 なで 外 回転なで		SC60
35－2	77	SB18	須恵器	杯身				内 回転なで、なで 外 回転なで、なで		SC57
35－3	77	SB18	須恵器	碗				内 回転なで 外 回転なで		SC62
35－4	77	SB18	土師器	鉢				内 横なで、赤彩 外 横なで、なで、赤彩		SC69
38－1	78	SK05	土製品	管状土錘						SK57
38－2	78	SK06	須恵器	杯蓋				内 回転なで 外 へら削り、回転なでか	外面にヘラ記号	SJ30
38－3	78 78	SK07	須恵器	杯蓋				内 回転なで 外 へら削り、なで、回転なで		SJ10
38－4	78	SK07	須恵器	杯蓋				内 回転なで 外 回転なで		SJ22
38－5	78	SK07	須恵器	碗			(12.2)	内 回転なで、なでか 外 回転なで、なで、赤切り		SJ24
38－6	78	SK05	須恵器	壺			12.8	内 回転なで 外 回転なで		SA100
38－7		SK39	青白磁	梅瓶						SA96
38－8	78	SK40	須恵器	鉢				内 回転なで 外 回転なで		SJ 4
38－9	78	SK40	土師器	碗			(6.0)	内 なで 外 回転糸切り		SJ 7

挿図番号	写真	出土地点	器別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	備考	実測番号
38－10	78	SK40	土師器	碗	6.8	1.1	4.6	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SJ17
38－11	78	SK43	青磁	碗						SA94
38－12	78	SK43	須恵器	杯身	3.2	10.6		内 回転なで 外 回転なで	SK45でも出土	SJ11
39－1		SK19	土師器	碗		(13.1)		内 回転なで 外 回転なで		SK34
39－2		SK19	土師器	碗		(13.2)		内 回転なで 外 回転なで		SK33
39－3	78	SK19	土師器	碗	3.9	12.0	4.8	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SK26
39－4	78	SK19	土師器	碗	3.8	12.1	5.4	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SK27
39－5	78	SK19	土師器	高台付碗	5.4	12.3	6.8	内 回転なで 外 回転なで		SK24
39－6		SK19	土師器	高台付碗	5.3	12.2	7.0	内 回転なで 外 回転なで		SK29
39－7	78	SK19	土師器	高台付碗	6.0	12.2	7.2	内 回転なで 外 回転なで		SK30
39－8	78	SK19	土師器	高台付碗	6.1	(16.0)	8.3	内 回転なで 外 回転なで		SK28
39－9		SK19	土師器	高台付碗			8.2	内 回転なで 外 回転なで		SK35
39－10		SK19	土師器	高台付碗			6.5	内 回転なで 外 回転なで		SK36
41－1	78	SK22	土師器	高台付碗	3.2	9.6	4.5	内 横なで 外 回転なで、回転糸切り		SK20
41－2	78	SK22	土師器	碗	4.1	11.9	5.0	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SK23
41－3	78	SK22	土師器	碗	4.0	11.5	5.8	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SK21
41－4		SK22	土師器	碗			4.5	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SK41
41－5		SK22	土師器	碗		(13.9)		内 回転なで 外 回転なで		SK48
41－6		SK22	土師器	坏			3.8	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SK42
41－7		SK22	土師器	碗		(15.8)		内 回転なで 外 回転なで		SK38
41－8	78	SK22	土師器	高台付碗	6.5	14.6	8.0	内 回転なで 外 回転なで、なで		SK22
41－9	78	SK22	土師器	高台			4.8			SK44
41－10		SK22	土師器	高台付杯			5.9	内 回転なでか 外 回転なで、糸切り		SK39
41－11		SK22	青白磁	合子						SA98
41－12	78	SK22	土師器	鍋		(16.6)		内 横毛目、なで、へら削り 外 横毛目、なで		SK24
41－13		SK22	須恵器	長頸壺				内 横なで 外 横なで		SJ96
42－1		SK52	土師器	杯	2.7	(11.6)	(7.8)	内 回転なで、赤彩 外 回転なで、赤彩		SJ21
43－1		SK03	須恵器	碗		12.4		内 回転なで 外 回転なで		SJ 3
43－2		SK03	須恵器	鉢		13.6		内 回転なで 外 回転なで、へら削り、なで		SJ 2
43－3		SK03	須恵器	碗		14.6		内 回転なで 外 回転なで		SJ 1
43－4		SK03	須恵器	杯身				内 回転なで 外 回転なで		SJ 8
43－5		SK03	土師器	壺				内 横なで、へら削り 外 横なで、横毛目、なで		SJ18
43－6		SK03	土師器	壺		(24.4)		内 横なで、へら削り 外 横なで、横毛目、なで		SJ13
44		SK15	土師器	壺		(17.4)		内 横なで、へら削り 外 横なで、横毛目		SJ34
46－1	79	SK103	土師器	壺		(19.0)		内 横なで、へら削り 外 横なで、へら削り		SN79
46－2	79	SK104	土師器	壺		16.8		内 横なで、へら削り 外 横なで、横毛目		SJ37
46－3	79	SK105	土師器	鍋		(13.6)		内 横なで、斜目 外 横なで、なで、斜目		SK74
46－4	79	SK108	土師器	壺				内 横なで、へら削り 外 横なで		SJ36
46－5	79	SK109	弥生土器	鉢				内 横なで 外 横なで		SJ40
46－6	79	SK109	弥生土器	甕			3.8	内 へら削り 外 横なで、なで		SK73
46－7	79	SK109	土師器	壺				内 横なで、へら削り、なで 外 横なで、横毛目、なで		SJ39
46－8	79	SK21	土師器	高杯		(21.5)		内 横なで、暗文 外 横なで、なで、暗文		SJ 5
46－9	79	SK21	土師器	壺		(20.6)		内 横なで、へら削り 外 横なで		SJ15
46－10	79	SK23	須恵器	杯蓋				内 回転なで、なで 外 回転なで、へら削り		SJ 9
46－11	79	SK23	土師器	壺		13.8		内 横なで、へら削り 外 横なで		SJ14
46－12	79	SK23	土師器	甕	26.0	(18.4)		内 横なで、なで、へら削り 外 横なで、横毛目、なで	SD19、SD20でも出土	SD49

挿図番号	写真	出土地点	器種	器種	器高	口径	底径	手法の特徴		備　考	実測番号
48－13	79	SK23	土師器	壺		16.8		内 横なで			SJ 5
								外 横なで			
48－14	79	SK23	縄文土器	深鉢	3.0			内 条痕			SJ12
								外 条痕			
47		SK104	手捏ね土器			4.6	4.5	内 指頭圧痕			SK104
								外 指頭圧痕			
48－1		SK17	土師器	壺		(14.6)		内 横なで、へら削り			SC 5
								外 横なで			
48－2		SK17	土師器	壺		(14.1)		内 横なで			SC 4
								外 横なで			
48－3	78	SK17	土師器	壺		(14.9)		内 横なで、へら削り			SC 8
								外 横なで、刷毛目			
48－4		SK17	土師器	壺		(21.4)		内 横なで、へら調き、へら削り			SB10
								外 横なで、羽状文			
48－5	78	SK17	土師器	壺				内 横なで			SB 5
								外 横なで			
48－6		SK17	土師器	壺				内 横なで			SC 6
								外 横なで			
48－7	78	SK17	土師器	高杯		(12.8)		内 杯部、脚毛目、なで、指頭圧痕			SB 6
								外 へら調き、刷毛目、なで			
50－1	79	SK02	弥生土器	壺	23.8	14.0		内 横なで、刷毛目、へら削り			SG17
								外 横なで、調毛目、へら調き			
50－2	79	SK02	弥生土器	壺	22.5	(14.5)	5.2	内 横なで、へら削り、なで			SH 9
								外 横なで、刷毛目、へら調き、刺突文			
50－3	79	SK02	弥生土器	壺	23.2	12.7	4.9	内 横なで、調毛目、へら削り			SG19
								外 横なで、調毛目、刺突文、へら調き			
50－4	79	SK02	弥生土器	壺	33.0	20.1	5.5	内 横なで、原毛目、へら調き			SG22
								外 横なで、へら調き、刺突文			
50－5		SK02	弥生土器	壺			5.2	内 へら削り、指頭圧痕			SG18
								外 へら調き			
50－6		SK02	弥生土器	壺	26.8	(14.0)	5.7	内 横なで、へら削り			SH10
								外 横なで、へら調き、刺突文			
50－7	79	SK02	弥生土器	壺		23.3		内 横なで、調毛目、へら削り			SN62
								外 横なで、調毛目、へら調き、刺突文			
50－8		SK02	弥生土器	壺		(20.3)		内 横なで、調毛目、へら削り			SG16
								外 横なで、へら調き、刺突文			
50－9	79	SK02	弥生土器	壺		21.4		内 横なで、調毛目、へら削り			SN60
								外 横なで、横毛目、刺突文			
51－1		SK01	弥生土器	壺		15.0		内 横なで、へら削り			SG20
								外 横なで、原毛目、へら調き、刺突文			
51－3		SK01	弥生土器	鉢			(4.6)	内 刷り、なで			SB34
								外 なで			
51－4		SK01	弥生土器	壺				内 へら削り、なで			SC50
								外 調毛目、なで、へら磨き、刺突文			
58－1		SD06	須恵器	杯蓋	(3.2)	(9.8)		内 回転なで		内面にへら記号	SO41
		8区4層						外 回転なで、へら切り、なで			
58－2		SD06	須恵器	杯蓋	3.6	(10.6)		内 回転なで、竹管文			SA25
		4区4層						外 回転なで、へら切り、へら削り、なで			
58－3		SD06	須恵器	杯身	3.7	(11.0)		内 回転なで、なで			SGM20
		4層						外 回転なで			
58－4		SD06	須恵器	杯身		(10.2)		内 回転なで、なで			SGM10
		4層						外 回転なで			
58－5		SD06	須恵器	杯身	3.7	11.2		内 回転なで、なで			SO17
		8区1層						外 回転なで、へら切り、なで			
58－6		SD06	須恵器	杯身	3.3	7.8		内 回転なで、なで			SO27
		7区5層						外 回転なで			
58－7		SD06	須恵器	蓋	2.4	(10.0)		内 回転なで、なで			SA29
		5.7区4.5層						外 回転なで、へら削り、なでか			
58－8	80	SD06	須恵器	蓋	2.0	8.2		内 回転なで、なで			SO34
		7区4.5層						外 回転なで、へら削り			
58－9	80	SD06	須恵器	鉢	3.6	10.6	5.3	内 回転なで、なで			SA24
		4層						外 回転なで、へら削り、へら切り、なで			
58－10		SD06	須恵器	蓋	3.0	(12.2)		内 回転なで、なで			SA21
		4区5層						外 回転なで、へら削り、なで			
58－11	80	SD06	須恵器	壺	3.3	(12.4)		内 回転なで、なで			SO23
		6～8区4.5層						外 回転なで、へら削り、なで			
58－12	80	SD06	須恵器	蓋	3.2	12.3		内 回転なで			SGM5
		4区4層						外 回転なで、なで			
58－13	80	SD06	須恵器	蓋	2.9	12.8		内 回転なで、なで			SO9
		8区3層						外 回転なで			
58－14	80	SD06	須恵器	蓋	3.3	(14.8)		内 回転なで、なで			SO25
		7区4層						外 回転なで、へら削り、なで			
58－15	80	SD06	須恵器	蓋	3.7	(15.1)		内 回転なで			SA30
		4区4層						外 回転なで、へら削り、竹管文			
58－16	80	SD06	須恵器	蓋	3.3	(13.3)		内 回転なで、なで			SO31
		7区3層						外 回転なで、へら削り、なで			
58－17		SD06	須恵器	蓋	3.7	(14.0)		内 回転なで、なで			SO24
		3.4区4層						外 回転なで、へら削り、なで			
58－18	80	SD06	須恵器	蓋	3.0	(14.4)		内 回転なで、なで		内面にへら記号	SO29
		6区4層						外 回転なで、へら削り、なで			
58－19		SD06	須恵器	蓋	2.8	14.7		内 回転なで、なで			SO6
		7区4層						外 回転なで、へら削り、なで			
58－20	80	SD06	須恵器	蓋	2.0	(14.3)		内 回転なで、なで			SO35
		2区4.5層						外 回転なで、へら削り、なで			
58－21	80	SD06	須恵器	蓋	3.7	14.6		内 回転なで、なで		内面にへら記号	SO21
		7.8区4.5層						外 回転なで、へら削り			
58－22	80	SD06	須恵器	蓋	3.9	16.0		内 回転なで、なで			SO19
		7区4.5層						外 回転なで、へら切り、なで			
58－23	80	SD06	須恵器	蓋	2.8	14.1		内 回転なで、なで			SO43
		7.8区3層						外 回転なで、へら削り			

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径		手法の特徴	備考	実測番号
58－24	80	SD06 6,4区4層	須恵器	蓋	2.4	15.5		内 外	なで 回転なで、へら削り、なで		SA 1
58－25		SD06 7区4層	須恵器	蓋	2.9	(16.4)		内 外	回転なで、なで 回転なで、へら削り、なで		SO32
58－26	80	SD06 1,2区4,5層	須恵器	蓋		12.3		内 外	回転なで、なで 回転なで、へら削り、なで		SO16
58－27	80	SD06 2,3区4,5層	須恵器	蓋		(13.8)		内 外	回転なで、なで 回転なで、へら削り、なで		SO33
58－28		SD06 2,3区4,5層	須恵器	蓋		(19.9)		内 外	回転なで、なで 回転なで、へら削りのちなで		SO30
58－29		SD06 2区5層	須恵器	高台付碗			7.7	内 外	回転なで、なで 回転なで		SN 4
58－30	80	SD06 6区	須恵器	高台付碗	4.4	(13.4)	7.4	内 外	回転なで、なでか 回転なで、へら削り		SA 4
58－31		SD06 3区5層	須恵器	高台付碗	5.2	(14.3)	8.8	内 外	回転なで、なで 回転なで、へら切り、なで		SO48
58－32		SD06 3区5層	須恵器	高台付碗			8.0	内 外	回転なでのちなで 回転なで、へら切り、なで、竹管文		SO37
58－33		SD06 5層	須恵器	高台付碗	5.2	(13.9)	8.0	内 外	回転なで、なで 回転なで		SA27
58－34		SD06 7区4層	須恵器	高台付碗	5.0	(14.8)	7.9	内 外	回転なで、なで 回転なで		SN 9
58－35	80	SD06 4区4層	須恵器	高台付碗	4.5	(12.3)	6.9	内 外	回転なで、なで 回転なで		SA 5
58－36	80	SD06 8区4層	須恵器	高台付碗	4.5	14.9	7.9	内 外	回転なで、なで 回転なで、へら切り		SO15
58－37		SD06 6区4層	須恵器	高台付碗	5.3	(16.1)	(9.1)	内 外	回転なで、なで 回転なで		SGM14
58－38		SD06 7,8区4層	須恵器	高台付碗	4.9	16.3	9.0	内 外	回転なで、なで 回転なで、へら削り、なで		SO39
58－39		SD06 3,4区4層	須恵器	高台付碗	5.0	(17.3)	(8.4)	内 外	回転なで、なで 回転なで、へら削り、なで	底部外面にへら記号	SO47
58－40		SD06 7区3層	須恵器	高台付碗	5.0	(12.9)	7.6	内 外	回転なで、なで 回転なで、静止糸切り、なで		SO38
58－41		SD06 8区5層	須恵器	高台付碗	5.2	(13.8)	8.1	内 外	回転なで、なで 回転なで、静止糸切り		SO46
58－42		SD06 4,6区4,5層	須恵器	高台付碗			8.0	内 外	回転なで、なで 回転なで、静止糸切り		SN 5
58－43		SD06	須恵器	高台付碗				内 外	回転なで、なで 回転なで、静止糸切り、円形3方透かし		SN32
59－1		SD06 2区4,5層	須恵器	高台付碗	4.4	12.2	8.9	内 外	回転なで、なで 回転なで、なで		SO10
59－2	80	SD06 4,6区4層	須恵器	高台付碗		(18.7)	(13.6)	内 外	回転なで、なで 回転なで、回転糸切り		SGM15
59－3		SD06 8区4層	須恵器	高台付碗	4.9	(12.1)	(8.6)	内 外	回転なで、なで 回転なで、なで		SI 1
59－4		SD06 8区	須恵器	高台付碗			(7.8)	内 外	回転なで、なで 回転なで、なで		SN 3
59－5		SD06 C－5	須恵器	高台付碗			10.2	内 外	回転なで、なで 回転なで、なで		SI 2
59－6	80	SD06 8区4層	須恵器	高台付碗	6.0	(16.2)	10.9	内 外	回転なで、なで 回転なで、回転糸切り、なで		SA 3
59－7	80	SD06 1,6区	須恵器	高台付碗	6.9	16.6	10.1	内 外	回転なで、なで 回転なで、回転糸切り		SO11
59－8		SD06 4区4層	瑞泉器	碗		14.1		内 外	回転なで 回転なで		SJ25
59－9		SD06 1～3区5層	須恵器	碗	3.6	(12.7)	7.5	内 外	回転なで、なで 回転なで、静止糸切り		SA53
59－10	80	SD06 4区4層	須恵器	碗	3.9	11.9	7.0	内 外	回転なで、なで 回転なで、静止糸切り		SGM22
59－11	80	SD06 5,4区5層	須恵器	碗	4.0	(12.5)	8.7	内 外	回転なで、なで 回転なで、なで、静止糸切り		SA10
59－12		SD06 7,4区4層	須恵器	碗	3.2	(12.7)	10.8	内 外	回転なで、なで 回転なで、静止糸切り		SA25
59－13		SD06 3区	須恵器	碗	(3.7)	(12.6)	7.4	内 外	回転なで、なで 回転なで、静止糸切り		SO49
59－14		SD06 7,8区5層	須恵器	碗	3.6	(14.2)	8.9	内 外	回転なで、なで 回転なで、静止糸切り		SA54
59－15	80	SD06 3区4,5層	須恵器	碗	4.4	11.3	6.3	内 外	回転なで、なで 回転なで、回転糸切り		SO 4
59－16	80	SD06 2区4層	須恵器	碗	4.0	11.7	6.6	内 外	回転なで 回転なで、回転糸切り	内面に墨付着	SO 1
59－17	80	SD06 2,3区4層	須恵器	碗	4.1	(11.7)	7.4	内 外	回転なで、なで 回転なで、回転糸切り		SO12
59－18	80	SD06 4区4層	須恵器	碗	3.9	11.5	8.7	内 外	回転なで、なで 回転なで、なで、回転糸切り		SGM3
59－19	80	SD06 1,3区4層	須恵器	碗	3.9	12.0	8.0	内 外	回転なで、なで 回転なで、回転糸切り		SO 3
59－20	80	SD05 3区4層	須恵器 須恵器	碗	4.4	12.1	(7.1)	内 外	回転なで、なで 回転なで、回転糸切り		SO45
59－21		SD05 1,2区4,5層	須恵器	碗	4.3	(12.4)	8.0	内 外	回転なで、なで 回転なで、なで、回転糸切り		SN10
59－22	80	SD06 4区4,5層	須恵器	碗	4.0	(12.5)	8.1	内 外	回転なで、なで 回転なで、回転糸切り		SA 6
59－23	80	SD06 4区4,5層	須恵器	碗	4.5	12.8	7.8	内 外	回転なで、なで 回転なで、なで、回転糸切り		SGM4
59－24	80	SD06 4区5層	須恵器	碗	4.1	(12.7)	7.4	内 外	回転なで、なで 回転なで、回転糸切り		SGM1
59－25		SD06 2区4層	須恵器	碗	4.3	13.3	8.9	内 外	回転なで、なで 回転なで、回転糸切り		SO14

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径		手法の特徴	備　考	実測番号
59—26	80	SD06 3区4層	須恵器	鉢	5.5	14.6	9.4	内 外	回転なで、なで 回転なで、回転糸切り		SO 5
59—27	80	SD06 1区4層	須恵器	鉢	5.9	14.9	11.2	内 外	回転なで、なで 回転なで、回転糸切り	内面と口縁部に墨付着	SO 2
59—28		SD05 4区5層	須恵器	鉢	(5.9)	(13.6)	(8.3)	内 外	回転なで、なで 回転なで、へら削り、回転糸切り、なで		SGM19
60—1		SD06 1、2区4、5層	須恵器	皿	2.1	(12.6)	(9.2)	内 外	回転なで、なで 回転なで、なで、静止糸切りか		SN12
60—2	80	SD06 4区5層	須恵器	皿	2.8	14.9	8.9	内 外	回転なで、なで 回転なで、へら切り		SGM2
60—3	80	SD05 2区4層	須恵器	鉢	2.6	13.8	8.9	内 外	回転なで、なで 回転なで、回転糸切り		SO 7
60—4		SD05 4区4層	須恵器	皿	2.4	(14.6)	11.2	内 外	回転なで、なで 回転なで、糸切り		SA 9
60—5	80	SD05 4区4、5層	須恵器	皿	2.9	(15.3)	11.3	内 外	回転なで、なで 回転なで、なで、回転糸切り		SGM7
60—6	80	SD06 3、4区5層	須恵器	高台付皿	3.3	(16.1)	11.8	内 外	回転なで、なで 回転なで、回転糸切り		SG36
60—7	80	SD06 4区4層	須恵器	高台付皿	3.4	(19.0)	11.4	内 外	回転なで、なでか 回転なで、糸切り		SA12
60—8	80	SD06 8区3層	須恵器	高台付皿	2.7	(18.2)	(13.8)	内 外	回転なで、なで 回転なで、回転糸切りか	内外面に火欅風の文様	SN15
60—9		SD05 3区1、2層	須恵器	高台付皿	2.8	18.8	13.4	内 外	回転なで、なで 回転なで、へら削り、なで		SO 8
60—10	80	SD06 4区4層	須恵器	高台付鉢	3.7	(19.7)	12.0	内 外	回転なで 回転なで		SGM12
60—11		SD06 5層	須恵器	高杯			7.0	内 外	回転なで、なで 回転なで	2段2方透かし	SA16
60—12		SD06 4、5、7区3、4層	須恵器	高杯	13.1	(11.5)	(9.0)	内 外	回転なで 回転なで、へら削り、カキ目、なで		SG44
60—13		SD06 8区2、3層	須恵器	高杯				内 外	回転なで、なで 回転なで、へら削り、3方透かし		SN31
60—14		SD06 4区4層	須恵器	高杯			11.9	内 外	回転なで 回転なで	2段2方透かし	SA18
60—15		SD05 5層	須恵器	高杯			8.9	内 外	回転なで、なで 回転なで	2方透かし	SA19
60—16		SD06 4区3層	須恵器	高杯	10.5	(15.2)	8.7	内 外	回転なで、なで 回転なで、なで	2方透かし	SA17
60—17		SD06 7区5層	須恵器	高杯			(8.9)	内 外	回転なで、なで、へら削り 回転なで		SN26
60—18		SD06 1、2区1層	須恵器	高杯				内 外	回転なで、なで、絞り目 回転なで		SN38
60—19		SD06 8区1層	須恵器	高杯				内 外	回転なで、なで 回転なで、へら削り		SN30
60—20	81	SD06 2区4層	須恵器	灯明皿	2.9	7.9	3.9	内 外	回転なで 回転なで、静止糸切り、なでか		SA45
60—21		SD06 1、3、5区4、5層	須恵器	灯明皿	2.0	8.4	4.5	内 外	回転なで 回転なで、糸切り		SA48
60—22	81	SD06 2、3区3層	須恵器	灯明皿	2.5	8.8	5.3	内 外	回転なで 回転なで、回転糸切り		SA49
60—23	81	SD06 2、3区4層	須恵器	灯明皿	3.2	8.4	5.4	内 外	回転なで 回転なで、静止糸切り		SA47
60—24	81	SD06 2区4層	須恵器	灯明皿	2.6	9.6	6.0	内 外	回転なで 回転なで、回転糸切りか		SA46
60—25	81	SD06 1、2区3層	須恵器	灯明皿	2.7	10.0	5.9	内 外	回転なで 回転なで、静止糸切り		SA42
60—26	81	SD06 1、2区4、5層	須恵器	灯明皿	3.0	10.3	6.4	内 外	回転なで 回転なで、糸切り		SA43
60—27	81	SD06 1、7区4、5層	須恵器	灯明皿	2.6	11.2	6.2	内 外	回転なで 回転なで、静止糸切りか		SA44
60—28	81	SD06 4、5区4層	須恵器	灯明皿	2.3	11.3	7.8	内 外	回転なで 回転なで、回転糸切り		SA50
60—29	81	SD06 3、5区4、5層	須恵器	托	2.0	14.5	8.0	内 外	回転なで 回転なで、静止糸切り		SA31
60—30	81	SD05 8区4層	須恵器	鉄鉢形土器	10.3	16.8		内 外	回転なで、なで へら削り、なで		SA32
60—31		SD06 1～4区1、3～5層	須恵器	鉄鉢形土器	9.9	18.4		内 外	回転なで、なで へら削り、なで、静止糸切り		SA34
60—32		SD05 2、3区5層	須恵器	鉄鉢形土器	10.4	21.0		内 外	回転なで、なで へら削り、なで		SA41
61—1		SD06 1～4区一括	須恵器	★				内 外	回転なで、頂部圧痕 回転なで、連続文、へら書き沈線、刺突文		SN33
61—2		SD06 7区5層	須恵器	★			4.8	内 外	回転なで、絞り目 回転なで、へら削り		SN34
61—3		SD06 4区5層	須恵器	★			4.0	内 外	回転なで 回転なで、へら削り、静止糸切り		SA14
61—4		SD06 7区5層	須恵器	★			5.5	内 外	回転なで、なで 回転なで、へら削り、静止糸切り		SN35
61—5		SD06 3区4層	須恵器	高台付★	10.5	7.7	5.5	内 外	回転なで 回転なで、なで		SA35
61—6		SD06 3区5層	須恵器	鉢転		(6.9)		内 外	回転なで 回転なで、なで		SN24
61—7		SD06 3、4区5層	須恵器	壺			6.0	内 外	回転なで 回転なで、へら削り、なで		SN18
61—8		SD06 1区1層	須恵器	長頸壺		(9.0)		内 外	回転なで 回転なで、絞り目		SN25
61—9		SD06 6区	須恵器	壺		(8.5)		内 外	回転なで 回転なで、なで		SN27
61—10	81	SD06 3区5層	須恵器	長頸壺			(8.3)	内 外	回転なで 回転なで、へら削り		SN23

掲載番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴		備　考	実測番号
61－11		SD06 1～3,6区4,5層	須恵器	長頸壺			6.6	内 回転なで、同心圧痕 外 回転なで、へら削り、静止糸切り			SA35
61－12	81	SD06 8区3層	須恵器	壺			5.8	内 回転なで 外 回転なで、へら削り、回転糸切り			SN35
61－13		SD06 3,4区1～3層	須恵器	水瓶			8.2	内 回転なで、なで 外 回転なで、回転糸切り			SN16
61－14	81	SD06 1～4区4,5層	須恵器	水瓶			7.8	内 回転なで、なで 外 回転なで、へら削り、なで		SD16でも出土	SA39
61－15		SD06 4区1～3層	須恵器	壺			(7.0)	内 回転なで、なで 外 回転なで、へら削り、なで			SN21
61－16	81	SD06 3,8区4層	須恵器	長頸壺			(9.2)	内 回転なで、なで 外 回転なで、叩き、なで			SA37
61－17	81	SD06 2～4区4,5層	須恵器	短頸壺	14.8	13.6	8.5	内 回転なで 外 回転なで			SA36
61－18		SD06 1区4層	須恵器	壺			8.4	内 回転なで 外 回転なで、へら削り、回転糸切り			SN22
61－19	81	SD06 2～5,7,8区4,5層	須恵器	短頸壺か			19.6	内 回転なで 外 回転なで、同頸圧痕、カキ目			SA51
61－20	81	SD06 2～4区4層	須恵器	平瓶	17.3	10.1	(10.1)	内 回転なで 外 回転なで、へら削り、カキ目			SA40
61－21	81	SD06 6区4層	須恵器	水差し			8.0	内 回転なで 外 回転なで、へら削り、へら切り			SA20
62－1		SD06 4,5区4,5層	須恵器	長頸壺			(8.8)	内 回転なで、沈線 外 回転なで、へら削り、なで			SGM21
62－2		SD06 2,4区4層	須恵器	高台付壺				内 回転なで、たたき 外 へら削り、叩き、なで			SB16
62－3		SD06 2～4区4,5層	須恵器	壺				内 横なで、叩き 外 横なで、かき目、叩き			SB14
62－4		SD06 4区4層	須恵器	壺			(21.2)	内 回転なで 外 回転なで			SC15
62－5		SD06 1～3区4,5層	須恵器	壺			(17.3)	内 回転なで、叩き 外 回転なで、叩き			SC16
62－6		SD06 2,4,5区4,5層	須恵器	壺			(17.0)	内 回転なで、叩き 外 回転なで、叩き		外面にへら記号	SB15
62－7	81	SD06 1,2区4層	須恵器	壺			(13.2)	内 回転なで、叩き、なで 外 回転なで、叩き			SC17
62－8	81	SD06 4区4,5層	須恵器	壺	19.7	15.7		内 回転なで、叩き 外 回転なで、叩き		SK02でも出土	SC18
62－9		SD06 2～4,7区4,5層	須恵器	丸底壺				内 回転なで、叩き 外 回転なで、叩き			SA99
62－10	81	SD06 2～4区4,5層	須恵器	壺		(14.8)		内 回転なで、へら削り、叩き 外 回転なで、叩き、かき目			SB17
62－11	81	SD06 1～4,7,8区4,5層	須恵器	壺				内 回転なで、叩き 外 回転なで、叩き			SC19
63－1	82	SD06 5,6区4,5層	須恵器	横瓶	24.0	12.8		内 回転なで、叩き 外 回転なで、叩き、カキ目			SH11
63－2	82	SD06 1～4,7,8区4,5層	須恵器	横瓶	26.0	13.2		内 回転なで、叩き 外 回転なで、叩き、カキ目			SG21
63－3		SD06 8区3層	須恵器	横瓶		(13.3)		内 回転なで、なで、叩き 外 回転なで、叩き			SC12
63－4		SD06 7区3層	須恵器	横瓶		(14.1)		内 回転なで、叩き 外 回転なで、叩き			SC13
63－5		SD06 5区5層	須恵器	壺		(38.6)		内 叩き 外 叩き			SJ95
64－1	82	SD06 4区5層	土師器	高杯			(9.4)	内 なで、へら削り、なで 外 なで、へら磨き			SK83
64－2	82	SD06 8区5層	土師器	高杯			10.3	内 へら削り、なで 外 へら調整、なで、赤彩			SK87
64－3	82	SD06 3区4,5層	土師器	高杯	9.8	(13.4)	(7.4)	内 横なで、なで、赤彩、へら削り 外 横なで、へら磨き、なで、赤彩			SK70
64－4	82	SD06 7区3層	土師器	椀	4.5	(14.2)		内 回転なで、なで、暗文 外 回転なで、なで			SN85
64－5	82	SD06 1区5層	土師器	皿	(3.7)	(19.0)	(11.0)	内 横なで、なで、黒毛目か、赤彩 外 横なで、へら削り、黒毛目、赤彩			SK55
64－6	82	SD06 8区4,5層	土師器	坩	5.0	(13.2)		内 横なで、なで、赤彩 外 横なで、なで、赤彩			SK59
64－7	82	SD06 1区5層	土師器	鍋	4.9	(15.0)		内 横なで、なで、赤彩 外 横なで、黒毛目、なで、赤彩			SK58
64－8		SD06 3区4層	土師器	鍋	4.4	(15.2)	(6.4)	内 回転なで、赤彩、暗文 外 回転なで、へら削り、静止糸切り、赤彩			SN102
64－9		SD06 7区5層	土師器	鍋		(13.8)		内 回転なで、赤彩、暗文 外 回転なで、赤彩			SN99
64－10		SD06	土師器	鍋			(9.9)	内 回転なで、赤彩、暗文 外 回転なで、へら削り、静止糸切り、赤彩			SN101
64－11		SD06 3,4区4層	土師器	鍋			(5.2)	内 回転なで、なで、赤彩、暗文 外 回転なで、へら削り、静止糸切り、赤彩			SN100
64－12	82	SD06 2,3区4,5層	土師器	鍋	4.7	14.1	5.9	内 回転なで、なで 外 回転なで		底部外面にへら記号	SN90
64－13	82	SD06 2,3区4,5層	土師器	鍋	3.4	10.4	6.8	内 回転なで、赤彩 外 回転なで、なで、赤彩			SN92
64－14		SD06 2,3区4層	土師器	鍋	4.9	(11.0)	8.0	内 回転なで、なで、赤彩 外 回転なで、なで、赤彩			SN93
64－15	82	SD06 7区4層	土師器	鍋	3.9	11.0	7.5	内 回転なで、赤彩 外 回転なで、へら削り、赤彩			SN98
64－16	82	SD06 3,4区4層	土師器	鍋	3.1	11.7	8.3	内 回転なで、赤彩 外 回転なで、へら削り、赤彩			SN91
64－17	82	SD06 4,5区4,5層	土師器	鍋	4.1	11.9	8.4	内 回転なで、赤彩 外 回転なで、へら削り、なで、赤彩			SGM26
64－18	82	SD06 2,3区4,5層	土師器	鍋	3.7	12.4	9.0	内 回転なで、赤彩 外 回転なで、へら削り、赤彩			SN52

掲図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	備考	実測番号
64－19		SD06 2,3区4,5層	土師器	坏	3.0	(12.3)	10.5	内 回転なで、赤彩 外 回転なで、へら削り、赤彩		SN57
64－20	82	SD06 2区4層	土師器	坏	3.5	12.9	10.0	内 回転なで、なで、赤彩 外 回転なで、へら削り、赤彩、底部に複数の定規		SN64
64－21	82	SD06 2区4層	土師器	鉢	3.4	12.7	9.0	内 回転なで、なで、赤彩 外 回転なで、へら切り か、赤彩		SK13
64－22		SD06 2区4層	土師器	鉢	3.4	(13.2)	(10.2)	内 回転なで、赤彩 外 回転なで、へら削り、赤彩		SN55
64－23	82	SD06 2区4層	土師器	鉢	4.2	13.9	10.6	内 回転なで、赤彩 外 回転なで、へら削り、赤彩		SN51
64－24		SD06 4区3層	土師器	鉢	3.7	14.3	12.0	内 回転なで、なで、赤彩 外 回転なで、へら削り、なで、赤彩		SGM23
64－25		SD06 7,8区4層	土師器	鉢	(3.8)	(14.4)	(11.0)	内 回転なで、なで、赤彩 外 回転なで、へら削り、赤彩		SN60
64－26	82	SD06 1～3区4層	土師器	鉢	4.8	14.7	11.9	内 回転なで、なで、赤彩 外 回転なで、へら引り、赤彩		SN63
64－27		SD06 7区4層	土師器	鉢	3.0	(16.6)	(13.4)	内 回転なで、なで、赤彩 外 回転なで、へら引り、赤彩		SN54
64－28	82	SD06 8区5層	土師器	皿	(2.6)	(19.8)	(17.4)	内 回転なで、赤彩 外 回転なで、へら削り、赤彩		SN56
64－29		SD06 1区3層	土師器	高台付鉢			(7.5)	内 回転なで、なで、赤彩 外 回転なで、なで、赤彩		SN98
64－30		SD06 3区4層	土師器	高台付鉢			(10.2)	内 回転なで、赤彩 外 回転なで、赤彩		SN96
64－31		SD06 2区4層	土師器	高台付鉢			(12.5)	内 回転なで、赤彩 外 回転なで、赤彩		SN97
64－32	82	SD06 6区層	土師器	高台付鉢	6.1	(15.9)	9.0	内 回転なで、なで、赤彩 外 回転なで、なで、赤彩	底部外面にへら記号	SK17
64－33		SD06 2,3区4,5層	土師器	鉢		(18.6)		内 横なで、刷毛目か、赤彩 外 横なで、へら削り、赤彩		SK64
64－34	82	SD06 1～4区4,5層	土師器	鉢	7.9	(19.6)		内 回転なで、なで、赤彩 外 回転なで、へら削り、なで、赤彩		SK18
64－35	82	SD06 3区4層	土師器	鉢	6.8	(13.8)	6.4	内 回転なで 外 回転なで、静止糸切り、なで		SK16
64－36	82	SD06 7区3層	土師器	坏	4.0	12.2	6.9	内 回転なで、なで、赤彩 外 回転なで、へら切り か		SK 4
64－37		SD06 1,2区3層	土師器	壺			5.8	内 回転なで 外 回転なで、へら削り、静止糸切り、赤彩		SN67
64－38		SD06 4区5層	土師器	壺			5.1	内 回転なで 外 回転なで、へら削り、静止糸切り、赤彩		SN66
65－1	82	SD06 5層	土師器	坏	4.0	11.7	7.0	内 回転なで、なで 外 回転なで、へら切り か		SGM24
65－2	82	SD06 5区3層	土師器	鉢	3.6	(13.4)	(8.1)	内 回転なで、なで 外 回転なで、へら切り、なで		N151
65－3	83	SD06 2区2層	土師器	高台付鉢	3.5	10.5	4.7	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SK 7
65－4	83	SD06 3区3層	土師器	高台付鉢	3.5	10.7	5.1	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SN42
65－5	83	SD06 2区3層	土師器	高台付鉢	3.6	11.5	5.0	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SK 9
65－6	83	SD06 2区2層	土師器	鉢	4.8	11.3	6.5	内 回転なで、なで 外 回転なで、回転糸切り		SN40
65－7	83	SD06 4,5区3層	土師器	鉢	4.5	11.6	6.0	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SGM32
65－8	83	SD06 4区3層	土師器	鉢	4.2	(11.5)	6.1	内 回転なで、なで 外 回転なで、静止糸切り		SGM25
65－9	83	SD06 4,5区3層	土師器	鉢	4.1	(11.6)	6.0	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SGM29
65－10	83	SD06 4,5区3層	土師器	坏	4.0	(11.7)	5.8	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SGM27
65－11	83	SD06 4区3層	土師器	坏	5.0	12.1	5.8	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SN45
65－12	83	SD06 3区3層	土師器	坏	4.7	12.1	6.6	内 回転なで、なで 外 回転なで、回転糸切り		SK14
65－13	83	SD06 7区3層	土師器	鉢	4.4	12.2	6.3	内 回転なで、なで 外 回転なで、回転糸切り		SK 6
65－14	83	SD06 4区3層	土師器	鉢	4.8	12.2	5.4	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SK 5
65－15	83	SD06 4区3層	土師器	鉢	4.8	12.5	5.9	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SN41
65－16	83	SD06 3区3層	土師器	鉢	4.0	(12.5)	5.9	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SK15
65－17	83	SD06 4区3層	土師器	鉢	4.6	(12.5)	6.0	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SGM33
65－18	83	SD06 3区3層	土師器	鉢	4.8	12.6	5.4	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SK 1
65－19	83	SD06 3区3層	土師器	鉢	4.0	13.0	5.8	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SK 3
65－20	83	SD06 4区3層	土師器	鉢	4.8	(12.8)	5.5	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SK 8
65－21		SD06 4区3層	土師器	坏	5.5	(14.2)	5.3	内 回転なで 外 回転なで、糸切り		SGM26
65－22	83	SD06 5,6区3層	土師器	高台付鉢	5.9	14.1	7.3	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		SGM30
65－23	83	SD06 8区3層	土師器	高台付鉢	6.6	13.6	7.2	内 回転なで 外 回転なで、静止糸切り		SN43
65－24	83	SD06 3区2,3層	土師器	高台付鉢	6.6	15.2	6.3	内 回転なで 外 回転なで		SN46
65－25	83	SD06 2区3層	土師器	高台付鉢	7.1	15.2	8.8	内 回転なで 外 回転なで		SN48

挿図番号	写真	出土地点	器種	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	備考	実測番号
65－26	83	SD08 3区3層	土師器	高台付碗	7.4	16.2	9.6	内 回転なで、へら削り台 外 回転なで、へら削りか		SN47
65－27	83	SD08 4、3区3層	土師器	高台付碗	7.2	13.9	8.5	内 回転なで 外 回転なで		SN49
65－28	83	SD08 4区2、3層	土師器	高台付碗	7.1	14.9	10.8	内 回転なで、なで 外 回転なで		SK12
66－1		SD08 4、5区5層	土師器	碗		(21.2)		内 横なで、へら削り 外 横なで、指転目		SA51
66－2		SD08 2、3区4、5層	土師器	碗		(30.2)		内 横なで、斜転目、へら削り 外 横なで、斜転目		SN70
66－3		SD08 2区4層	土師器	碗		(22.2)		内 横なで、へら削り 外 横なで、斜転目		SI 3
66－4	83	SD08 4、5、7区4層	土師器	碗		(30.0)		内 横なで、へら削り 外 横なで、斜転目		SN78
66－5		SD08 4、7、8区4、5層	土師器	碗		(22.0)		内 横なで、へら削り 外 横なで、斜転目		SG 6
66－6	83	SD08 4区4、5層	土師器	碗		(22.6)		内 横なで、へら削り 外 横なで、斜転目		SN72
66－7		SD08 4区4、5層	土師器	碗		(30.2)		内 横なで、へら削り 外 横なで、斜転目		SN74
66－8		SD08 4区4層	土師器	碗		(15.8)		内 横なで、へら削り 外 横なで、指転目		SG 3
66－9		SD08 4区3、4層	土師器	碗		16.0		内 横なで、へら削り 外 横なで、指転目		SI 4
66－10	83	SD08 4、8区4、5層	土師器	碗		20.2		内 横なで、へら削り 外 横なで、なで		SN68
66－11		SD08 8区5層	土師器	碗		(26.4)		内 横なで、へら削り 外 横なで、指転目		SG 1
66－12		SD08 4区4層	土師器	碗		(28.0)		内 横なで、へら削り 外 横なで、指転目		SD10
66－13		SD08 4区5層	土師器	碗		(28.0)		内 横なで、へら削り 外 横なで、斜転目		SH 1
66－14		SD08 3、8区4、5層	土師器	碗		(30.1)		内 指転目、へら削り 外 横なで、指転目		SH 4
66－15	83	SD08 6区	土師器	皿	25.2	25.2		内 横なで、へら削り 外 横なで、斜転目、なで		SA28
67－1	83	SD08 2区1～3層	土師器	皿		(26.4)		内 横なで、へら削り 外 横なで、指転目		SN75
67－2	83	SD08 3、4区4、5層	土師器	皿		(29.4)		内 横なで、へら削り 外 横なで、斜転目		SN77
67－3	83	SD08 2、3区4層	土師器	皿		(28.6)		内 横なで、指転目、へら削り 外 横なで、指転目		SN69
67－4		SD08 2区4、5層	土師器	皿		(35.2)		内 横なで、へら削り 外 横なで、斜転目		SH 3
67－5		SD08 4、5区4層	土師器	皿		(40.4)		内 横なで、へら削り 外 横なで、斜転目		SK19
67－6		SD08 4区3層	土師器	皿		13.6		内 横なで、へら削り 外 横なで		SH 5
67－7		SD08 2、3区1～3層	土師器	皿		(24.6)		内 横なで、へら削り 外 横なで		SG13
67－8		SD08 8区2、3層	土師器	皿		(25.6)		内 横なで、へら削り 外 横なで、斜転目		SG 7
67－9		SD08 ～5、7、8区4、5層	土師器	鉢		(41.0)	(12.8)	内 横なで、へら削り 外 横なで、斜転目		SK101
67－10		SD08 6～8区4、5層	土師器	甕				内 へら削り、なで、横転目 外 なで、斜転目		SB35
68－1	84	SD08	土師器	土製支脚						SJ30
68－2	84	SD08	土師器	土製支脚						SJ28
68－3	84	SD08	土師器	土製支脚						SJ29
68－4	84	SD08	土師器	球						SK102
68－5	84	SD08	土師器	管状土錘						SK90
68－6	84	SD08	土師器	管状土錘						SK84
68－7	84	SD08	土師器	管状土錘						SK83
68－8	84	SD08	土師器	管状土錘						SK92
68－9	84	SD08	土師器	管状土錘						SK91
68－10	84	SD08	土師器	管状土錘						SK100
68－11	84	SD08	土師器	管状土錘						SK95
68－12	84	SD08 2区4層	製塩土器					内 なで 外 指頭圧痕		SJ99
68－13	84	SD08 2、3区4層	製塩土器					内 器壁圧痕 外 指頭圧痕		SJ102
68－14	84	SD08	製塩土器					内 なで 外 指頭圧痕		SJ101
68－15	84	SD08 1区4層	製塩土器					内 なで 外 指頭圧痕		SJ100
68－16	84	SD08	製塩土器					内 なで 外 指頭圧痕		SJ97
69－1	85	SD08 2～4区4、5層	須恵器	高台付碗	4.1	13.0	8.0	内 回転なで 外 回転なで	器壁「麻奥井」	SA66
69－2	85	SD08 8区4層	須恵器	高台付碗	(6.1)	(14.8)	10.8	内 回転なで、なで 外 回転なで、なで、回転糸切り	器壁	SA58
69－3		SD08 1、2、4区4、5層	須恵器	皿	2.5	13.2	8.9	内 回転なで、なで 外 回転なで、回転糸切り	器壁	SA64
69－4		SD08 1区4、5層	須恵器	碗	3.7	13.2	10.2	内 回転なで 外 回転なで	器壁「色」	SA63
69－5		SD08 2区4層	須恵器	碗	4.2	11.7	8.2	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り	器壁「メ」	SA52
69－6	85	SD08 8区4層	須恵器	碗	4.8	(11.3)	8.1	内 回転なで、なで 外 回転なで、回転糸切り	器壁	SA62

挿図番号	写真	出土地点	器種	器種	器高	口径	底径	手法の特徴		備考	実測番号
69－7		SD06 E－6	須恵器	硯				内 回転なで 外 回転糸切り		墨書	SA67
69－8		SD06 5区3、4層	須恵器	高台付皿	3.9	29.1	11.8	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り、なで		墨書	SA 5
69－9	85	SD06 4区4層	須恵器	高台付皿	4.2	(29.2)	15.1	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り、なで		墨書「法」	SA13
69－10	85	SD06 4区4、5層	須恵器	高台付皿	3.8	19.8	15.3	内 回転なで、なで 外 回転なで、回転糸切り、なで		墨書「門門」	SA 2
69－11		SD05 4区5層	土師器	鍋	4.3	(12.2)	(6.5)	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		墨書	SGM34
69－12		SD06 4、5区4、5層	土師器	鍋	4.1	11.1	6.9	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		墨書「上井」	SA30
69－13		SD06 4、5区4層	土師器	鍋	4.2	11.1	6.4	内 回転なで 外 回転なで、回転糸切り		墨書「部本」	SA65
69－14		SD06	土師器	鍋				内 回転なで 外 回転なで		墨書「本」	SA70
76－1		SD16	土師器	皿		(14.4)		内 底なで、へら削り、なで 外 横なで			SJ32
76－2	88	SD16	土師器	皿		(14.8)		内 横なで、へら削り 外 横なで、胴毛目			SK56
76－3		SD06	土師器	皿				内 横なで、へら削り 外 横なで、胴毛目			SK54
76－4		SD16	須恵器	硯		(12.3)		内 回転なで 外 回転なで			SK45
76－5	88	SD06	須恵器	鉢鉢形土器	10.0	(29.2)		内 回転なで、なで 外 回転なで、へら削り		SD06、SK09でも出土	SK85
76－6	88	SD16	須恵器	高杯				内 回転なで、なで 外 回転なで、へら削り、なで、2方透かし			SJ33
77－1		SD24	土師器	皿		(15.4)		内 横なで、へら削り 外 横なで、列点文			SK59
77－2		SD24	須恵器	壺		(15.6)		内 回転なで、なで 外 回転なで			SK48
77－3		SD24	須恵器	壺		(6.0)		内 回転なで 外 回転なで、へら削り			SK47
78－1		SD17	土師器	甕				内 横なでか、へら削りか 外 横なでか、胴毛目			SK81
78－2		SD17	土師器	高杯				内 なで、磨耗 外 横なで、胴毛目、磨耗			SK80
79－2	88	SD12	土師器	椀				内 なで、へら削り 外 横なで、胴毛目、なで			SK78
80－1		SD14	土師器	鉢		15.3		内 横なで、へら削り、竹管文 外 横なで、胴毛目、竹管文			SK77
80－2	88	SD14	土師器	高杯		(20.6)		内 横なで、なで 外 横なで		SD15でも出土	SK79
80－3	88	SD15	土師器	皿	8.5	8.4		内 横なで、なで 外 横なで、なで			SK75
80－4		SD15	土師器	皿				内 へら削り 外 胴毛目、なで			SK76
82－1		SD05	土師器	鉢		(17.0)		内 横なで、へら削りか 外 横なで			SJ49
82－2		SD05	土師器	鉢		14.4		内 横なで、へら削り 外 横なで、胴毛目			SJ47
82－3	88	SD05	土師器	鉢		14.1		内 胴毛目、横なで、へら削り 外 横なで、胴毛目			SJ48
82－4	89	SD07	土師器	甕		25.4		内 なで、へら磨き、へら削り 外 なで、へら磨き		SJ58と同一個体	SJ57
82－5	89	SD07	土師器	鉢		13.4		内 横なで、へら削り 外 横なで			SJ52
82－6	89	SD07	土師器	皿		20.6		内 横なで、なで、へら削り 外 横なで			SJ55
82－7	89	SD07	土師器	皿		17.4		内 横なで、胴毛目か 外 横なで、胴毛目			SJ54
82－8	89	SD07	土師器	甕				内 へら削り、指頭圧痕 外 胴毛目、なで、煤粉			SJ53
82－9	89	SD07	土師器	甕		(17.1)		内 胴毛目、なで、へら削り 外 なで、胴毛目			SJ56
82－10	89	SD07	土師器	高杯	11.7	23.3	12.2	内 なで 外 なで、胴毛目、円形3方透かし			SJ59
82－11	89	SD07	須恵器	杯身		(16.4)		内 回転なで 外 回転なで、へら削り		底部外面にへら記号	SJ51
82－12	89	SD19	土師器	椀				内 横なで、へら削り 外 横なで			SK55
82－13	89	SD19	土師器	高杯				内 横なで、なで、赤彩 外 横なで、胴毛目、磨耗			SK61
82－14	89	SD19	須恵器	高台付皿		(14.0)	8.8	内 回転なで、なで 外 回転なで、へら削り、静止糸切り		SK23、SD23でも出土	SK49
82－15	89	SD19	須恵器	杯蓋				内 回転なで 外 回転なで、へら撫りか			SK46
82－16		SD20	土師器	鉢		14.0		内 赤彩 J466外 なでか			SJ35
82－17		SD20	土師器	皿		(18.2)		内 横なで、へら削り 外 横なで、胴毛目		SD19、SK23でも出土	SJ36
82－18		SD20	土師器	甕		(15.6)		内 横なで 外 横なで			SK50
82－19		SD20	土師器	椀		(11.6)		内 横なで 外 横なで、へら削り			SK51
82－20		SD20	土師器	皿				内 横なで、へら削り 外 横なで、胴毛目			SK60
82－21		SD20	土師器	椀				内 横なで、胴毛目、へら削り 外 横なで、胴毛目			SK57

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴		備考	実測番号
82－22		SD20	土師器	脚部			(7.5)	内 へら削り 外 なで			SK62
83－1		GSD08	弥生土器	壺		(20.8)		内 刷毛目、横なで 外 刺突文、刷毛目、横なで			SJ58
83－2		GSD08	弥生土器	鉢	(5.0)	(15.4)		内 横なで、へら磨き 外 横なで、へら磨き			SJ69
83－3		GSD08	土師器	壺		13.2		内 横なで、へら削り 外 横なで			SJ60
83－4		GSD08	弥生土器	壺		(16.5)		内 へら磨き、へら削り 外 横なで			SJ71
83－5		GSD08	弥生土器	壺		(20.8)		内 横なで、へら削り、へら磨き 外 横なで、刷毛目			SJ67
83－6		FSD08	土製品	管状土錘							SK58
83－7		FSD08	土製品	管状土錘							SK96
84－1	89	SD01	弥生土器	壺		(20.8)		内 横なで、へら削り 外 横なで			SJ44
84－2	89	SD01	土師器	壺				内 横なで、へら削り 外 横なで			SJ42
84－3	89	SD01	弥生土器	壺			5.0	内 なで 外 へら磨き			SGK5
84－4	89	SD01	弥生土器	壺		(8.6)		内 横なで、へら磨き、へら削り 外 横なで、刷毛目、へら磨き			SGT3
84－5	89	SD01	弥生土器	壺		18.4		内 横なで、へら削り 外 刺突文、竹管文			SGK11
84－6	89	SD02	弥生土器	壺				内 横なで 外 横なで			SJ45
84－7	89	SD02	弥生土器	壺				内 横なで 外 横なで			SJ46
84－8	89	SD02	弥生土器	高杯		17.2		内 横なで、なで 外 横なで、へら磨き			SJ43
89－1	90	SD03	弥生土器	壺		(24.4)		内 へら磨き、なで 外 横なで、へら描き沈線、へら磨き			SGT8
89－2	90	SD03	弥生土器	壺		(24.8)		内 へら磨きか、刷毛目 外 刷毛、横なで、鼓毛目、へら描き沈線			SGT6
89－3	90	SD03	弥生土器	壺		(34.0)		内 刷毛目、へら磨き 外 刷毛目、櫛描き沈線、へら磨き			SGK20
89－4	90	SD03	弥生土器	壺		33.8		内 刷毛目、へら磨き 外 刷毛、へら描き沈線、刷毛目			SGK19
89－5	90	SD03	弥生土器	壺		(22.6)		内 横なで、刷毛目 外 刷毛、刷毛目、櫛描き沈線、刺突文			SGT12
89－6	90	SD03	弥生土器	壺	35.8	(31.5)	10.2	内 刷毛目、へら磨き 外 刷毛、円孔、なで、へら磨き、櫛描き沈線、刺突文			SGT21
89－7	90	SD03	弥生土器	壺		(26.5)		内 横なで 外 横なで、刷毛目、櫛描き沈線			SGK7
89－8	90	SD03	弥生土器	壺				内 なで 外 刷毛目、へら描き沈線、刺突文			SGT16
89－9	90	SD03	弥生土器	壺				内 なで 外 刷毛目、へら描き沈線、刺突文			SGT15
90－1	90	SD03	弥生土器	壺		(32.7)		内 刷毛目、刷毛目のちへら磨き 外 刷毛目			SGK12
90－2	90	SD03	弥生土器	壺	21.3	(24.2)	(6.0)	内 横なで、なで 外 横なで、なで			SGT10
90－3	90	SD03	弥生土器	壺		(16.9)		内 横なで、刷毛目 外 横なで、刷毛目			SGT9
90－4	90	SD03	弥生土器	壺		(25.8)		内 横なで、なで 外 横なで、刷毛目			SGT18
90－5	90	SD03	弥生土器	器台ミニチュア土器	9.4	(7.7)	4.1	内 横なで 外 横なで、なで			SGK1
90－6	90	SD03	弥生土器	器台ミニチュア土器			3.8	内 横なで、なで 外 横なで、なで、へら描き沈線			SGT1
90－7	90	SD03	弥生土器	鉢	9.2	(14.1)	6.8	内 横なで、なで 外 刷毛目か			SGT7
90－8	91	SD03	弥生土器	壺		(13.2)		内 へら磨き、指頭圧痕 外 指頭圧痕、へら磨き			SGT4
90－9	91	SD03	弥生土器	壺				内 なで 外 なで、へら描き沈線			SGK16
90－10	91	SD03	弥生土器	壺				内 なで 外 なで、貝殻腹縁			SGK15
90－11	91	SD03	弥生土器	壺				内 貝殻腹縁			SGK13
90－12	91	SD03	弥生土器	壺				内 横なで 外 横なで、貝殻腹縁、なで			SGT13
90－13	91	SD03	弥生土器	壺				内 なで 外 なで、へら描き沈線、斜状文			SGT14
90－14	91	SD03	弥生土器	壺				内 へら磨き 外 へら描き沈線、へら磨き、貝殻腹縁		SD02でも出土	SGK17
91－1	91	SD03	弥生土器	壺				内 へら磨き 外 へら磨き、へら描き沈線			SGK9
91－2	91	SD03	弥生土器	壺				内 へら磨き、なで 外 なで、へら描き沈線			SGT19
91－3	91	SD03	弥生土器	壺			7.4	内 刷毛目、へら磨きか 外 なで、へら描き沈線、へら磨き			SGT2
91－4	91	SD03	弥生土器	壺				外 へら磨き、へら描き沈線			SGK10
91－5	91	SD03	弥生土器	壺				内 へら磨き 外 へら磨き、へら描き沈線			SGK18
91－6	91	SD03	弥生土器	壺				内 指頭圧痕 外 へら磨き、貝殻腹縁			SGK4
91－7	91	SD03	弥生土器	壺			8.5	内 へら磨き 外 へら磨き、なで			SGK6

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	備考	実測番号
91－8	91	SD03	弥生土器	壺			10.0	内 横なで 外 へら磨き、なで		SG09
91－9	91	SD03	弥生土器	壺			10.3	内 へら磨き、なで 外 胴毛目		SG11
91－10	91	SD03	弥生土器	壺			7.8	内 胴毛目、へら磨き、なで 外 へら磨き、なで		SG12
91－11	91	SD03	弥生土器	壺				内 胴毛目 外 胴毛目のちへら磨き、細描き流線		SG20
92－1	92	SD03	縄文土器	鉢				内 条痕 外 条痕、刻目		SC39
92－2	92	SD05	縄文土器	深鉢				内 なで、不貫通の底縁刺突 外 条痕	孔列土器	SC35
92－3	92	SD03	縄文土器	鉢				内 なで 外 刻目、突起文		SB26
92－4	92	SD03	縄文土器	鉢				内 なで 外 なで		SB24
92－5	92	SD03	縄文土器	鉢				内 なで、磨き 外 磨き、流線		SB31
92－6	92	SD03	縄文土器	鉢			(1.4)	内 条痕 外 条痕、なで、流線		SC48
92－7	92	SD03	縄文土器	鉢				内 条痕 外 条痕		SC47
92－8	92	SD03	縄文土器	深鉢				内 なで 外 なで、条痕		SC36
92－9		SD03	縄文土器	鉢			(19.4)	内 条痕 外 条痕		SB33
96－1	92	SD04	縄文土器	鉢			(21.8)	内 黒色磨研 外 黒色磨研		SB30
96－2	93	SD04	縄文土器	鉢				内 なで 外 なで		SC37
96－3	92	SD04	縄文土器	鉢				内 なで、磨き 外 磨き、流線、斜めのへら模様		SB28
96－4	92	SD04	縄文土器	壺か				内 なで 外 なで		SB25
96－5	92	SD04	縄文土器	鉢				内 磨き 外 組紐模様、なで、沈線、縄文		SB32
96－6	92	SD04	縄文土器	鉢			(29.8)	内 横なで 外 横なで		SC45
96－7	92	SD04	縄文土器	鉢			(28.7)	内 なで 外 条痕		SB23
96－8	92	SD04	縄文土器	鉢			(26.6)	内 横なで、沈線 外 横なで	SD03でも出土	SC41
96－9	92	SD04	縄文土器	鉢			(28.3)	内 横なで 外 横なで	SD03でも出土	SC43
96－10		SD04	縄文土器	鉢			(32.2)	内 横なで、条痕 外 横なで、条痕		SC44
96－11	92	SD04	縄文土器	鉢			(36.6)	内 横なで、沈線 外 横なで	SD03でも出土	SC42
96－12	92	SD04	縄文土器	鉢			7.0	内 なで 外 なで		SB29
96－13	93	SD04	縄文土器	鉢				内 なで 外 なで		SC46
96－14		SD04	縄文土器	深鉢			(30.4)	内 条痕 外 なで、条痕		SC33
104－1	93	E8 Ⅳ層	縄文土器	鉢			(20.2)	内 刻目 外 縄文、磨き、縄文部分に条跡		SB21
104－2	93	E5 Ⅳ層	縄文土器	鉢				内 刻目 外 縄文、沈線		SC23
104－3	93	E5 Ⅳ層	縄文土器	鉢				内 なで 外 条痕、沈線		SB19
104－4	93	E6 Ⅳ層	縄文土器	鉢				内 刻目 外 縄文、沈線、磨き		SC24
104－5	93	E5 Ⅳ層	縄文土器	鉢			(14.8)	内 刻目 外 縄文、磨き		SC26
104－6	93	G5 Ⅳ層	縄文土器	深鉢			(20.6)	内 なで 外 縄文、なで		SC20
104－7	93	E5 Ⅳ層 E6 Ⅳ層	縄文土器	鉢			(21.2)	内 刻目 外 縄文、磨き、		SC27
104－8	93	F5	縄文土器	鉢				内 なで、雪き 外 縄文、なで		SB22
104－9	93	D6 Ⅳ層	縄文土器	鉢			(23.8)	内 刻目、刻り 外 縄文、刻り	E5Ⅳ層でも出土	SB15
104－10	93	E5 Ⅳ層	縄文土器	鉢				内 磨き、なで 外 縄文、磨き		SC29
104－11	93	F4 Ⅳ層	縄文土器	鉢				内 磨き 外 磨きか		SB20
104－12	93	D5 Ⅳ層	縄文土器	深鉢				内 なで 外 条痕		SC31
104－13	93	G5 Ⅳ層	縄文土器	深鉢			(30.3)	内 なで、指頭圧痕 外 なで、条痕	E5でも出土	SC32
104－14	93	F5 Ⅳ層	縄文土器	深鉢				内 横なで 外 条痕		SC22
104－15	93	G5 Ⅳ層	縄文土器	鉢				内 なで 外 条痕、なで		SC30
104－16	93	F6 Ⅳ層	縄文土器	深鉢				内 刻り 外 条痕		SC21
107－17	93		縄文土器	鉢				内 なで 外 なで		SC29

出土遺物観察表２（木製品）

挿図番号	写真	出土地点	器種	長さ(口径)	幅(底径)	厚さ(器高)	木取り	樹種	実測番号
8－1	74	D6	木櫛	(4.8)	(1.0)	0.2	柾目		KU
8－2	74	D6	木櫛	(5.6)	(1.6)	0.3	板目		KU
8－3	74	D2	木鏃状木製品	7.7	2.3	0.9	柾目	ヒノキ科アスナロ属	72
8－4	74	C5	木錘状木製品	9.7	2.2	2.2	板目	スギ科スギ属スギ	81
8－5	74	C5	刀状木製品	12.5	2.2	0.3	柾目	スギ科スギ属スギ	7
8－6	74	D6	木簡状木製品	(7.3)	2.7	0.2	柾目	スギ科スギ属スギ	82
8－7	74		木札	5.3	3.0	0.3	柾目	スギ科スギ属スギ	A2
9	75	H7	刳物楕円桶　把手付	33.9	26.1	40.8	縦木取り	スギ科スギ属スギ	76
10－1	74	D5	挽物椀		(8.2)		横木取り	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	39
10－2	74	C5	部材	(29.8)	7.1	1.0	板目		
10－3	74	C5	田下駄	(23.3)	9.1	1.1	板目	スギ科スギ属スギ	40
10－4	74	D6	部材	(27.7)	5.1	2.7		スギ科スギ属スギ	42
10－5	74	E6	鍬	(28.0)	11.9	1.6	板目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	5
10－6	74	G7	田下駄	(27.3)	(10.9)	1.7	柾目	スギ科スギ属スギ	3
10－7	74	C4	田下駄	62.5	14.5	2.2	板目	スギ科スギ属スギ	80
70－1	86	SD06	木簡	(28.4)	(3.3)	1.0	柾目		
70－2	86	SD06	木簡	(14.8)	2.2	0.5	柾目		
70－3	86	SD06	木簡	(9.1)	2.2	0.5	柾目		
71－4	87	SD06	斎串	23.0	2.4	0.5	板目	スギ科スギ属スギ	1
71－5	87	SD06	斎串	(22.3)	2.3	0.3	板目	スギ科スギ属スギ	2
71－6	87	SD06	斎串	(4.8)	1.1	0.2	柾目	スギ科スギ属スギ	6
71－7	87	D6	斎串	(14.0)	1.5	0.4	板目	スギ科スギ属スギ	8
71－8	87	SD06	斎串	(18.4)	2.3	0.5	柾目	スギ科スギ属スギ	4
71－9	87	SD06	斎串	17.5	2.0	0.6	柾目	スギ科スギ属スギ	3
71－10	87	SD06	斎串	(7.5)	3.0	0.5	柾目	スギ科スギ属スギ	7
71－11	87	SD06	斎串	(9.9)	2.7	0.3	柾目	スギ科スギ属スギ	5
72－1		SD06	挽物皿	(19.1)	12.5	2.2	縦木取り	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	A6
72－2		SD06	曲物	19.6	20.2	8.8			A
72－3		SD06	曲物	13.0	13.5	(7.0)		スギ科スギ属スギ	A7
72－4	84		箆	(7.8)	3.9	1.0			A
72－5	84	SD06	木針	(43.1)	3.8	1.1	板目	スギ科スギ属スギ	A3
72－6	84	SD06	田下駄	(26.3)	11.1	1.5	柾目	スギ科スギ属スギ	34
72－7	84	SD06	田下駄	(32.3)	10.3	1.5	柾目	スギ科スギ属スギ	A1
72－8	84	西側溝	田下駄	36.1	11.0	1.8	柾目	スギ科スギ属スギ	47
72－9	84	SD06	田下駄	22.7	9.6	2.6	板目	スギ科スギ属スギ	10
72－10	84	SD06	部材	(23.3)	3.0	2.9		ヒノキ科ヒノキ属	A5
72－11	84	SD06	火鑽臼	(21.6)	3.2	0.5	柾目	スギ科スギ属スギ	A4
73－1		SD06	曲物蓋板	72.7	13.5	1.1	板目	ヒノキ科ヒノキ属	84
73－2		SD06	槽	(56.5)	14.0	8.9	縦木取り	スギ科スギ属スギ	83
73－3		G9	部材	(185.3)	14.7	10.5		ブナ科クリ属クリ	74
73－4		SD06	部材	(166.4)	7.4	3.7		スギ科スギ属スギ	77
73－5		SD06	部材	(124.0)	8.5	5.3			78
94－1		SD03	挽物椀				横木取り	クワ科クワ属	86
94－2		SD03	鍬未製品	148.4	18.7	3.6	板目	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	75

出土遺物観察表３（石製品・金属製品）

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	長さ	幅	厚さ	備考	実測番号
7－1	74	G9	石製品	石鏃	1.9	1.6	0.4		SJ92
7－2	74	F区　Ⅰ層	石製品	石鏃	1.6	1.3	0.4		SJ74
7－3	74	F6	石製品	剥片	7.4	4.8	0.8		SJ89
7－4	74	C6	石製品	石斧	(6.2)	(5.1)	(1.4)		SJ88
7－5	74	H6　Ⅳ層	石製品	石斧	(7.8)	4.8	1.9		SJ86
7－6	74	F8　Ⅰ層	硯		(10.5)	(6.4)	1.5	滑石	SA79
7－7	74	C6	鉄器	鉄鏃	12.6	1.0	0.3		SN83
7－8	74	F8　Ⅱ層	鉄器	鉄鏃	(10.8)	(5.4)	0.4		SN85
7－9	74	F7　Ⅰ層	鉄器	鉄鏃	(13.7)	(6.6)	0.2		SN84
7－10	74	G9　Ⅱ層	鉄器	鎌	18.4	2.5	0.3		SN86
7－11	74	B4	銭貨	淳熙元宝	2.4		0.15	背面「十六」	
41－14		SK22	石製品	砥石	(9.7)	7.7	4.7		SK86
51－2		SK01	石製品	石錘	6.6	5.6			SJ79
74－1	88	SD06	鉄器	斧	11.2	4.5	3.1		SN93
74－2	88	SD06	鉄器	斧	8.7	4.0	1.6		SN92
74－3	88	SD06	鉄器	斧	6.4	3.5	1.4		SN91
74－4	88	SD06	鉄器	紡錘車	6.8	4.5	0.6		SN90
74－5	88	SD06	鉄器	鎌	(6.5)	2.5	0.3		SN94
74－6	88	SD06	鉄器	刀子	13.0	1.1	0.2		SN87
74－7	88	SD06	鉄器	鎹	9.2	5.3	0.4	肉金具か	SN88
74－8	88	SD06	金属製品	耳環	3.5		0.9		SN89
74－9	88	SD06	金属製品	耳環	1.7		0.5		SN95
75－1	88	SD06	石器	石棒	16.5	(12.5)	3.6		SA76
75－2	88	SD06	石器	石棒	20.8	11.2	3.5		SN77
75－3		SD03	石製品	敲石	10.0	9.6	5.4		SJ83
75－4	88	SD06	石製品	石錘	4.3	4.2	1.3		SJ85
75－5	88	SD06	石製品	石鏃	2.0	1.6	0.3		SK89
75－6	88	SD06	石器	小型方柱状片刃石斧	(8.6)	1.5	1.2		SA72
75－7	88	SD06	石製品	石斧	(6.8)	(5.3)	(1.6)		SJ87
75－8	88	SD06	石器	磨製石包丁	(7.1)	(4.7)	0.6		SA73
75－9	88	SD06	石製品	砥石	9.7	7.6	6.0		SK87
75－10	88	SD06	石製品	丸鞆	3.3	2.3	0.5		SA81
75－11	88	SD06	石製品	紡錘車	4.7	4.7	2.5		SK72
76－7	88	SD16	石製品	砥石	13.3	9.6	2.4		SJ78
79－1		SD13	石製品	砥石	(8.5)	5.6	2.4		SK86
82－23		SD20	石器	石棒	(19.8)	12.1	2.8		SA75
93－1	92	SD03	石器	打製石鏃	(3.3)	1.5	0.7		SA78
93－2	92	SD03	石製品	石錘	4.9	4.0	1.8		SJ84
93－3	92	SD03	石器	石棒	14.2	10.2	2.7		SA74
93－4	92	SD03	石器	柱状片刃石斧	11.4	(2.0)	3.5		SA71
93－5	92	SD03	石製品	砥石	10.1	8.3	3.8		SJ80
93－6	92	SD03	石製品	砥石	(7.0)	5.7	2.1		SJ77
100	93	SP25	石器	スクレーパー	(5.8)	3.3	0.5		SA80

写真図版

遺跡周辺の航空写真（1945年撮影）
A：三田谷Ⅰ遺跡　B：古志本郷遺跡　C：天神遺跡